明治三十四年十一月五日發行
每月一回五日發行

明治三十三年十二月廿五日
第三種郵便物認可

女學世界

第一巻第拾四號

口繪



總裁 小松宮大妃殿下　副總裁鍋島侯爵夫人

大日本女學會

新學年開始

會員募集

本會は女子必須のの諸學科を掲げたる講義錄を發行し家庭を離れ難き女子をして居ながら通信教授を受けしむ仍て一般女子素養の程度に應じ高等簡易兩科を設くると左の如し

高等科（毎月一回廿五日女學講義發行二個年終了束脩四拾錢月謝四拾錢紙數菊判參百頁）○倫理坪内雄藏○禮法佐方鎭子○教育學安井哲子○兒童學高島平三郎 ○國文坂 正臣○文法今泉定介○作文同 ○作歌大口鯛二○美辭學島村瀧太郎○漢文土屋 弘○日本歷史大森金五郎 ○日本婦人列傳下田歌子○萬國歷史喜田貞吉○日本地理同 ○萬國地理同 ○地文脇水鉄五郎 ○理化同 ○算術上野 清○博物津田梅子○生理衛生三宅 秀○家事衛生同 ○小兒衛生三島通良○家事經濟後閑菊野○家庭教育三輪田眞佐子○割烹石井泰次郎 ○裁縫渡邊辰五郎 ○習字坂 正臣○繪畫武村千佐子 ○圖案同 ○美學島村瀧太郎○音學東儀季治○挿花秀島成績○點茶松浦伯爵○園藝池田伴親○法制經濟岡戸鎗介○民法鳩山和夫○社會學岸本熊武太○御伽譚○詞藻○質問應答○雜錄○雜報

簡易科毎月（一回五日講義發行二個年終了束脩貳拾錢紙數同百五十頁）

○修身談本會編纂○禮法佐方鎭子○國文同 ○作文今泉定介○漢文土屋 弘○日本歷史大森金五郎 ○日本地理喜田貞吉○算術上野伊志子 ○博物小此木忠七郎○理化脇水鉄五郎○生理衛生三宅 秀○家事大要後閑菊野○家庭教育三輪田眞佐子○割烹石井泰次郎 ○裁縫渡邊辰五郎 ○習字坂 正臣○圖畫武村千佐子 ○史傳下田歌子御伽譚○詞藻○質問應答○雜錄○雜報

●會則は請求次第送呈す●束脩月謝を添へ申込あれば假入會を許し直に送本すべし

☞初卷發行 簡易科十一月五日 高等科同月廿五日

今般轉居 東京麴町下二番町卅七番地 大日本女學會

（甲の一）

(甲の二)

新刊心理的小説

文學博士元良勇次郎先生
文學士戸澤姑射先生
合譯

愛と心

全壹冊美本
正價金卅錢
郵税六錢

是れ希臘の神話を經とし近世の心理學を緯として構成せる一種の小説也オリムパスの美妙なる神國オイサの優美なるエーロスの温雅なる態度瞭然として現れ其間に嫉妬猜忌等の惡念化身して徘徊す而かも全篇は一の夢幻世界只其結構を見るも趣味混々として湧き再讀三讀して人心の變化微妙なるを味ふべし是れ一の譬諭語也爾も具象を離れずして譯者は歐洲文學に曉通し且つ邦文の妙を得たる戸澤學士と心理學の蘊奧を究められたる元良博士也

發兌元 東京神田錦町 勉強堂書店

美術寫眞大安賣廣告

● 日本名所寫眞 大形八十枚一箱入 郵税共六十錢
● 三都美人寫眞 小形百枚一箱入 郵税共三十六錢
● 東西力士寫眞 中形五十枚一箱 郵税共二十六錢

名所は地名を附し美人力士は姓名を記入したる斬新奇抜廉價無比の珍寫眞殊に三品一時に御注文の方へは一圓に付一割引す郵劵代用は一割増

● 發賣元 大阪内本町松屋町南入 中川商店

さけふやすもと
増酒資料

壹斗の酒は直に貳斗となる大金儲的醸造化學作用の一大發明新法傳習望の方は郵劵四錢送れば詳細なる傳習手續摘要を送呈す

東京市神田區五軒町拾九番地 日本授產館

わきが根治確證藥

何程重き慢性わきがにても誓つて根治し決して再發せざること確證す價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固慢性症根治分貳圓卅錢の參種あり着金即刻送藥す

東京市神田區五軒町十九番地 日新館藥房

月やく忽ち下る確證藥

如何程[illegible]本劑(藥名調經丸)は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も忽ち下す特効あり但し妊婦は流產の恐あるに付飲用を禁ず價六拾錢特製壹圓拾錢

東京市神田區五軒町拾九番地 日新館藥房

色の白くなる新劑

いか程色黒き[illegible]も本劑を[illegible]用ゆれば忽ち肉體純白色に變化し艶美の容貌となること確證す

價八拾錢特別製金壹圓卅錢

東京市神田區五軒町拾九番地 日新館藥房

胃腸病根治劑

[illegible]不治の難症と斷念せる慢性胃腸病患者は最終の試藥として[illegible]分服し見よ忽ち根治確證す價壹週分四拾錢[illegible]週分[illegible]錢

東京市神田區五軒町拾九番地 日新館藥房

腦病根治 健忘即治
記臆増進確證藥

記臆薄弱健忘腦力乏弱神經系病を根治し大に記臆力を増進す

價七拾錢、壹圓七拾錢、貳圓七拾錢、特別製分參圓六拾錢

東京市神田區五軒町十九番地 日新館藥房

(甲の三)

十一月上旬發兌

男爵石黒忠悳君述

新版

況翁閑話 附況翁談片

東京博文館發兌

全壹冊洋裝菊判
寫眞銅版口繪挿入
正價貳拾五錢
郵稅六錢

維新前後、刀圭を擲ちて政海に入りたる名士大村寺島芳川諸氏を始として其人に乏しからず、而も身醫家に生れず早く國事に奔走し、一旦翻然杏林に投じて遂に國家に大勳を奏し、華族の貴爵に陞り、然る後高踏勇退せる況翁石黒男爵の如きは當世の奇傑と言ふ可らずや。本書は翁が明治初年以來の談片を輯錄する者、事百般に渉りて而も時事を諷せる者多く、往々奮慨を諧謔に寓する者あり、機鋒鋭利、談論輕快、興趣津々として妙味盡きず、繼續の間、翁と膝を交へて其佳謔を聞くの想あるべし。

五版

天則百話

男爵加藤弘之君著

通俗的に高遠ある學理を說き其間復た社會萬般の事柄を評論し以て俗見の誤まれるを正し論理一遍の非眞理なるを打破す議論正確文字平易明治今日に一異彩を放つものなり

正價金三拾錢郵稅六錢

三版

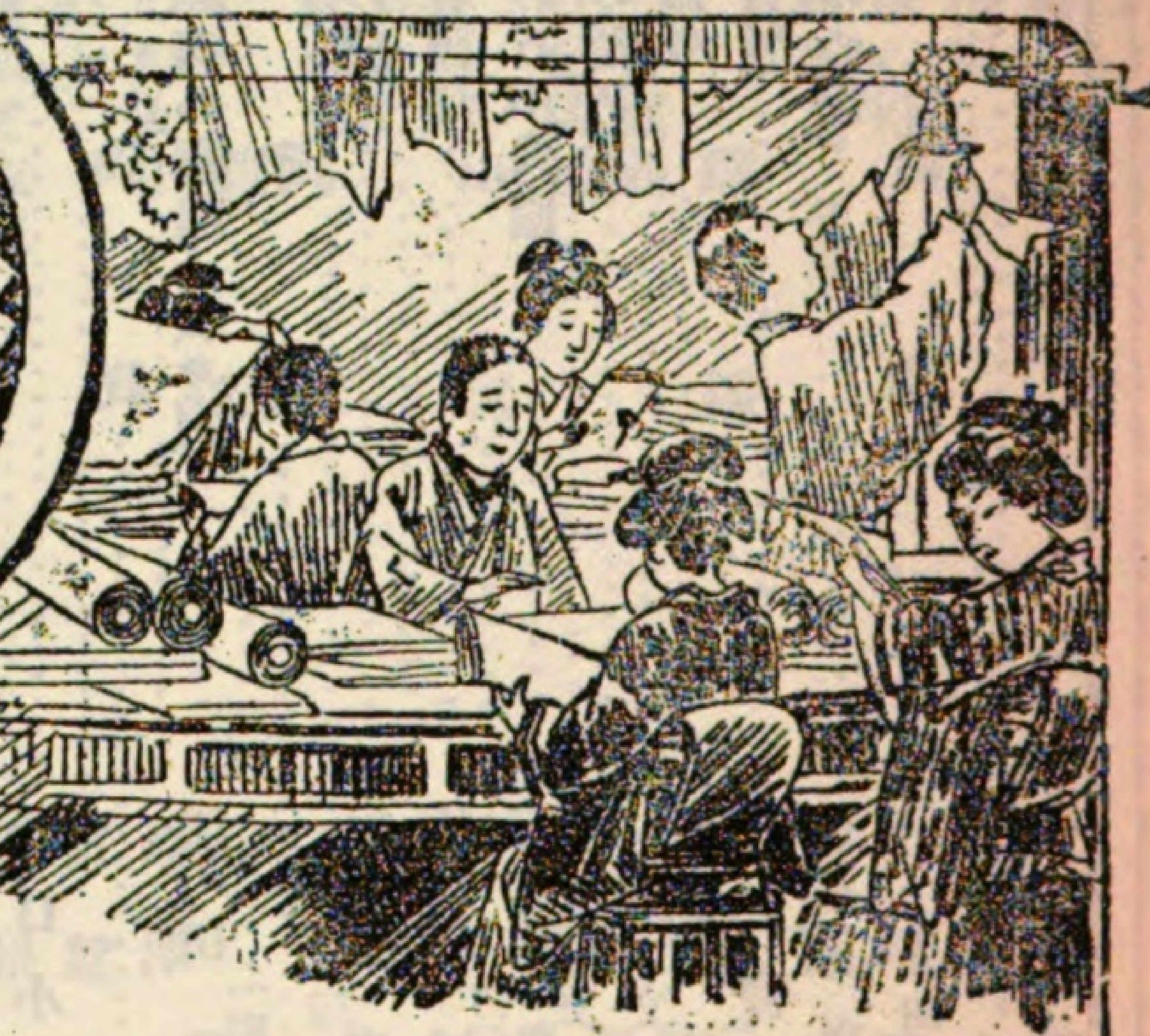
人事百話

子爵福羽美靜君著

本書は人々處世の道一百條を學德共に高き子爵が丁寧懇切に講述せられたるものにして何人を問はず必ず一本を坐右に備へざるべからず

正價金貳拾錢郵稅四錢

(甲の四)



季節向き新柄流行品を階上階下總躰に陳列致し尚は御休息室をも取設け置候間御慰み旁御子様方御連れ遊ばされ緩々御遊覧なし下され度願上候

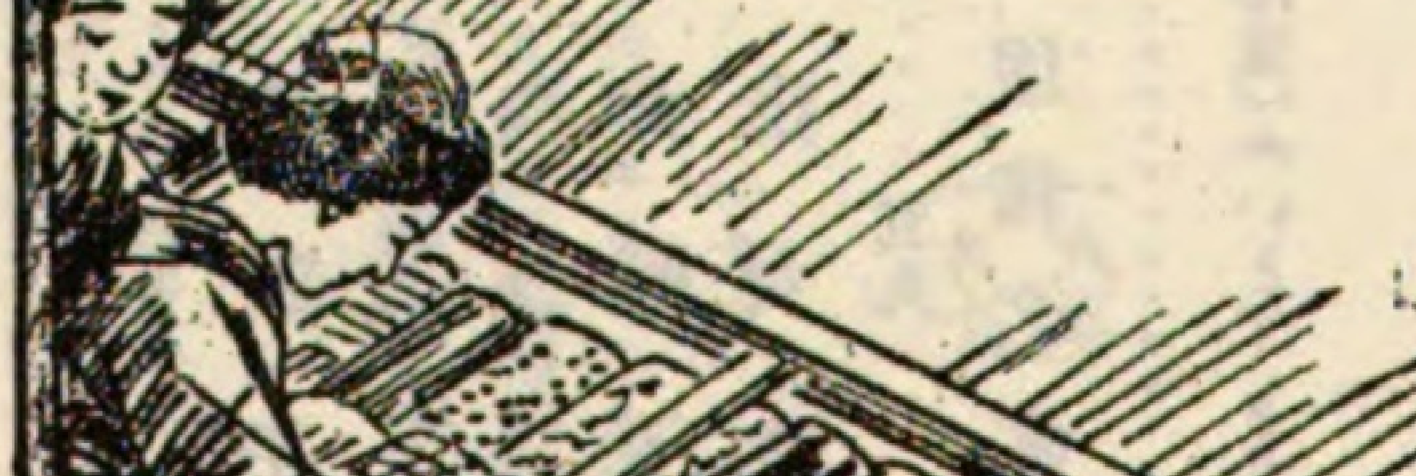
地方よりの御注文は御手紙にて御申越し被下候はゞ即日小包郵便にて發送可仕候尚は注文御案内書御入用の節は御一報次第御送り可申上候

電話
東京本局 特 五二五 一二一七 一八六〇
大阪東 特 四七三 一六五〇

東京日本橋區駿河町

三井呉服店

大阪高麗橋二丁目



女學世界第十四號目次

少女文庫

華族女學校學監下田歌子女史著

第[illegible]編　[illegible]お伽噺教草

お伽噺は其昔潤若姫君のお伽衆が其お相手になせし噺なり由來此種の噺は日本に於て[illegible]外國にても寳話あり寓話ありて何も幼稚なる兒女の腦裡に能く映して修身の助けとなり智を磨き躰を强くするの手引草ともなるの効著し下田女史の意を此著に注かるゝ周到にして教育に資する高且大といふべし慈愛深き世の父兄諸彦は愛兒の爲めに一本を購はれたし、

全一冊菊判和裝
正價金[illegible]十五錢
郵税金六錢

第貳編　庭訓お伽噺

此書は本邦古代のお伽噺より近代のものに至る迄多くの同種類中より其今に取りて可なりと思ふものゝみを撰み出せるなり總て此類の書中には甚た面白趣向の者ありて往古の風俗を知るの栞とせんは此上なきものあれど其兒女の教育に適せさるものもあれは述者深く此點に注意を加へて説明したれば年少女子も一讀其意を解し得て大に風教の稗益となるべし

全一冊菊判和裝
正價金三十五錢
郵税金六錢

第參編　内國少女鑑

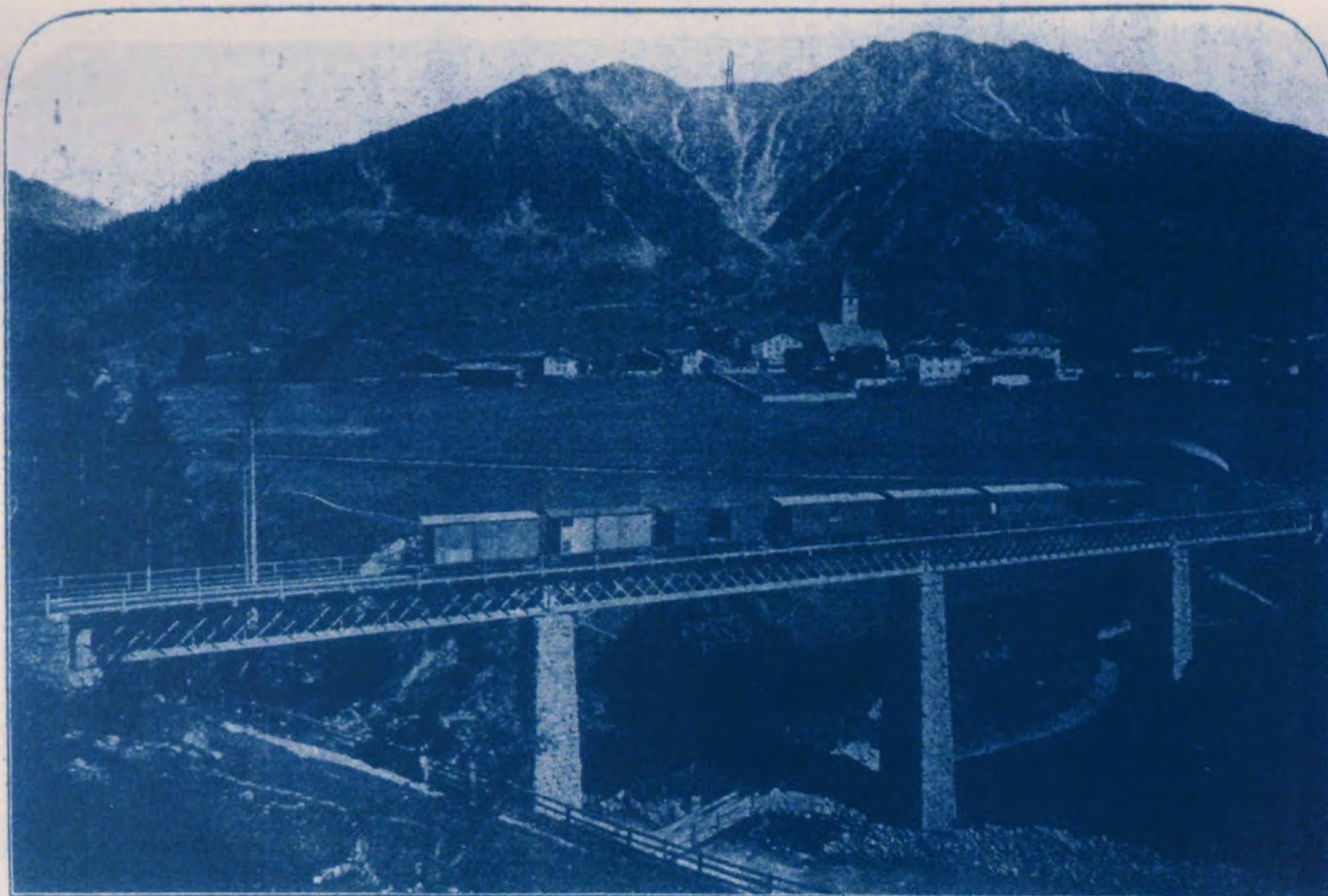
下田歌子女史が家庭教育に熱心なる又斯文に堪能なること今新に喋々を要せず既に此文庫も第三編を發兌するに至れり此度の一冊は我日本に於ける古來より近世迄の少女が傳記に就て大方少女の模範となるべき行爲を細かに取り集めたる者其文の秀麗なる挿繪亦精妙なれば家庭の讀物として無上の寶冊なるべし

全一冊菊判和裝
正價金三十五錢
郵税金六錢

發兌元　東京本町　博文館



常宮昌子內親王殿下

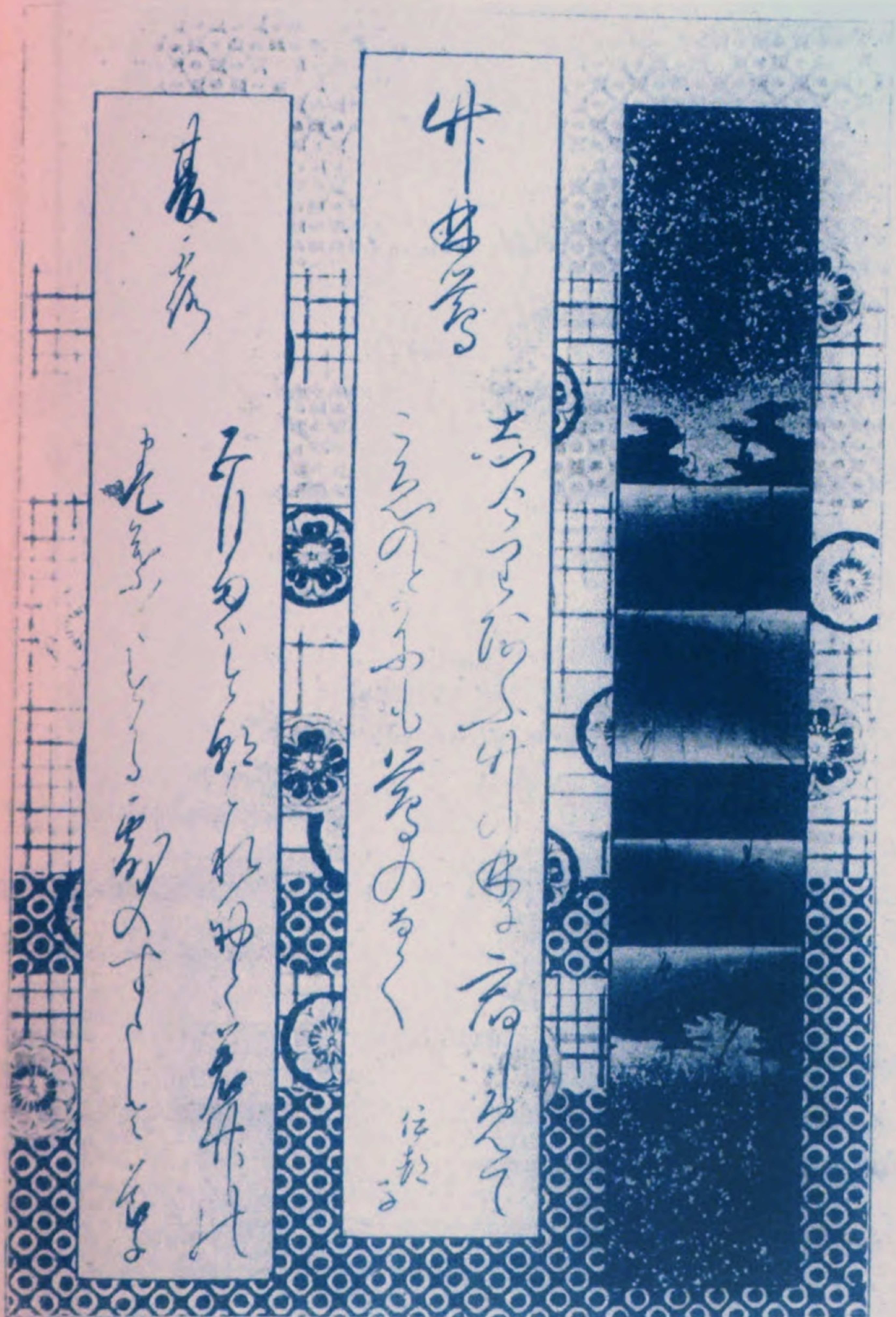


瑞西國ツイリッヒ村の長橋

秋の松島



名流筆蹟



安江駒子　梨本宮妃殿下　保科子爵母堂

最も信用ある
最も正確なる
當用日記懷中日記發兌廣告

明治三十五年 當用日記

菊判形四六判形
但紙數各五百四
十頁菊半截形紙
數五百二十餘頁
御注文は必前金

當用日記

五種

菊判大形	特製（舶來洋紙背皮美製金文字入）	…正價金六拾五錢	郵税拾四錢
菊判大形	上製（舶來洋紙總クロース金文字入）	…正價金五拾錢	郵税拾四錢
四六判形	特製（舶來洋紙背皮美製金文字入）	…正價金五拾錢	郵税拾錢
四六判形	上製（舶來洋紙總クロース金文字入）	…正價金三拾五錢	郵税拾錢
菊半截形	上製（舶來洋紙總クロース金文字入）	…正價金三拾錢	郵税八錢

著名文學大家執筆◎有名和洋畫伯揮畫

洋裝菊版美本

少年讀本

壹冊百卅頁餘

全部五拾冊毎月壹回發行

1 高島秋帆 福地櫻痴君著（年方畫）
2 白河樂翁公 中村秋香君著（永洗畫）
3 河井繼之助 戸川殘花君著（半古畫）
4 三條實美公 依田學海君著（[illegible]畫）
5 曲亭馬琴 [illegible]著（[illegible]畫）
6 井伊掃部頭 巖谷小波君著（[illegible]畫）
7 山田長政 遲塚麗水君著（春汀畫）

8 錢屋五兵衛 桐生悠々君著（永洗畫）
9 春日局 岸上質軒君著（春汀畫）
10 水戸烈公 野口珂北君著（大觀畫）
11 桐野利秋 春山鐵崖君著（象堂畫）
12 藤田東湖 大和田建樹君著（不折畫）
13 伊能忠敬 [illegible]君著（永洗畫）
14 新井白石 武島羽衣君著（敬中畫）

15 水野越州 中村桂軒君著（永洗畫）
16 池大雅 田山花袋君著（觀山畫）
17 木内宗吾 松原二十三階堂君著（春汀畫）
18 西郷隆盛 川崎紫山君著（年方畫）
19 坂本龍馬 坂崎紫瀾君著（年方畫）
20 横井小楠 大野酒竹君著（不折畫）
21 貝原益軒 [illegible]君著（春汀畫）

第卅九編

第十一號

熊田葦城君著

阿部伊勢守

遠藤耕溪君畫

洋裝全壹冊

正價金拾三錢 郵税四錢

明治今日の開明を致せるは世人諸藩の功あるを知りて幕末の賢相阿部伊勢守の力大に與れるとを知らず伊勢守の如きは難局に當りて苦心經營實に堂々大臣の風を失はず本書を繙きて其然るを知るべし

22 渡邊崋山 渡邊霞亭君著（年方畫）
23 中濱萬次郎 石井研堂君著（耕溪畫）
24 近衞忠熈公 勢多章之君著（不折畫）
25 間宮倫宗 文學士笹川臨風君著（古洞畫）
26 周布政之助 堺枯川君著（松亭畫）
27 荻生徂徠 内田魯庵君著（華舟畫）
28 松平伊豆 [illegible]山吐虹君著（華邨畫）

29 中江藤樹 [illegible]君著（古洞畫）
30 島津齊彬公 春山鐵崖君著（弘光畫）
31 高野長英 千河岸貫一君著（春汀畫）
32 橋本左内 桐生悠々君著（華舟畫）
33 釋月性 千河岸貫一君著（春汀畫）
34 平野國臣 白河鯉洋君著（古洞畫）

35 熊澤蕃山 寺田成[illegible]君著（年方畫）
36 雲井龍雄 玉木椿園君著（古洞畫）
37 野中兼山 北村香樹君著（耕溪畫）
38 大鹽平八郎 堀紫山君著（華舟畫）
39 佐久間象山 塚原靖君著（春汀畫）
40 小栗上野介 勢多章之君著（古洞畫）

正價 前金壹冊拾三錢◎六冊金七拾錢◎十貳冊金壹圓三拾五錢◎郵税壹冊に付四錢

（乙の四）

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館



華族女學校長 男爵 細川潤次郎君



東京市教育會長 江原素六翁



栃木婦人會發會式



齋藤棠白氏撮影

淑德女學校生徒

秋晴



岡山後樂園



（雜報欄參看）

清國婦人

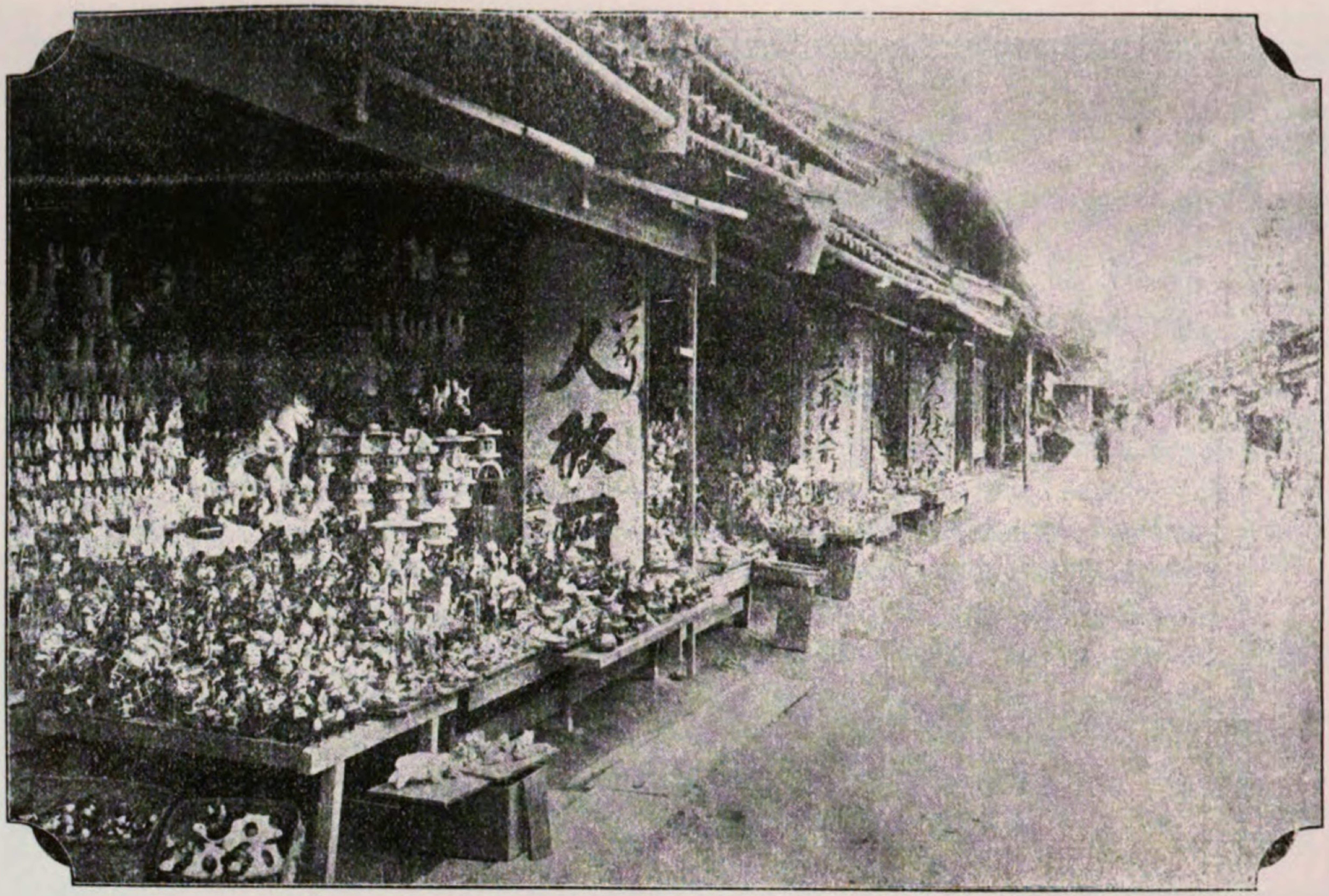
泰西名都



和蘭國海牙府市街



東京風俗雑観（青物店）



(名蹟雜話參照)

伏見稲荷町の人形店

角田竹冷君閲
牧野望東君
星野麥人君 共著
博文館發兌

俳諧年表

十一月十五日迄の御注文に限り一割引の事

本書は延徳元年より明治卅四年に至る迄四百十三年間の俳諧關係の總てを網羅し山崎宗鑑が一休和尚に參禪せし以來俳道の出來事俳人の生死俳書の編述等一目瞭然の年表なり俳家文學家歷史家は座右欠くべからざる珍書なりとす

全壹冊和製上製
正價六拾錢郵税八錢
製本既成……發賣

福地櫻癡居士新作脚本

再版
芳哉義士譽

歌舞座新狂言 團菊登場

全一冊洋裝繪表美本
正價三拾錢郵税四錢

此脚本は櫻癡居士の新作にして團菊兩優久振の登場演劇に上るものなり其筋書は赤穗義士復讎事畢りて諸侯家へ預けらる大石内藏助等十七人は細川邸にありて愼で幕府の裁許を待つ幕府にては其處刑に關して議論兩派に分れ遂に切腹に決す此際大石の心事細川侯の義俠又は夫妻親子の訣別最後の決心等を脚本として之を五幕に作る櫻癡先生の斯文に堪能なる新に喋々するを要せず江湖の諸君陸續御購讀あれ

發兌元博文館

（丙の三）

工業叢書

海軍機關學校敎授工學士 市川俊雄君著
（既刊）

水及油

水と油とは人生秒時も缺く可らざる必要品なり、人類之に由て生活し、機械之に由て運轉し、萬種の製産之に由て運轉し、萬種の製産之に由て始めて成る、而して其工業上に於ての作用を詳論したるもの、從來我國に此の如き良書なし、世の工業家、機械家及化學者を始めとし艦船鐵道の機關士工業學校の敎員及生徒は勿論其他總ての技師、技手等の必讀すべき良書なり

全壹冊洋裝　金字入上製
正價五拾錢　郵稅六錢

（丙の四）

獨逸國カール、ランゲンペック氏著
東京高等工業學校敎授 東京帝國大學講師 工學士細木松之介君校閲
尾州瀨戸陶器學校長黑田政憲君譯
（既刊）

陶器製造化學

本書の譯者黑田氏は我國陶器の最も盛んなる産出地なる尾州瀨戸の陶器學校長にて、校者細木氏は工科大學に於て專門として陶器の製造を研究したる工學士なり而して本書の原著は歐洲に於て陶器の産出の最も盛んなる獨逸國のカール、ランゲンペック氏が多年苦心して研究したる陶器製造の原理及方法を編述したるものにて方今世界の各國を通じて斯業の爲めに唯一の原理として賞讃せらるものといふ、當業者の爲めには無上の參考書たるべし是れ工業叢書の第貳編として出版するものなり

全壹冊洋裝　金字入上製
正價六十錢　郵稅六錢

機關車

工學士糸山孝吉君著　十一月上旬發行

發兌元　東京　博文館

当代女流

十二大家投票募集

明治の昭代、文運の隆盛に伴ひ、女學界の趨勢著るしく發展し、女流名家の輩出近古無比と稱す、此時に際し本誌は新たに當代女流の英傑別紙投票用紙に指定せる十二大家を選ばんと欲し、普く江湖に向つて投票を募る、是れ斯界の先輩を稱揚するのみならず、又以て後進才媛の摸範となし、一般婦女社會の啓發誘掖に資せんとするの趣旨に出づ、讀者請ふ、左の規程に由り公正に投票されん事を

最高點の投票を得られたる諸大家へは精巧なる石膏製の塑像を贈呈し且つ其の肖像は明年一月より每號女學世界卷頭寫眞版（アートペーパア）に掲載し、且つ其の小傳を掲ぐべし

投票規程

一投票は凡て投票用紙に由る事
一投票〆切は十二月十日限の事
一投票披露は來三十五年一月五日女學世界第二卷第一號に於てす
一十二大家中宗教家は佛教、神道、基督教を論ぜず、總じて道德高く信仰深き斯界の名家を擧げ又事業家と稱すべきは慈善事業矯風事業其他一般公共問題に與つて力あるの人を擧げ、畫家、音樂家は和漢洋を論ぜず凡て斯界に卓拔せる技能ある人を擧ぐべし
一被選者は凡て現存者に限る事
一投票は封筒に入れ表面に女學世界投票と朱書し博文館編輯局宛の事

博文館編輯局

（丁の一）

(此投票用紙を切取り記入の上投寄すべし)

投票用紙

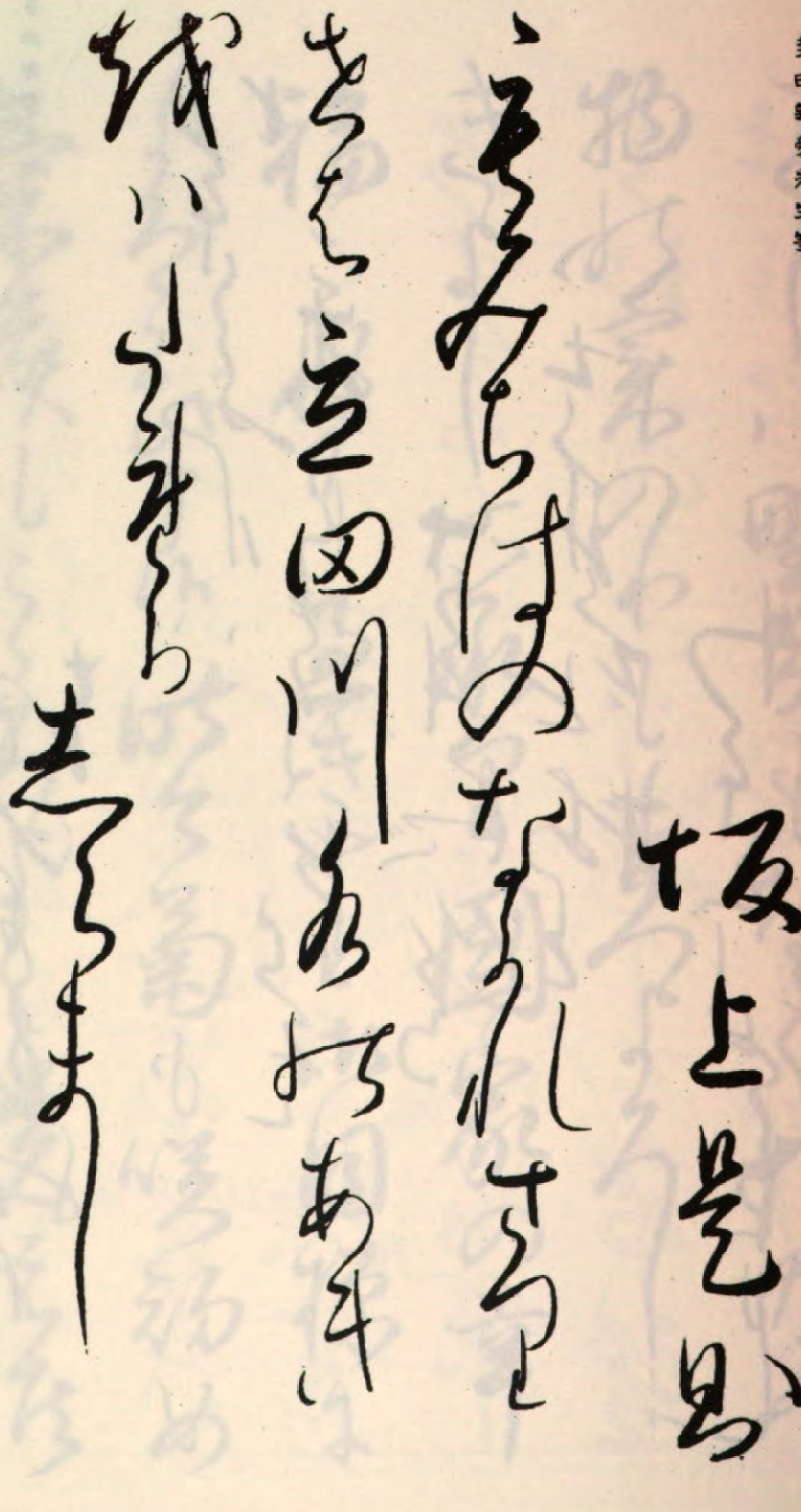
明治女傑十二大家

教育家	宗教家	著述家	英學家	女丈夫	小說家	事業家	交際家	音樂家	歌人	書家	畫家

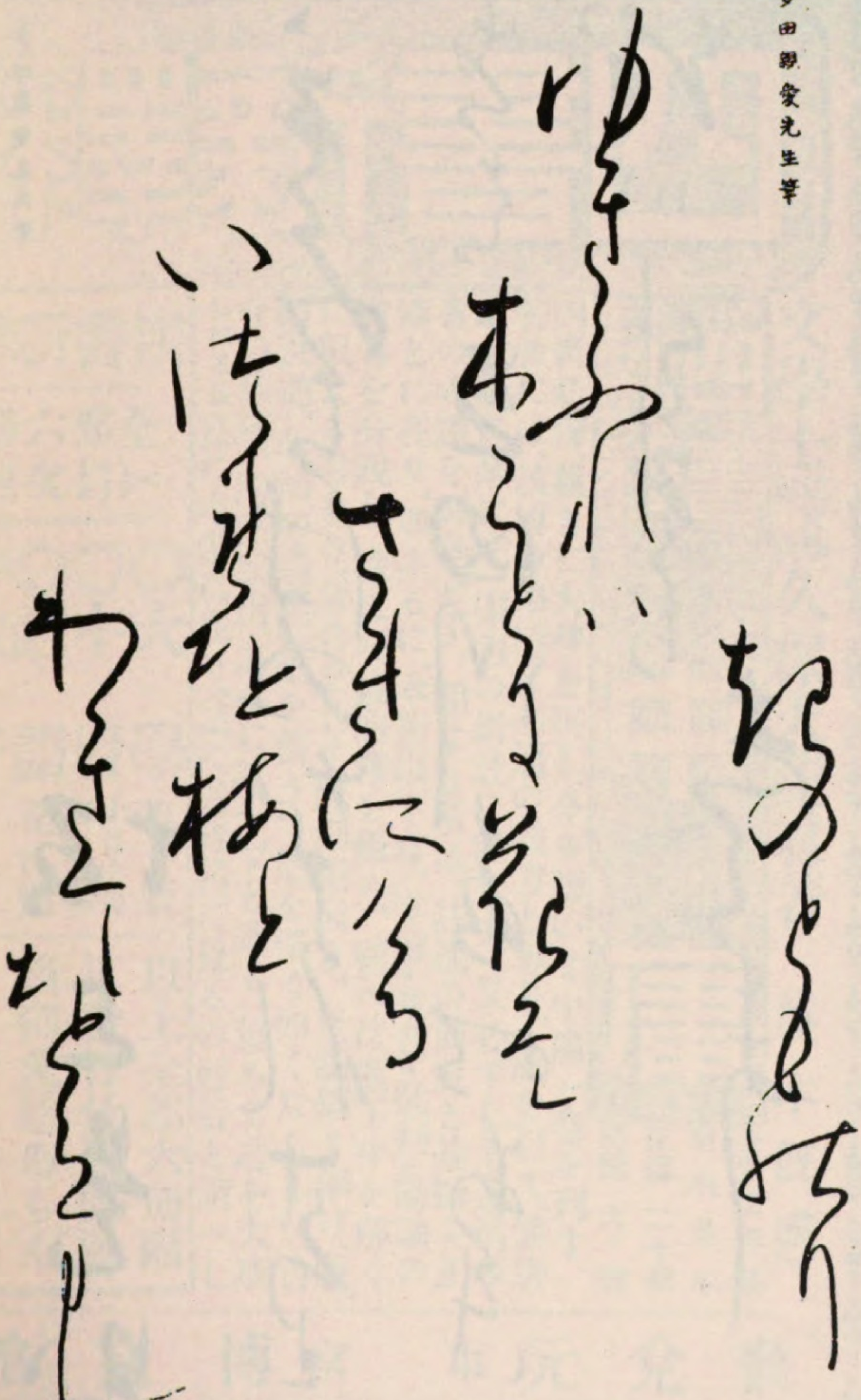
投票者
氏名及住所

(丁の二)

多田親愛先生筆



多田親愛先生筆



ことしは野分もなくたなつ
物の実のりもまづまづよろし
きよしにて郷里國家の幸
福これにまさるきざしを御同様に
よろこび申候時に菊も咲初め
気候もこころよく覚え候

百花咲揃候而折から申
書画音楽乃事ども有之き
ゝく存候来る十日の餘会せ
出来候ハゞ午後四時御車
にて御迎に参り候様にと希望
仕候右の案内まで早々かしこ



野口小蘋女史筆

野口小蘋女史筆





野口小蘋女史筆

野口小蘋女史筆



女學世界
明治三十四年十一月五日發行
第壹卷　第拾四號
紀元二千五百六十一年　西暦一千九百一年（辛丑）

論說

家内經濟の整理（承前）

法學博士　添田壽一

家政を整理するに最も必要なるは奢侈を愼むことであります、俗諺にも「奢るものは久しからず」と申ますが、之は洵に金言であります之を歴史上の事實に見ても、古今東西奢侈を以て國家を亡ぼし、家產を傾けたる例證は少なくないとは、人の皆知る所である、然るに尚世人が奢侈の弊に陷るのは是れ奢侈の性質と、弊害とを熟察せざるのみならず、制度

も亦之を矯正するに緩漫なるが爲であります。而して我國の現状を察するに、奢侈の行はるゝと實に熾なるものであります。就中衣服に於て其最も甚だしきを見のであります。殊に二十七八年の戰役以後、一層甚だしきを加へ、其弊の及ぶ所は獨り衣服に止まらず、住居、食品、皆過當、過度なるの形跡があります。就中憂ふべきは將來の國民たるべき青年少壯者が、此の通弊に感溺し、輕浮、虚飾、投機熱に耽り甚だしきは負債の多きを誇り、德義信用地を拂つて去るに至つたのである。今日世上の問題たる資本の缺乏の如きは、生産力の薄弱にも由りませうが、また貯蓄心の發達せぬのも其重なる原因である。而して貯蓄心の發達せざるは、是れ奢侈心の旺盛なる結果なりと斷言するを憚らぬのであります。國民奢侈に耽りて、貯蓄心に乏しきときは、内國資本の増殖は到底望むことが出來ません。假令海外より資本を輸入するも。從つて注けば、從つて流出し、何時立つても其潤澤なることを望むことは出來ませぬ。故に苟も資本の増殖を圖らむと欲せば、先づ奢侈浪費を抑制し、貯蓄の美風を涵養せなければならぬ。

想ふに個人及び家内經濟上注意すべきは、勤勵以て生産を增殖し、節儉以て貯蓄を爲し、百方收入と資本の増加とを計るにあります。既に一定の收入ありとすれば、其支出する所

は、宜しく（一）生存必需費（二）義務費（三）原料購入器具補充費（四）教育及研究費（五）貯蓄及保險費（六）快樂費と云ふ順序に依りて、取捨すべきは個人經濟上の要件であります。而して其支出を收入に超過せしめざるを計るには、收支の計算を明瞭・精確に爲し、日常の支出をして、收入と均衡を得せしむるに注意しなければなりません。其收入少額にして、一身一家の生存費すら支辨する能はざるに拘はらず、快樂費に收入の要部を擲つが如きは宜しくない。況んや收入に超過して、快樂費を使用するが如きは、大に愼まなければなりません。

各人又は國民全躰の收入增加に由り、又は教育の普及、學術の應用、物價の下落に由り、生計程度の漸次昂進するは頗る望ましきことであります。然れども或は收入なく、或は收入增加せざるに、生計の程度のみ昂進するときは、負債又は不正の手段に訴ふるの外なきを以て、收入と生計の程度とは、必ず權衡を得せしめなければならぬ。若し不幸にして收入に減少を來すときは、則ち其生計を低下せしむるの外別に其方法はないのであります。然れども一度昂進せる生計の程度を低くするとは隨分困難であります。故に平常成るべく生計の程度を收入の許すより遙か以内に定めて置いて、多少の餘裕を存し、之を貯積して、

も亦之を矯正するに緩漫なるが爲であります。而して我國の現狀を察するに、奢侈の行はるゝと實に熾なるものであります。就中衣服に於て其最も甚だしきを見るのであります。殊に二十七八年の戰役以後、一層甚だしきを加へ、其弊の及ふ所は獨り衣服に止まらず、住居、食品、皆過當、過度なるの形跡があります。就中憂ふべきは將來の國民たるべき青年少壯者が、此の通弊に感溺し、輕浮、虛飾、投機熱に耽り甚だしきは負債の多きを誇り、德義信用地を拂つて去るに至つたのである。今日世上の問題たる資本の缺乏の如きは、生產力の薄弱にも由りませうが、また貯蓄心の發達せぬのも其重なる原因である。而して貯蓄心の發達せざるは、是れ奢侈心の旺盛なる結果なりと斷言するを憚らぬのであります。國民奢侈に耽りて、貯蓄心に乏しきときは、內國資本の增殖は到底望むことが出來ません。假令海外より資本を輸入するも。從つて注けば、從つて流出し、何時立つても其潤澤なることを望むことは出來ませぬ。故に苟も資本の增殖を圖らむと欲せば、先づ奢侈浪費を抑制し、貯蓄の美風を涵養せなければならぬ。

想ふに個人及び家內經濟上注意すべきは、勤勵以て生產を增殖し、節儉以て貯蓄を爲し、百方收入と資本の增加とを計るにあります。既に一定の收入ありとすれば、其支出する所

は、宜しく(一)生存必需費(二)義務費(三)原料購入器具補充費(四)敎育及研究費(五)貯蓄及保險費(六)快樂費と云ふ順序に依りて、取捨すべきは個人經濟上の要件であります。而して其支出を收入に超過せしめざるを計るには、收支の計算を明瞭精確に爲し、日常の支出をして、收入と均衡を得せしむるに注意しなければなりません。其收入少額にして、一身一家の生存費すら支辨する能はざるに拘はらず、快樂費に收入の要部を擲つが如きは宜しくない。況んや收入に超過して、快樂費を使用するが如きは、大に愼まなければなりません。

各人又は國民全躰の收入增加に由り、又は敎育の普及、學術の應用、物價の下落に由り、生計程度の漸次昻進するは頗る望ましきことであります。然れども或は收入なく、或は收入增加せざるに、生計の程度のみ昻進するときは、負債又は不正の手段に訴ふるの外なきを以て、收入と生計の程度とは、必ず權衡を得せしめなければならぬ。若し不幸にして收入に減少を來すときは、則ち其生計を低下せしむるの外別に其方法はないのであります。然れども一度昻進せる生計の程度を低くするとは隨分困難であります。故に平常成るべく生計の程度を收入の許すより遙か以内に定めて置いて、多少の餘裕を存じ、之を貯積して、

以て萬一の事變に備へなければなりません。果して然らば先つ各種の職業に勉勵して收入の增加を計らねばなりませぬ。收入增加の方策は、其腦力によると躰力に依るとに論なく、又地位の高下と、職業の種類とに論なく、只活動して一生懸命に稼くにあります。實に生存の道も、立身の術も、富國の秘訣も、全く勞動にあります。夫れ斯の如く勞動か貴重なる以上は、農夫となり、工夫と爲り、擔夫となるも、毫も耻つべきものでない。之れを只管他人の助力を仰き、又は負債の深淵に身を沈むるに比すれば、其優れること萬々であります。

幸に各人皆勞動して其收入を增加するも、全く之を徒費するときは勞して何の効もない、是に於てか、貯蓄保險の必要を生ずるのであります。貯蓄と保險とは畢竟其目的を同じくして居ります。貯蓄は積極的にして効を平常に現はし、且つ人をして資本家の地位に進ましむるものであります。而して保險は消極的にして、非常の際に備ふるの差かあるのみである。貯蓄保險は社會の組織複雜に爲り、生計の困難、人情の輕薄、危害の頻繁に赴くに從つて、愈々其必要を增加するのであります。殊に我國の如く天災頻りに至り、浪費の弊風行はれ、資本の缺乏を感ずる所にありては、最も之を奬勵しなければなりません。蓋し

貯蓄を勉め。一錢の微も之を貯へ、以て銀行に預け入るゝときは、直接には浪費を避け、使途明白にして利子を生じ、紛失の憂、盗難の心配なく、經濟上の獨立も全くするを得るのみならず、間接には事業家を利益し、各種の社會病を豫防することも出來ます。

能く働き能く備へても不時の事變の爲めには一時負債に依頼して、其の必要を充たし、以て危急を凌ぐ必要もありませう。故に正當なる生産的の起債は、貧富相益し、有無相通じ、資力、智識、勞力をして、互に相待ちて益せしむる所以であつて、此種の負債たる強ち排斥すべきものでありません。然れども世上に於て債務を負擔するものは、皆此の如き正當なる必要に依つて起したるもののみでない。往々浪費奢侈の結果として起したるものであります。甚だしきは其身業に已に獨立自營の心を失ひ、他人の財力のみに依頼して、利を詭譎の間に僥倖して、以て僅かに一世を過さんとするものさへあります。此の如きは大に制止しなければなりませぬ。其理由は負債は如何に必要なる場合と雖も、元來他人の財力に依頼するものなれば、平身低頭其の承諾を得て、其餘財を借らなければならぬ。從つて他人に屈服するの恥辱があります。而して世事動もすれば豫期の如くならざる故に、期日に至つて償還すること能はざるときは、百方辭言を設けて、返濟の猶豫を懇願しなければ

なりません。幸に債主の承諾を得るも、元利の償却に追はれて、他の進取事業を營むの暇かなきに至るのである。若し又全く償還の途なきときは、法律上の罪人と爲り、獨り一身上の屈辱に止まらず、或は死後尚ほ禍を妻子に遺すものであります。假令此くまでに至らずとするも、尚ほ獨立自營の心を傷け、甚だしきは意見を枉げ、節操を破らしむることあるのみならず、之を數々行ふときは、遂には負債に慣れて、他人の財を見ては恰かも自身の所有物なるが如くに思惟し、而して負債の多額なるを誇り、甘言以て債主を欺き、巧に債務を逃るゝを畢世の能事と爲し、廉耻は地を拂つて去るに至るのであります。其害惡の及ぶ所、眞に懼るべきである。故に成るべく負債を起すことは避けなければならぬ。既に陳述せる如く、負債は動もすれば人を奴隷界に墜落せしめ、他人に迷惑を及ぼし、其身も亦社會上法律上の罪人となることを忘却せず、力めて起債を忌避し、萬止むを得ずして、且つ償還の見込あるの外は、決して之に依賴してはなりません。若し獨力にて事の必要に應ずることが出來ないで負債を起すも、必ず收入增加、地位改良等、凡て生產的目的の爲めにする塲合に限なければならぬ。若し奢侈遊惰の資料として之を起すときは、必ず債務辨償の途に窮し、勢ひ他人の損害自己の困弊を來すのであります。又た期限に至らば、必

ず約束を重んじ、債務辨償を怠るべからざるは勿論、成るべく期限前に償還することを心掛けなければならぬ。

以上の目的を達せんと欲せば、勤勵、節儉、生産力を擴張し、收入を増加し、之を蓄積して、以て償還基金を増殖することを計らなければなりません。彼の舊債未だ完濟せられざるに新債を起し、若くは新債を以て舊債の償還に充つるが如きは宜しくない。負債に負債を重ぬるときは、負擔を輕減するの日なきのみならず、負債の増加するに從ひ、利子増加し、愈々高利に苦められ、遂には自暴自棄殆んど爲す所を知らざるに至るのであります。人々夫の如き有樣に陷れば、之を小にしては一身を誤まり、之を大にしては延て國家衰亡の基因となるのであります。

之を要するに、以上陳述せる如き事柄は、男子の動もすれば怠りやすき所であつて、女子の注意に依賴することの大なるものであります。故に一家經濟上女子の責任は甚だ重大でありまして、女子が家政上十分に其職責を竭くすときは、一家經濟も大に面目を改め、延ては一國の經濟も發達する譯であります。是れ彼のナポレオン一世の如き軍事に忙しき人までが、女子敎育に重きを置た所以であります。故に女子敎育の方針も、女子をして家政

に熟達せしむることを主眼として、善良有爲の家婦を養成するのは極めて大切であります。「家齊而後國治」と云ふ金言の意も茲にありますから、一家經濟の大切なると同時に、女子教育の緊要なることを忘れてはなりませぬ。

《完》



家庭

母親の感化

東京市教育會長 江原素六



◉女子の教育

凡そ時の古今を問はず、國の東西を論ぜず、或は名君と崇められ、賢相と稱せられ、經世家と唱へられて、當時を益し、又後世を利する人々にして國民の教育に心を盡し、力を用ゐざるものは未だ曾て一人もない、如何となれば教育の有無は個人の禍福、國家の隆替に大なる關係が有るからで有ります、且つ又論語にも教へざる民を以て戰ふ、これ、これを棄つるなりといひ、又は善人民を教ゆる七年、亦以て戎につくべしと、孔子の曰はれました教へは固より兵法や、調練の事ではなく、畢竟普通教育のことを申したのであります。

勿論其の普通教育といふのは男女を併せて言つたもので、唯その學科に於ては自から男女の區別はある、然るに今日では一個人でも又社會全體からでも、まづ男子を教育して後ち女子に及ぼす樣な傾きがある、甚だしきは男子に教育を授け、女子には衣服を與へるのを以て其宜しきを得たものと考へるのがある。

歐米教育家の説に、凡そ天地のうちに空飛ぶ鳥、水に潜む魚、陸に動く獸、地に生ずる植物其數億兆といへども、獨り人類に限ッて教育すべきものである、即ち教育のないものは人類たるの資格に缺く所ありといふのである、然らば人類の半を有する女子にして適當なる教育なき時は其の不幸は論ずるを待たぬ事である。

先年私の親が鷄を養ひました時、其圍みをいくら高くしても飛出して困るから兩方の羽を短く切ました、然るに五日、六日と立ますと短き羽根で矢張り飛出します、偶々養鷄に經驗ある友人が參りまして、片羽根のみを切りましたが、それからは容易に飛ばなくなりました、これは釣合がわるくなッたからである、

男女は常に釣合を取るのが肝要である、然るに男子の敎育ばかり進んでも女子の方が進まなければ、恰も片羽根短い鷄のやうなもので、男子の長じた智、德を十分に公私に利用することは出來ぬので有る、故に男子も敎育の効果を全ふせんとするには女子の敎は尤も大切である、

◎良妻賢母

いづれの國でも其國後來の盛衰を知らうとするには、現時の青年を見ればよく分るのである、即ち現時の青年は後來の國民である、男子の事は須らく言はず、我國今日女子の敎育知識は後來國民の母となるべき充分なる資格を備へさせねばならない即ち後來國家の隆替に關する重大の問題であるから大に奮發せねばなりません、

蓋世の英雄「ナポレオン」も麻の如くに亂れたる社會の秩序を整理せんには如何にしたらばよからうかと、轉た心を病ませて、是を當時有名の婦人「マダムカンパン」に問れた、すると「カンパン」婦人の答へに曰く、唯それ善母なりと「ナポレオン」は即座に首肯いて、嗚呼善母なる哉、善母なる哉と感嘆せられたといふ事である、

婦人にして苟くも善母であつたならば、この人は舅姑に仕へてよき媳である、夫に對してよき妻である、子女の爲めによき母である、婢僕の爲めにはよき主婦である、されば家事經濟は勿論人生の至福國家の大幸といふべき圓滿なる家庭を作ることが出來ます、

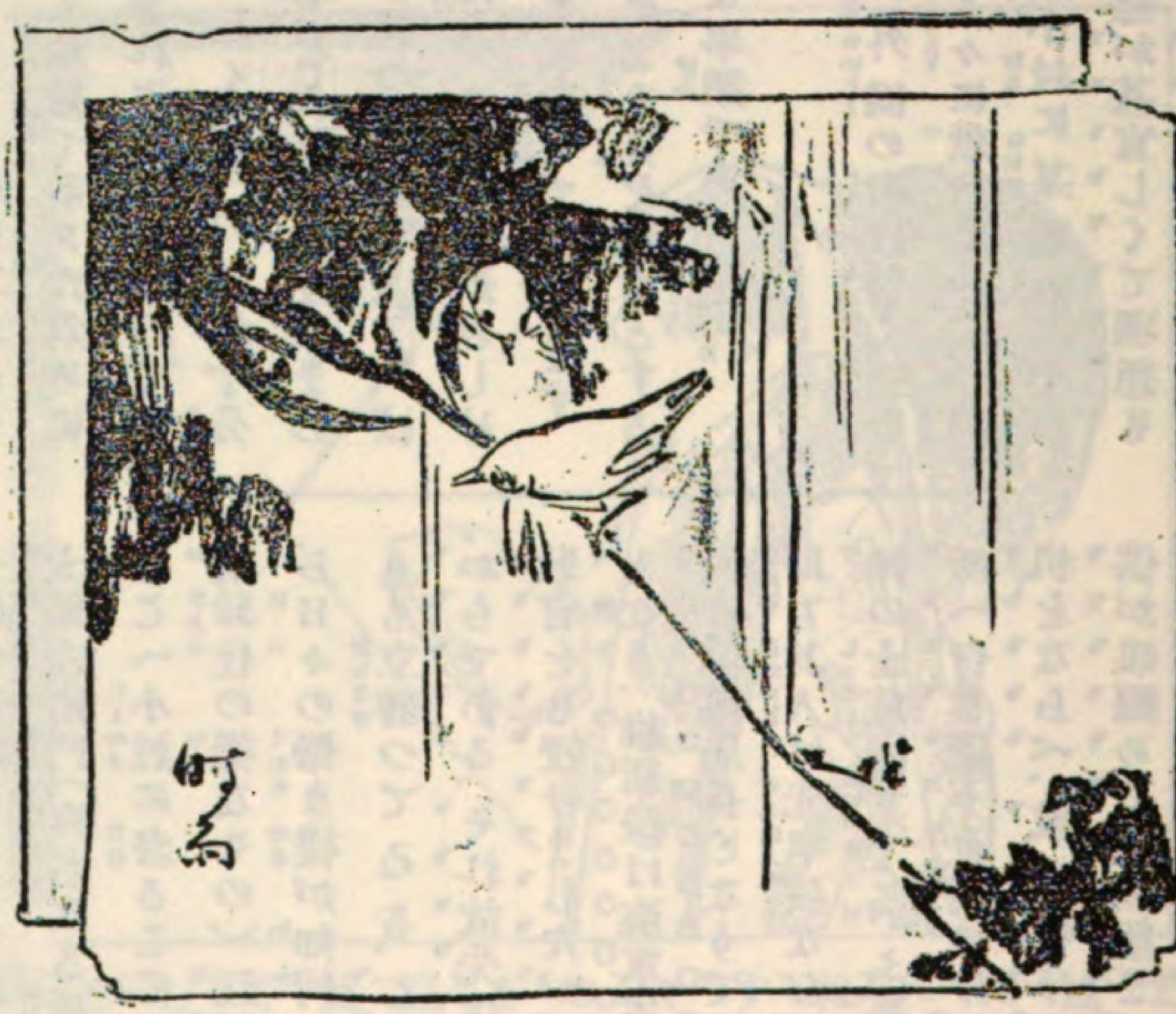
支那と日本と西洋とを論ぜず、總て有名なる人であつて、一人として母親の感化に由らぬものはありません、又其人々が、社會に偉大なる事業を成したのを見るに、內助、即ち妻の助けを稟けぬものはありませぬ、婦人敎育は固とに人生禍福の源泉で有ます。

◎男女同權

次に我國では男女同權といふ事を痛く忌みまして、女子敎育とさいへば兎角柔順〳〵と言ひますが、抑道德上男女同權とは、男は男だけ、女は女だけの操を維持し、各其義務を完ふする事を意味してゐるのであ

らう、支那では之を敎へて男女別ありと申してある、男女別ありとは、男に妻あり、女に夫ありといふ樣に註解して有ます、男女互に一夫一婦の德操を守ることを敎へて有ます。

男女同權云々と類似の言葉は妻は齋なりといふことで有ます、男女ともに天與の權利の本分を盡すことは齊しきことでありませう、また孔子家語には女は助なり、歐米の所謂妻は夫の補助なりといふことによく似てある、然るに敎育なき女子にては夫を助け夫を慰め、夫を勵ますなどゝいふことは到底望むことは出來ない、若も妻が無敎育であつて、妻たるの德操を備へざるに於ては夫の不幸、家庭の不愉快譬ふるに物はありません、



◉母の家庭敎育

文王の母大妊の體敎、孟母の三遷をはじめ、「ナポレオン」「ワシントン」等悉く母親の感化の偉大なることは喋々を要せぬ、或人が一世「ナポレオン」に向ッて陛下の將帥學と陛下の政治學とはいづれの學校に修業されたかと問ふた時「ナポレオン」は言下に『母の家庭に於て學びたり』と答へた、盖し那翁の整然として秩序ある智識は主としてその母親の秩序を重んじて敎育した結果と言はねばならない。

若も妻にして其德全からざる時は聖賢といへども其の痛苦の殆んど堪へ難い有樣である事は、往々歷史に見る處であ

ります、希臘の賢哲「ソクラテス」その人は實に歐洲道德學の元祖とも言はるゝ人でありまするのに不幸にも其妻「ザンティペ」の性質が至つて頑囂であツた爲めに「ソクラテス」も殆んど堪忍がしきれなかツたさうであります、且其子は「ソクラテス」の如く忍耐の德が十分でありませぬ故常に母子の間に大なる不和を生じました、大賢「ソクラテス」の如きすら其の妻の惡しければ困難であります、況んや我々平凡のもので妻があしければ生涯の不作といふ事はまことに金言であります女子敎育はよき母を製すると共によき妻を得んとするものでありますから、實に大切な事業であります。

◉母親の感化力

母親の感化力に就いて古の事、又外國の事は暫く措いて私が親しく聞き、又交際した人々に就いて一二の例を御話しいたします、靜岡縣の或小村に某といふ小民がありました、其妻なる者は心懸が甚宜しくて理想もなか〳〵高尙で平素の望としては自分の小供をは村の名主の次席にすはるやうにしたい、そうするには習字を學ばせ、村の習字先生とするにしかずと思ひてよく子供の世話をしました、然るに伊豆韮山の代官に江川太郎左衛門(有名なる砲術家)といふ人がありまして、そこへ小姓に參ることになりました、(小姓とは今日の御給仕の樣なもの)江川先生は其の小姓の立居振舞から日々の働き樣が如何にも規律があッて、他の小供よりも立勝つてゐる、これは不斷母親の仕附がよろしいからである、それ故先生は、その小供を特別に扱ひまた敎育をも授けましたが、この小供は後に幕府の軍艦頭となり、維新後は海軍省造船大技監となり、轉じて又宮內省御料局長となりて宮中でも大勢力家となりました即ち其人は先年歿なられた肥田濱五郎君である、又沼津の士族で某といふ寡婦がありました、其人は每朝臺所へ行き竈下を焚つけるに先ちて必らず子供の爲めに机をならべ、或は習字に又は讀本若しくは算術など子供が眼醒めて後朝飯まで復習をなすに便利になる樣にいたして一日も怠りませぬといふことであります、果して其の子供兩人は今現に博士になッてゐられる。

又私が關係しております學校の生徒で一年級から、三年級頃までは甚た强情で、敎員に逆ひます、止を得ず退校を命じました、すると直ちに母親が詫に参ります、此の如き事が幾回だか數へきれぬほどでありました、或時今度はいかほど母親が詫びても承諾をせぬと迄内決してゐたが、矢張母親の誠實なる謝罪に抗し得ずして退校を取消した事があります、然るに其青年は其後全く別人の如くなりまして四年は優等で及第いたしました、大かた五年級も優等で卒業するでありませう

今一つの例を申ますれば、某といふ書生が行跡とかく不良でありますから不得止退校を命じました、然るに少しも悔る氣色もなく靴音高く踏鳴らしていで、参りました、然るに其夕刻になって彼の書生は顔色蒼さめ涙を流しつゝ歸り來て申すには私にこれまで何事も恐ろしい事、怖い事を感じません、然るに今日、母親の涙には何とも申上げやうがなく、恐れました母の申すにはこの二十世紀の競争場裏に出て獨立獨行をなすべき青年が、退校を命ぜられるやうでは、お前の前途に就きおもひやらる親として憫然でたまらぬ、また父上は、常にお留守のみ故、家庭の敎育はこの母親の責任である然るに今日の始末では父上に對してこの母がすまぬとて母が涙を流しました、實に母親の涙ほどおそろしきものはありませぬ、どうぞ復校の叶へるよを願いたいとて眞實に歎きました、その生徒も今日では以前には全く別



の人物となりました、實に母親の感化力といふものは非常なものでありまする。

右の次第であるから女子教育の必要なることは論を待ちませぬが、其主義方法の適不適は更に大なる問題であらうとおもひます。（本篇氏が東京市教育會に於ける談話の要領を抄錄したるもの也）

素人看病法（承前）

復德女學校講師醫學士　佐藤恒久

◎看病人の性格（十條のきまり）

それから又人に依つては看病の出來ない性質の人もあります。此看病に就いて最も必要な性質と云ふのは何であるかと云ふに、是は看病を爲るのが道樂と云ふ性質の人即ち病人の世話を爲る事が好であると云ふ風の人が看病人に適當な人で在います。斯う云う人は必ず本心を以て看病を爲るので在いますから、間違は無いのて在います（世間にこんな人は澤山あり升）。併し然う云ふ人ばかりも無いものでありますから、多少看病は就いて必要な性質と云ふものを豫々心掛けて自分で養成して置くと云ふ事が婦人方には必要であると思ひます。其性質で必要なのは第一▲觀察力に富むで居るもの、即ち氣が利いて居ると云ふ事であります。諺にエヘンと云へば灰吹」と云ふ事が在います。即ちエヘンと云ふのは咳を爲る事でありますから、無論痰が出るものと見て悟つて灰吹を出して遣ると云ふ樣にしなければならぬ。此氣が利くと云ふ事は看病には最も必要な事であります。又病人が妙な顔を爲る時にも何所が痛むのであるかと云ふ事を速に見て察して遣る事が出來る、其察し心がある人程善良なる看病人であります。それから第二には▲正直な人が良いので在います。前にも申した通り看病人は醫者の居ない時始終病人に付添つて居るのでありますて、醫者が來た時に其間の容體を談さねばならぬのでありますから、少しでも嘘を云ふては醫者が迷ひます。其事を正直に談して呉れますと大に助けに成るので在ります。其外にも例はありますが是たけにして置きませう。第三には▲規律の

正しいと云ふ事であります。是は何か物を納めて置くに爲た所で其置所が何時もチヤンと定まつて居ると云ふ樣に始末の宜い人でなければなりませぬ。例へば品物が入用な事がある場合に定まつた場所に置いてあれば、直に其物を持つて來る事が出來ますが、或時は押入に納めてあり、或時は引出の中に納れてあると云ふ樣に常に入れ所が定まつて居りませぬと、急に入用の起つた時に大に狼狽爲る事がありますから、此規律の正しいと云ふ事は最も必要な事であります。第四は▲從順と云ふ事であります。併し是は醫師の方に從順であれと云ふのでありまして、決して病人に對して從順であつてはなりませぬ。勿論病人に向つても或場合には從順でなければなりませぬけれども、看病人が餘り病人に對して從順でありますると云ふと、病人は我儘になりまして、例へば醫者が食べてはならぬと云ふ食物を病人は兎角食べ度かるものでありますから、之を看病人に強請ります。其時看病人が病人の云ふ事を聽いて其を與へますと、醫者が良く無いと申す程の食物でありますから必ず害になります。それですから看病人は醫者に從順であつて、看病人に不從順であれと申すので在います。第五は▲儉約と云ふ事であります。看病人に儉約心が在いませぬと、金滿家の病人は宜しいが、貧乏人の家の病人は實に困るのであります。病氣に罹つて平素よりは費用が多く掛るから、成るべく約しくして一日も永く養生の出來る樣に爲て遣る事が肝要であります。若し財産も全く治療の爲に遣つて仕舞つて、醫者を頼む事も出來ない、と云ふやうな事に成らぬとも云へませぬから、兎に角病人のある時には約しく爲て遣らないと、中途になつて遂に其病人を見殺しに爲ると云ふ場合にならぬとも云へませぬ。些細な事ではありますが、今病人は粥を食べさするに、病人の事でありますから、澤山食べた所で二三杯位でありませう。其を看病人に儉約心が無いと云ふと、大な土鍋に一抔拵へます。すると後に殘つた粥は自分も嫌であらうし、誰も食べるものは無い、仕方が無いから其を捨てゝ仕舞ふ樣な事になります。是が毎日の事で永く續け

たならば如何斗り浪費であるか知れませぬ。又氷を用ゐる場合も同樣でありまして一寸用ゐて殘りのものをよく始末爲て置けば又入用の時に用ゐられますが、打遣つて置きますと、只の水になつて、後の用には足りなくなるのであります。一事が萬事で儉約の德はなかなか多きいのであります斯樣に儉約心があると無いとでは大なる差があるので御在いますから、物を約しく爲ると云ふ事は、看病人の一の役目であります。第六は▲忍耐と云ふ事であります。何しろ病人の事でありますから、病の爲とは云ひながら、時に依つては種々の我儘を云ふ事もあり、又怒りぽい性質の人は物を抛げ付けると云ふ樣な場合もありませうが、「是は病の爲で在るから」と此所をよく忍耐して何所までも親切に看病を爲なければなりませぬ。第七は▲禮義の正しい事が肝要であります。是は病人が看病人を信用爲ると爲ないとに關係爲るのでありますから、余程注意を要する事であります。看病人がチヤンと枕邊に畏まつて座つて居て呉れるのと、あぐらをかいて居るか、或は横臥して居るのとを比ぶれば、無論禮義のある方を病人が歡ぶに違ひありませぬ。殊に病人は神經が過敏に成つて居りますから、些細の事を氣に掛けるもので在います。苟も病人が看病人を信用致さない樣では看病人の云ふ事に從はぬ樣になるのでありまして即ち看病を爲た甲斐は無いのでありますから、看病人はなるべく病人に畏れられる位に爲なければなりませぬ。然うすると如何なる事でも病人が從つて呉れる樣になるので詰り病氣が全快爲るのであります。第八▲靜粛の人は活潑な性質の人よりも看病人に適當なる事は判つて居ります。看病人が餘り活潑であると嫌がるのは病人の常であります。第九は餘り情に脆いのは看病人に不適當であります。今病人が非常に痛がつて居る側ではらはら思つて自然自分も多少狼狽爲る樣な所が出て來る、然う爲ると病人が看病人に氣の毒であると云ふやうな考へを起して參ります。例へば諸嬢が親御樣の看病をなさるとして、諸嬢が大層に情に脆い人であつて、「如

何にも氣の毒であるから痛みを止めて上げ度い」と思ふ其心配顔を病人が見ると「ア、可憐だ私の爲に此樣に苦勢を爲て吳れる」と云ふ考を起すと、其爲に病氣が募ると云ふ事があるかも知れないのであります。斯樣に情に脆い看病人が病人と共に苦しむのが病人の目に觸れるのは宜く無いのでありますから、なるべく心を強く爲て居らなければなりませぬ。只顔ばかり強く爲て居ても、內心に弱い所がありましては、矢張自然面に見れる樣であると、病人の爲になりませぬ。又前に靜なのが宜いと云ふても、のそ〳〵して居るのは困りますから、丁度其間の所を取らなければなりませぬ。第九▲強壯看病人は強壯でなければ出來ませぬ。夜は遲くまで起きて居り或は徹夜爲る事もあり又は一定の時間に食事を爲る事が出來ないのは常の事であります一ヶ月も二ヶ月も然う云ふ風に働いて居て外へ出る事も出來ないと云ふ樣な事があるから、平素脆弱な人は看病を爲ると云ふ事は余り宜く無い事であります。第十は▲清潔好きと云ふ事が必要な事であります。凡て看病人は病室及び自分の着物なぞも勉めて清潔にしなければなりませぬ。若し傳染病患者でありますると、隨分看病をして居る人に病氣が傳染しないとも申されませぬ。其を豫防するには看病人の體が何時も清潔でなければならぬのであります。清潔好の人は自然身體が強壯でありますから、前項と大なる關係があるのであります。

斯樣に種々の性質が看病を爲る人に必要でありますから、成るべく平素から此性質を養成して置いて、いざと云ふ時の役に立たせると云ふやうにして置きたいものであります。右の外手先の器用と云ふ事があります。此器用不器用と云ふ事は多少天性と云ふ事もありませうけれども、是も矢張熟練すれば、不器用の人も器用に成るのでありまして、決して器用な人で無ければ此仕事は出來ないと云ふ譯ではありませぬ。是は啻に看病法のみに限りませぬ、如何なる事業でも、不器用な人が段々慣れて其仕事が上手に出來ると云ふ事が澤山にありますから、熟練すれば看病は誰でも出來るのでありま

す。殊に注意をして居りますれば、矢張不器用人でも手の動かし方が器用になります。然うして重に看病中の器用と云ふのは患者の體を取扱ふ時でありまして、繃帶を巻く時とか、患者を寐床から立たすると云ふ時に注意して遣りますれば、決して痛みを感ぜしむると云ふ事は無いので在います。それに熟練があれば良いのであります。若し患者が痛みを起すがと云ふ樣な恐がある時には、其事を爲る前に患者に向つて「少し痛いかも知れませぬ」と斷つて置く方が宜しいのであります。すると患者はどの位痛むかと思ふて居た所が、思ひの外痛く無いと歡こびます斯樣に前以て首を下げて一言斷つて置きますと、縱令痛みがあつても强く感じない。又餘り物事をそつと爲さうと思つて手先ばかり用ふと云ふ事は良く無い事であります例へば今患者の體を起すと云ふ樣な場合でも指の先で觸つたならば心持が良いと思ふ人があるかも知れないが、是は實に痛いものであります。却て手を充分に掛けてすれば、痛が少いのでありますから是は注意しなければならぬ事で在います。それから看病には男女何れが適するかと云ふに、是は男子よりも女子の方が適當して居る樣に思はれます。唯今申しました清潔好きか規律正しいとか禮義正しいとか情深いとか云ふやうな事は、總て女子の性質として得易いから、看病人には男子の方が不向かと思はれます。外國でも日本でも看病人と云ふものには女子を適當と看做して居る。又私も然う考へます。併し陸海軍と云ふ樣な所は、女子を用ゐられない譯があるので、男子を用ゐますけれども、一般は女子の仕事と看做して良い樣に思ひます。

趣味ある小庭園

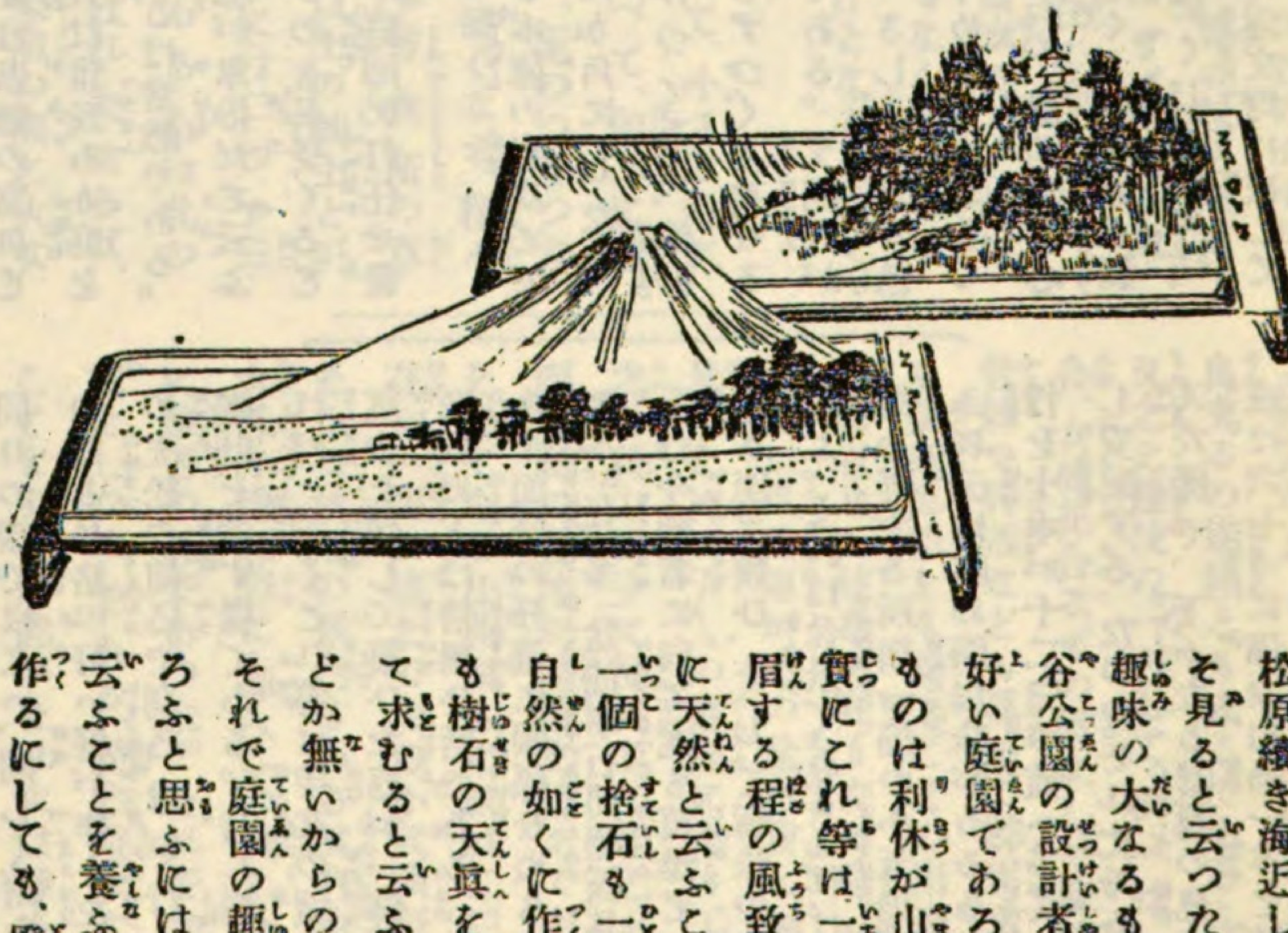
附盆景合

近藤嘉三

庭園の趣味は必ずしも黄金の力や、面積の廣狹に伴ふものではない、若し財力と、面積の分量とのみに由りて趣味が償ひ得らるゝものなれば、華族や紳士の庭園は何れも立派で雅致が無ければならぬ、それよりも今方

に築造されようと云ふ日比谷公園などは、尤もその精なるものと成る筈である、然し事實は往々反對の結果を示して居る、日比谷の公園は何の樣なものが出來るか分らぬが彼の設計なるものを見れば、その大抵を察することが出來る。然ればとて庭園の築造に黄金を費すは惡い面積の廣ひは惡いと申すのではない、大なるものには大なるものゝ趣味あるべく小なるものには小なるものゝ趣味がある、只之を求むるに、黄金や面積の外に於てするのが肝要であらふと思ふ。

天龍寺の夢想國師が嵐山を築山として大井川を泉水に見立てゝ、これを方丈の庭園に取圍んだとのは、大なる庭園の趣味ある者、又た我いほは



松原續き海近し、富士の高峯を軒端にそ見ると云つた太田道灌の庭はも少し趣味の大なるものである、これは日比谷公園の設計者などが參考とするには好い庭園であろふ又小にして趣味あるものは利休が山里の庭、集雲庵の露地、實にこれ等は一樹一石で千山萬壑に比肩する程の風致雅趣がある、これは實に天然と云ふことを失はぬからの事で一個の捨石も一莖の草も自然的で……自然の如くに作爲するからの事で聊かも樹石の天眞を傷けぬ故である、又強て求むると云ふこととわざとらしき事などか無いからの事である。

それで庭園の趣味……趣味ある庭を作ろふと思ふには、先づ己の心に趣味を云ふことを養ふのが第一で垣根を一重作るにしても、燈籠を据るにしても、一

一心から割出すものであるから其配置は思想の寫眞と云ふても善ひ、然れば雅致ある心の人は雅致あり庭を作り、卑俗な心の人は卑俗なる庭を作るは當然である。然しそれかと申して華族や紳士の思想が卑俗だと云ふのでは無ひ、がその中には雅致に乏ひのも見受くると云ふ計りである。必竟それは植木屋や庭師に打任せ置くからの事でもあろふか。

先つ俗極まる庭園を申さは驛々にある本陣の庭などである、棠檀やつゝちを刈込で、圓くしたり角にしたり、もそつと甚しいのは塔や富士の山が作つてある、兼好の所謂「前栽の草木まで心のまゝならずつくりなせるは見る目も苦しくいとわびしきものである。又同人がよき人の、のどやかに住なしたる所は、さし入る月の色も一きはしみ〴〵と見ゆるぞかし、今めかしくきらゝかならねど、木立ものふりてわざとならぬ、庭の草も心あるさまにて簀子透垣のたよりをかしく、うちある調度も古覺えて、やすらかなるこそ、心にくしと見ゆれ、と」ある、甲乙二者を比較すれば、其雅俗文野は決して同日の談ではない、同しく財を費すならばどうか風情のある品格の好い庭が作りたいものである、近頃流行の禿松の植込や刈込檜の行列、その俗ばい事は實に嘔吐を催す樣である。若し趣味と云ふ側から申したなれは、恐くこれ等は半文の價値も無いてあろふ。千金萬金を費して築ひた庭が一鉢十錢内外の緣日植木にも及ばぬとは情無ひ話である。して見れは趣味は實に黄金や面積の分量に關係せぬものと云はねばならぬ。得趣不在多盆池拳石間煙霞具足、實に格言である。余は今讀者に向て尤も黄金を費すこと少く、加之も面積も至て狭ひ、そして趣味の多ひ庭園を紹介しようと思ふ。それは盆景てあるこれは全く盆池拳石の間の煙霞を弄する所謂一箇の小天地でその小天地の中には云ふに云はれぬ面白味があるもので例えばさゝやかなる竹を十本か十二三本植へて其傍に一つ二つの小石でし安配する、たつたそれ丈であるが、修竹千竿の幽徑に入た樣で、丁々たる碁石の色でも聞ゆる樣な趣がある或は六七寸に滿たぬ松一本を植へて、小砂利か何かで

細流れを作つて拇指大の捨石を置けは、其松の五十年も百年も經つた樣に見へて、寒流石上一株の松とても云ひ度ひ景色が見ゆる。田子の浦の景色も、松島の風致も、木曾山中の獨木橋の有樣も自由自在に築かるゝ。これは又自已の意匠を以て如何樣なる風景も出來る。只單に盆景としての風情を賞する計りてなく他日大きなる庭園を築造する時には非常なる助けとなるものであるふ。

近來倫敦では大變にこの盆景が流行して、小さな鉢に二三十年を經たりと見ゆる松や杉を植へて、向ふに富士山を置き或は楓やぬるての丈の短ひ、葉のつまつたのを澤山に植込んで、其内に五重の塔を置くなど、種々の景色を作て日本の風景と稱へて客間や會食所の卓上に置くことが、非常に流行して中流以上の紳士とか流行社會に名を知られた、貴夫人人の家には二つや三つこれを持たぬ人は無ひと申すことである、余は此の盆景が日本でも座敷飾の一となりて弄ばれたならば、居室の風情を添ふる計りでなく、庭園築造の際に大なる利益があり、又今日の樣な卑俗な庭園の築造法を改良するの端緒とも成るであろふと思ふ。

又之を遊技の一として弄べば、至極面白ひ。昔の撫子合、女郎花合などの樣にして家庭の慰をするのである。骨牌や將棊などゝ異つて弊害もなく、至極優雅で、加之も美術思想をも養ふことの出來る慰樂である。今年の夏歸省して岐阜に在りたる時、牧野花遊だの橋山だのと云ふ風流連がこの盆景會を催したが、それは種々の景色をめい〳〵の意匠に由りて、會日迄に築き揚けて之を持ち寄りて品評して甲乙を定むるのであるが一尺四方程の盆池に錢蓮を植えて中洲とも見ゆる所に小亭を置てある小西湖もあれば二三寸の萩や女郎花や鷄頭花を一面に植えてたる小武藏野か小宮城野とか言ひたそうな秋郊の景色もある其打水が夜燭の光に映じて、大珠小珠五彩に輝ひて、美しひ、涼しそふな風情は實に筆舌の外であつた。それで余は此人世に斯の樣に注意をしたのである、同じ遊ぶなれば意匠を練ると云ふことをするが能ひそれには豫め籤取を以て盆景の題を

分つのであるが、其籤には只泉水との築山とのする計では風情が無ひから、古人の發句を題にするのである即ちその發句と籤札に書て置くのである、例之「古池や蛙飛び込む水の音、」との「枯枝に鳥のとまりけり秋の暮、」とか種々季節の發句を認めて、其發句に由で作意築造する、先つ假りに一寸との句で築くとすれば、古池の句を得たれは、小さな池を作つて、二三寸程で咲せた山吹を所々に植ゆるとか又枯枝の句なれは、向ふの方に山骨の露れたとも見ゆる、石の一も置て手前にぬるてか楓の落葉して、僅かに一葉か二葉散り殘て居るを植ゆる、斯樣に築き揚けて、會日に之を臺の上に飾つて傍にら短冊にその發句を書ひて添えて出すのてある。そして其盆景假山水が題意に逼つて居るか、どうかと云ふことを品評する事にすれば餘程興味のある遊技の一となるてあろふと思ふ、そして名は盆景合せとでも各つくるが好ひであろふ、この小なる山水も時としては華族や紳士が、巨多の費用を擲つて作りたる庭園を淩ぐことが無ひとも限らぬであろふ。

庖厨の治め方　（三）

治庖會顧問　赤堀峯翁

緒言

丁度今から二十年の昔、明治二十年に、今の福羽子爵が高等女子師範學校の總理をやつて居らるゝ時に、同校の生徒で、近いうち卒業するといふものゝ爲めに割烹の出教授をしました、割烹塲も其當時新規に出來て、一週に一回づゝ割烹の實習が始まりました、尤も寄宿生の數は百人程で、當時はいづくの學校でも彼の賄所といふものがあつて、此所でも矢張木柝が鳴ると、女生徒が食堂へ來て食べる、食事がすむと箸も茶碗もみな其儘にして置くといふ姿であッた。それでは婦人にして一家の夫人となつた時に宜しうない。といふ事に心づいて、賄の改良といふやういやうな考を起しました。

尤も其時分賄師といふものは、隨分素人で、何も解らないのが多い、中には士族が商法に手を出して失敗して賄でも引受けて仕樣といふ族もありました。それ故、

食物として、完全したものがありません、眞實に一ッ生徒の爲めに賄ひといふのでなく、譬へばまづ全鱠魚を煮て、其汁の殘つたもので翌日は甘藷を煮るといふ姿て、あッたから、芋を煮ても大根を煑ても本當に煮えませぬ。そこで當時此の學校で生徒を監督して居らる、舍監の方が（山川二葉女史現大學總長の姉君）賄方を呼んで申されたには、本校では割烹の教授を始めて居ますが、其の材料も賄方とは異つて多少吟味をしてゐるから、幾分か本校割烹の方が好味であるといふ事は爭はれない、併し大勢の生徒に食べさせるのに、芋も大根も半煮といふやうでは、宜しくあるまい、どうかして柔かに煮へるものなら煮て食べさせたいものである、學問する人達に、斯ふいふ固いものを食はしては困りますといふ、御話がありました、其れは其の筈で、鰯や全鱠魚を煮た汁で甘藷を煮るから、口の端に持つて來られない、然し賄ひ方は儲けやうといふことが第一であるから舍監のいふ事に應じません、それて其の後は生徒に自炊させる方が至當であるといふ、說が起つたものと見へて、賄は割烹の價値をいふことが、生徒にも少しは御了解になつた、それから先生に世話をして貰つて此所に割烹講習の必要が却て材料を費けなくして甘く煮じる、といふ所より女學の內に割烹の一科を加へて、自炊する事になッたらしいのである。

それから今度は割烹の場所を少しく廣く拵へました、其の中には各組に仕切をして、十六人、十七人位を一組としました、それで百人程であるから六個所に仕切り、一番から六番までとし、皆竈附で、臺所が分れて居る、其臺所 割烹所は、一週間交替で、二人とか三人とかいふものは此所の 割烹係 になッて毎日、朝は蔬菜、晝飯は何晩餐は何、それから土曜日で少し御馳走する時には汁粉とか何とかを別に拵へて食べさせる、又日曜になれば、女生徒の事であるから菓豆の甘ひ口取でも拵へる事になりまして、さういふやうに自分も世話をいたし、又長女の赤堀菊を出勤させまして、十三年間引續いて行つて居りました、それから後も生徒は各自炊を致しまして、下婢を使つて食物の調製に手傳はしてや

りました、今日では婦人の學校の寄宿では大略さういふ風になッて參りましたがその元は女子師範學校から及ぼして來たのでありませう。尤も婦人の學校で男子の賄方を置くといふ事はない譯で、且つ婦人が自分ですれば、安價で出來るし賄方を頼む時は不味で、若し場所の悪い所から出た品を、煮焼する時は衛生上にも危險であり、旁々割烹を習つたのを幸い、引續いて自炊が行はれ、遂には割烹が女學の一科目になッたのであります。

その後世間でも又此の必要を感じたものと見へて、明治十七八年の頃中原文學士が設立された成立學舍、其の女子部でも割烹場を駿河臺の袋町に設けて生徒（百五十人ばかり）に敎授しやうと自分に御依頼がたッた。

それから諸所に及ぼして參つて、一橋通の女子職業學校が出來まして、今の裁縫女學校の校長渡邊辰五郎氏が當時同校の裁縫敎師をして居りましたが、私に女生徒の爲めに割烹のことを敎えて呉れといふ事で、それへも參りました、確か二十二年頃で、當時は寄宿生が稍く十九人位しかなかつた、其の內通學生も習ひたいといふので、間もなく兩方合せて百人程になました。

それで私の考へでは更に一層盛にしたいといふので、安西宇太郎氏（現今師範學校數學敎師）武田英一（砲工學校講師）野口保興（高等師範學校敎授）の諸氏も加はられ、茲に割烹の會を起して希望の奧樣の爲めにしたらばよからうといふ事で始めました、其の當時は箕作麟祥氏の夫人、同住吉氏の夫人、平山當時の內閣書記官長の夫人、福羽逸人氏夫人、成島謙吉氏の夫人、其他陸軍の大佐、中佐、少佐といふやうな御方の夫人が會員になつて丁度二十五年に成り立ちました。

それからこれは別なお話でありますが、或る立派な身分の夫人でありましたが、一日私が訪問した時、丁度鯛の潮の汁を調理して旦那に羞められました、其時夫人の申さるゝに割烹店へ申付ると、色は白くて甘味がある、家で拵へたものは鹹くて迚も食はれない、それで、鹽汁の中へ砂糖を入れると言はれる、恐らく潮の中へ砂糖など入れて食へるものではありません私は誠に見

るに忍びないから、別に御手數料など要りませんから出敎授して上げたいといふので、其の家々へも參る事になりました。斯樣に、學校は卒業しても家事向の事は少しも知らないといふ御方が少くない、それで此の割烹といふ事は女子の爲めに必要であつて、第一家族の人數を計つて、これだけの人數には何程の米、味噌、蔬菜がいるといふ事を積つて見る、さうすると自から冗費を省く事になります、から大勢の奥樣達を集めて行らうぢやないかといふことであります、今日の奥樣中にはまた摺子木持つた事のない、又火を焚いた事のない方が幾らもある、といふやうな譯で段々とこの割烹の講習會が盛大になつて參りました。

扨この料理といふものは極めて習ふのに易いもので僅かの講習で直ぐと効能が顯はれて參ります、麹町の學務委員をしてゐらるゝ小磯といふ方のお孃さんが或所へ嫁ついてゐらるゝ、其の良人が勸め先きで西洋料理を食べて、家に歸つてから何か日本料理を食べやうといふがどうも、甘く出來ないので困るから少し割烹を敎へて呉れといふ所から、少々稽古をしました、ところがそれを見聞して居ります中に同家の女中や、お働婦といふ者も一寸した豆腐の汁位は拵へる樣になりました、それ故小學校の女生徒にも習はせたいといふ事で、色々反對もありましたが、どうか高等四年級を卒業したものには燒豆腐の煮樣、豆腐の汁、鹿角菜の煮樣の大概は修めて六ヶ敷料理は知らなくとも、其位のことはしてやりたいと主張されて漸くまとまりまして本年の六月開始されました、月に一回づゝ小學校の高等の三年と、四年の女生徒を集めまして敎ゆるのであるから、芋を煮たり、唐茄子を煮たりするが、皆自宅に歸ッて實地にやつて御覧になると必ず柔かに甘く煮られるやうになるのであります。庖厨の治め方に就てこれから追々と御婦人方の心得になるやう實地の御話をいたしませう。

親の命令

梅軒主人

世の親達には、兒供が兎角、其の命令に從はないとて、愚痴を溢すものが多くある。成る程、兒供が親の命令に從はないほど、良しからぬものはあるまいと思ふ。時からいへば、親の不愉快、家庭の亂調で、將來を慮れば子の不孝は勿論、國憲を重んじ國法は遵ふといふ精神を破壞することになるであらう。實に、此の事は、些細に似て、而かも、甚で關係の大なるものである。何故に、兒供が、親の命令に背くに至るか、固より兒供其れ自身が、生來、有して居る偏僻の性があるとしても、しかしながら、何かの原因でなくては、斯んなにも淺ましいことになるものでなからう。蓋し是れは、兒供の罪を責めるよりも、親たる人、殊に母たる者の罪が、いと多いであらうと思はれる。

一寸、實例を擧げて見ように、兒供が、病人の枕元をも頓着なしに、走り騷いで通り行くことがあつたとすれば、其の時、世間普通の母は何といふであらうか。

「これ〳〵、そんなに、病人の枕元を、走るものではない、」と、そうして、其の時の母の顏色はといふに、隨分微笑を洩らして居ることもある。又、其の時の母の態度はといふに、或は手に裁縫の糸針を離さず、否らざれば、口に煙草の烟をくゆらしつゝあるようなこともは、全くないであらうか。若しも其ほどでなくば、恐らくは心の中に語りて、「何日か之れを制めたこともあつたが、兒供は走り度がるものだから、無下に抑へつけるも可哀相である」とて、全でこれを知らぬ振りにして置くこともあらう。我々は必ずしも此のよしな言を發すなかれといふのではない、又此のよしな微笑や、態度や、同情寛假を非難するのではないのみか、只〻之れ等を用ひる場合が、此の時には適當しないのではない、正當でなからうといふことを思へるのである。若しも其の時に、母が自分の仕事を中止め糸針を下に置いて、顏を謹嚴にし言を莊重にして、先づ「チョイト此處へお出でよ」と呼ぶならば、兒供はどうするであらうか。忽ち靜まつて、其の前に來て、直ちに、母は何事をいふならんと、其

の顔を熟視めるであらう。そこて丁寧に其の心得違を諭し、病人が如何に迷惑するかを説き聞かせ、以後決して再びしないよーに誓はせるならば、兒供がどれだけ感銘するであらうか、彼れと此れとを比べば、どのよーに母の見識が立ち、どのよーに親の命令が行はれるか、世の母たる人先づこれを試みて御覽あれ。

詮ずる所、親の命令すること又禁止することは、假初には出來ない



もので、其の宜しきを得と得ぬとで、どれだけ、教育の上に關係するかは、大抵思ひ當たることであらう。左にこれに付いて、親たる人の心得べき大切の個條を、並べ擧ぐるであらう。

（一）命令禁止を發する場合には先づこれに注意させることが肝要である。兒供が、親の命令禁止を破るといふは、それ程に故意でするものではない、多くは知らず識らずに、そんなことをするのであるそれといふは、何事か命令、若くは禁止する場合に、兒供がその事を、よく飲み込まないから、起

ることが多いのである。即ち、親の命令禁止したことがあつたか、否かを、心に留めない所から、起ることが多いよーである。何にせよ、命令禁止をなす場合には、最も嚴格に、最も眞面目に、言ひ渡して、深くその事に注意させるがよろしい。それでさへ、兒供といふものは、其の後何かに、心の奪はれて居る時は、全くそれを忘れて、犯すことが有り勝ちである。しかし、元と初にさへ、確かと注意させてあるならば、一々八釜しく、其の命令禁止を繰り返すには及ばない、只々チラット目付で、或は手擬で、以つて知らせば、それで彼れ等は、忽ち悟つてこれに從ふに至るものである。

(二)命令禁止はこれを粗忽に與へてはならぬ。粗忽に、當座、思ひ付いたよーな命令禁止は、屹度後に至りて、悔いるよーなことがある。何故かといふに、即座に命令禁止することは、その時だけは慥かに都合がよろしからんも、他の場合に至ると忽ち不都合を感ずることがあり、或は又それが、兒供に長く耐えられないことがある。そんなことで、後になつて、その命令禁止を取り消すか或は更めるよーなとあらば、それがために親の信用は忽ち落ちてしまふであらふ。全躰世間の親が、命令禁止することに、隨分、無理無考のことがある、兒供の惡戯は、大人の眼より見てこそ、そーとも見えるが兒供の積りでは、決して惡戯とも思はないことが多い。例へば、板塀の節穴に指を差し入れると、襖障子に指を突き込むとは兒供に取りては、同様に考へて居る、又石を抛り投げると、茶碗を投げ破すと、彼れの心中には何等の區別もないのである。されば兒供が、障子に穴を明け茶碗を投げ破すよーなことあるを見れば、初からこれを叱り懲らすことを廢めて、先づ板塀の節穴は指を入れても差支ないが、障子は柔かなものであるから、其の都度に破れるものであることを會得させ、又石はいく等、地に投げても破れないが、茶碗は破れるものであることをよく〳〵承知させて、それから後は二度と犯さないよーにすればよろしい。勿論これは、年齒も行かない兒供に、會得させることが六かしいから、初の間は、先づ障子や茶碗などを、破はされても致方が

ないとして、只々大切な品物を、身の周に置かないよーにすることが肝要である。

(三)命令禁止は、其の言を成るたけ、少く、又込み入つたことを止め、其れに何を命令禁止したのか、能く明かにせねばならぬ。世間では、兒供に命ずることや、禁ずることの箇條が、多過ぎて、兒供にしては、甚だ迷惑することがある。一例を擧げれば、兒供が飯を食べるとしように、ソレ、チヤント坐るのであるよ、ソレ餘所見するのでないよ、ソレ御飯を溢さないよーに、一つゞこお拾ひよ、ソラ〳〵お膝が崩れたよ、そんなに澤山御飯を食べるのでないよ……、それでは兒供は堪つたものではない、怖づ〳〵ビク〳〵、成長することも出來るまい。まさかそれ程でなくとも、母の口の喋々と八釜しいのには、側から聞くも煩いことがある。兒供に命ずることとは、命じなければならぬことのみでよろしい、又禁ずることも、禁じなければ、惡人になるとか、危險であるとかいふことだけでよろしい。よつく考へて見るに、兒供が大聲を上げたからといつて、それで惡人になるであらうか、或は危險であらうか、又兒供が跣足で走つたからとて、それで惡人にならうか、飯を溢したからとて、危險であらうか。何でも考へるに兒供が危險であると惡人になるとの心配あることは極めて少いのである。石や木屑などが、ゴロ〳〵横はつて居る所を、跣足で走れば危險でもあらう。兄弟の食物を横奪したらば、惡人となるでもあらう。しかし、こんな事は、左樣に多くは、現はれて來ないものである。され



ば兒供に命令禁止する箇條の煩いは、全く其の必要のないことが知れるであらう。むかし、ロックといふ教育家のいつたことがあるに、兒供には、成るだけ、守らせなければならぬだけの規則を與へて、簡單に過ぎても、繁雜に過ぎてはならぬと。それから又ボルマンといふ學者は、一般に父の命ずることは、母の命ずることよりも、兒供が從ふものである、その理由は、父の命ずることは、多くは、簡單であるが、母は喃々饒舌くるからであらうといつた。成る程一理ある說である、尤も、兒供が父に從ひ易いといふには父は母よりも嚴重であるからもあらうか、しかし母の饒舌は兎角其の見識を下げるものである、言の少いのは、何となく重々しく見えてよろしものである。

(四)命令禁示は後にも先にも、父も母も一致して居なければならぬ。前條にも述べたやうに、世間の母は兎角言が多い上に猶、動々もすると輕率しくて、思ひ付き次第、見當り次第に、命令禁止を發するものがある。例へていふに、兒供が門前へ出たとしように、見るまゝ直に頭から、「誰れが斷りもしないで、門の外へ出ましたか」ときめ付ける、その權幕に怖れて父が許したことをも告げずに、シク／＼と泣いて居る、所へ母が全くそれが父の許を受けて出て居つたことを後で覺つて、今更何ともいひやうのなくて、そんなにも甚くきめつけなくても、よかつたにと、後悔することがある。これ等はまだ優しい方だが、前に命じて置いたことを、後で忘れてしまふか、或は記えて居つても、催促しないことがあり、又は前に差止めなかつたことを、後で突然禁ずることなどが、往々あることで、兒供は果して何れに從へばよろしいか、殆んど當惑することがある。それから、父の命令禁止する所と、母の命令禁止する所と衝合つて始末につかぬことがある。父が八釜しく禁じて置いたことを、母は見ぬ振りに、或は内々の言で許すことがある、或は又父が命じて置いたことを、兒供が果さないから、母が獨り氣を揉んで、自分で代りに其の仕事をしてそれで、其の兒供の口からは、父へ向つて、父に命ぜられたやうにしたといはせるものがある。甚しいとき

は父の命じて置いた仕事を、母が可愛相だと考へて、アお父さんは何故あんなに甚いのであるかと、呟きながら、一切自分で取り計らふものがある。成る程母の愛情としては、左もあらうが、しかし父は決して其の子を憎んでするではない、詰まり子を愛する情から、こんなにも訓練るのであるといふことを覺つて、己れも父と同樣に約束を果たさせることを監督する母は誠に少い。世間で父が子を譴責ると、母は中に入つて、これを慰め、父が放蕩息子を勘當すると、母は内々澤山の旅費を與へて出し遣るといふことは敢て珍らしくも何ともない話である。此のよーにする母は如何にも子より有り難く思はれよーが、しかし後日自ら侮られる種子を蒔くので、若しも後年、父が死去した跡になれば、それこそ、母は在つて無いよーな取扱を受けるは、始から鏡のよーに明をである。

(五)命令禁止には他の方便を用ふることはいけない。成る程、方便といふことは、重寶ではある、兒供に或る事を會得させたり、或はどうしても兒供の聞かないときには、それで以て、從はせることが出來る。例へば行儀を正しくしなければ、巡査樣に渡してしまふとか、善からぬことをすれば、狐や狸に投げて遣つてしまふと告げたり、或は親の制し止めるを聞き入れなければ、今晩鼠が來て、坊の頭を眠て居る間に嚙むであらうなどといふことである。一時はそれでよいかも知れないが、後に至りて、一向鼠の來ることもなく、又巡査に渡されることもなく、又或は狐や狸は受け取るものでないなどを覺つたときは、モー再びとは親の言を信じない。それだけなればまだしも、今度は自分も親のよーに虚言を吐いても差支のないものと心得て、段々に不實な人間となつてしまふかも計られない、思へば、恐ろしいことではないか。若しも其のよーにならなければ色々と虚喝されたものだから、ビク／＼怖氣づいて、後に腦病となるべき種子を蒔かないと限られない。これで以て一時の方便を使ふは甚、氣附はしいことが分かる、何も有りのまゝに責めるか催促するか説諭すればよろしいのである。

右の通り親の命令禁止を假初にしなければ、モー兒供がいふことを聞かぬとの苦情は日々減じて來るは慥である。世の親たる人殊に母たる實際にその通りになさい。

(をはり)

割烹實習

女子職業學校割烹科教員　井上善兵衛講述
岡野をり江筆記

△源氏麩

源氏麩とは青と白の薄すだれ麩の事で、こゝにはこれを五枚用ゐる割でお話しをする。麩は沸騰の湯のなかへ入れ、サッと湯煮をして、くる／＼巻き、小口から細かに切る。『鍋の中へ生酒五勺、味淋一合、鹽五匁、砂糖五十目ほどを入れ煮立たところへ、まへの切つた麩を入れ掻きまはし、それへ水飴一錢ほどを加へる。汁の煮つまつたところで鍋を卸し、皿へ盛り、そのうへに南部霰をふりかけて侑める。拜見がうつしく、精進料理の丼、又は鉢に用ゐてよろしい。

▲ケンチン巻

豆腐一丁をよく水を切り、これを鍋の水のはつたなかへ入れ、煮立つて來たとき、笊へあげてよく湯をしぼり、煎り豆腐の様に煎り、其三分の一は裏漉にかける。『豆腐の中へいれる種は皆な下煮をして置く。』俎板の上に濡布巾を敷き、其上へ紙湯葉を載せ、これでまへの豆腐を太さ一寸ほどに巻き、蒸籠へ入れて蒸す。蒸し上りしとき、玉子燒器に油を引きこれでいためる。』別に味淋、醤油、砂糖を煮立て、油でいためた分はこれへ轉がしてツヤをつける、これは精進の口取及び鉢に用ゐてよろしい。

△百合の白煮

姫百合の小さいのを選りてよく洗ふ。(注意＝洗ふには魚串の様な細く尖つたもので、よく百合の内側の土をつゝき出すがよい。)これを赤鍋の中へ一個づゝ伏せて並べる、鍋一杯になつたら、あく引砂糖を百合のかぶるほど入れる、鹽は百合三十個につき七匁位の割に入れ、その上に美濃紙を蓋の代りに直にかぶせて煮る。汁の煮つまつたところて味淋五勺を加へ十分位煮て卸す、

これも口取又は平の種につかふ。

▲伊達巻玉子

魚は何でもよろしい。百目程をよく擂つぶす。擂るときは鹽を加へる。これに玉子を一個宛入れて段々にゆるめ、緩んで來たとき、味淋の煮切り五勺と煮汁一合、生酒五勺、醤油四勺程を加へ、裏漉にかける。風味を試みるため擂肉なとつまみを玉子燒鍋にて燒きもし試食して醤油でも甘味でも不足と思つたときは、それ〱加減をして、これから切一體の本燒にかゝる。『玉子燒器へは油を引き、これへ擂身を入れる、七輪の火はほんの餘熱ばかりにして置く、玉子燒器の上へは、炮烙をかぶせ炭火を上へ載せて上から火をきかす樣にする。(注意=炮烙の上へ火をあげるとすべり落ちる恐れがある。そこで金輪を炮烙へのせてもいゝ、又それがないときは、繩を鹽水でよくあらひ、又鹽をこすりこむ樣に度々つけて釜敷形に作り、炮烙の上へ上せる、七輪の内へ炭火を積みてもすべり落る恐れがない。)それから火が利て來ると、所々がふくれては焦げる、焦げてくる部分へは手早く濡紙をあてゝこれを防ぐ、(注意=濡紙は豫めその燒く側へ用意して置くがよろしい、)指て押して見て堅くなつたのを度に、卸して板へ明け裏かへして再び五分間ばかり燒く。それから「鬼すだれ」(竹すだれの一種太くも編みたもの)へとつて、端から巻て其上を麻糸で縛つて又十分時間置く。さめた時後厚五分位に切る、これは口取に用ゐる。

▲テツクワ味噌

先づ大豆と麻の實とを煎り置く、牛蒡、細いときは小口切り、太いときは四ツ割位にして小口から刻む。蓮根も四ツ割、同しく小口より切り、以上大豆はじめ諸種を胡麻の油でよくいため、これへ生油五勺へ味啉三分を加へ十分間程煮て味をつける、そこで味噌はもし上赤味噌ばかりの時は、百目につき砂糖八十目位を入れる。若並味噌と上赤味噌と同割のときは、砂糖は六十目位でよい、この味噌をまへの油ていためた種の中へ入れ、初めは緩み加減と思ふ程にて三十分間ほど練りあげると、それてひどくうまるテツクワ味噌が出來る、

土用中でも五六日間風味のかはる事はない。

▲牛肉カツレツ

牛肉を長二寸位、幅一寸五分位に切り、庖丁の峯でそく〳〵と叩き、板の上へ並べて上から鹽と胡椒をふりかけ、米利堅粉をつける、その上へ玉子のといたのを塗り尚上へパン粉をつけてヘツトで揚げる、狐色になつたを度に皿へとる、皿へは古新聞紙を敷いて置けば油のきれがよろしい。これは鉢肴に用ゐる、附合せには馬鈴薯又は青隱元などを油であげて添へる。

▲牛皮（菓子）

白玉粉椀一杯につき、水一杯砂糖一杯半の割で、鍋へ入れ火にかけて煉る。凡そ一時間平に煉つて、煉れあがつた時、ブリキ箱（外有合せの箱何でも）浮粉を敷き、これへ流しこみ、上へまた浮粉をふる。冷めるにしたがつてかたまる、その時切つて用ゐる。

妊婦の心得

米國人　ミセスウ井ン

◎腹帶の弊害

丁度今から十年程以前の事で、私に一人の子供が生れます前。其節私が針仕事に頼んだ一人の日本婦人がありました、其時其人も矢張子供が生れる前でありましたが、帶を固く締めて居られたから、私は少しその人が懷妊とは氣がつきませんでした。後で不思議にも其方の子供と、私の子供と、丁度同日の同時間に生れました。二三週間立ちますと其母親は赤坊を伴れて私の宅へ來ましたが。私は其小兒の頭を一目見ました時には非常に驚きました、何故驚ろいたかと申せば其子供の頭が私の子供のよりは餘程度はづれて大きいのです、そこで又其子供の身體を見せてもらいました時に、尚一層驚きました、頭は私の子供のよりは餘程大きいのに其身體は私の子供の身體よりは遙かに少いので御座います、其量目も大方私の子供の半分位しかなかつたらうと思ひます、私は其きな頭と小なな弱々しい體を

見まして大變心痛しましたがそれが深く私の心に印象せられて今だに忘れる事が出來ません、扨て私の心配は遂に事實となつて、其赤坊はわづか二三箇月の間生てゐてとう／＼死んで仕舞ひました、若しそれが生てゐましたならば、必ず大變苦んだに違ひありませんから之は却て此小兒のために幸福であつたかも知れまん。

私は此經驗に由て日本の母親さん方が子供の出產前に腹帶を固く御締めになる事を知つてそしてそれが知らず／＼の間に其子供の上に及ぼす恐ろしい弊害を覺りました、それから私は大變注意して此事を調へましたが、其調べ得ました結果を今茲に御話いたしませう曾つて日清戰爭の直ぐ後のことでしたが、私は幸にも戰爭から御歸りになッた士官や兵士の方に大ぜい御目にかゝッて聞くのに日本と支那と兵士の身體の大なに大變な相違があるとの事で、日本人は支那人よりも身長の低い人種だと云つて大層慨歎されました、それには何か分解のある事ではあるまいかと思ひまして、又一層私が研究の材料となりました。

尤も信用すべき筋から聞くのに支那の婦人は、日本の婦人方の樣に子供の生る前に腹帶を用ひないとの事でした、此事は日本人の體格が主として母親の腹帶に關係すると云ふ私の說を確めました、日本の方々から私は度々其身長の低いことについて色々な說を聞きましたが、體格の短少なるといふ問題に付ては日本の方々が大變注意して居らるゝといふことが明かです、殊に曾て日本へ參りました亞米利加の私の朋友なども之に就て色々の說をして居るのである、扨て茲に一つ、大切な問題といふのは日本の婦人方の健康のことであります、外國でも隨分澤山の婦人が婦人的の病に苦しめられて居るのは明かであります、けれども確かに此病氣は日本に一番多く流行して居るやうです、曾て日本に參りました外國人は何故日本の美しい若い婦人はあの樣に直きに花盛りの時が過ぎてしまふのであるか、何故あのやうに早く年老るであらうかと申します、これは全く日本婦人が日本固有の婦人病に苦しめられる

結果であります。

◎頭部の膨大なる原因

そして此病氣の重なる原因は確かに小兒の生れる前に帶を締めるためだと思ひます、此弊害ある習慣が行はれて居ましては、容易に日本國民の身長の低い事は免かれないまた廣く流行て居る婦人病も免れない、而して日本小兒の特有ともいふべき頭の大なる事即ち天然を失ッた形は免かれまいとおもひます。

胎兒の頭は其位置に由て身體の他の部分が受けて居るひといふ壓迫は遁れて居ます、骨盤が之を保護して居りますから骨の保護のない他の部分が受ける樣な壓迫は遁れるのであります、ですから小兒は生れますと今迄の束縛が急に自由になりまして頭が他のところよりも餘程早く發達するのです、夫は數箇月も經た日本の小兒はきまッた樣に西洋の小兒などよりも頭が大きくつて身體が小ない、一寸考へるも成程腦髓の一はいはいつた大きな頭と、之を育ふ丈夫な身體は、腦力のある證據であるから實に感謝すべき迄のものでありますけれど、大きな頭は必ず腦の力が大きいと云ふ譯ではありませぬ、却て其反對で屢次腦病や、又才能の少いことをあらわすのでありますから、腦のはいつてない大きな頭を自慢いたしますのは丁度蒸氣機械や、また之を運轉する力も備はつてない軍艦を自慢いたすのと同じ事で、誠に愚かなことであります、どうも大きな頭は本當の天才に乏しい事が多い樣でありますから、英國の諺にも少さな頭に小さな智慧があるけれども、大きな頭には少しもないと申ます。

◎腦髓の健全力

腦を丈夫に活潑に保ちますには澤山の養ひ分を要しますが、若し身體が弱くして之を供給いたすことができなければ腦髓は不用なものとなるのみでなく、却て害をいたす樣になります、其譯は腦の營養不足のためにいろ〳〵な病氣の住家となつて不運な小兒は一生涯虚弱な者となつてしまふのです。出生前に締め付けられ居つた小兒の大きな頭がから云ふ風になりますのはどうも當然なことであります、腦に入用なる養ひ分とは

申までもなく聾耳なる。血のことです、或る大家の醫者が申さるゝには身を健康に保つには他の部分より腦に一番割に澤山血を要しまして、殆ど全身を循環する血液の五分の一は腦に要する、けれども身體の色々な機械を造てゐる此血が不足いたしますならば、腦は充分に入る丈けの養ひをとる事が出來ませんから、餓えて衰弱するの外はありません、私は大きな厚い頭をして居る小兒でいぢけてしまつたのを實見しました、其の度に幾度私の心を痛めたかしれません、かゝる小兒は大抵身分の低い人よりも金持ちや位置ある人の家族のうちに多く見受ける樣であります、この樣な小兒は其大きな頭を支へるとも六ヶ敷い樣な弱い身體をしていましては立派な姿は小兒のために何のたしにもなりません、後て小兒が成年となりましてからもやはり天然を失つた大きな頭は明かに表はれて居ります、承れば日本の青年は腦病の爲めにひどく苦しんで居らるといふ事です大せいの青年が腦病のために據なく其勉強を中途で止めなければならんといふのは如何にも殘念です、勿論青年方の頭痛や腦病には色々其他の原因も御座りまして屢次胃病や神經衰弱などのために起ることがありますけれども、此等の原因はみな關係があるのであります、若し頭がもつと小さくつて身體がもつと丈夫であれば腦にも充分に養ひをやる事が出來ますから色々な頭の病氣の根本の原因はなくなつてしまいませう。

それならば如何したらば此患が除かれるかと云へば即ち妊娠中腹帶の樣なものをすつかり取除けてしまふことであります、嗚呼日本の母親方よどうか皆さんの御子達が天然自然に御育ちなさる樣にしてあげて下さい、それが何程子供の爲になるか知れません。

◎出產輕快の謬想

妊娠中に腹を縛るのは只產を輕くするためだと云ふことでありますが、成程それは御望み通りになるかも知れません、けれども、それにしても母親方は只御自分の苦しみを短くし輕くする其ために大切な子供を一生涯弱くしたり、又苦しめたりするのである、さすれば御產

を輕くする爲め大變高い値を御拂ひになるではありませんか、子供は腹帶や何かを用ひなくつても立派に生れます、それは西洋各國でもみなこれを用ひずに立派に生れることを見ても明かです。

日本の婦人とても身體の組織は外國の婦人と同樣です、唯異ふてゐるといへばそれは代々腹帶を締めた爲に身體の機關が小さくなつてしまつたので、つまり自分で違はしてしまつたのであります、造物主は凡ての動物の牝と、世の婦人達に別段の助けなくつても子供を生める樣にこしらへられてゐる、それにも拘らず獨り日本の婦人にばかり子供を生む前に腹帶をしめさせる樣な不公平な事はされないのです、今の文明な時代にかゝる考は捨てゝしまうのが誠に必要であります、切腹の樣なことが行はれた時代にはこんな風習も止を得ないが、もはや今では過去に葬つてしまいたいものであります。

さて第二に注意を仰ぎたいのは日本人の大きさと姙娠した婦人が腹帶をしめることの關係であります、先達て私は或る新聞に日本人が段々身長が低くなる傾向であるのに、西洋各國の人種は段々身長が高くなる傾きであるといふことを述べました、日本で名ある方々や、また西洋の人も此說が事實である事を證明されました、此人種の上に表はれた正反對の傾向は人民の習慣や氣候の相異などの樣な種々の原因に由ていくらか之を說明することも出來ますが、日本人ばかり獨り小兒の出生前に之を固く締めることを思ふと、此惡習慣に由て日本人の身長が段々低くなるのだと申す私の說は當然なる說ではありますまいか。

◎手足を壓迫する事

外國人即ち婦人が姙娠中、寬濶かに着物をきる外の國々では國民の脊丈が段々と高くなります、是れに引かへ、獨り日本人即ち婦人が子供の出生前に帶を締める日本國民の平均の丈が段々低くなると云ふのは實に確な事實であります。日本人の身體の内で一番短かいところは手と足だと申すことを度々きゝますがそれは私の說ではすぐ說明の出來る事で、頭は腹帶の壓迫をす

つかり逃れて居りますから隨て比較的に大きいのです、さうして出生前に手足は其反對に壓迫を受けなければならん位置にありますから、丁度前の説に符合して小さいのであります、身體の何部かに充血したり、また熱があつたりしますと、手足は冷たくなります、それと同じわけて婦人が子供の出生前に之を固くしめますれば、きつと血の循環は乏しくなつて殊に胎兒の手足は尚更てあります、若し血の循環が乏しくなれば血から少しばかりの營養しか送ることが出來ませんからどうしても成長が妨げられずには居られません。胎兒の身體は頭よりも、もつと壓しつけられて難義しますが手足の苦しみは身體よりもゝつとひどいのであります。

日本人の身長の低い源因は母親が子供の生れる前に之を御締めなさるためだといふ此説に若し誰か御疑ひがあれば、試驗をなさつて御覧なさい、犬ても猫ても姙娠した獸を取ッて日本の母親方が姙娠中になされる樣に、長い間それをきつく締めてゝ御覧なさい、動物ても必らず之を心持ち能く休むことが出來ない、隨分慘酷に見へるぢやありませんか、況してや人間の母親たる婦人方に於ては……

◎呼吸を妨ぐる事

腹帶が母親の健康上に及ぼす結果に就ての第三に大切なる要件は小兒の出生前に用ふる腹帶は、まづ第一に子供の血液の循環を妨げると申しましたが、之れがやはり母親の血の循環をも妨げます。そして身體の中、一番大切な營養の必要な部分が妨げらるゝので、隨つて血液の循環が乏しくなりますから、滋養分も不足し、滋養分が不足するとまた從つて身躰の强壯、即ち健康を缺く譯て御座ります、それで活動力を大に要する身體の部分は、それが爲めに實に餓えてしまいます、誠に心ある方々は活動力の一番必要な處に之を妨けて居ることの間違ひなることを御覧になる筈て御座ります。若しもさうてなければ、其結果は病氣です、活動力が段々減じてしまへば誰れてもどんな病氣にでも罹り易くなりますが、わけて婦人にある病氣は、猶ほさうで御

座ります。

次に此腹帶は深い呼吸を妨げます。深い呼吸をいたすことは、常に願はしいことでありまして、妊娠中は殊に必要であります。母親は自分の爲めばかりでは無く、又其胎兒のためにも呼吸しなければならないので、平常よりも酸素の需用が餘程多いのであります。私は小供が死んで生れることのあるのは、通常母親の方に呼吸が不足いたした直接の結果だと云ふことを見ました。

それから腹帶は筋肉の發達を妨げます。子宮の筋肉程力の強い縮みやうをいたす力は、人間の身體中、他にはどこにも要しないのです。又早く立派に生産することの出來る一大秘密は此筋肉の丈夫なことであります。されば妊娠中の御婦人方は、此筋肉の發達に就き注意をなさるべき筈て御座います、身體の他の部分の筋肉でも何か、特別の用に當やうと思へば、どう云ふ風に致しますか、運動さして之を丈夫にする様にすることは何誰も御存知であります。況てや赤坊が生れる時に大切な役目を持つて居る此筋肉もやはり同じ道理て運動が大切であります。體操術上若し申上げますならば、此筋肉を丈夫に致す爲めに種々な體操の致し方も御座りますけれども、斯樣な運動のことは固く腹帶を締めて居ては何の役にも立ちませんのです。

今迄お話して來た要點を摘んで申しますと、（第一）腹帶は胎兒の發育に害あること、隨つて小兒一生の體格に影響すること、（第二）日本國民體格の發育を妨けると、（第三）母親自身に害あると等です。

されば敬愛なる日本の姉妹方どうぞ皆さんの腹帶をおやめ下さい。そしてみなさんの身體の筋肉を丈夫になさいまし一體腹帶は身體のいろ／＼な機關を害ひまして消化を弱くし呼吸を妨げ筋肉の働きを妨げますであるから私共は一致協力して出來得る丈け此恐るべき弊害を廢するやうに力めなければなりません。



修身

女徳

野中千代子

親切

仁義禮智の眞實にして僞なき理を信と申します信はまことで御在ますまことなければ仁義禮智も僞となり萬の善も皆あだ事で御在ます仁義禮智の四德に信を加へて五常といたします又五性と申します性とは心に生れつきたる理で御在ます此五性は萬世まで人に生れ付てかはらない理ですから五常と申します百行萬善皆此五常から出ます五常を以て萬善をかねてをります人の心とするは此五つにあるので此外に心と求むるは天地聖人の道では御在ませぬ故に誠は天の道で御在まして之をまことにするのは人の道で御在ます四時行はれ萬物生れ善にさいはいし惡にわざはひするも皆是は天道のまことで御在ます昔から今日までかはりませぬ人の道は之を則としてつとめて誠にするにあるので御在ます其故に人の心はまことを主といたします誠がなければ物はありませぬ君につかへ父につかへどのやうな善を行ふても誠がなければ何事もみなひがことで御在ます是を物なしと申しますつとめて善を行ふてもまことなければ自らあざむき人をあざむくことになりますまことに惜むべきことで御座ますあざむくとはいつはることで御在ます故に萬づの事誠を本とせねばなりませぬ聖人が忠信を主とすと申されましたのは此こゝろもちで御在ます忠信は即ち誠の心で御座ます。

善を好み惡をきらふことの誠なるは誠意の事で御在ます是人の行の第一のつとめで行の初めで御在ます善を好むことはよき色のやうに惡をきらふことは惡き臭のやうにせねばなりませぬ是れが善を好み惡をきらふことの誠あるので御在ますもし善を知つても實に好まずして行はず惡と知ても實にきらはずしてさけないのは之を自ら欺くと申します自から欺くとは善を好み惡を

きらふことの眞實でないのを申します自から欺くことをいましめて好惡の二に眞實にして僞ないやうにせねばなりませぬ是れが人間第一の心法で御在ます。

此の誠を人のために心をこめて盡すのが親切で御在ますおよそ鰥寡孤獨貧窮にしてたよりなきもの飢えこゞえ病みて苦しめるものかたわなるもの等を我分にしたがひ力の及ぶほどは救はねばなりませぬ之を救ふには勞と財とを惜みてはなりませぬ何故と申せば自身が彼を救ふほど財のあるのは天が我身獨りに幸し玉ふのではありませぬ貧苦なる者を救はしめんとて我身にたからをあたへて富しめたまふ道理で御座ますから富める者は無益のことに財を棄てずして斯樣の貧苦の者を救ふことは先にせねばなりませぬおよそ善を行ひて人をすくふ事は上は王公より下は乞食にいたるまで行はれないことは御座ません善を行ふべき時にあたりてよく心をつくせば必らず行はれます貧賤なる人も仁に志ざして行へば其身に應じて日々人に利益あることが澤山御座ます飢たるものに一飯をあたへ渇けるものに湯水をあたへ道路にいばらからたちはりあるものかどある石人の足をそこなふ物は取すて溝の內なるふみ石を一ツ二ツ置かへ小さな溝に小橋をかくにほどのことはいかなる貧乏の人もなし得べき事で御座まして是また人に益ある善行で御座ますまして富貴の人は其志さへあれば人をすくふことはひろく其功はなか／＼大なるもので御座ます高きもいやしきもおこたりなく久しくおこなへば善をつむこと限りがなくて此上のたのしみは御座ますまい。

人をそしるといふことはわが同類をうとんじにくみてそこなふのでありますから不仁にして愛なしといはねばなりませぬ同類をあなどりかろんじてないがしろにするのは不敬で御座ます無禮で御座ます不仁無禮は惡いことで御座ますもつともいましめねばなりませぬ人をそしりてたとひ理にあたるとも決して厚き道では御座ませぬまして實に過ぐるは尙更のことで御座ます人をそしるは道理にそむくのみならずかならず身の禍をなります人をそしれば人も亦われをそしります恰も天

にむかひてつばきを吐くやうなもので御座ますそしらるゝ人は一生の恨となります人をそしりて人しるまじと思ふは愚かで御座ます悪事千里を行くといふことはりもあり壁に耳ありといふことも御座ます人もしわれを愛せずしてそしりにくむとも決して怒りうらむるに及びませぬ神は聰明正直にして私しすることとは御座ませんから誠を以てかんぜしむれば後にはついにその人の心がやわらぎてかへつてわれをいつくしむに至るは必定で御座ますたとへば家を治むるにもつともをさめがたいのは奴婢で御座ます使はれるものは力を勞し使ふものは心を勞しますむしろ主人の方がかへつて苦勞が多いくらいで御座ます忠實なものは稀として大抵無養無敎育のものなればこそ人の家に雇はるゝのでありますから之を使ふにもつとも道があるやうで御在ます遠ざけてきびしければうらみそむきますそれかと申して近づけているかせなればおごりおこたります要は唯親切を專らとしてそれ〳〵の家事にあたらせる工夫が專一で御在ますその誠をあらはすにはねんごろに敎えいとふて馴し時に財物をあたへてその情を通ずるのです與ふべきにあたへずして吝嗇なるは不仁にして誠がないからで御在ます誠は人間の立場で御在ますから是れがなくては一日も立行く事はできませぬまして人として詐はりあざむくほどのことがありては夫こそ忽まち人にうとまれこのひろい〳〵世の中が狹くなりて立ゆくことはできませぬ志かし人の心ばかりは測りがたいもので御在まして士といつても信義なき人はいふ事うけがふこと一々あてにはなりませぬまして庶人はならはしあしくて信義が御在ませぬわが心のやうに信があらふとおもふてゆだんして人をゆるせばおほかたは約束がちがふて人に欺むかれ後悔することがありますから決してゆだんはできませぬ。

古への書に善をすれば天より百の福をくだし不善をすれば百の禍をくだすと書て御在ます又善悪のむくひは影の形にしたがひ響の音に應ずるが如くかならず其しるしあることを先哲は申してをられます又天道は善に福し淫にわざはひすといはれました又易といふ本にも

積善の家にはかならず餘慶あり積不善の家にはかならず餘殃ありと書て御在ます是は天道の常理であることを說かれたので御在ます又古語に天道は還すことを好むといふことが御在ます善人にさいはひし惡人にわざはひしたまふ道理にて善惡ともにかならずその報をこのみたまふを還すとはこのむと申したので御在ます善惡ともに返報があるといふことなんで御在ますもちろん天道は廣大にしてにはかに其のしるしのあらふはづはありませぬけれども後はかならずむくひがあるおろかな人は此の道理を知らずして惡をさりて善をおこなふ志はなくて惡を行ひても唯神佛にへつらひいのりて福を求め禍をのがれんとするはまことに笑ふべきことで心あらん人はよく思案すべき事で御在ます人間の內にても心あきらかに私すくなき正直な人は人のへつらひ求むることは好みませぬ理をまげて人に私するやうなことは致しませぬまして神は聰明正直でありますから私するやうなことは決して御在ませぬ此の道理はまことに明らかで知りやすいことで御在ます又古語に神は非禮をうけずと申すことが御在ます菅公のお歌に心だに誠の道にかなひなば祈らずとても神やまもらん又あやまりのあらば中々さもあらば心つくしに何いのるらんとおよみになりましたが此二首の道理至極せりと存じます凡此理ははなはだ明らかにしていかなる無學なる人も知りやすき道理で御在ますけれども凡俗は道理にくらく利慾ふかきゆへに此の道理が腑に落ちぬといふのはまことに因つたもので御在ます人は誠をつくすといふことがなければ人に對する言葉の上にも所作の上にも誠がこもらねば少しも有がたいとは思いませぬ却て惡感を起しますたとへば外形の大きくて內容の少ない通り一遍の贈物よりも後園にできたにら一把まづくとも手細工の品などの方がどれほど有がたいか知れませぬそれは全く誠がこもつて感通するからで御在ますして見れば此の誠ほど貴賤老幼の別なく人として缺くべからざるものは御在ませぬ。

女子の作法

實踐女學校講師
禮法講習會師範 田島秀子

菓子鉢の進め樣
附茶の飲み方

●干菓子は菓子鉢又は盆に盛り、足打八寸に載せるが本儀で御座います。之は足打又は足附とも申し折敷に足を附けたので、又折敷と云ふは方形の角を切りし盆の事で御座います、さうしてそれに箸を添へ、八寸の兩緣を持ち、例の如くにして進めます、其後に煎茶を茶椀に載せ、右の手を右の方椀の緣を持ち、左の手で其底を受け、持ち出て客の前三尺許はなれて座し、左の手をつき、右の手に茶椀の右緣を持ち、片手にて客の前にある菓子の右に出だします、又受ける人は茶椀共ゝ、右の手にて取り上、左の手を其裏乃ち底にあて、右の手にて茶椀のみ取り上、喫し終らば又茶椀に載せ、右の手に右緣を持ち、左の手は膝の上に置きたる儘、前にありし所へ置きます、さうして菓子を取るには、先つ懐紙を取出し、左の手を添へて、我が左り膝の側に置き、右の手にて箸を取り上、左の中指と藥指の間にて、そと揃へ、左の手に前の紙を平に受け、少し體を屈めて取り、紙を持ちし儘前の如く、箸を揃へ下に置き、次に兩手にて紙を膝の前に置くので御座います、若し外にも客のある時は、先づ始めに一禮して取るので御座いますが、若し盆の上に紙を敷きて、菓子を出されし時、自分のみに出だされしもの故、我が前に据へられし時に、一寸目禮すれば宜しう御座います、又食する時は、兩手にて紙の儘取り上、左の手の上に平に載せ、右の手にてつまみて食します、又食し終らば、紙は左の袂に袖口より入れます、それで前の如くに茶を飲終らば、茶椀はもとの如く茶托に載せ、決して茶椀を伏せてはいけません、殘滴の椀を汚しなどするは誠に失禮で御座います、又腰高茶臺乃ち天目臺の事、之れは蓋をして煎茶の如く持ち出で進

むる時、右の手で蓋を取り、一寸左の手にてあしらひ、右の手にて鍔の所客の右の方に蓋を挾みて進めます、受くる人は茶椀と違ひ、右の手で蓋を押へ、左の手に茶椀を取り上、右の手にて茶椀の載せありし跡へ蓋を伏せ置き、兩手にて茶椀を持ちて飮みます、次に蒸菓子の類は緣高(乃ち盆の緣を高くして物を盛るに便利なる物)に盛り出だすか本式で御座います、さうして緣高の合せ目は、我が前に客の方よりは向うになる樣に据へます、然し略しては菓子器又菓子皿に盛つても宜しう御座います、又足打八寸に盛り、黑もぢの楊枝を添へても同じく宜しう御座います、受くる人は干菓子の如く、懷紙を取り出だし、左の手に受け、右の手で楊枝を取り、菓子を突き、さし紙の上へ置き、楊枝にて宜き程に割りて食し、又食し終らば、楊枝は紙に包み、前の如く袂に入れます、さうして前の如く茶を飮終らば、正しく茶碗を臺の上に載せ、蓋を右の手にて(臺の左側に左の手をそと添へながら)なし我が膝の前より少し兩手にて前の方へ出し置くので御座います。

史傳

徐世賓皇后

文學士　中内蝶二

上

時は長く、地は廣し、遠き五千年の古より、近き世の今に至るまで、東西三萬里の地球の上に、英雄豪傑の名をのこしゝものは少なからねど、貧しき一士官より身を起して、驚くべき才智と勇略とをあらはし、風雲の會に乘じて、一躍萬乘の皇位に上り、歐羅巴の全土を席捲して雷名を、天下に轟かしゝ、かの拿破崙に肩を比ぶるに足るべきもの、果して幾人かある。まことに、拿破崙は絶世の英雄なり、奇代の豪傑なり、苟も目に一丁字を解するほどのものは、三尺の兒童といへども、なほ其名を知らざるものはあらざるべし。さばれ、英雄豪傑の

大業を成し遂ぐるまでには、内助の功與つて多きに居ることを知らむものは、また拿破崙の皇后に、貞操の德いと高き賢婦のありしことを知らざるべからず。その人を誰とかなす、わがこゝに語らむとする徐世賓皇后にぞありける。

徐世賓皇后は、西暦千七百六十三年、西印度のマルチニコ島に生れぬ。父はタッシエーとて、佛蘭西の砲兵中尉なりき。天成の麗質は、幼き頃より數多の人の目を驚かし、あはれ、かゝる美貌をもちたるからには、都にあらば、世にときめきたまふ人〳〵に愛でかしづかれて、榮耀榮華も心のまゝなるべきに、浪路はるけき離小島に人となりて、朝な夕な、たゞ銅色の肌したる蠻子を友としつゝ、可惜名玉の瓦の裏に埋れはてむことの痛ましさよと、其身の上を憐れまざるものとてはあらざりき。誰れかおもはむや、この草深き片田舍に生れ出でたる少女の身の、他日世界に名を轟かし、絶世の英雄に見出だされて、佛蘭西皇后陛下の貴き御座に上らむとは。

佛蘭西の華族の公達にて、ボーアルチー子爵といふ人ありけり、公の務を帶びて、遙〳〵とマルチニコ島に來りし時、此嬋娟しき少女の姿を見て、心恍惚として、そゞろに愛慕の情に堪へず、父なる人に心のたけを打ち明けて、強いて己が妻に迎へたき旨をぞ語りける。この時、徐世賓は、年まだ三五の春淺かりしかば、親子の情として、この若き娘を遠く手放してやるに忍びず、たやすくは其言葉に從はざりしが、また熟〳〵と思ひかへせば、姿も容も人に優れて、いと美はしく生れしものを、本國の都には出しもせで、生涯邊土に打ち果てしめむも哀れなれば、遂に其請ひを容れて、子爵夫人とはなりたりける。

名玉は遂に瓦裏を出でぬ。徐世賓は子爵に伴はれて、巴里の都に入りてより、時の皇后マリー、アントアチットの宮廷に事へて、驕奢を競ふ貴婦人達の間に立ちて、交際場裏の花よと稱へられしが、幾ほどもなく、國中に大亂起りて、革命の浪さきは徐世賓の家庭に及び、良人ボーアルチー子爵は、不幸にも暴徒の爲めに捕

へられて、はかなく刑場の露と消えしのみか、その身もまた、縲紲の辱を受けて、鐵の窓の裏に呻吟すること數月、幾度か無慙の刃のもとに命を斷たれむとして、僅かに免るゝことを得、憂き月日を送りけるほどに、冤の罪はれて、漸く自由の身となり、久〳〵にて溫き天つ日の惠みを浴び、あな嬉しやと、もとの居住に歸りて見れば、哀しきかな、家は焚かれ、財產は沒收せられて、雨露を淩ぐべき宿もなく、飢を淩ぐべき糧もなし。血筋の人や、親しかりける友の許を訪へば、或は兇手に斃れたるもあり、或は四方に流離ひたるものもあり、賴む樹の下雨もりて、立ち寄るべき方もあらざれば、亡き夫が遺孤の、ユーゼーヌ、オルトンスと名づくる二人の子女を懷きつゝ、一時は途方に暮れたりしが、さてあるべきにざあらねば、弱る心を取り直して、西印度なる父母の許より、わづかばかりの扶助を乞うて、辛くも母子三人の露命を繫ぎ、きのふの榮華を夢みつゝ、亡夫のことを想ひ出だして、世の味氣なさに、袂を濡らさぬ日とてはなかりき。

程なく革命の亂は平ぎしものから、政府は再び暴徒の蜂起らむことを恐れ、その患ひを斷たむがために、巴里の住民の所有にかゝる武器の類は、悉くこれを沒收せむことにつとめぬ。當時副將の職に在りし拿破崙は、政府の命を奉じて、この兵器沒收の役目に當り、徐世賓が亡夫ボーアルチー子爵の佩劍をも取り上げしに、子爵の遺孤、ユーゼーヌは、この時僅に十二歲の少童なりしが、心慧しくして孝心深き兒なりしかば、父の遺品を取り去られしことを悲しく思ひて、一日拿破崙の前に出でゝ、健氣にも、亡父の佩劍を返されむことをぞねがひける。

拿破崙つく〴〵と其顏容を見るに、頑是なき中にも、また犯しがたき所ありて、熱心の情自から面にあらはれたれば、深く心を動かして、强いて其言葉をこばむに忍びず、快く返し與へけるに、ユーゼーヌは歡ぶこと限りなく、嬉しさの餘りに、淚に咽び、劍を胸に押し當てたるまゝ、言葉もなくて目禮しつゝ、退きたり。拿破崙はその、孝心のいと深きことを感ずるにつけても、かゝ

るやさしき孝子をおほし立てたる婦女こそ、ゆかしき限なりけれど、ひそかに徐世賓が人物をぞしのびける。

徐世賓もまた、拿破崙が若きにも似ず、わが子を深切に勞はりくれたるを喜び、感謝の情に堪えざれば、せめては其禮を述べむとて、翌日馬車を馳せて拿破崙の邸を訪ひぬ。

拿破崙はかくと聞くより、懇ろに出て迎へて、其風采を見るに、身には亡夫へ變らぬ操の喪服を着け、迦陵頻迦の囀づる如き其聲は、感極まりてうち震慄へるさへいぢらしきに、温雅艶麗、容色といひ擧止といひ、一點の非の打ち所もなきほどの美人なれば、愛慕の情は益つのり、別れてより後間もなく、徐世賓の家を訪ひて、さま〳〵に誠をつくして、その薄倖を慰めぬ。かくて互いに訪いつ、訪はれつするほどに、交情いよ〳〵厚くなりゆきて、遂には眞實の戀とぞなりける。

徐世賓は拿破崙より年二つ長じたれども、容貌の勝れて美はしきが上に、快活にして愛嬌に富みたれば、眞實の齢よりは、四つ五つばかりも若く見えてけり。

當時佛蘭西の政府、五監督官の一人に、バラーといふものありけり、徐世賓とは、かねて親しき交誼ある間なりしが、はやくも、拿破崙の徐世賓を戀ひ慕へる樣子を見てとりしかば、獨り心におもふやう、拿破崙は、その才智といひ、その勇略といひ、將來必らず世に時めくべき人なり。また徐世賓は、地位高く、眞友多く、才貌二つながら優れたる賢婦なり。今若し、この兩人をして婚を結ばしめむれは、互ひの身の上、こよなき幸福なるべしと、熱心に徐世賓に說きて、再婚のことをぞ勸めける。

されど、徐世賓は一時の情慾に制せられて、將來を誤まるが如き婦人ならねば、たやすくは其勸告に從はず、沈思默考の末、親しき人々へ、この事をはかりけるに、何れもバラーが說に賛し、其叔母及び二人の子女までもまた切に勸めて止まざりしかば、遂に意を決して再婚の事を諾し、こゝに鸞鳳比翼の歡會はなりぬ。この時徐世賓、芳紀まさに三十二とぞ聞こえし。

（未完）

靜御前（上）

鹽井ふく子

ひとしく之れ水なり。深くして淵となり、淺くして瀨となり、激して湍となり、流れ一川となり、懸りて瀑となり、止まりて泉となる。日うらゝかに風和らげば、さゞ波も起らず、水面鏡の如きも、一旦風荒れ、雨躍れば、縦横澎湃、濁浪天を打ち、一靜一動、一緩一急、境遇の異なるに從うて、其の觀を異にすと云へども、水の水たる所以の本質に至りては、固より二致あるにあらざるなり。

臣をして良臣たらしめよ、忠臣たらしむるなかれとは唐の魏徴が、太宗皇帝を誡めし言なるが、まことや、國亂れて忠臣あり。家貧にして孝子あり。夫不幸にして節婦あり。忠臣、孝子、節婦あるは變にして、もとより不祥願ふ處にあらず。されば、今の世の女子教育をとなふるもの、女子に敎ふるには、たゞ良女たるの道を以てせよ、いたづらに貞女節婦の道を以てして、王介甫が所謂狂女を養成すべからすと説かるゝあるも、うべ一理ある言の葉にて、誠に、國にとりても、家にとりても、はた身にとりても、貞女節婦となるは不吉、女子の本意にはもとよりあらずと雖、人の境遇には順あり、逆あり、富貴にして志を得るは順境にして、貧賤にして志を得ざるは逆境なり。順境にして忠臣となり、孝子となる事既に容易事にあらず、まして、逆境にあるものをや。時春にして草木ひとしく榮ゆるも、霜雪至りて松柏のみさをはじめて現はる。されば、世亂れて英雄あらはると云ひけん、治世には英雄なしとの意にはあらず、たゞ順境にありては、大奸かへりて忠の如く、小人盛德を銜へども、一旦生死の巷にのぞみ、利害の岐路に及びて忠邪わかる。治世の良臣、必ずしも亂世の忠臣たるを得ず、つら〳〵今の世の良女を見るに、たゞよく人に順ひ、夫のさゞくる財貨たゞよく細事し、之に衣し、之に食し、人とよく和し、よくむつぶ、誠に善なり、善と云へども善惡をわけ、理非を知る事にくらく、たゞ春風、花の一時にほゝ笑み、霜雪至るときの操を思はし

むるの感あらしむ。心なき少婦も順境に逢はゞ良婦たるを得べし。治世の賢婦、烈女、また往々利害をのみはかり、嫉妬邪惡の心を內にたくましくし、仁義を凌を以て烈婦賢女ともするありて、女子が特性の、なさけをも、操をも忘れしむ。あはれ、定まりなき世の中に、人はたとひ順境に處するとも逆境の事を忘るべからず、今此處に靜御前の傳をものす。あながちに、世を逆境たらしめ、人を節婦たらしめんと欲するにあらず、たとへ、順境に處してもおなじくこれ敷島の大和島根の女子なり、つねに、ひそかに、靜ばかりの氣慨を心にたもちおかばやとこそ思ふなれ。

靜は九郎判官　源　義經の妾にして、父の名は傳はらず、或は北面の武士某の落胤なりと云ふ。靜兄弟なし、姉妹なし、母は磯禪師とて、阿波國、磯と云ふ所のもの故、磯の禪師といふ。今磯崎と云ふ所なり、靜も其の國志津賀といふ所にて出生しければその名とす、今は、ところのもの語つて志津木といふともあり。又丹後の磯と云ふ所のものにて、磯の前司、靜も其處の產なり。

今に塔ありと、和田宗瓜が丹後巡遊日錄には云へり。前きのは百井塘雨が笈埃隨筆に云へるにて、好古叢誌には、磯崎は板野郡撫養と云ふ鄕の內にて、鳴門の近所なり、志津木は津名郡にして、今も一部落をなせる所なり、但しシヅキは古き鄕名にて、式內志筑神社もあり、さればシヅカをあやまりてシヅキと呼ぶにはあらずと辯駁せられたり。何れが信なるか、僞なるか、今此處に正すを得ず、しかも、その生れし年月も詳ならず、たゞ文治三年九月、年十九歲にして死歿せしと云ふより逆算して、仁安三年、人皇七十九代の御門、六條天皇の御世に生ひ出でしならんとをしはからるゝのみ。靜もまた幼より其の業を受けけん、舞に堪能にして、十五の年とかや、安德天皇の御世にひでりうちつゞきければ、上下心をつくし、さま〴〵の祈りどもしけれども、天なほ雨を降し玉はざるに、後白川法皇、いたくうれひ玉ひて、はては、一條、三條、大宮、壬生あたりの善女龍王、此處にあらはるゝと昔より云ひ傳へられし二條神泉苑に御幸

ましまして、雨乞のため、白拍子百人を召して舞はせさせ玉ふ。靜も其の中に交りたり。年は三五、月ならばもちの月、花ならばやよひ、扇をとりて舞ひすましたる柳腰はさながらみどりの糸をくる如く、紅顏、夕陽にかゝやきて花やかに、ひるがへす袖は雲か、羽衣か、さながら天津乙女の舞ふよと見るほどに、習々たる風はにはかに池の面を叩きて、どつと聲たつれば、白雲さつと下りふたがりて、水を流すが如く雨さへふり來りぬ。人は掌をうつて感賞し、草木は枝をならして贊嘆す。法皇いたく御感ましまして、日本一の宣旨を下したまひけるとなり。義經に見そめられしも此の時にして、其の舞のあまり堪能なりしに、思はずも心とゞめられ、遂に堀川の亭に召されてわりなきちぎりを結ばれしなりとぞ。

靜は、實に白拍子なり、もといやしきものなりけれども、其の心は、つゆ他の遊びものゝ如く野卑ならず、義經に見えそめられし前に、心をよするもの數ありしも、敢てなびかざりしを、玆に義經にわりなく思はれ、其の志にもだし難く、且つは、清和天皇の御末、鎌倉殿の御弟なるに、ありがたくも、かたじけなくも身にしみて、從ひまゐらす事とはなりぬ。義經、他の女房はところ〳〵に住ませて、たゞ靜をのみ己が館堀河の亭にとゞめ、寵愛一方ならざりしも、徒に其の美貌をめでしのみにはあらずして、靜が氣慨、またよく義經が意氣に相投じしものなるべし。

あわれ、狡兎死して走狗烹られ、飛鳥つきて良弓藏まる世の習ひとは云ひながら、九郎判官源義經、さんぬる年兄賴朝を尋ねて浮島が原に兄弟の對面をしてしより、たゞ一意に兄の命に從ひ、峨々たる峻山に騎馬を走らし、漫々たる海水に怒濤をしのぎ、火に入り、水に投じて、萬死を辭せず、たゞ兄の命これ奉じて、前には朝日將軍義仲を討じ、後には四國九州にまで赴きて、平氏を平らげ、天下をして賴朝に歸せしめし大功、如何なる恩賞もあるべしと思はれけるに、兄とは云へど、賴朝猜忌の心深く、義經が武勇すぐれたるを、ひそかに忌みける機に乘じての梶原が讒言、そは、かつて、津の國渡邊

にて逆櫓立てん、立てまじの論より、大に人にあざけられたる恨をはらさんの心深く、頼朝に申しけるやう、今、平家悉く亡びて、天下は君が掌にあり、されど、ひとり九郎判官殿ばかりは世にもおそろしき大將軍にて候ふ。一谷落さるゝ事、げに鬼神の所爲と覺え候、川尻の大風に船出し玉ひしはげに人の所行とは覺えず候、敵には向ふをのみ知りて、一足も退くを思はず、おそろしと申すは九郎殿にて候。君、早く心し玉はずは、後日に悔い玉ふべしと



云ふ。さらでだに、うしろいぶせく思ひをりし頼朝、追討の心此處に決して直ちに將士を上せんとしたりしかど、誰も應ずるものなし。さては、梶原ばかりぞ、景時都に上ぼつて打つてまゐらせよと仰せけれども、元來、義經に中あしきもの、拙者上りたりと聞かれなば、追討使を所望して上るにこそとはやく推量せられなば、中々に逆打に討たれぬと覺え候。人を損ぜずして、敵を亡ぼすこそ、よき謀にて候へば、たゞ思ひがけなからん人に仰せ

てとにげ足をふみて、まかり出でける、何處までも狡童なるぞや。賴朝義經に勢のつかぬ間に、早く討手をむけばやと思へど、中々に大名どもさしむけたらんには、かれ、早くさとりて、宇治勢多の橋をもひき、京都の騒ともなりてあしかりなんずと思ひめぐらして、やがて良案のうかぶまゝに、土佐坊昌俊をめして、義經追討の始終をうちあけ、和僧物詣するやうにて上ぼりて、たばかりて討ちて得させよとありければ、土佐坊畏り承りて、宿所へもかへらず、すぐに京にぞ上ぼりける。土佐坊、もと奈良法師なり、事によりて兵衛の佐賴朝に奉公し、心際不覺なしとて身を放さず、めしつかはれたるものなり。茲に文治二年九月廿九日、七大寺詣にことよせて、土佐坊鎌倉を立ち、十月十一日に京につきにける。

義經、土佐坊がこたび都にのぼりたる意志よく知れり、上洛と聞けども、二位賴朝よりの狀もなく、おとづれも聞えざりければ、武藏坊辨慶を以て之を召しぬ。召しに應じて土佐坊來りたり、判官如何にして土佐坊此度上洛せしぞ、また鎌倉殿よりの狀はなきやなど尋ねらるゝに、昌俊畏つて、知ろしめす如く、拙僧はもと大和の住人、奈良のものにて候が、宿願の事侍れども、近年、源平の合戰に打ちまぎれて、其の願を遂げず、遺憾に覺え候を、今日、其の願をはたさんために、七大寺詣の志候てまかり上ぼりて候、鎌倉殿にも別に御事も候はぬ間、御文をば參らせられず候。たゞ御詞に仰せ候は、當時都に別の支細の候はぬは、さて、渡らせ玉ふ御故なり、和かまへて、よく〳〵守護させ玉へとの仰せばかりに候と申しければ、義經あざわらひて、よもさにはあるまじ、義經討ちに上ぼりしにやあらん。中〳〵に大名どもさし出だしなば、宇治、勢多の橋をもひき、京都の騒どもなりて、中々にあしかりなん、和僧物詣するやうにて上ぼりて義經をたばかり討てよとの仰を承りて上ぼりしにやあらん。如何に、土佐坊、七大寺詣などとはまつかな僞りにて候べし。九郎が眼識によも相違はあるまじなとて、白眼にきつと見下せば、土佐坊大におどろきけるが、何によりてか只今さる御事

の候べき、愚僧は誠に宿願の事の候てまゐり上ぼりたるにて候、誓つて腹黒き心の候に候はず候。神佛も御覧せさせ玉へとばかりに、七枚の起請文をかき、或はやきてのみ、或は社の寶殿にこめなどして、やがて歸へれり。起請はかきたりしかど、今宵はからずば、あしかりなんと思ひて、夜討の支度しけり。

頃は、十月十七日の夜、静、義經の姿となりてより四年十八歳の事なりけり。日來堀川の邸に住みて、片時傍らを去る事なかりけるが、立待の月の雲かゝるを見、義經を誡め申しけるは、大路は何となく塵灰立つて、人の足さわがしく候、御内よりの催しのなからんには、是れほど大衆の者どもが騒ぐべき事や候、如何さまにも晝の起請法師の仕業と覺え候、人を遣はして見せ候はゞやとて、六波羅の故入道相國のつかはれたるかぶろを、三四人つかけれけるを、二人見せにつかはす、程ふるまで歸へらず、いよ〳〵あやしみて、女は中々くるしかるまじとて、はしたものを一人見せに遣はす。女、男をさがすさましして、土佐坊が宿所のほとりを伺ひ、やがて走り歸へりて申しけるは、かぶろとおぼしきものは、二人ながら土作坊が門の前に斬り伏せられて候ふ。門の前には鞍置馬など引き立て〳〵、大幕の内には、者ども、鎧着、甲の緒をしめ、矢かき負ひ、弓押し張り、只今寄せんずるかまへにこそは候へ、すこしも物語のけしきとは見え候はずと申しければ、判官、さればこそとて、太刀とりて出て玉へば、静きせなが取りて投げかけ奉る。たかひもばかりして出て玉へば、馬に鞍置きて中門の口に引き立てたり。判官之にうちのり。門あけさせて待ち玉ふ所に、土佐坊ひた甲四五十騎、總門の前に押しよせて鬨をどつとぞ作りける。判官、鐙ふみはり、立ち上り大音聲をあげて、夜討にもまた晝軍にも、義經をたやすく討つべきものは、日本國には覺えぬものをとて、馳せ廻り給へば、馬にあてられじとや、みな、中をあけてぞ通しける。さるほどに、伊勢三郎義盛、奥州の佐藤四郎兵衛忠信、江田の源三、熊井太郎、武藏坊辨慶など一人當千の兵ども、御内に夜討入りたりとて、其處彼處より馳せ參りければ、土佐坊心は猛くよせたれ

ども、兵黨どもみなうたれて、己れも搦めとられてけり。やがて大庭にひきすゑさせ、如何に土佐坊腹黒くなしとて起請かきながら、かやうの結構、神罰踵をめぐらさず、今こそ思ひ知りたりや、命をしくば鎌倉に歸へり得させん如何にと云へば、土佐坊かしこまり申しけるは、こは口惜しき事をの玉ふよ。愚僧、法師なれども、おのれぞ九郎殿をねらはんものと鎌倉殿の仰せを蒙りてより此の方、命をば兵衛殿に奉りぬ。なじかは生きてかへらん、御報恩にはとく／＼頭を刎ねられ候へとありけるに、義經涙をはら／＼とこぼし、主君の命を奉じて、命を鴻毛より輕んず、君に仕ふるものは誰れもかくあらまほしけれとて、鎧の袖をしぼりしが、やがて六條河原へ引き出してぞ斬りてける。こは平家物語の方をとりたるにて、靜、義經をいましめずは、義經、如何に戰爭に妙を得たりとも、不意に出でられんには其の狼狽如何なりけん。また源平盛衰記には義經心騷ぎ頻りなり、一定晝の起請法師が夜討ちに寄せんと思ふなれと云へば、靜、大路は塵灰たつて何となくさわがしとて、かぶろを見せにつかはす。こは盛衰記の方しかるべしと思ひぬ。義經、よしや起請に一旦はゆるしかへすとも、如何で疑ひをはらしてうちとけん。後の靜の傳をものすもの、靜が義經をいましめしやうものせしは、其の功を大にせんとの心にて。こは、義經、靜、共に晝の起請法師を疑ひしにて、靜は、義經に力を合はせて、以て土佐坊の至るをふせぎしなり。而して、義經の討つて出んとするや、小敵意に介するに足らずとて、直ちに太刀とりて出んとせしを、小敵とて侮りたまふなとて。冑を取つて打ちかけたりとあり。こは義經の人となり、またさる事もありしやとも覺ゆ。此の時、靜の注意なくして、輕裝突進せは、或は創傷をうけけんもはかり難し。靜また思慮ありと云ふべし。げに靜の人をなり高尚沈毅、義經が配たるに耻ぢざるは此の一事を以ても推知せらるゝなり。

事いよ／＼おもてだちぬ。頼朝、北條四郎時政に六萬騎の兵をさしそへて討手に向はせられたり。義經、遂に都に身をおく能はず、一まづ四國に下りて事をはか

らばやと思ひ、郎黨五百騎、夫人及び女房十餘人を伴ひて、波風をも立てず、都を出て、津の國大物の浦より船てに渡らんとしけるが、折りしも東風、ともづなを切つて走りけるに、夜の間に風向變じて西風となり、しかも怒濤さかさまき來りて、義經の船は、住吉に打ち上げられ、他の船舶もみな、彼方此方の津々浦々に吹きかへされて、ちり〴〵になりにけり。折りふし頼朝、義經追討の院宣を請ひ、求むる急なり、義經是非なく女房どもを住吉にうち捨て、伊豆右衛門尉有綱、堀彌太郎景光、武藏坊辨慶、及び靜の四人を供して、津の國より大和に行き、吉野山にこもりぬ。あはれ、他の女房どもは住吉にうち捨てゝ、靜ひとりを供したりし、もと寵愛の他にすぐれ、恩愛のちぎりすてがたくて、かく供したるにもあるべけれど、まだ靜が志の他にまされるにもあるべし。

女流名家事蹟

耕靄女史

文運の進歩に隨ひて世人の美術といふ事注意するに至らしめしは勿論教育普及の基因せし現象なりと雖とも要するに世の風潮も亦自然高尚に趣き美育の方向に向ひ來りて美術の研究、美術の應用といふ事に深く注意するの時季到來せるに因るならん而して我國從來の美術は重に男子の獨有に歸し居り女子の如きは一向に預る事なき有樣にてありしのみならず其繪畫の事たる又男子に屬せしめたるを以て其の氣韻意匠筆皆な又男子の性に偏し其優美麗艶なる女子の生に伴ひたる蘊蓄を發揮せしむる能はさりしぞ遺憾なり然るに明治の今日、男女相並ひて進行すといふ事よりして女子も亦美術の基ひたる温潤雅淑の天性を發揮すべき事とはなりぬ

さりながら古來より名畫として世に殘り、名人として人に知らるに所のものは皆是多く男子なり婦女にして世に筆蹟を殘し其事蹟を現はせしは僅少に過きず、是れ當時世運の然らしむる所ならん、故に是等の筆蹟を尋ね、事蹟を探るは又容易の業にあらす、然かも斯る時代に於る尙僅々にせよ、能く古代より才妃名媛にして文學の餘暇繪畫に志しに筆を染め或は信仰より佛像を畫かれし等、幸ひに女流の身を以て斯業に名を馳せしは斯の道の爲に賀すべく、且つ當時文運の一端を想像するに足るべし、又中世已後明治以前の世にても畫家の妻女、又は文學に富める女子にて稀には繪畫を能くする人のありし事は、往々書籍にも見え、又は口碑にも傳われり、然かも此女子たちの筆蹟の世に殘りしもの稀なるは誠に惜むべき事なり、惟ふに此人々か當時斯道を修むるに多くの不便を忍し、辛苦に耐へしは如何ばかりなりしぞ、斯る世

にかく忘されしこそ眞に天性に出つるにあらされは能く斯の如くなる能はさるなり、尙此時代に生れし婦女にして幾多の美術的技能をいだきて空しく其天然の蘊蓄を發揮するに至らすして終りしもの少なからさりしなり譬は宛も名玉布をかけて光りを掩しに異らすされは此布の中より稀れに光りを放ちたる玉こそ、眞の寶玉として尊むべきならん爰に彼の女流事蹟を擧け聊か斯道研究に資し併て後進に望む所あらんとす

勿論此篇を輯する女流の名譽世に傳ふるもの誠に僅少にして殊に紀傳に乏しく、加ふるに淺學不文を以てす、冀くは識者其漏たるを補はれ又足らさるは益されん事を

嵯峨帝皇后

皇后橘氏御諱は嘉知子贈大相國清友公の御息女なり資性寛仁にましまして風容絶異御手を垂るれば膝を過ぎ髮地に委す、后未だ笄せざりしとき法華寺に尼禪雲といふものあり后の臂を把り謂て曰く娘子後まさに天子皇后の母となるべしと後ち果して皇后に立給ふ篤く佛門に歸依し給ひ慈善を天下に布き給ふ檀林寺を建て比丘尼の律戒を持するものを置かる世に檀林皇后と稱せらる后また繪畫を善せらる惜むらくは御遺蹟の世に傳ふもの甚稀なり今傳ふ所は嵯峨大覺寺什寶嵯峨帝宸翰一字三禮紺紙金泥の般若心經の表紙藥師三尊は即ち后の書き給ふところにして微妙の善畫なりとそ嘉祥三年五月崩御せらる。

文德帝皇后

皇后藤氏御諱は明子太政大臣良房公の御息女にして、清和帝の御母君なり世に染殿の后と稱せらる常に繪畫を好ませられ尤巧に草花を畵き給へり豐臣秀吉公その畵き給ひし所の白菊の屛風（高さ六尺金銀を撒して密に地を飾る）を得て大に珍重せしといふ昌泰三年五月崩御し給ふ

後一條帝皇后

中宮藤氏御諱は威子攝政道長公第三の御息女にして寛仁二年掖庭に入り女御に補せらる同年十月。皇后に立給ふ中宮と稱し藤壺と號せらる常に繪畫を能し給ひ嘗て多寶塔を造り經卷を製し大進賴經に命じ其經紙及標上に畫かせ給ふ皆中宮の自ら稿し給ひし所なりとぞ。

後冷泉帝皇后

皇后藤氏御諱は歡子關白敎通公第三の御息女なり姿色

豊艶にして琵琶を善くし給ふ又厚く佛乘を信じ給ひ小野の山房に寓せらる丶世に小野皇后と稱せらる丶も此を以てなり嘗て二條洞院の亭にゐらせられ最勝王經を書寫し給ふ或時雷其御室に震ふ御衣裳みな焦すに至る、后瞑目跪坐して御徴恙なかりしと、書圖は最人物を能せられ、當時畫工の憚る所なりしといふ

崇德帝中宮

中宮藤氏御諱は聖子關白忠通公第一の御息女なり大治五年中宮に立ち給ふ、崇德帝の讃岐國に遷幸あらせらる丶や、后御憂戚のあまり御落飾尼とならせらる、養和元年御不豫自ら起たざることをしろしめされ、毎日戒を僧の湛敎に受させ給ひたり、后豫じめ石浮圖を造らせられ、銘を御手づからか丶せ給へりとぞまた繪畫を嗜み給ひしといふ同年十二月崩御せらる（つゞく）



文苑

和歌

霧

賤の女がころもうつなる音きけはきりのうちにも里はありけり　久我建通

にほ鳥のたつかけきえて隅田かはすさきの松にか丶るあさきり　東久世通禧

わたの原波にうかへるうすきりにひかりやつれて日は上りけり　井上正直

深かりしさ霧はついに晴れすしていはのかけ道雨になりにけり　木下利玄

あかしかた浪のうき霧たえ〴〵にほの見えわたる沖のつりふね　三浦千春

女郎花こはきもみえぬ霧のうちにをり〴〵萩のおとそきこゆる　三輪義方

山川のいはねのかしかこゑすれどなかれぬ見えず霧た

ちわたる　相澤求

川とめもけさよりあきし富士川のわたり瀬ひろく霧こめてけり　赤堀信成

朝きりにこきゆく船はかくれてもおとのみかよふ川つらのさと　矢田香圃

山みちはさきりの中にかゝまりてかり草おひしうまよくるかな　山崎房吉

野山なる秋のあはれを見せしとやふかく〱霧のこすへたつらん　大野泰

おくて田のたり穂さやきて雁かねのきこゆる山路きり晴れにけり　石川季遠

天地はちゝたゝもとにせまりきぬ霧おほひかゝる杉のしたいほ　石榑千亦

ゆくらんかはた歸るらんか青海原うき霧のうちに海士の聲する　横山碩

朝またきたちいてゝ見れは渡もるひとさへ見えす霧ふかくして　土田道一

紅葉する秋はきりこそかくしけれとかくはたしのある世也けり　又原保行

かへりくる船の帆みえすほの〲ときりにくもれる海のおもかな　小原頼之

いひしらぬ秋のあはれやこのつらむしかのねもらす峯のゆふきり　川田爲則

朝またき山路こえゆけば猿なくかけのしたみち霧ふきおろす　井上公二

波の上に富士も天城もみゆへきをわさきわふかし伊豆の海はら　關屋祐之

水を渡る鐘のひゝきもかすかなりきりにくれゆく川そひのやと　栗田土雄

北の海きりにとさゝれて舟ゆかすちゝのはふりに遂にあはぬ我　山田清定

みわたしの松原なみき松のいろ〱霧たつまゝにうすらきにけり　新井千湧

遠山にゆふ日しつみてわかやまはさきりの中につゝまれにけり　笠原幡多雄

のほる日にさ霧ははれぬもみちはのあかきまつくを名

殘にはして　新井幸太郎

山みえて海みえそめてしま見えてきりのとはりのちきれゆく哉　松寺久雄

けさ見れは霧のみたてり八千草のはなのいつこに匿てゆきけむ　高久貞義

富士のねは雲井に高くあらはれてふもとの里をこむるうすきり　松浦裏次

あさ鳥のねくらをいへる聲はしてあけぬや霧のまよひなるらむ　井野邊嚴水

夕かはに大根あらふとおりたては水車のあたりきりしろくたく　澤　式

朝たちのみち一里半ゆめのことゆけともゆけとなほ霧のうち　鹽川庵

霧ふかきともか庵をとひくれはわか軒端にとたちのほりけり　龜山新一

深山路にゆくへもわかす旅ひとのきりのなかにそ立まよふかな　萬木敬二

朝日かけおほへる空のうきゝりにまきれてさわく稻すゝめかな　松谷庄藏

山祇のくたりますてふこのころをはる名のみやま霧たちわたる　相馬御風

千草みえす旅人みえすゆふくれの十里のひろ野たゝきりのうみ　佐々木信綱

野も山もつゝみこめたる朝きりのうへにそはたつふしの大たけ　伊藤梅子

霧こめて千草のはなはつゝめともつゝみかねたる野への虫のね　八十一　増山深雪子

旅ひとの駒のすゝおときこゆれと驛路はみえすきりにかくれて　板倉止子

七くさの色もほの〴〵見えそめてあけはなけゆく霧のなかみち　末松生子

落しひをきそひてひろふうなゐらのこゑをのこして霧たちわたる　板倉藤子

あつさ弓やくちや何方おほつかなきりたちわたる玉かはのさと　七十五　安藤菊子

朝な夕なむかふ岡へのこすゑもまてしつみはてたる霧の

うなはら　　徳富久子

なにかしの墨繪に似たりうす霧のみほりの松をつゝむ
あしたは　　荻野愛子

我さきにゆく人やたれ霧のうちにをり〳〵きこゆしは
ふさの聲　　池田愛子

あしの海ほの〳〵見えて函根やま八重たつきりも今は
れんとす　　大竹伊勢子

霧こめて山路は見えすさをしかの聲するかたやたかね
なるらん　　中村文子

かへりゆく君のゆくへを見送れはきりにかけなきこの
夕べかな　　長谷川柳子

荷おひ馬の鈴の音のみたかくしてあさ霧ふかしやまの
したみち　　鈴木光子

のきはより霧たちこめてわか山もむかひの山も見えす
成にけり　　慶野華子

おるか如き人の往來も見えわかす朝きりふかしろんと
んのいち　　佐藤朝惠子

かへりみれば我を送りこし我友のおもわも見えす霧ふ
かうして　　錢井鐵子

花もなし紅葉もいまたそめあへぬみやまをかくす峯の
あさきり　　加藤雛子

岡のへのさ霧のうちをあさゆけはゆめちをたとる心地
こそすれ　　久保花子

玉川のきしへのやなき見るか中にきりのそこにも沈み
ゆくかな　　吉田靜子

吾つまか歸りきますよゆふきりのなかよりもるゝ舟う
たのこゑ　　藤本雪子

友とちは霧にかくれてやまみちをひとり旅ゆくこゝち
こそすれ　　松井とも子

霧をおひてあした立出て霧をおひてゆふへ立歸るやま
のへのいほ　　有賀はる子

海山をひとつにこめしあさきりもつゝみかねたり天の
日のかけ　　坪野柳子

たちこむる朝霧のこちに鳥なきてねふりし村はいまさ
めんとす　　松浦島子

かたりあふ船子の聲もたつきりにしめりてわかす大利

根のみつ　武田倭文子
なく鳥の聲もほのかに榛名の海うなはらくらく霧こめてけり　小林しけ子

草花（竹柏園十月次會當座兼題點）

市にかうてうゑし草花まちなかのせまき小庭のなかめなりけり　加藤雛子
秋風の野へふくまゝにはなすゝきまねけはなひくをみなへし哉　井上公二
百千々の花にまよへとわきつのみもとの小萩にきてとまりけり　井上正直
朝戸出の目にうれしきは女郎花桔梗かるかやあさかほのはな　鹽川廣
茸狩のみちふみかへて八千くさの花さく野邊にいてにけるかな　佐藤朝惠子
さきつゝく秋の千草のあやにしきふまゝくをしき野邊の通路　増山三雪子
狩衣すそのをわたるわきかせにをはなみたれて萩のはなちる　關谷祐之
とりそへて見るも嬉しき秋くさのなかに見なれぬこと國のはな　板倉止子
またきてもこすへき池の橋のもとに一本さけりみそはきのはな　赤堀信成
やみふして水もやらねはいけ置しすゝきの葉先あかくなりにけり　淺井鐵子
蝦夷菊をわか鞍つほにゆひつけて我を見送りしゑそをとめはも　山田清定
なほさりに刈殘したるみちのへの小さくも秋ははなさきにけり　吉田靜子
露なから折らんすへもとこゝろみにさはれはおつる糸はきのはな　久保花子
里の子かこほろきとるとむれ騒く野へは八千くさ今さかりなり　澤　式
我やとは野守のいほとなりにけり尾花くすはなさきみたれつゝ　藤平雪子
名もしらぬ君國のはなも打交りにはゝ千草のにしきな

りけり　板倉藤子
かりとるも物うきまゝに捨おきし庭のやくさ花になりけり　鈴木光子
秋の野の七草まではかぞふれどかぞへもあへぬ八千草のはな　相澤求
八千草を手毎にもちてかへるさにいま一もと〻折りぞふるかな　小林しげ子
八千草をわか物にせるさま見れは秋の野もりそうらやましける　慶野華子
いふせしと思ひし草は寄おきてみなから花になれるおきかな　石川季遠
草花のさかりなるらんはなやしきくるま引出せはやゆきて見ん　安藤菊子
さま〴〵の千草の中に花もりかほこれる花もにほひぞめけり　大竹以勢子
をりわきて湯の山かへる山かごのみきもひたりも桔梗いとさき　有賀晴子
ゆけ〳〵と野道はつきず草のはなとりては捨てつ又とりて見つ　山崎房吉
み佛にさゝげんとてや植ゑつらむおうなか庭のけいとうのはな　栗田土雄
虫のねに耳かたふけて八千くさの花野ふみしたきめしひ一人ゆく　中村文子
野分してたふれしまゝの石ぶみにさきかゝりたり八千草のはな　坪野柳子
つみためし犬たての花を幼子の小さきものにもりておそへる　松浦島子
我も死なばかくあらまほし秋草の花にうもるゝおくつきところ　長谷川柳子
幼子に名をとはれて〻大かたはこたへかねたるは千草のはな　池田愛子
殊更にうゑたる如きいろどりにことしも生ふるおしろひの花　荻野慶子
いつこより駒のり入れん花すゝきいまをさかりの武藏野のはら　土田道一
樣々ににほひし千くさはなれてひろのに殘るひともの

ときく　松井とも子

昨日けふ野守かいほのにきはひに千くさの花のさかりをそしる　高久貞義

色ふかき千草のにしきしく野べにまねく尾花のそても見えけり　又原保行

いかはかり宿無のおほき秋ならんくさとしいへは八千色にさく　武田倭文子

おそかれを縁日にゆく植木屋のくるまにあまるは八千草のはな　木下利玄

さきにほふ千草八千草いろ／＼に秋のくさ野をいろとりにけり　笠原幡多雄

かたへよりかつ咲そめぬ朝な夕なまみつやりつる餘のくさはな　横山碩

秋の野は尾はなくす花はきつはな名もしらぬ草ならぬはな　松寺久雄

父ゆきて今日七七日たむくへく鉢のなゝくささきそろひけり　石榑千亦

文章

ある半日

大塚楠緒子

暑からず寒からぬ袷の袖の輕き頃、二人三人の君の主唱にて、同じ學校より出でし級三つばかりを限り集まらむといふ會の催されし事なりき。もとよりすべてを擧げて數へなば五十人六十人の人數になるべき筈ながら、女の身の皆とり／＼に嫁ぎ散りてはかゝる會合は誠に覺束なく折よく都にありて其日にさし障りもなく、さる日さる池のほとり綠の蔭深き所に集りしは、僅に丸髷の數十あまり三つ四つ、五年、六年、七年、八年逢はざりし君の半を過ぐれば俄には物語の辻褄もあはぬもとかしさよ。法學士の妻ぎみあり。工學士の夫人あり。局長の君の技師の君の、さま／＼に姿かたちの何時しか變り給へれど、そはたゞ聊なる丸髷の根の上り加減さがり加減、いづれは年頃ホームのクインとなり給へる箔のつきてあれば奥様振りたる奥樣ぶりのお

とをしき目ざましきは、さても爭そはれぬはうき世かな。これにても皆一度は彼のよしあしの噂高かりける、されど盛にはなやかなりし講堂に集りて、今は其御二人ともに世に在さぬ博士の君と倫理學者の君との領せられけるもとに、和樂會といふものもあり音樂會めきたるものありて、英詩の朗讀、邦語の暗誦、ピヤノの一手二手も貴女のたしなみ程は誰れ彼れの君のいと小器用に彈き給ひて、ボロテーズに洋服のリボン動かし給ひしも幾人か、賢き行啓のありしも其時なりしよ、その程はわれは入學の始、新參の最下級に在りつれば、何事も夢のやうなりつれど、今さる國の領事の夫人になりゐたまへる君の級なとのはな〳〵しかりし事は猶めに殘るやうにぞ覺ゆる、さても昔の面影は失せて芝の上に鬼事のはしこかりし君も、少し長くめしたる裾さばきのいかにもマダムめきて疊さはりのしとやかに、お早かりしこととよ出かけに來客のありてなと、まめ〳〵しき御口振のいつのまにかくは物馴れ給へるにかと驚かるゝばかり、皆御子の一人二人は持ち給へれは、天然痘の流行するといふに疾く種痘してやらずばなど衣紋つくり〳〵まつ座り給ふもあれば、けふは連れて來むと思ひつれど幼稚園のありてと御氣のすまぬやうなる君もあり、七つとて手を出して數へ給ふ男兒つれ給へる君の、いたづらで〳〵と小さき軍服の襟なほしてやりゐ給ふ御そぶりもいつのまにかふさはしう似合ふやうになり給へる此君の妹になり給ふ君も同じ級なりけれどやがて近き日、その良夫なる博士の君の外國より歸朝し給ふといふに取り紛れて今日は來給はぬなりけり、來會の男爵夫人になられんといふ君は、昨日とか今朝とか始めての女の見うませ給へりとかさては今日顏出し給はぬもことわり、次の會には其御たから抱きてや見え給ふべしとうはさしあふ、我級の中に最もひやうきんに在して得意なるおどけにいつも人笑はせ給ひし君は、今は陸軍の佐官の夫人にて東京を離れて遠く住み給へばそれも今日は詮なし、今一人醫學博士の君のは、けふは佛蘭西語の稽古日なりとて來給はぬとぞけふに限りて似非なる御勉强ぞとさる君は惜まれ

口きゝ給ふ、此中に珍しくいまだ御子といふものなくてそれ故にやいつまでもわか〳〵しき君昔より勝れて背の高き君なるに、少し御目にかゝらぬ程に又ひとしほ高くなりまさり給へるやうなりと笑へばさる事もあるまじと笑ひ返し給ふ、寒き冬の朝ストーブのまはりにせりよりて怠け者の常とて其日讀せらるゝ篇にあたるべき英語の下讀の間に合はず、次の、例の面白からぬ倫理談、講堂の後の方に座りてゐならむ給ふ師の君たちの眼をしのびては袂よりディクショナリーこそ〳〵と取り出てては字を引き、貴き聖めきたる老大家の側話をもうはの空に聴き流しきゝながし爲ける我等とはかはりて、背高き此君はいとまじめなる勉强家に在して、筆記帳などいつも淸らかに書き直しては持ち給へしよ、

牛込より一つ橋への御手車のゆきかひに、邊の人の眼をも引きて校中に美人の聞え高かりし君、今は軍人の妻君にて、箱の内の珠のやうに愛でいつきかしつかれ給ふにや良夫の君の容易には外に出したまはぬと、その御美しきと共にかねてより噂され給ふ君、けふは珍らしう優しき御姿見せ給へるに人々殊更にもてはやして君さへ來給ひへるに來給はぬ君たちの御心のつれなさ御足の重たさよと、さては來給はぬは、此君故にひとしほわるくいはれ給ふやうなり、立ゐも儘ならぬ烈しきチブスの病褥に横はり給へるまゝこれも海外へ留學の良人君を送り給ひて四年越、さるからに殊に待ちおくかれ給ふと見ゆる君、今しはしにて歸り給ふといふに船の着くは何日にかならむ、いかにして迎へにゆかんか、などしきりに氣を揉み給へるを傍に居たまふ法學士の妻君、さまで氣をもみ給はすもかなと戯れはみながら、誠にわれも覺えのあり氣のもめるものよ、然したまへ斯くし給へと敎へ給ふ、此君は交際社會に名高き伯母君もち給へればにやいとも話上手に在して、それよりそれへと抑揚頓挫のたくみなる書き取らばたちところに名文章をや得んとぞ思ふ、

すべての君たちそれ〳〵に嫁ぎましてとり〳〵に異なれる家の風に親しみ給ひ良人君の御風に化せられ給へ

ればにや、すまし給へりし君の驚くばかり愛嬌よくなり給へるもあれば、無下にあどけなかりし君の呆るゝばかり眼はしのき、給ふやうになり、給へるもあり、おしなべてそはいづれも主張少なく主義弱き日本の女性の缺點にして、はた長所なる、世の良人なる君の爲には誠に重寶なる德用向の點ならんなどぞ思ふ

味うすき茶もかゝる心おかれぬ團居にはをかしう啜られて二時三時と時のうつる程、はや歸らずばと膝うごかし給ふ君のあればこは御急ぎかな良人君の待ち給へればにやなど嫌がらせ給ふは中に年かさなる君、それに顏赤らめ給ふ程の花嫁君も在さねど、いひ返さん勇氣もなきはまた坐り直し給ふもあり、

次の會のことなどうち合せして今日來給ひし程の君は次にも必ず集り給へ、わけも無に出で給はずば罰金といふもの徵集せんなどいひ〳〵て、晩鴉見上ぐる森になき騷ぐ頃、惜しき半日の興を盡して丸髷のほろ車のいくつか四方に散りはてけるは過ぎし〳〵日の事なりしか、わが事は棚の上へ乘せ置きて、君たちの事のみかくは興じてかきつらぬる罪、いつかは生涯のうちに報いくべきことゝ、けなげなる覺悟をしつゝさてはいさゝかの思ひ出でを雨の日のつれ〴〵に、

秋のいろ〳〵

二十三階堂

國家全慶

見渡すかぎりの稻田、は黃金の波うち、重味にうなだれたる稻の穗先に雀の十羽二十羽と打群れて噪ぐさま、家のまわりの粟畑の、畦をあがきて家鷄のいきほいよく羽撃きせる。

紅葉

秋の山水は着色に妙あり、巖が根錆づきて隈どりあざやかなる。谿の小流れ澄み渡りて碧玉を熔かせる、いづれか塵襟を洗ふの料ならざる。行き〳〵て兩山の峽近くなれば、見渡す山邊の樹々の梢の皆な紅葉して錦繡の幕を踏み分けて入るおもひあり。

海邊

なごりなく晴れ渡りたる大海原に、朝日まばゆく照りかへして、はる〴〵と霞める沖に遠山かげの二片三片、青螺をきり落したる。靜かなる波の上に、遠く近く浮める帆かけ船の四つ五つ、白紙を貼りつけたらんやうに、或は貝殼、藻屑などの、限りなく波うちきはに打ち寄せたるなぞ。

晩　秋

熟柿の纍々たるは、其色紅玉をあざむき、老葉半ば黄みて枝を去らんとせるもの多し、案山子の弓矢すでに魂をうしなひて今は鳥の友となりぬ、まがきの烏瓜あはれにおれて枯木をつたふ蔦の紅葉せる、いづれが秋の名殘ならざる。

渡る雁

白露地に布き、日光草の葉末を透りて黄金の珠をつゝる、燦々たる野草をふみしだきて郊外遙かに見渡せば、森の彼方に續ける遠山の淸容、娟として爽氣一段なり、北風名殘なく吹き渡りて肌寒く覺ゆる時、鴻雁數三、列を爲して頭上高く渡り行くを見る。

山村の晩景

追はるゝごとき疾き日の夕暮、風凪ぎて空氣一しほ澄み渡り、一種爽やかなるかほりの四面に充ち〳〵たる、秋の日のさびしさもそゞろに懷ひの種とぞなる、夕陽は名殘なく山の彼方に落ち入りて、西の天を染め出し、高山の頂、夕照の雲にそびえて山際あざやかに近き心地ぞする、麓を廻る里の村々には、薄綿曳きたらんやうなる晩靄の立籠めて、白屋に炊煙のたちのぼれる景色、いとゞもの寂びたり。

畷　道

見渡せば千畝萬畝の鄙駄みちを、限りなく列ねて、見渡せば稻木のとこ〴〵に山蔭見え透きて、あるは畑に種まくもあり、刈りたる田の面を犂きかへすあり、新らしき鋤鍬買ひて歸へる里の童、小川に芋洗ふ女、牛部屋を掃ひて限りなく肥料をかき出したる。

秋の深山

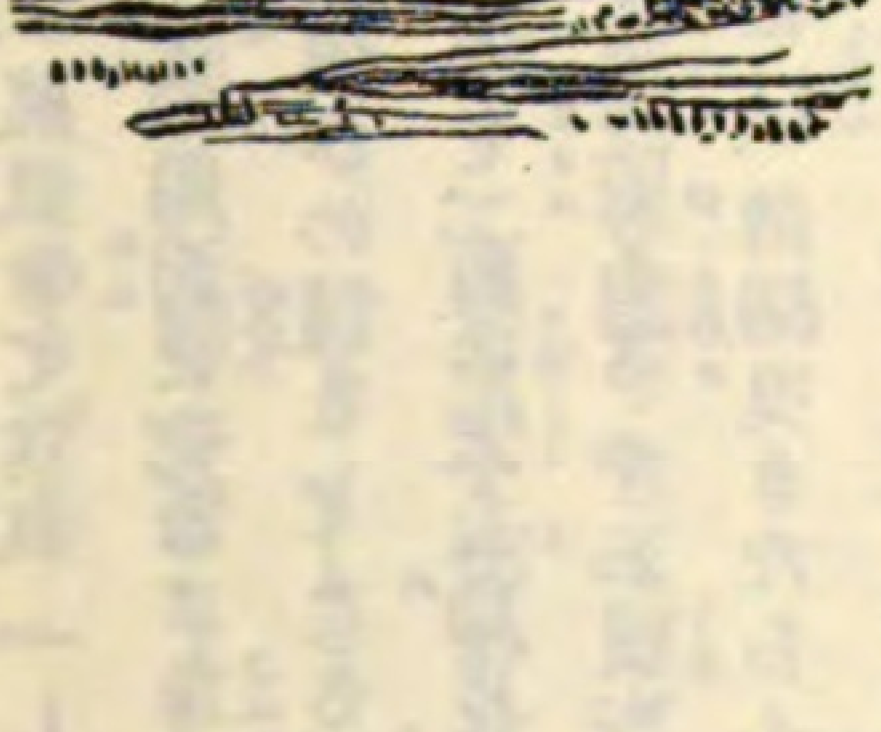
雜木山にわかち入れば、露華深ふして木の根株に苔の蒸せる、雨後の茸のみ簇々として金蓋、玉莖眼のよると

ころに點々たる。宿り木をまとへる蔓草の襷亘せるやうに、赤き實を珠とつゝりて、鈍栗の實の小徑に落ち散りたる。

いとすゝき

すみれ女史

久しう齒痛にくるしみて、筆も針もなげやりに過しける中いつしか秋やゝ深うなりて、萩桔梗はもろくも風に姿を任しぬ、ひとり尾花の穗老いず、折からの秋を小手招きにうたひて、なびくは世の愛か、榮かもとよりこれ花も咲かず、香もなけれど、さて見捨がたなの糸薄、亂れ〳〵て庭もせに、はた岡のべに、露ふきこぼすしほらしさ。無心にして招くこれが下には、愛の女神も立添ふらん、夕べの星もやどるらん、罪なき人罪ある人、うつくしき子、みにくき子、嬉しき女たのしき男世のあらゆる人は、まねき〳〵て立てる尾花に祝福を祈るべくや、さはいへいつしか無情の冬、つれなの北風にこれも亦あやめちるゝをおもへば、そゞろにあはれは身にしみぬ、誰れか悶を美の中に加へし、薄よ、糸薄よ、こゝを我が世と靡きみだれて、恣に世の榮世の愛を招け、前途には恐ろしき冬あり、ねたましき迄うつくしの霜あり雪あり、人にたとへていはゞ汝今、盛半はなる花の處女子ならんか、處女は虛心平氣にして唯世の愛を求む、知らずや愛の裏面には涙あり、苦痛あり、煩悶あり、恰も尾花が行手に悲しき冬、くらき夕べのある如くにして、世は必ずしも愛の舞臺にのみ限らざるなり、嗚呼心してなびけや、いとすゝき、心してゆけとしかき人。



學藝

日本名蹟雜話

文學士　喜田貞吉

大和めぐり(つゞき)

◉奈良の郊外　(前號八一頁地圖參照)

◎奈良の市中をめぐり終へたる我等は、之より杖をその郊外に曳かんとす。そも〳〵この地は、東、西、北の三面は山を以て圍まれ、平野南に開けて、すこぶる景勝の地なれば、元明天皇も都をこゝに遷されて、所謂、奈良朝七代七十餘年間の帝都とも、成りたる次第にして、當時の舊蹟の、市の內外至るところにあるは、勿論の事なるが、之より以前の遺蹟も、また其數に乏しとせず、殊に、西部北部の、山の麓は、古代の有力者、特に皇室の、御葬地とも云ふべき程の地たりしなり。蓋し其地南をうけて、遠く大和平野を見晴らし、貴顯の御墓所としては、極めて適當の地なればならんか。

◎今の奈良市を北に出づれば、法蓮村に、

◎聖武天皇の御陵　あり、佐保山南陵と申す。其西に、文武天皇の夫人、卽ち聖武天皇の御生母なる、宮子媛(藤原不比等の女)の

◎佐保山西陵　あり、又東には、聖武天皇の皇后光明子、卽ち光明皇后の、

◎佐保山東陵　ある趣に、延喜式と云ふ古書に見ゆれども、西陵の方は、今其所を失して明ならず。之より北の山へ少し上れば、元明元正二帝の、

◎奈保山東陵、奈保山西陵　の二陵あり。聖武天皇の皇太子の、

◎那富山墓　及び、應神天皇の皇子、大山守命の、

◎那良山墓　も、共にこの山續きにあり。之より西南の方に下れば、法華寺村に出づべし。村に、

◎法華寺　あり、法華寺は、聖武天皇の御代に、國毎に置かれたる、國分尼寺にして、詳しくは法華滅罪寺と云ひしものあり。聖武天皇の起されたる國分寺には、各國共に、僧寺と尼寺との二つ宛ありて、僧寺の方には、男僧二十人宛、尼寺の方には、女僧即ち尼十人宛を、入れ置かれしものなりしが、其後、世の變遷と共に、尼寺の方は早く廢滅して、國分寺として後世に存在し、或は地名と成りて殘れるは、多くは僧寺の方のみと成れるに、この法華寺のみは、むかしのまゝに存在し、舊幕時代には、比丘尼御所として、皇女方、皇族、姫宮達、或は攝家の姫君などの、住職となりて入寺せらるゝ寺の一ツなりしなり。この法華寺村の東南、佐保川のほとりの、田圃の中には、一寸見た所にて、凡そ、

◎十箇ばかりの小古墳　あり。多少大小の差はあれど、先づ大抵高さ二間から三間位、周圍十二三間から二十間内外のものと見えたり。もとより何人の墓なりや知るよしなく、此より西北の地に、あまた散在する大古墳に比べては、實に言ふにも足らぬ程の小なるものなれど、かゝるものにても、之を築くには、數百人の人夫を、數日間要したりしに相違なし。

法華寺村の北には、

◎大なべ、小なべ　の二大古墳あり。其形は、前號に述べたる、開化天皇の率川陵と同じく、前方後圓と稱する種類のものなれども、其大さは、更に之に數倍し、遠方より望むも、立派な小山なり。「大なべ」は東にあり、「小なべ」は西にあり、山の縦が各二町半、横幅が一町餘もあらん、大きなる堀を以て之を取り巻き、水深くして船なくては渡り難し。堀を一周せんには、「大なべ」にて十町餘、「小なべ」の方もまた十町に近かるべし。山の高さ十餘間、後方最も高き所に、石棺あるよし、以前に之を調査したる人の、書けるものに見えたり。今は御陵墓傳説地として、宮内省より之を保管し、人の立ち入るを禁じたり。「小なべ」の西及び北に、六七箇の小古墳の、列を成して並べるあり。之は近臣又は殉死者を葬りたるものにて、陪塚といふ。大きなる古墳には大抵之あり。其大さは、法華寺村東南の、田の中にある

もの位なり。「大なべ」の周圍にも、もとかゝる陪塚はありしならんも、いつの程にか取り去られて、今はなし。此所の陪塚は、堀つて見ねば、其內部を知るよしなけれど、先年坪井理學博士が、東京芝公園內の、大古墳の陪塚を開きしに、何れも中より數人分の人骨出でたり。此數人は同時に死して、同時に埋葬したるものと思はるれば、蓋し殉死者を葬りたるものなるべく、以て此所の陪塚の性質をも、類推するに足らんか。

「大なべ」「小なべ」の二大古墳は、古くより元明元正二帝の陵として、傳へられしも、其形式如何にも奈良朝より古く、實らしからぬば、宮內省には、前に述べたる所に二帝の陵を考定し、「大なべ」、「小なべ」の二大古墳は、今は何人のともわからぬものとなり、單に御陵墓傳說地として保護するのみとなれり。但、此位の大きさの墳墓を作るには、數千の人を數ヶ月間使役せずては、到底出來まじければ、たとへ天皇の御陵ならぬとも、極めて勢力ありし人の墓たるは、決して疑ふべからざるなり。

「小なべ」の西に、氷上池あり、周圍十四五町。池の北に、仁德天皇の皇后、磐之媛命の、

◎平城坂上陵　あり。此皇后は、當時權勢並ぶものなき、武內宿禰の孫女として、殊に此ころは、三韓も我國に內附し、我が皇室の稜威最も盛なる頃なりしかば、御陵も甚大にして、其大さ「大なべ」にも劣らず、周圍には二重の堀を繞らし、陪塚も數多ありて、結構極めて鄭重なり。其形式また同じく前方後圓にして、「大なべ」「小なべ」と同じ構造なり。

氷上池の西南には、平城天皇の、

◎楊梅陵　あり。之は前のものに比すれば、時代の餘程下りたるだけ、構造も甚小にして、周圍に堀もなく、形も圓丘なり。此邊を佐紀村といふ、むかしは「狹城」或は「狹木」と文字にかき、垂仁天皇の皇后、日葉酢媛命の、

◎狹木之寺間陵　をはしめとし、成務天皇の、

◎狹城盾列池後陵　また神功皇后の、

◎狹城盾列池上陵　などあり。其南には、孝謙天皇の

◎高野陵もあり。此外、何人のとも知り難き大古墳、小古墳の、荒陵となれるもの、無數に此邊に散在す。圓形の塚もあれば、瓢形の塚もあり、これ等に屬する陪塚もあり。稍下れる世のもあるべけれども、多くは、「大なべ」「小なべ」などゝ等しく、神功皇后、成務天皇の御陵などゝ、形式を同うし、其御代を去る、甚しくは遠からぬ世のものと思はれ、實地に臨みて之が有樣を見るものは、何人も、此ほとりが、古代高貴の御葬地なりし事を推察するに躊躇せざるべし。

右の中にも、垂仁天皇の皇后日葉酸媛命の陵は、これを築く時に、殉死を禁じたる代りに、陵の周圍に埴輪土偶を樹てたりとの傳説ありて、歴史上殊に著しきものなり。然れども、此傳説は、頗る疑ふべきものなり、名蹟雜話にはあまり關係なき事の樣なれど、試に之が說を成さんか。

垂仁天皇殉死を禁じ、埴輪土偶を以て之に代へたりとの說に就て

日本紀に曰く、垂仁天皇二十八年、皇弟倭彦命薨ず、其葬儀に當りて、近習のものを集めて、悉く生きながら墓のめぐりに埋め立つ、數日死せず、晝夜泣き叫ぶ、遂に死して腐敗し、犬烏集りて之を喰ふ、天皇其泣哭の聲を聞て、深く之を憐み、殉死を禁ず、然るに、三十二年皇后崩ず、其葬式に際して、さきに已に殉死を禁じたれば、陵のほとり淋しく、事缺けたる樣にて儀式整はず、即ち野見宿禰の發明によりて、土偶を墓の周圍に樹つる事とし、本國出雲より土工一百人を呼びて、土にて人馬其他種々の物を作らしめ、以て生人に代えたり、之を埴輪とも立物とも云ふ、之より野見宿禰の後裔は、代々土師氏として、天皇の葬儀を掌る事となれり、云々』

右の說は、よく人の口にする所なれど、頗る疑はしきものあり、(一)、殉死とは、果して右に云へる如く、生きたる人を、其まゝ墳墓の周邊に立たせて、はては餓死させ、腐らせ、犬や烏の餌食たらしむるものなりや。孝德天皇が殉死を禁じ給ひし勅語の中に、或は

自殺して殉ひ、或は絞殺して殉はしめ、或は強て死したる人の馬を殉はしむる風ありし事を、述べられたるを思ひ、又、現に陪塚の中に、殉死者と思はるゝ、數人又は十數人の屍體の存在するを見るに、埴輪を墓の周邊に立つる如く、生きたる人を立てゝ置きたりとは、信じ難きなり。(二)、垂仁天皇以後、果して殉死を廢せられしか。史を案ずるに、田道間守が垂仁天皇の陵前に死し、隼人某が雄略天皇の陵前に死せしもの、共に自殺して死に從ひしたぐひなり。其後にも、或は自殺し、或は絞殺して、殉死せしむるもの多かりしが故にこそ、孝德天皇の禁令は發布せられたるなれ。されば、埴輪が殉死の代りとなりて、それて殉死が止めになりたりとは、思はれざるなり。かつ、(三)、埴輪は果して殉死の代理なるべきか。實際に就て之を見るに、埴輪には、人形、或は馬、鳥などの形したるもあれど、多數はかゝるものにあらずして、單に圓筒たるに過ぎず、而して此圓筒を、墳墓の周邊へ、幾重にも並べて、垣根を作れるなり。即ち永久腐朽せざる材料を以て、墳墓の周邊に八重垣を作りたるものなり。之を以て殉死者の代理とは、決して信ぜられず。圓筒には、大抵、薪を束ねたるが如き模樣ありて、其配置の狀より見るも、其形狀及び模樣より見るも、はじめは木の枝の束ねたるものを、數多並べて、垣根を作りしを、それにては間もなく朽ちる故に土にて其代りを作りしものとしか思はれざるなり。今日にても、鄭重にするには、墓の周邊に、石を切り合して玉垣作るを思ふべし。其玉垣なる埴輪の中に、人形や、動物の形したるものゝあるは、神佛の前に、仁王や、狛犬や、狐、鹿などを、その神佛の使役者として、置くと、同じ思想より出でしものにて、殉死とは關係なきものなるべし。

果して然らば、垂仁天皇殉死を禁じ、土師氏が其代りに、埴輪を作り始めたりとは、何かの間違の說なるべし。蓋、此の南方に垂仁天皇の陵ありて、其近邊は、埴輪製造職人たる、土師氏の本據の地なれば、其祖先がはじめて此地へ來りしに就て、何か垂仁天皇と關

係わりて、爲に、其家柄、又は職業の由來を說明し、子孫に語り傳ふるに方りて、かゝる說も起りしならんか。之はたゞ試に言ぶ迄にて、定說とも思はねども、要するに、學校にて歷史の時に、埴輪の由來を學びて、それを直ちに應用し、此古墳は埴輪があるが故に、垂仁天皇以後のものなり、此古墳は、殉死者があるが故に、垂仁天皇以前のものなりなどゝ、早合點しては、とんだ間違に陷る事あるべしと思へば、かくは注意の爲、なか〳〵しく書き添えつ。

◎神功皇后陵は稍西北に離れて、此地の諸陵の中には、最も大なり。神功皇后陵と成務天皇陵とは、古代に於て已に之を取り違へたる奇談あり、仁明天皇の承和十年三月十八日に、山陵鳴動す、依て之を撿するに、北は神功皇后陵にして、南は成務天皇陵なるを、從來全く取り違へて、神功皇后に奉るべきものを、常に成務陵に奉り、神功皇后の祟ありて、之を謝する場合にも、空しく成務天皇に向つて謝せしかば、遂に斯く山陵の鳴動あるに至りしなりとの事わかりて、勅使を立てゝ、南北二陵に謝し奉れり、蓋、古代の墳墓には、後世の墳墓の如く、文字を以て書きたる墓標なきが故に、かゝる間違も起りしならん。

◎以上述べたる所は、すべて大和平野北隅の山麓にあるものにて、之より南一帶、郡山町の邊までは、古への

◎平城京の敷地內なり。(前號の圖に點線を以て其外郭の大體を示せり。)此敷地は、添上、生駒二郡に亘りて、中に都跡村といふもあり、もと大極殿のありし所なりしとて、字を大黑の芝と稱する所もあり、前に述べたる法華寺の外に、西大寺、唐招提寺、藥師寺等の巨刹あり、大安寺の址も殘れり。

◎西大寺は、孝謙天皇の勅願にて、天皇の御陵の西南にあり、古の平城京の西北隅にあたる。もとの境內は極めて廣かりし由なれども、今は大に衰へて、近邊に民家連りて、西大寺村を成す。西大寺村の南方は、

◎菅原の地にして、實に菅原氏の故鄕なり。菅原氏は土師氏より出で、野見宿禰の後裔に屬す。此地は土師氏の本據なり。こゝに菅原寺及び天滿宮あり。○前號の圖に

菅原寺を平城外京郭にある如く記せしは誤り郭内にあたる此邊を伏見の里とも云ふ、菅原は大名にて、伏見は其中の小名か、或は二者相並べるか、古歌に

いざこゝに我世は經へなん菅原や
　伏見の里の荒れまくも惜し

何となくものぞ悲しき菅原や
　伏見の里の秋のゆふぐれ

などあり。この西南に、安康天皇の

◎菅原伏見西陵　あり、更に東南に、垂仁天皇の

◎菅原伏見東陵　あり。安康陵は丸形にて、稍小なれども、垂仁陵は（前方後圓にして、大さも「大なべ」位あり、周圍の堀には水を湛え、陵上樹木生ひ茂りて、極めて神々し。近傍に一二三の陪塚あり、常世國に使して、漸く使命をはたし、歸朝せし際には、已に天皇崩御の後なりしかば、大に悲み、陵前に號叫して、遂に殉死せし、田道間守の墓も、此中にある筈なり。此邊、なほ此外にも數多の古墳あり。

垂仁陵の北をすぎて、奈良市迄、一里餘の極めて眞直なる道路あり、東西に通ず、之れ即ち古の平城京の

◎三條大路　なり。平城京の址は今さだかに見るべからずと雖、街路は尙往々にして存し、五條、六條、七條、八條、九條など、村名にも殘りて、ほゞ其所を知るを得べし。

◎唐招提寺　は、垂仁陵の東南にあり。我國律宗の開祖、唐僧鑑眞和尙の創建せし所なり、此南方に

◎藥師寺　あり。孝謙天皇御出家の後、こゝにましましけるよし。これより三十町ばかり離れて、東に

◎大安寺村　あり。もと、支那長安の西明寺を模して、建立したる大寺なりしも、何時の程にか廢して、僅に小堂と村名とに、其名を留む。こゝにも前方後圓の古墳あり。この大安寺と、藥師寺と西大寺とは、もとの平城京の敷地内にありて、前號に述べたる、奈良市中の、東大寺、興福寺、元興寺と共に、南都七大寺の中なり。七大寺の中、今一ツは法隆寺にて、之は南都とは云ふものゝ、遠く西南に離れたり。

右にて奈良の郊外、主として、もとの平城京の敷地のほ

とりを一周して、再び奈良市に歸る。（奈良の郊外終）

秋の夕（承前）

藤堂忠次郎

秋の夕に就てはずいぶん咄が長くなりました、虫の鳴音から、其の姿のこと、それから、どうして鳴くか、次ぎになぜ鳴くかなど、虫については、中々話すことが多いですョ、今はザットばかり、いつて上げたのです」と申したれど、それから、こー いふ好い虫の、盛んに鳴く頃には、秋の七草といふのが、亦盛りであります、秋の七草とは何々ですか、露子さん、チョイト指して御覽」

妹「ソーです子、アー何んだッか、ソー〱、すゝきといふのが一つあつたでしよー、それから……」

姉「皆いつて上げましよー、一つはすゝきそれをかるかやともいひます、はぎ、くず、ききよー、なでしこ、おみなめし、もー一つは何だッけ、ソー〱ふぢばかまです、」

妹「分りました、それで七つになりますね、ふぢばかま、きゝよー、かるかや、おみなめし、はぎ、くず、なでしこ、これで七草、分かつた〱、」

姉「オヤ、阿方、旨い歌が出來ましたョ、」

妹「へエ、歌……何が歌が出來ました、」

姉「露子さんの七草をお數へなすつたのが、丁度面白い調子の歌になつたんですョ、私も一度いひ直して見ましよーか、

ふぢばかま　きゝよー　かるかや　おみなめし
はぎ　くず　なでしこ　これぞ七草

妹「ソー〱、そーでした子、面白い歌になつて居ました子、私餘ッ程、歌が上手と見える、オホヽヽ」

姉「左樣、露子さんは、今少しすると子、もつと歌がよく出來るよーになりましよーョ、」

妹「一つ聞いて見ましよー、すゝき又かるかやといふのはどんなものですか、」

姉「こゝでは暗いですから、色々手に取つて來て、お椽へ行つて、燈火で見ましよー、

それ〳〵その長い脊高い毛をふさ〳〵と持て居るのが、かるかやですョ、これを亦一名かやともをばなともいふてす、をばなとは、獸の尾のよーてあるからともいひ、又男のよーに雄々して突つ立て居るからともいふそーです、色は美しいといふではないが、舊暦仲秋の望月には、其の夜、生花として宴席の飾としたといふことてあります、古人も亦折角此を愛てゝ居るよしで、西行法師なども

吉野山風にすゝき
　に咲く花は
　　人の折るさへをしまれぬかな、

すゝきには種類があつて、其の葉に白い斑が横に這入つて居るのをたかのはすゝきといふ、又その斑が黄白い色で縦に着いて居るのをしますゝきといふのです、それから、尋常のすゝきのよーで葉の細いのをしますゝきといひます、すゝきは可なり多く實用のあるもので、これを苅つて屋根を葺きます、俗にかやぶきの屋根といふのは即ちそれである、又牛馬の飼料にもする、又葉を編つて縄ともーします、



はぎになるとすゝきよりも遙に其の美を賞するもので、れんげそーやふぢのよーに蝶形の花であります、それでよく庭に栽ゑられて、柳のよーな枝の垂れて居る所に、赤或は赤紫の愛らしい花が簇つて居る風情などは一入文人雅

客の心を動かすは勿論、俗人でも誰れでも、その通りである、殊にみやぎのはぎといつて、葉か少し尖がつて枝の大きく垂れるものは最も賞美せられて居ます、其の他山へ行けばやまはぎとて、莖の少しも垂ないで直立して居るもの、又きはぎとて其の莖が太くて木のよーで葉に横脈の多いものがある、どれも皆美しい色で、山野の風景を彩つて居ます、はぎの葉は之れを茶の代りに用つたり、又、それを牛馬の飼料にもします、日光の山奥では、これをはぎかりといふて、九月十月頃に、村民打揃つてこれを苅り込むそーである、仙臺では其の幹を筆の軸にして土地の名産として賣つて


くず

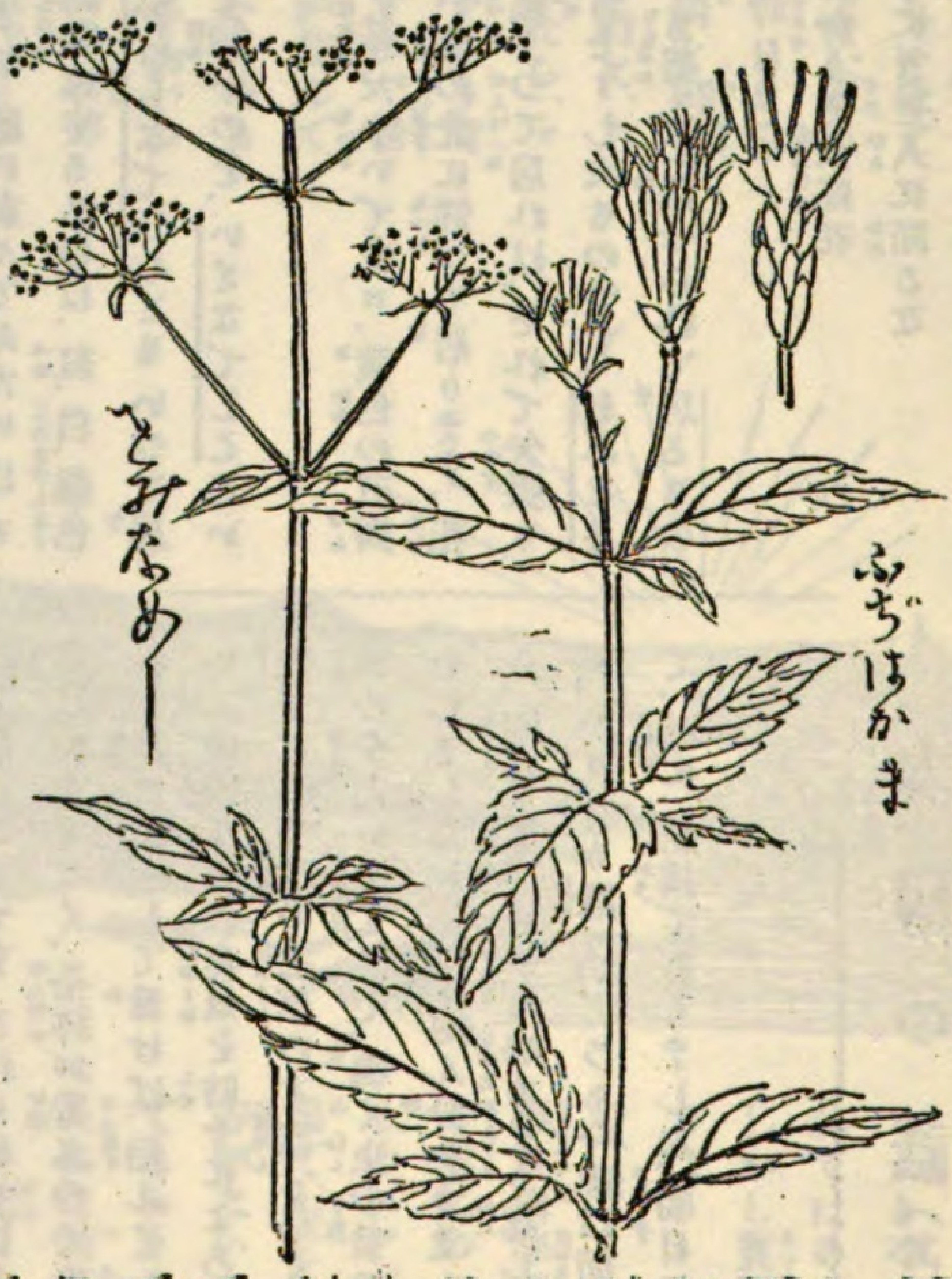
居ます、チヨツト雅致があるものですヨ。

はぎを蝶形の花といふが、くずも亦そーであります、蔓草の先に穂のよーに赤紫の花を綴つて、仲々美しいものです、それに何ういふ譯でか、はぎのよーに庭に栽ゑられないのは、憐れではありませんか、只ゝ葉が大きくて蔓が矢鱈に匍ひ廻すから、夏蠅がられて居るではないでしよーかネ、實用は寧ろ遙かに多いとはいれるです、露子さんなんぞ、よく知つて居るでしよーヨ、くずの一番の功用をネ、」

妹「それは、葛粉のことでしよー、どうして拵へますか、」

姉「それはネ、其の生の根から取るのです、其の根は芋に

なつて、多くの澱粉といふのを含んで居ます、殊に冬の間は、秋までに充分蓄へた澱粉がありますから、春に芽を吹き出すまでに、取らなければなりませぬ、その根を取れば、それを磨り潰ぶして布嚢に容れて、水に漬けたまゝ、洗へば、澱粉が嚢から洩れて出て水に混じて、白い乳汁のよーになる、その白く濁つたものを、暫時澄まして置くと、白い粉は皆底に沈むから、上水を徐々洗ひ去り、詰まり、其の沈んで居る粉を乾せば謂はゆる葛粉といふものが得られるのであります、河内の國は其の名産で、葛井寺といふのがあつて、これを藤井寺と讀みます、何故といふに、其の蔓を藤ともいひますからだそーです、その蔓は其のまゝ綯つて細に製し、又其の皮より葛布といふ帷子地を造ります、



七草の中で花の最も美しくて優さしいものは何々かといはゞ、ききよー、なでしこ、をみなめしを擧げるでしよー、ききよー、なでしこ、は共に七草の中で、最も花の大きなもので、ききよーは、紫色の花で、八重のがあるそーですが、先づ單瓣で、五に裂けて、殊に其の蕾が圓くふくれて居る様子が「きゝやうの花咲く時ポンといひそうな」と或る句にもいつてある通りで、誠に面白くあります、なでし

「こは桃色の五枚の瓣が、其の縁細く裂けて總のよーで美しくある、七草としてはかはらなでしこといつて、野や河原に自然に生へて居るが、庭に栽えて見たいほどてあります、しかし庭や鉢栽にするものは、紅、白、雜色あつて、これを石竹とかかはらなでしことも いつて居る、其の一種で葉の極めて細いのを、いとなでしこといひます、

をみなめしになると花は甚だ小いですョ、黄色の五瓣ある小花か澤山に、優しい莖の先に簇つて居ります、花が小くても、このよーに集まつて居れば、それて矢張り立派に目立ちます、花は皆そーしたものです、をみなめしは、昔から、歌にも文にも盛んに載せられて居るものであります、古今集に

名にめてゝ折れるばかりぞ女郎花
我おちにきと人に語るな

といふてあるは今更喋々と擧げるまでもないです、それから、一つ殘つて居るのは、ふぢばかまてあります、これは菊の類て、あまり多くは見えないで、大抵はこれに類したひよどりばなと見違へられて居るよーです、薄紫色の花てはあるが、其の色よりも其の香がすぐれて居ることてす、これを乾せば其の香愈々烈しくて、花ばかりでなく、全躰が香ふのであります、夏のときこれを籠に吊るして置けば、殆んと一ヶ月間も香失せないて便所などの臭氣を防ぐによろしいそーてある、

先づこれで秋の七草のオ話をザート一通り爲ました、秋の夕といふことて、鳴く虫の音や、咲き揃ふ七草の話をしましたョ、露子さん分かりましたか、分かりましたら、明日の晩、も一度略方くり返して御覽」

妹「ハイ、有り難う、どうも今夜は面白い話を聞かせられて、誠に、結構てありました、明日の晩には屹度、」

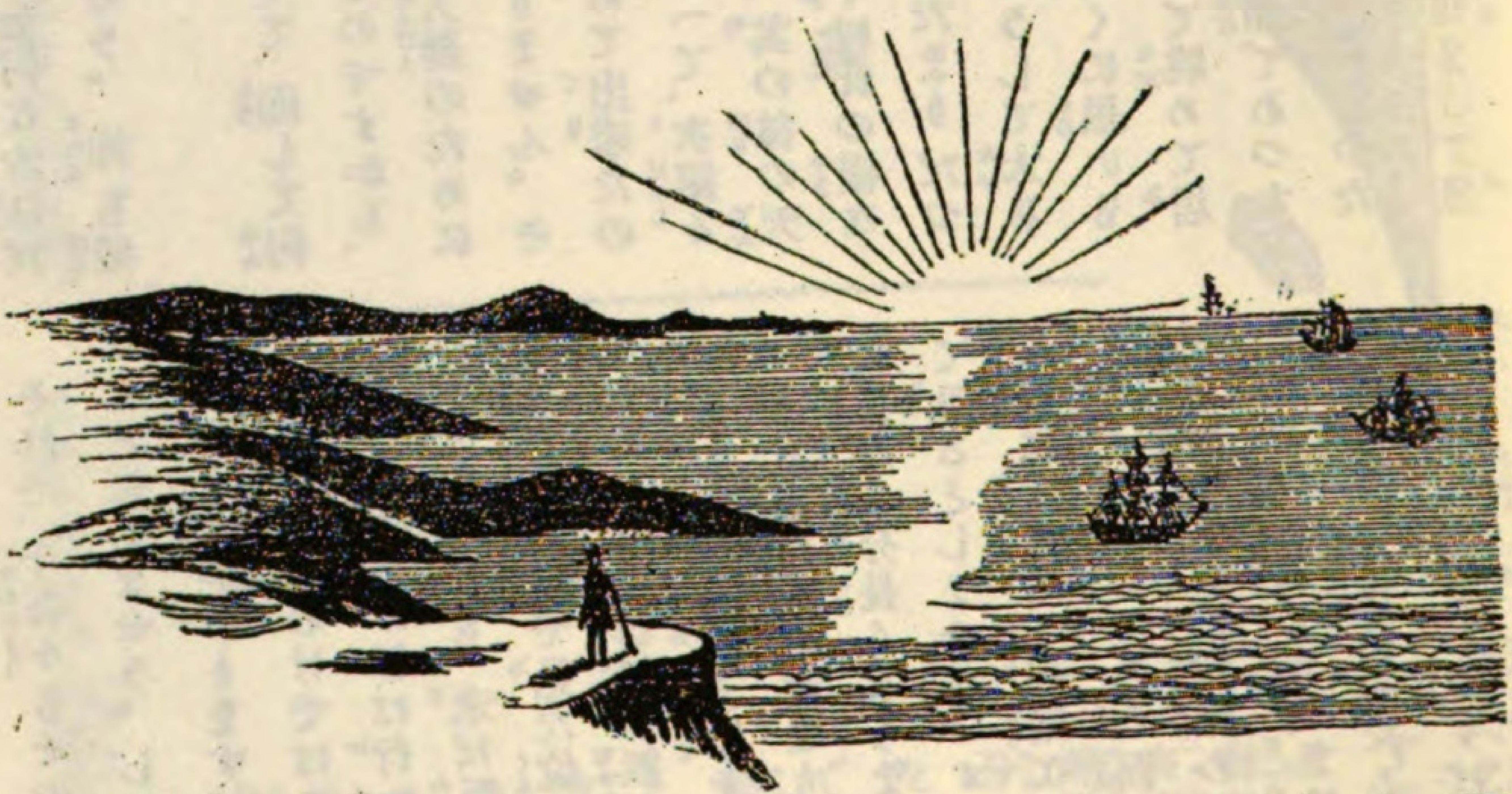
（をはり）

太陽の話（其二）

女子高等師範學校教授　岡田みつ子

前號に御話しかけた太陽の事について、引繼き申しま

せう。
◎燒くが如くてあつた炎暑の候も疾くに去つて、惱ましかつた日の姿が、朝夕け懷かしいほどになりました。皆さんは、定めし朝は窓にさしこむ朝日を迎へ、暮には沈みゆく夕陽を御送りなさるてせうが、その時に、あれを若しごくそばて見たら、マア如何ものだろうナンテいう考を起された事がありますか。昔から月の世界には天人が住んてゐるとか、兎が餅を舂いてゐるとか、色々の事をいひますが、あの太陽にも、ヤハリそんな事がありそうに思はれますか。どうも見た處ては、能く見定める事も出來ない位目も眩みさうに



光つてゐるから、人は愚か、生物なんて、とても居さうには思はれません。傍へ行つても、やはり大きな〳〵火の球らしく思はれてはありませんか。
しかし實際如何てせう。見たいではありませんか。というた處で、固より翼のない人間故、飛ぶ事も出來ず、孫悟空のやうに一寸雲にのつて行つて來るわけにもゆかず、マア空しく力の弱い眼て、天をにらむてゐるより仕方がないのてせうか？イヤ左樣てもありません。有難い事には、人には智慧があるのてすから、ナニ羽はなくとも、雲にのれなくとも、ちつとも困りません、イヤ却て居ながらて知る事が出來

る、便利な方法を知つてゐます。それは如何な方法だか、今の皆樣にはモウ申す必要もないでせう。即ち望遠鏡で見ればよいのです。

此の望遠鏡さへあれば、身体は下界に居つて、而して何萬里さきの物でも、見たい放題に見られるのですから、ドゥモ結構な次第で、之を發明した人は、人間のために大層な善い事を仕た人と言はなければなりません。その望遠鏡は今より三百年ばかり以前に初めて出來たのて、其れから多くの學者が種々に工夫を加へて、次第々々に精巧なのが出來るやうになつたから、其の後の天文學の進み方は、實に著しいもので、月の中は此の樣なものである、あの銀河というものも星のかたまりだつた、オヤあの星は動かないと思うたらば、どうして大さう動くなど丶、全で吾等が海岸に立つて、遠くに黒いものが見えるとか、白いものが動くとかいうて眺めて居たのが、傍へゆくと、其れが陸であつたり、船であつたりするやうな工合に、天の事がよく分るやうになつたのです。

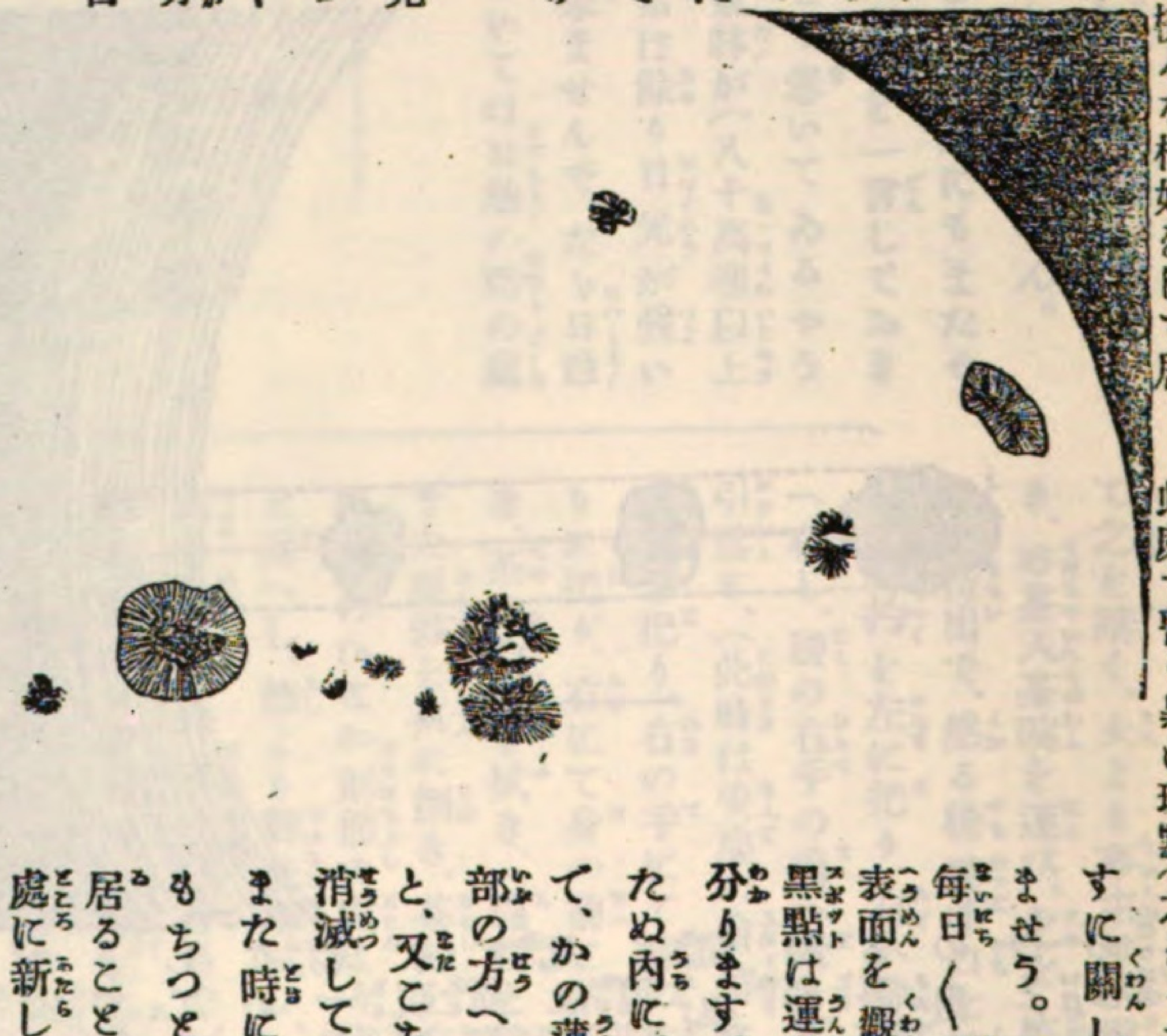
それで、今吾々もその望遠鏡によつて、一つ太陽を見ることにしませう。しかし見るまへに、一寸御斷り申しておく事があります。それは望遠鏡と申しても、無限の力が有るわけではないから之で見た所が、實際の通りというわけには行かないのです。マア如何よいので見るとしても、未だ吾々から百八十萬哩はなれてゐる太陽を、肉眼で見た位にしか知れないのであります。(しかし此の器械の無かつた時分は、九千一百萬哩隔つた所から見て居た事を考へれば、其れでも非常な進歩であると思はねばなりません。)

前置が大分長くなりましたが、いよ〳〵望遠鏡を取つて見るとしませう。オヤ〳〵妙な物が見える。太陽の表面に幾多の不規則な形をした黒い斑點がある。あのキラ〳〵輝いてゐる面上に、黒いものなどがありさうにも思へないが實際ある。太陽の表面に何處にもかしこにも一面有るかしらむ。そうではない。地球で云うて見ると、赤道にあたる線の上下に多い。その大さも、極小さいのやら、又すばらしい大きいのやら種々ある。

その形といふたら何ともいはれぬ樣々な格好をして居るが、何れも〳〵中心に暗黒な部分があつて、その次に少し薄黑い部分がある。一寸書をかいて見ると、次のやうな工合です。黒斑點はかり見て居つたが、それのない他の部分は如何かしらむ。之もたゞ光つてゐるのではなく、光つてゐる中に一面まばらに斑點をつけたやうな有樣が見える。

之を望遠鏡の更に度の強いので見ますと、黒點と見えたものも、光つた斑點と見えたものも、いろ〳〵複雜なものから出來てゐるのが分るし、それらの物以外に倘種々目にはいるものが有るのです。

だからいよ〳〵太陽を傍近くて見たらば、またどの樣な事が見えるのか知れないのです。

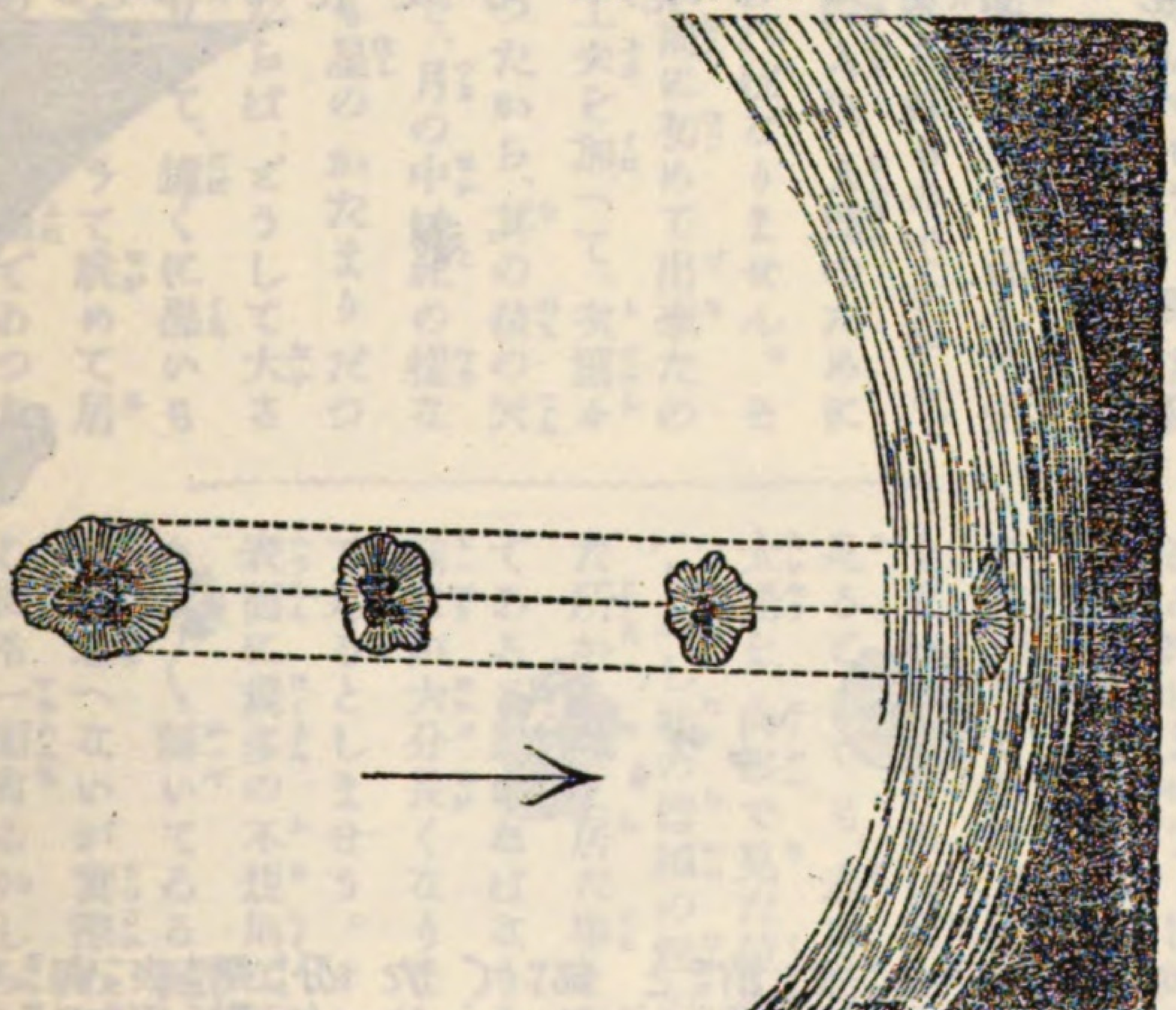


此處で暫く黒い斑點(之を「サン、スポット」と申しますに關してゐる、面白い事を述べませう。

毎日〳〵望遠鏡をもつて、太陽の表面を觀察して居ると、今申した黒點は運動するものだとかう事が分ります。時としては一時間と經たぬ内に、變化が起る事があるので、かの薄黑い部分が中央の暗黒部の方へズーッと行くかと思ふと、又こちらでは暗黒部が一部分消滅して仕舞ふ。そうかと思ふと、また時には、一週間でも二週間でもちつとも變らないで、その儘で居ることもあるし、不意に飛んだ處に新しいのが出來てをる事もあるのです。

これらはまづ黒點自身の運動ですが、モ一つ異つた運

動もあります。それはヤハリ毎日見てゐると、どの黒點もどの黒點も皆太陽の面を次第〱に横ぎつて行くので、東の端に居つたのは十三四日の間に、必らず西の端に來て見えなくなる。してまた一定の日が經つと、元のが再び東の端に現はれます。(圖は一の黒點が、中央から端に向うて進んでゆく樣を示したのであります。)から黒點がどれも〱揃うて東から西へ廻るのは如何いふわけでせう。之れ太陽自身が回轉するのであるといふ事ではありませんか。太陽の自轉するナンテたゞては決して知れる事てはないのですが、全く黒點の觀察てもつて分つたのであります。



ご承知の通り地球は自轉するのに一晝夜かゝりますが、太陽が一回轉するにはどれだけの時を要するかといふと、まづ二十五日だと申します。(果してそうであるかまだ確とは分ないのです。)

も一つ面白い事は、太陽の表面に現はれる黒點の數が年によつに異なる事なので。全く黒點の見えない時もあり、又非常に多く現はれる時もあります。長い間學者の研究した結果、十一年目毎に非常に黒點の多い年が來る事が知れました。しかし、此の出現に消長のある原因は、ちつとも分らないので、たゞ黒點の多い時は、磁石の顫動が最甚しく、北光なども此時に必

らず影響を蒙むるなど云ふ事だけが明になつてゐるのです。黒點と之等のものと果して如何なる關係があるか、之は未來の學者の解説を待たねばなりません。

黒點の事は之ほどにしておきまして、太陽にもまたその表面をとり圍んで居るものがある事を一言しておきませう。地球のぐるりを大氣がとり巻いてゐるやうに、太陽の周圍には非常に高熱の氣体が（八十萬哩以上の深さに）あるのです。たゞし平常は餘り日光が强いので、望遠鏡でゝも見ることが出來ませんで、たゞ日蝕の時にのみよく見えます。之については日蝕の話の處て申す事にしませう。

茶の湯手びき（つゞく）

利休流家元　正飄庵宗月述

薄茶の手前

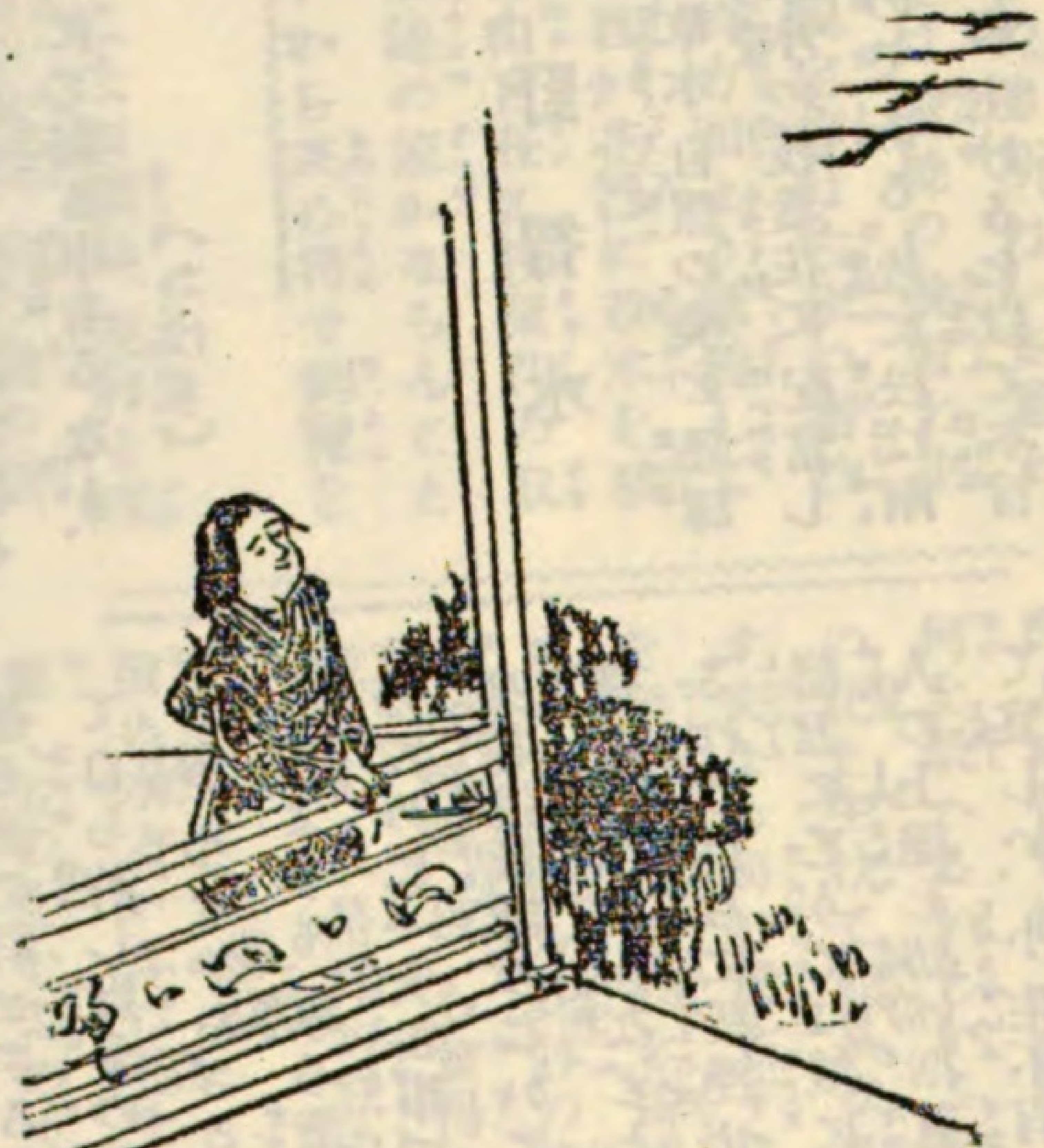
濃茶の手前終りて主客ともに暫らく話し合ひ、宜き頃を見計らひ、薄茶を進む、此時は、亭主先づ勝手口を明け出で、水指を右の脇に置き挨拶す、時に客は總禮にて之を請く、夫より亭主は水指を運び、客は小切目へをき、亦茶入茶碗を運び、之を大切目に置き合せ、次に建水を持出で、然る後勝手口を締め、座につき、容貌を直し、柄杓を左に把り、右へ持替へ、蓋置を左に把りて右へ移し、腰の右手の前へ置き、柄杓を其上へ載せ、柄を引落す、（此時は安座の會釋にはおよばず）次に左りに茶碗を把り、右の手にて膝の左方の前へ置き、茶入を左りに把り、右にて身の前と茶碗の間に置、帛紗を行に捌き、茶入の蓋を拭き、（爐淵と建水の間を割りて置）く、また服紗を眞に捌き、茶杓を右の手に把り、帛紗にて行に（中のひなか則節の處より露先迄二邊拭ひ、茶杓の裏を返へし、節より露先迄拭ひ、飛白形の處にて返へし、表を出し柄の處迄拭きさぐ）拭き、茶入へ掛け、茶筅を把り、茶入を置合せ、柄杓を把り、帛紗を右に移し、左へ柄杓を構へ、服紗にて釜の蓋を締め、蓋の上をゆの字に拭ひ、把りあげ、露を切り、蓋置きへ載せ、帛紗を腰に付け、茶巾を釜の蓋へ載せ、柄杓を右の手へ復して、湯を

汲み、茶碗へ入れ、柄杓を釜に掛け、茶筅を把り、常の如く三度茶筅とじを爲し、滌ぎて露を切り元の座へ置き、茶碗を右に把り、左の掌へ載せ、濯ぎ、茶巾を取り、湯を明け、茶巾にて三ふき半に廻を拭き、中をゆの字に拭き、其儘前へ置き、右にて茶巾を出し、疊み直し、(茶巾の裏を返して四ッに折り、又二ッにをり、縁りをつまみ、二ッにをるなり)次に右の手にて釜の蓋へ直し置き、手を清よめ、茶匙を把り、左の手にて茶入を取り、茶碗の中中程迄持出し、蓋を取り、右の膝と茶碗の間へ置き、茶碗になかばかゝる程に引わげ、茶を掬く(ひとすくひ又は二すくひ)なり、凡そ棗と茶碗との間の明きは、大棗なれば小棗の高さ程に明け、小棗なれば大棗の高さ程にて宜し、扨茶入に蓋を爲し、元の座に置きつけ、茶杓をかけ、柄杓を取り、湯を一杯に汲み、能き加減に茶碗へ入れ、殘り湯を釜へ復し、柄杓を釜へ懸け茶を點るものとす、

客は亭主が茶匙を把りし時に菓子器を把り、二客と自分との間の向ふの疊に置き、次客へ勸む、次客は之を辭す、此に於て上客は菓子器を引き寄せ、懷紙を出し、菓子を把り、菓子器を次客の間へ置き、茶の出るを待つなり、

亭主は茶を點て、茶碗を取上げ、左の掌へ載せ、點工合を一見し、茶碗の表を客の方へ向けて環付へ出す、此時上客は亭主え一禮を爲して茶碗を取り、茶碗の表を横へ廻して一口呑み、服加減の挨拶して呑み終り、茶碗の表を亭主の方へ向けて返す、亭主即ち其茶碗を取り、左の手へ載せ、呑口を見て廻し、前に置く、此時呑たる客より挨拶す、亭主は之を受けて茶碗へ湯を汲み入れ濺ぐ、次第に右の通りになし、(茶筅の扱を常の如く眞行草と順に爲すべし、茶巾は其都度常の如く疊みなをすべし、末座より茶碗を返し、菓子器を上客の前へ出せば、上客之を請取りて置く)次に亭主は茶碗を取上げ、見て前に置き、湯を汲み入れし時上客より最早御仕舞くだされたし、然し御自服下されたしと挨拶し、菓子器を茶碗の出る處の下へ出す、此に於て亭主は、然らば御相伴致すべしとて、茶巾を取り、湯を流し、拭ひ、茶を點

て、上座へ出し、今一服如何と挨拶し、客は一統にて最早充分頂戴せりとて辭す、亭主は然らば御相伴致すべしと挨拶して、茶碗を把り上げ、之を頂き、我前に置き、菓子器を取り、又頂き、故の座へ出し置き、茶を喫するなり、斯て頂了り、茶碗を持ち、座を繰り、前に置き、湯を汲み、濺ぎ、又前に置き、仕舞の挨拶をなし、水を汲み入れ、茶筅とじをなし、茶碗を右にて把り上げ、左へ移し、茶巾を取り、建水へ流し、茶巾を茶碗の中へ入れ、茶碗を右へ復し前に置き、茶筅を取り、茶碗の中へ仕舞、帛紗を眞に捌き、茶杓を拭ひ、帛紗に付し、茶を建水の上にて拂ひ落し、又拭ひ直して茶匙を茶碗へ載せ、帛紗を腰に付け、茶碗を大切目へ割りて置き、茶入を把り、茶碗と置合せ、柄杓を眞に取り、水を釜へ入れ、(一度二度或は五度と半月に入るゝなり)湯返しを成し、露を切り、陰に返して左の手へ持ち、搆へて釜の蓋を成す、(此時は手にて蓋をなす)柄杓を右に持替、蓋置へ載せ、水指の蓋を締め、(此時客より茶入茶杓等拝見の所望あらば、柄杓を取り、建水の上え載せ、蓋置を柄杓の柄の下へ置き、茶入を取り、身の前に置、左の手にて茶碗を大切目へ直し、帛紗を行に捌き、茶入を把りあげ、蓋を改め、茶入を拭ひ、帛紗を藥指と小指の間へ挾み、右の手にて茶入を出し、帛紗を眞にたゝみ、茶杓を草に拭きて出し置、帛紗は腰に挾むなり、又常の品なれば客より所望するは却て失禮なり)柄杓蓋置を持ち、建水を左に持ち、勝手口を明けて出る、茶碗を引き、水指を引き、(客より茶入茶杓を返す迄通ひ口にて待ち居る、一品客の



見様は濃茶と同じ、）勝手口には挨拶を成す、此時客總禮をなす、薄茶濟みたれば客は程よき時分を見計ひ退散すべし、當日亭主も疲れ居る故、長談等なす可からず、是は客に心得有たき事なり、此外三人以上の客在る時は、重ね茶碗と稱へ、茶碗二ッにて點る事有るなり、習ひての上にて知るべし、（おはり）

生花速成

自然古流家元　梶野智水

謹で生花の本旨を思惟するに、草木自然の美を發輝して、忠孝仁義禮智信の七道を草木の枝葉花に配當して本末整然たる花躰を組立てるのである、故に松は剛く柳は柔く、櫻は艶美に梅は閑雅に生けるを以て本旨として殊更に人工の所作の見ゆるやうな生けることを大に嫌ひます。

世間多くは生花の本旨を誤りて、徒らに末藝に馳せて草木の幹莖を熱灰又は火にてあぶり或は藥湯を以て煎じ甚敷に至ては松梅などを生けるに望で幹莖を横に切りかけ栓を挿みて屈曲せしめ以て愚俗の歡心を買ふをのみ能事として、本旨たる草木自然の美と云ふことを毫も意に解せざる人々が得意然として花道の宗匠を以て自ら許し幾多の門人をして生花の眞理を誤解せしむる者、少なからざるやうに思ひます、斯の如きは生花といふよりも、寧ろ造花と稱するが適當である、實に花道のために一大恨事であります。

又花道敎師のなかに於ても門人を敎育するに當りて口傳、秘法、許物などと稱してすくなからざる禮物を贈らされば更らに敎授せざる箇條が甚だ多くあります門人諸君にとりては誠に遺憾至極であらう斯かる先生は門人の上達を妨げ斯道の擴張に障害を與ふる罪人と申して宜しい、小生不肖なりといへども生花家として花道の隆盛を熱心に希望する者でありますから右等の陋習を矯正したいと存じて多年の間、門人に敎授するにも常に開放主義を執て藝術の點に至ては自ら進で盛に授與致しまして唯門人の速成を企圖するのみで御座いま

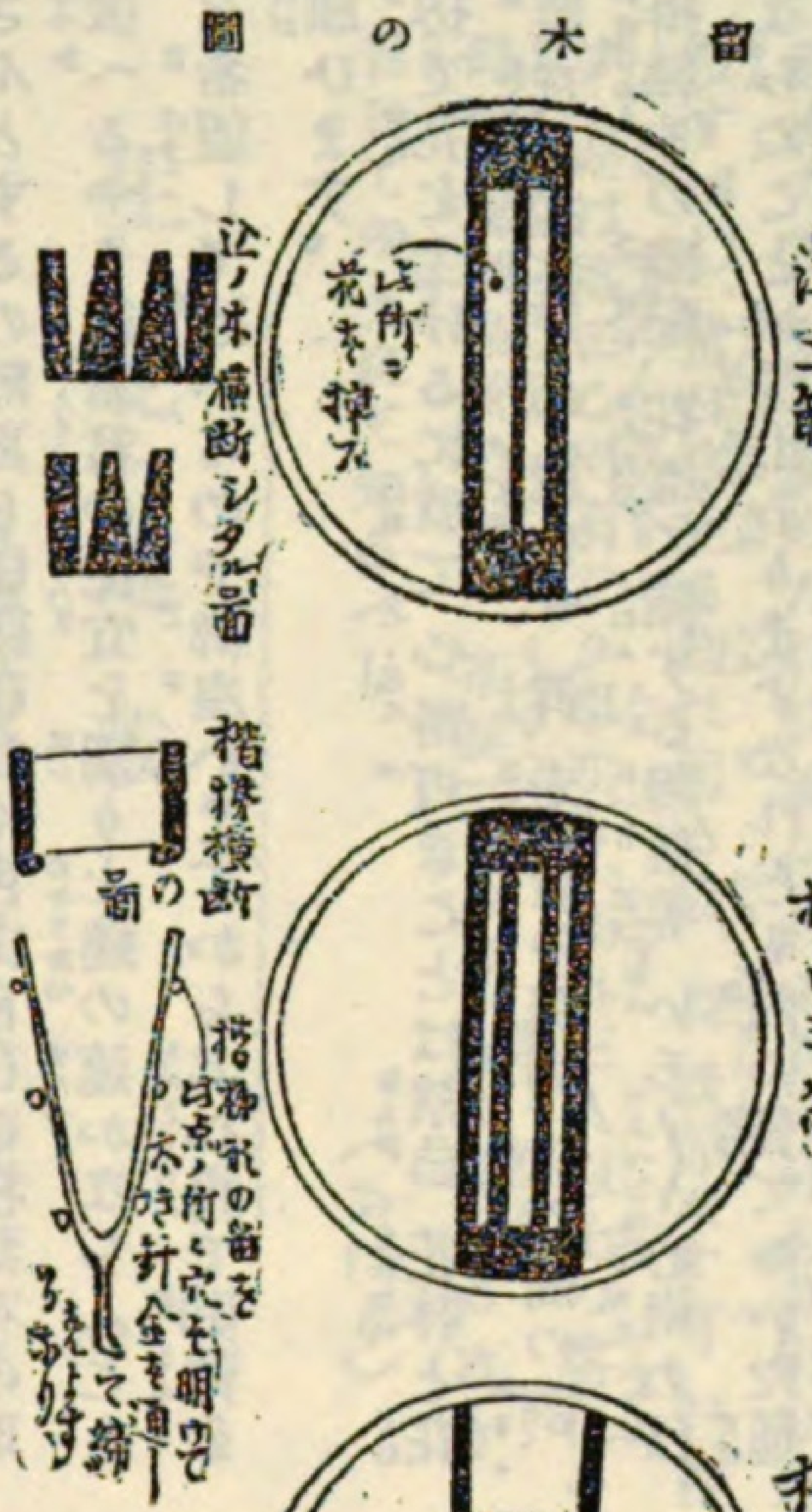
す。
今回家傳の敎理たる自然主義を基礎として自分が研究の結果得たる知識と今日まで敎授せし經驗とに依賴して、諸家に於て秘傳とする所の草木の生け方、變躰曲形、水揚法等悉く詳記し又解しがたき所は一々圖を挿入して懇切に說明致します、就ては實地の練習を主とするが故に花道に關する諸種の規定等は古來の書物に讓りまして唯生花の技藝を美術的方面より講義して讀者の參考に供する。要するに諸君が花器に草木を移さんとするの際更らに躊躇なく自由自在に枝葉花の取扱へるやうに諸君の便宜を圖り上達の速かならんことを希望して述べるので御座いますから其心得で御覽を願ひます。

扨て花を生けるに就て心得可きことは禁忌、花躰と花器及び花臺との取合せ、眞、走、行の差別、床の間の割、掛軸との差配、花道に關する禮儀等、いろ〳〵心得ねばならぬことが澤山ありますなれども前に言ておいた通り實地の練習を旨として生花術の綱要を演るのであるから諸種のヶ條は皆古來の書物に讓りて爰には省略して置きませう、尤も自分の意見は種々あるけれども古書と大同小異で御座いますから古書を御覽になれば能くお解りになります。

門人が花を持て初めて敎師の宅へ來た時に敎師は先づ何を敎へるかといふに第一留木の事を說明し直に持參の花を生けて簡易なる花躰の說明をするので御在います夫より毎日稽古するに隨ひて色々規定を口授し花枝を添削し又書物を傳授するのである、斯くして稽古するうちに段々花躰の意味が領解て來るに連れて變躰曲形水揚等自ら會得することが出來る。此方針に據て說明する、是れが私の敎授法であります。

◎留木

留め木といふは花を器に挿して姿の崩れぬやうに留て置くものをいふので是れも流儀に依て種々差別がある即ち又留、弓張留、込の木留(花緘みともいふ)、十文字留、楷梯留、折留などゝ數多あるけれども自分が今用ふる所のものは込の木楷梯の二種を專ら使ひ、時の都合



留木の圖

依て傍ら轡、蟹、亀、渦、などを用ひます。

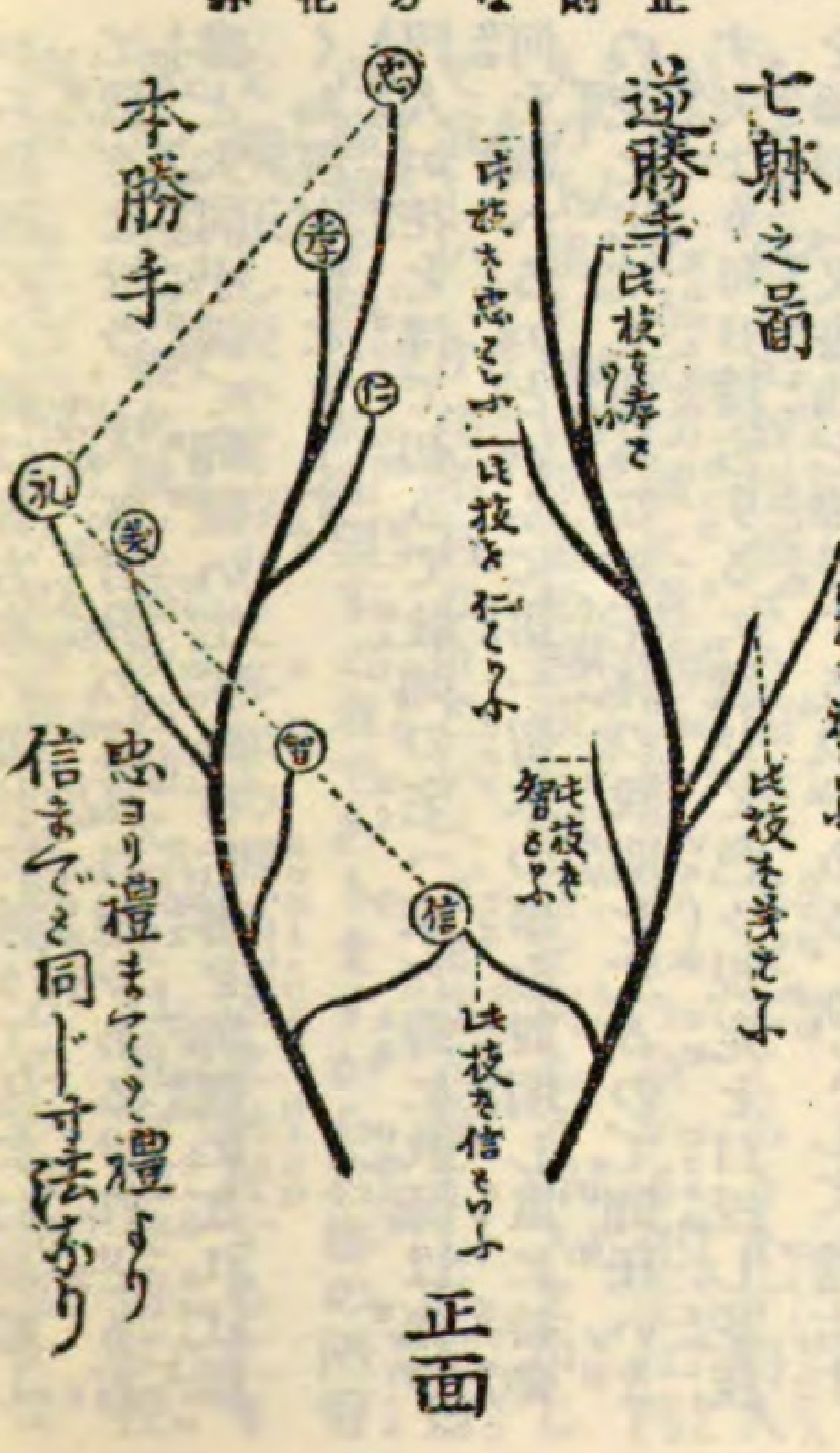
込の木に生けるときは幹茎の剛くして強き草木を撰み、楷梯は幹茎の柔かにして弱きものを生けるゝきに用ひます。

込の木を造るには溝一筋なれば木、又は竹の中央を浅く削りて二枚合せて捻鋲にて留めるか針金にて釘綴り付ける、溝二筋なれば板三枚此時は一方の溝を廣くして置くがよろしい又三筋なれば板四枚此時は中央の溝を太くしておくに利があります、此留木にて生ける時は花の姿振を考へて枝の下を斜に削りて挿し込むのです。

楷梯留も矢張竹の木にて拵らへたもので是れを手軽に造るには圖の如く木の股にて造れば容易に出來ます。

右の七躰を以て正しき花形の骨子として千態萬状諸草木皆悉くこれに則とるので御座います、故に初歩の者は能々枝名形狀枝の振り方を闇記して然る後ち手を下すのが

正則なる花鉢





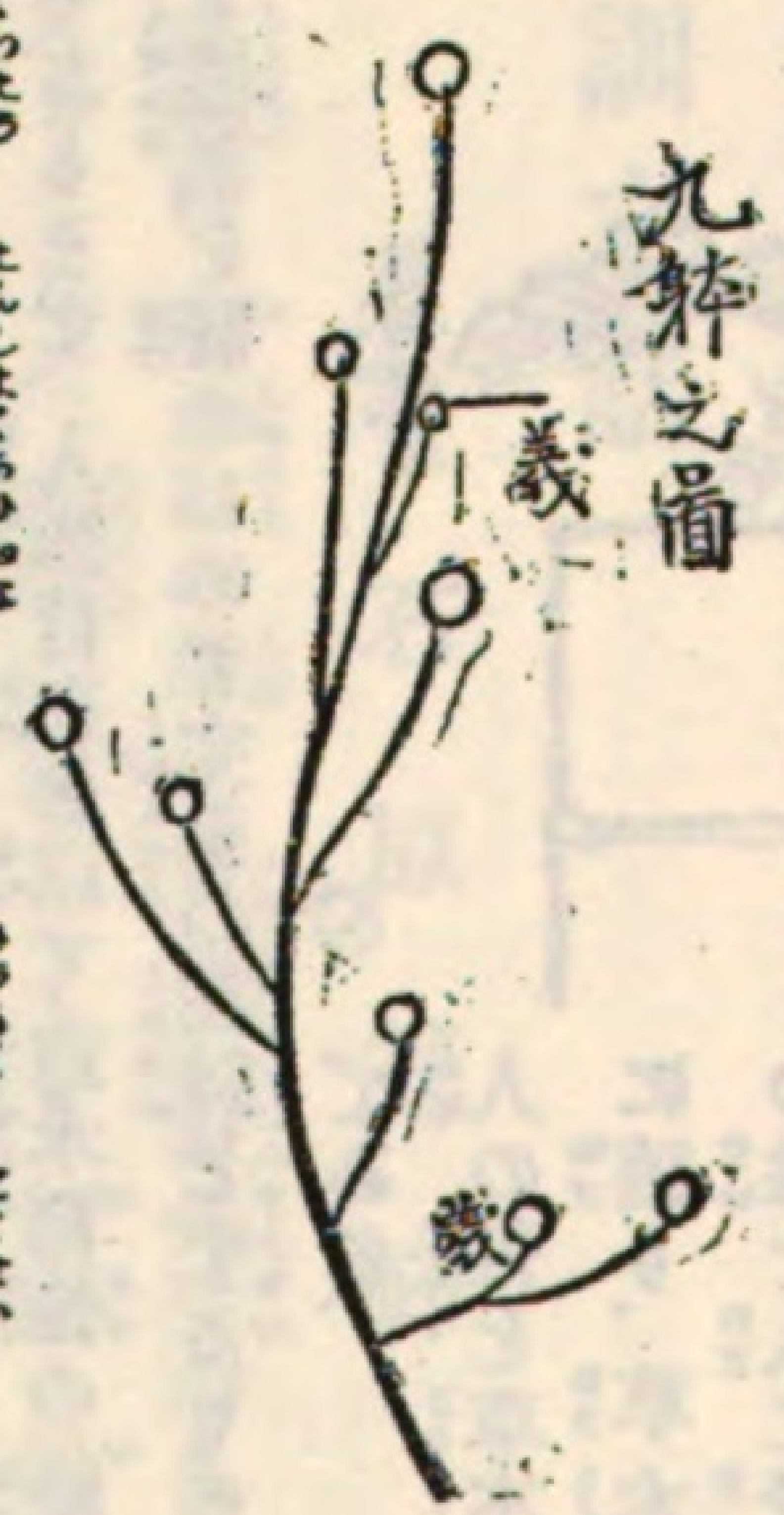


順序である、此七躰を煉習して枝を挿すにのぞみ更らに躊躇なきやうに成たらば九躰、十一躰等と枝、葉、花を増加することを、稽古して遂に四十九躰に至て増加の終りとするので有ります、

倨て枝數を増すといふは、七躰に潤飾を加へるので假令ば九躰に生けんと欲する時は忠の枝に義の枝を添へて忠義とするので又信の枝にも義の枝を副へて信義として九躰となる即ち圖を以て示せば左の如くなるのである、

又十一躰ならば禮の枝に義の枝を添へて禮義として智の枝に義を添て智義となすのであります、右示す通り段々枝數を増すに隨ひ七躰に七躰を具足せしめるのであります、九躰十一躰の例を以て他は推知あらんとを望む、

倨て前に示したる花躰の枝名を忠孝仁義等と稱することとは、生花の原理に基て號するので其原理とは如何といふに、千草萬木皆悉く寒暖風雨に催されて芽を發して花開き實を結ぶことと千載一律毫も時を違へず正直にして些の邪心なく年々歳々花葉の艶色相同じきことと草木の特性にして人間の及ぶ所では御座いません、然れども出生の地



を離るゝことと不能して而も意識、智能、禮義等は更らになきものであります、

これに反して人間は身意常に移動して定住の心更になしと雖も生れてより天然と禮儀を辨へて忠孝自ら備はることは人間の特性にして即ち人の性は善也といふ所以である、故に人にして萬一禮儀を缺く者あらば既に人界を脱したるものにて、古人の所謂鳥獸を去ること遠からずといふもの是れである、

然れば禮儀等は人間の長所で有て、草木如何に正直にして艶美なりといへども禮儀の點に至ては人間に及ばざるや遙遠てある、けれども人は常に諸慾のために一心を支配せられて邪道に入り易いが故に草木の正直を心眼に觀受して邪心を轉して正眞の道に趣き、又人の禮義を草木に移して、枝葉花の放姿に狂曲せし物をして禮義整然たらしむるのであります、人徳自在を以て草木自性の缺を補ひて益々盛美を發せしめて完全の花躰とするものである、



人の性を草木に譲り、草木の性を人に受けて彼此融和して正道に趣くの技藝、清淨の雅樂にして能所不二といふは此所以でございます、

智信を基礎として、上、忠孝を致して、中に禮義を備ふることは道德の大本てあるがゆへに花躰の技名に七道を配當して能生の人七道を守り、所生の花も七道を護りて、能所ともに非道不德に傾かざるやうにするが生花の所詮であります、

◎菊の生方

天長節の佳節を祝するには何しても菊によらなければなりません、此目出度菊も無雑作に挿しては何の風情なく又氣韻もなければ奉祝の微意を表するには何かもの足らざるやうに思はれるであらふ、これは花に魂を入れざるので即ち花が死で居るからてす、然るに此花を忠孝仁義禮智信の七道に配當して秩序整然たる花躰となすならば如何にも嬉しきことで、奉祝の微衷を表するに足ること丶信じます、さればこれより花に靈をいれるといふ即ち菊の生方を御話しいたしましやう、

菊にはいろ／＼種類があるけれども生ける時は大別して大輪、中輪、小輪の三種と致します先始に大輪の生方は前に有る樣です、

右の通り滿開中開莟と遣ひ分けて本葉といふを必ず用ひねばなりません此本葉といふは剛くして大きなる葉にて或は泥磨葉ともいひまして菊の地上に發生して居る時一番下にある葉にて葉末が少し黄色を帯びたる位の葉を撰むがよろしい、

何故斯る葉を遣ふかといふに是は出生によるものにて生花は總て花器を土地と見做してそれより出生したる草木と見ゆるやうに生成が自然の美であります、此故に信の枝を挿すには丈を低くするもんですから何しても根元を伐り捨てねばなりません、根元を切る時は本葉は無く成て末葉斗りとなります此末葉斗りに成た枝を前に遣ひますから花躰に向て本葉が更らに見へませぬ、本葉なくして枝、葉、花の出生する道理は無い、これに依て圖の通りに信の枝の前に本葉を遣ひて出生の美を顯すのであります、

養生訓之話

醫科大學　石原笠軒

養生訓と申す書物は、御承如の通り、貝原益軒先生がものせられのでありまして、此書の出てゝより以來と云ふものは、西洋の醫學が這入ッて來る迄の間、久しく世俗の衞生を指導致したので、誠に其功績は偉大なもの

であります、今日でも、生存してゐる古老の口には常に此養生訓が膾炙せられて仲々重寶がられてゐるのであります、私は、益軒先生が、學問に深く德望に高く、餘多當時の學者達から尊敬せらるゝの地位に在りて、尙はまた、當時の學者達は、派を立て、流を分ち、各其奉ずる所に據守して、相呼應し、相排擠するをこれ事とし、或は、徒らに經學の講演、訓詁の小事、詩句、文章の上下のみに務めて、これ足れりとせるに拘はらず、獨り、卓然として、流俗と見を異にし、世間一般の人に道德を敎へ、實行を誨へ、利用厚生てふことに力を盡されましたのは、深く、感服致して居ります、即ち、先生は、當時の所謂學問なるものゝほかに、種々世上に利益のある學術を硏究致されまして、これを平易に、通俗的に書き著はして、當時を利し後世の爲になる樣に謀られたのであります、私は、好んで益軒先生の著述を讀みました、就內養生訓は、吾人に關係のある書物でもありますし、永年、吾人の祖先等が衛生上の指南車と仰ぎてゐたものでもありますし、亦た今日の衛生にも大に關係があるのであるから、度々讀んで見たのであります、思ふに諸媛方は、今日の學問を修めらるゝ事であれば、別段必要の無いのに、古るい本を、一々、調べておいでになる閑も御座りますまい、依て、私は、玆に古るい本の事ではあるけれども、前申すやうな書物でありますから、短簡に此書に就きて、概略早わかりのする樣に、御話致しましやうと存じます、それに就きては先づ、

一、何時此書が出來たか

と云ふことを申しましやう、元來益軒先生は、今を去ること、凡そ二百七十年ばかり前で、明正天皇の御世、寛永七年十一月十四日に福岡城內に誕生致されましたので、當時は德川三代將軍家光公の治世でありまして、幕府の權勢が一番隆盛であッた時代で御座ります、益軒とは先生の號でありまして、名は、篤信と申されます、先生の父は名は利貞、號は寬齋と由して福岡藩の醫官即ち黑田侯の侍醫でありました、醫術にはいたく拔んでたる人であッて名國手の譽が高かッたのみならず、學問にもえらひ人でありました、益軒先生は、如斯學

者であッてまた醫者であッた人の家に生れられたのであります

益軒先生は、幼より學問を勵まれましたが、わけありて、學問の傍らに醫術にも精通致されました、けれども、先生の本職とも云ふべきは、やはり學問の方でありまして、後年、福岡藩の儒官に任ぜられたので御座ります、先生の傳記は此處に委しく述べることは出來ませんが、先生は、七十一歳になりて、官を辭せられ、其後は著述などに從事致し、丁度、正德四年の八月廿四日に年八十五で卒せられました、處で、養生訓は、正德三年の比に出來上りたので先生が、なくなられる前年の事で御座ります、それでは、どう云ふ由來で此書が出來たか、即ち、

二、養生訓の由來

は如何と云ふに、益軒先生は、幼少の時からして、躰質が虚弱であッて、あまり丈夫でなかッた、自分の家は醫者で且つ儒者であッたから、學問の方の勉強をする傍ら、醫術の方の研究をするのに便利をもッて居られたのであッた處で、先生が考へられまするのには、自分は身體が强壮で無い、これでは、學問も充分思ふ儘に出來ないかも知れぬ、それでは男子の目的を達する事が出來ない、なんでも醫術の研究をして、實地の養生法を考へ、これを自分の體に應用して、躰質の虚弱を補へ、一方の學問を遂げんければならぬのであると、

そこで、先生は、一方には學問、即ち當時の儒學を修めらるゝ傍ら、醫術を研究し、醫書を調べられまして、衛生に資となるべきふし〴〵は、其都度、一々これを抄錄致され、また他の人より聞かれたること、自分で經驗せられたことをも書き加へつゝおかれたので、段々とそれが積り〳〵て、終に一大册と成つたのであります、其時は、先生も最早老年の頃でありましたが、門弟をして、これを輯集せしめられまして、まとまつたる一つの書物に編成させられたのが即ち彼の『頤生輯要』と申す本で御座ります、

處で、此の『頤生輯要』はあまりの大部であるからして、ちよッと、直ぐに、世俗の人が、目を透ふしにくい、それ

で先生は、なるべく世間一般のだれにでも讀ませて、廣く、人世の益となる樣にしたいと云ふ主義でありまするよりして、『頤生輯要』から、實地衛生に、適切なる肝要なる所を拔萃して、更に一書と致されました、これが此の養生訓であります、『頤生輯要』を閱ますと

篤信もと稟氣薄弱にして、夭折を免るゝこと能はざるを恐る、故に幼より衛生の術に志あり、書を看るの際に、古人の言、養生に資たるもの有れば則ち隨て而して之を抄出す、其道義に合はざるものは捨て而して採らず、年を積むや久ふして、而して漸く數百條に至る、竊に謂ふ、頤生の道苟も備はる、自から覺ゆ、予の幸にして而して夭折を免れ、耄耋に至るものは、乃ち職として此れ之に由る也、

との序文があります、また養生訓の後記にも、

右にしるせし所は、古人の言をやはらげ、古人の意をうけておしひろめしなり、又、先輩にきける所多し、みづから試み、しるしある事は、臆說といへども、しるし侍りぬ、是養生の大意なり、其の條目の詳なる事は說きつくしがたし、保養の道に志あらん人は、多く古人の書をよんでしるべし、大意通じても、條目の詳なる事をしらざれば其の道を盡しがたし、愚生昔わかくして書を讀みし時、群書の內養生の術を說ける古語をあつめて門客にさずけ、其門類をわかたしむ、名づけて頤生輯要と云ふ、養生に志あらん人は、考へ見給ふべし、こゝにしるせしは其の要をとれるなり、

とあります、是に依りて本書の由來と及び其目的とする所が明かにわかりましようと存じます、是より進んで、本書の內容に就き、聊か御話を致しましよう、

三、總說

として、先づ、本書の大體に關して御話申さんに、德川幕府の治世に、學殖德望二つながら備はり、一方に於ては、人倫道德を說きて天下の道念を指導し、一方に於ては、濟人愛物、實踐躬行、利用厚生の主義によりて、或は本草なり或は農業稼穡の事なり、或は地理風俗にかゝはる事より、或は醫術衛生の事なりを研究して、これを

實行し得るやうに平易に說き明かしてまた餘蘊なく、實に當時の學者中には比倫なき、高き見識をもツて居られました益軒先生の養生訓に對して、おこがましき批評を加ふるのは、實に恐れ入ツたる次第ではあるけれども、之は時世の然らしむる處であツて、先生の著述を攻擊すればとて、決して先生の德を損ずるわけでは無いと、私は信じまする。私は、益軒先生が、實地の利用を重んじ、一般民衆の利益を謀らんことに力を盡されし事は、明治の今日に對比すれば、大變、筋合は違ふけれども、何となく、三田の福澤先生と似寄ツた所があるやうに感じます、勿論、時代が違ひ、性行が違へはするけれども、机上の空理と云ふことを排斥し、實行を目的とし、世間一般、上下の別なく、自分の意見を明かにし、了解せしめて、これを人世日常の事に實行せしむる樣に務められたと云ふのは能く似てゐるではありませんか、同じ主義の樣ではありませんか、如斯は、此處に關係ないことでありますけれど、此間なくなられました、福澤先生を聯想して愚感を述べたのです、是又、益軒先生の德を稱するわけの一ツでもありましやう。

閑話休題、養生訓は、敢て、大冊と稱するには至らず、熱心に讀む時は一夜を費せば、讀了する事が出來る位で、大凡そ、拾萬字ばかりのものであります、本書は、分かれて八卷となり、卷之一總論上、卷之二總論下、卷之三飮食上。卷之四飮食下飮酒飮茶煙草附愼色欲、卷之五五官二便洗浴、卷之六愼病擇醫、卷之七用藥、卷之八養老育幼鍼灸治、以上、

であります。昔の事であるからして、致方ない次第ではあるけれども、それでも、日常の養生に關しては、これで充分であツたのでしやう、此處で、所謂、養生とは果して如何なる意味であるか、今日の醫學上の見地からしてはどういふ風であらうかと申すに、今日醫學の方で衞生と申すは、主として人體の健康を謀り人體の强壯を期するのでありまして、其基づく處は、日新の科學であります、小にしては已れ一個としての身體、大にしては一家、一村一郡一縣より以て國家的の衞生を謀るのであります、養生訓の內にも衞生と云ふことが見へ

ますが、今日醫學上の衛生と云ふ事は西洋の字を譯したので、意義は明晰であります、それとこれとは、字に於ては同一であるけれども、其由て來る所を異にし且つ意味も一致しない所があります、さてまた養生と云ふことは、略ぼ今日で云ふ衛生に近い意味がありまして、普段健康である時には身體に氣を付けて病氣を惹き起さぬ樣にし、病氣となれば醫藥のほかに、適當の處置を講じて、回復を謀ると云ふので、又、病後の攝生等にも關係をもツてゐるのであります、しかし、おもに直接に一個人の身體ばかりを目的とするのでありまするから、今日の衛生と云ふ事に比すれば此點では少しく區域が廣いけれども、一個人の身體以外の事にはあまり關係せぬと云ふ點に至りては、少しく狹義であると申さんければなりません、（次號完結）

小兒の視覺

古川花子

人として女に生れた者は、誰でも母となつて、兒童を教育するの用意がなければならぬ、それに就いての修學の方法は、いろ〳〵有りましやうけれども、第一に意を注ぐべきものは、小兒に關する事柄であらふと思ふ、今私は茲に、小兒の視覺に就いて、知り得た所を述べて見たいと思ひます、それも悉しいことではなく、眞の大略でありますから、分らない所があらば、更に『兒童心理學』といふやうなものを、研究して下さるやう勸めます。

（一）光の感受性

兒童の事は何でも、推測して知るより外に仕方がありません、で、フライエルと云ふ方が小兒が、生れて、僅かに五分間ほど經ちました時に、薄暗き窓の方へ向はしましたが、格別光を感ずるといふやうな樣子も見えません、その眼は何うかと云ふに、或は閉ぢたり、或は開いたりして、上の瞼と下の瞼との間が、唯の五ミリメートルを隔てゝ居る計りでありました。けれども第一日の終に至らざる前に、その兒を窓の方に向はしめ、手で以て可愛らしい眼を蔽ぎましたら、その顏色が俄かに

變りました、ですから、此の時は小兒は早や微かな光を認めたか、若しくば感じて居たと云ふことは、疑ひを容れません、而してその相貌から判して見まするど、愉快を感じて居たやうに思はれました、それを何うかと申すに、その面を蔽ふた時は、以前よりは少しく不滿の色がありました、第二日には燭火を近づけまするど、小兒は直ぐに兩眼を閉ぢて仕舞ひました。

第六日、第七日に到りますれば、適度の光を好むものゝやうです、即ち一旦窓に面した後、該處を去りまして、他に對ふと云ふと、度々その頭を曩の處へ向けると云ふのがその立派な證據です、又九日十日になると、その睡醒後、直ちに燭火を近づけるときは、強く頭を回らすけれども、霎時經つと直ぐに元の方向に對いて、燭火を眺むべく眼を開きます、されば睡より醒めました時には、平生よりも、一層ひどく光を感ずることは、私共が暗黑な場所から、明るい所へ出て、一時目が茫として晦むことのあるのと一緒でしやう。

又十一日に至れば、半メートルの處に在る燭火、或は光彩ある物躰を見て、愉快を感じるものゝやうに思はれます。フライエル氏の兒童、通常の日光に於いて、瞳孔を縮小することと成人よりも甚しく、大凡、その直徑二ミリメートルであつた相ですが、雪又は夏の炎天の雲のやうな、炫然と輝いた物躰を見まして、上と下との兩瞼を縮少することも、成人よりは一層甚しかつたと申します。ところが段々と大きくなつて、二月も經ちまして、眼界に現はれた光輝ある物躰を見て、何遍も〳〵歡聲を發ち、または鮮やかな彩色を施した物躰については、容易に兒童の注意を喚び起すことが出來たからです、又第十月になりますればもう、生れてから三百日も經つたのですから、餘程よく分るやうになり、洋燈に火を點けるのを見て喜び、又は日の光りや、光輝のある何かの物躰を見て、にこ〳〵と笑ふやうになります。

今かきましたフライエル氏の兒童のことは、西洋の『心理學』の書物に書いてあつたのですが、實際小兒は自身に話しをして呉れませぬから、何うしても是れ等の

事實によつて、歸納的にその通有せる感受性を論定する外に、仕方がないだらうと思はれます。

（二）眼瞼の運動

前には光の感受性のことに就いて、その實例をわけましたが、今度は眼瞼の運動といふことに就いて、少々申し上げ度いと思ひます。そも〱新生兒は、眠つて居ない時でも、その眼を開いて居ることは少ないのであります、又よしや之を開く時にしても、概して奇異なる不均一を呈します、即ち言葉を換へて申しましやうならば、一眼を開いて居つても、他の一眼は閉づると云ふ風に、兩眼を一緒に動かしませぬ。併し第十一日に到りまするると、交々開閉して居ります、その後一月の間と云ふものは、同一の時に、左と右と同一に眼を開きまするけれども、兩瞼の間の廣さは、何時でも揃つては居りませぬ、又兩眼を閉づる時にも、その上瞼の運動は、右と左と同時でない場合が多いやうに思はれました。で、第十五週になりまするると、視線を下の方に注ぎながら、眼瞼を上ぐることが度々でありまして、それが爲に懸念あるが如き相貌を致します。又第三月に至るの前に於いては、眼瞼は下視する際正しく瞳孔に伴つて動くやうになります、けれども第三月の末でも、まだ矢張上方を視る時に、これと共に眼瞼の上ることと十分でありません。あの病氣を患らふて居る兒童が、所謂眼球を轉じまするとき、瞳孔は上に向ひながら、その眼瞼は下に降りまして、唯々もと白色の硬膜といふもの許りが兩瞼の間に見ゆると云ふが如きは、右の不規則甚しきに到つたものであります。

又兒童の前額は何うである乎と云ふに、野猿や、獼猴なんど丶同じく、初日には非常な横皺を認めるけれども第三月の末になりますれば、上方を視ると共に、之を顰蹙することは、殆んどないやうになります、第九十八日目からは、フライエル氏の童子は、上視の際その眉を顰めることが出來たが、第九月末よりは、初めてその正しく行はれて居るのを見たと云ふ事です。が、これ等は皆一種の協働運動と申しまして、生産後に習ひ得たものに相違ありません。

小兒がその視線を下の方に注ぐと同時に、上瞼を擧げまするとは、第一日から已に業に存じて居ります、唯々それは一方許りを行ふことは出來ないけれども、眼を上方に向くることは、上瞼を擧ぐることなくして行はるゝのは、實際に見とめ得た所である、故に眼球と上瞼とを同時に、擧げて起す運動は、出生後に習得したものであつて、生來有する所の運動、即ち上瞼と眼球との獨立の運動は、暫時で消え失せて了ひますが、これは大人では出來ないことであります。

彼の兒童が驚愕した場合におきまして、眼瞼を速やかに開閉する理由の如きも、未だ兒童が危難の觀念を有せぬにしても、兎に角急激な印象を與へまして、驚愕に似て居る一種の變化をその内部に與ふることは明白な事實であらうと思はれます。

又兒童が始めて叫號したり、後日飢餓の如き不快の情より啼泣します時は、眼を緊しく閉ぢまするか、或は兩瞼間を著しく縮少することを常とし まするが、これは皆その不快なる徴候であらうと、我共は考へまする。

（三）　眼の運動

眼の運動に就きましては、本然論と、經濟論と、二派に分れて喧しい議論も御座いましたが、例のフライエル氏の兒童は、第一日に於きましては、既にその兩眼を同時に左右に動かし、それと同時に或はその頭を轉じたり、又は轉じなかつたりしたことが、恰度大人のやうであつたが、最初の六日間に屢々反復して、精密に研究して見ると、その兩眼を同時に左と右とに轉ずる運動は、大人のやうに一偏に運動するものでないと云ふことを發見した、第十日には顏貌不正、眉間の攣蹙、眼瞼の運動と同時に、諸種の眼の整はない所の運動を見たのである、そして特に注意すべきことは、兩眼を輳合し、又は眇視の狀を呈すること、是れであります。而して第三週間の始めになりますると、輳合や偏視の度合は、最も始めの時のやうに甚くはありません けれども、猶ほ明白に眼の不整運動を見ることが出來まする。

これはフライエルと云ふ方の兒童のことに就いて云ふ

たのでありますが、他の或る兒童の如きは、第四日までは、不協動の運動のみを存じ、又第十日までは、十分に凝視することが出來ないものがありました相です。併しこれ等は皆、その兒童が醒起、即ち眠つて居ないときの情狀でありまするか、兒童の睡眠して居まするときは、第六十日迄は、その眼を半ば開いて、鼾の聲を絶つことなくして、頗る敏い、捷こい不整運動をすることが屢ありました、而して其の第三日に達しました時は、眼の不整運動を見ることがないけれども、睡眠中には時々之を見るのみならず、第九月に至りても、往々にして微少なる不協働あり、之になしまして、醒起して居るときには、第九月に於いては、一インチ、若しくば貳インチを隔てまして、兒童の鼻の前に持せし物躰に對して、たやすく兩眼を輳合して來ることが出來ました。かくて第十月に至り、視線の輳合、一時攪亂せられ、極めて僅少の眇視を見まするが、恁くの如き異常の作用は戸外で遠方を見ることを慣はしめましたのに、數週間で消滅して了ひ、それより後と申すものは、全て合規の協働運動を連續したと云ひます。

まだ此の外面白いことも澤山にありまするが、皆生理學・心理學の小難かしい議論に亘りまするから、略することゝしまする、併し、視覺と云ふことは、兒童のみならず何んな成人でも、最も注意を要することでありますから、讀者諸君は、宜しく此の他に、觀眺の方向、色の辨別などに就いて研究し、他日玉のやうな子供を生んだときに、立派に完全な敎育の出來るやうにせらるゝのは、寔に望ましいことで御座います。

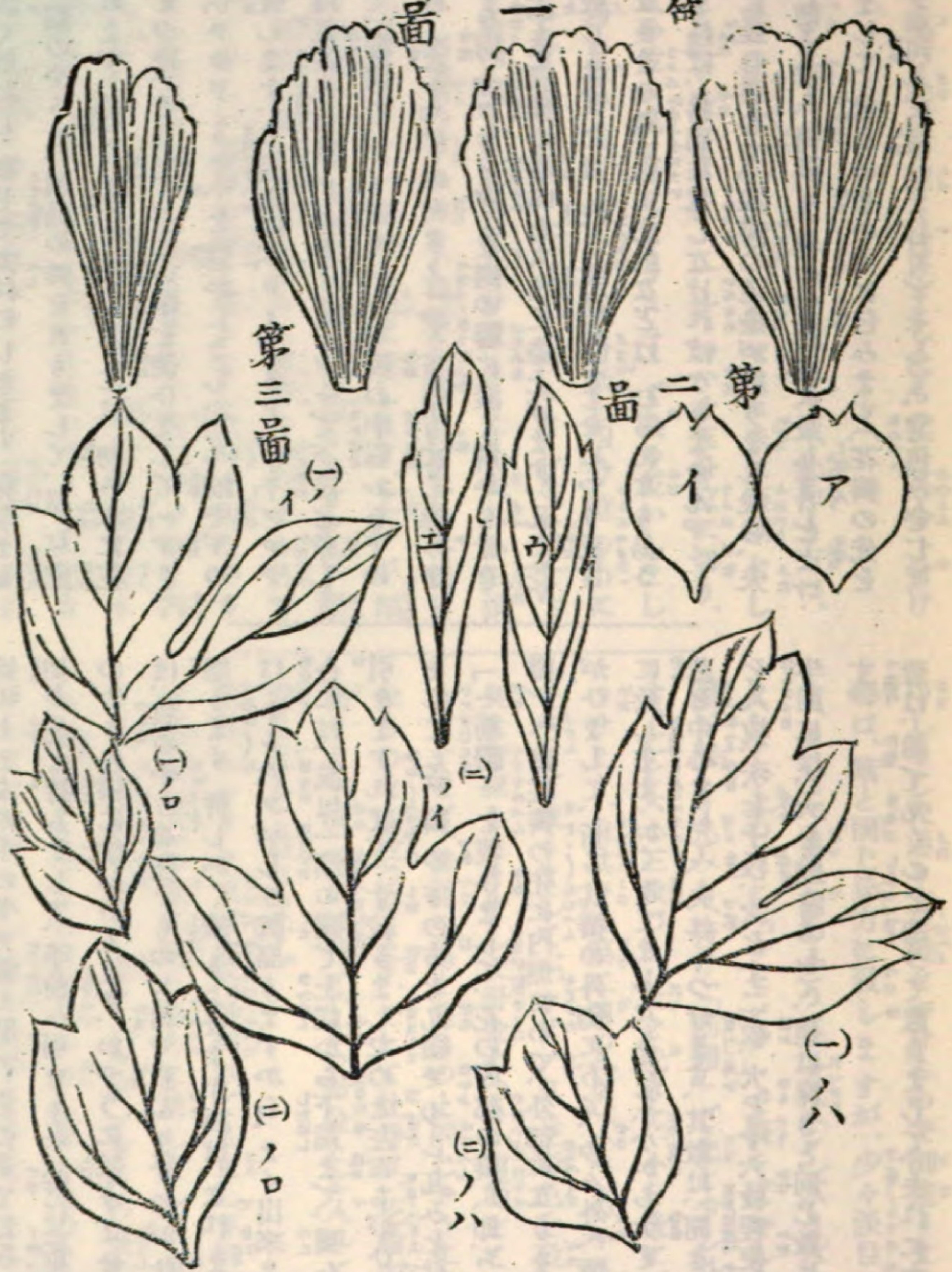
造花科

牡丹の造方

女子職業學校職員　三好幸子述

牡丹の花の色には、白、淡紅、海老茶など色々御座ります、之を造りますに、用布は、寒冷紗も宜しう御座りますが、絖なれば尚更美しう御座ります、先、花瓣の染め方から申上ます

寒冷紗でも、絖でも、其白の儘、竹シンシに張りまして、


第一圖
第二圖
ア
イ
第三圖
(一)ノイ
エ
ウ
(二)ノイ
(一)ノロ
(二)ノロ
(一)ノハ
(二)ノハ

晒膠を淡く解かし、刷毛で夫れにしきます、乾きましたら、第一圖のやうに、四通の瓣をきりまして、望む處る色に染めます、即ち白色に致すますには、初め水に花瓣の全躰をづけ、とり出し、太い筆を使ひまして、「グリーン」、と「ヲウラミン」、を解かしましたで、液で下の方を彩色致します、又淡紅は、「ローダミン」、と「フロクシン」で、海老茶色は淡い「ローダミン」て下染を致し置きまして、後濃い「ローダミン」で瓣の中程から下の方まで染め、次に「ピクレット」て下の方丈を染めます、夫れから尙「マセンダ」を別の器に濃く解かし置きまして、其中に花瓣の全躰を入れて染上げます、凡て花瓣を彩色致しますには、成る丈極付きませぬやう致さなければなりませぬ、殊に此色などは、むらになり易う御座りますれば、格別注意しなければなりません。

右のやうに致しまして、花瓣の色染が終りましたら、夫れを乾かしまして、何れも表の方を内に致しまして二つに折りまして、軟かい布の内に包みます(花瓣の先を右に、折目を向ふに致しまして)そして、其包みをして瓣の上を左の手の平で強く壓へ、右の手で包みをした切の先を持ちまして、手前へ引きます時は花瓣に實物のやうに縱に皺がありますかやうに絞りよせますには、机のやうな堅いもの丶角で致しますのが仕易う御座ります、併しかく絞りよせますのは、なれません內は、中々六ツかしう御座りますから、よく出來ません場合には、或は一筋の鏝で上端から下端まて、殘らず筋を引きますれば、一寸絞りましたのと左程ちがひません、そして各瓣の下の方を丸鏝で少し丸みを付け、尙「一筋鏝」を使ひまして、花の內部の瓣(即ち小さき瓣)へは花瓣の先に內側にあて、外部になりますに從がひまして、折々其瓣の外側にあて、少々外へ通るやうに致します、かくあてましたものを、小から大と段々に、蕊を中心として、夫れへつけます、其數は、開きには、小を八枚、次を十枚、次を十二枚、大を十六枚程使ひます、半開には、大を除きまして、他は開きと同じ數に致します。

蕾は、綿で丸く心を造つて置きまして、夫れに中位の瓣

を三枚下部の丸みを深く付けましたものを其心へ付けます、
蕊は、花瓣を作る前に、こしらへ置きます、此作り方は、「カタン糸」の極太いのか、又は白レイス糸に姫糊をしいて、糸を堅く致しまして、一寸か一寸五分位に切り、其先の五分位の處に、「ヲウラミニ」で染め乾かしました、米の粉を付けます、又一方に、青紙を四分位の巾に切りましたものを板の上に張り、のりをしき、其上に、前の糸を列べ程よい長さに付け置きます、夫れから張りつけました糸の下の方を、花瓣と同じ色に、(上部を白く殘し置きまして)ぼかし染に致します、之れが即ち雄蕊で御座ります、又中心の雌蕊を造りますには、雁皮紙か、又は竹紙を淡青に染め(花瓣の如何なる色でもかまひません)薔薇の蕾を造りました時と同じやうに致しましたものを三ッ造りまして、其の合せ目を内に致して、三ッを一所に針金で括り、其上に、前に造りました紙にはりつけましたる糸をまきつけます、(開きには二巻き、半開には一巻ばかり)そして其上に、前に申しました通り、花瓣をつけるので御座ります。

蕚は、葉と同じ染方に致しますが、少々淡目に染上ます、そして、第二圖のやうに、大小(ア)、(イ)二通り切りまして、上の方を「マセンダ」で淡くぼかしまして、丸鏝で深く丸みを、付け、「筋鏝」で先を少し外へ返します、之を大小三枚づゝ、大を先きに、小を後に、都合六枚つけます、尚其下に第二圖の(ウ)、(エ)のやうな形を同じ色布で截りまして、「マゼンタ」で彩色を致し、裏の中央に青紙をまきました針金をつけ、尚筋をとり、臘をしきますなど、普通の葉を造るのと同じやうに致しましたものを六枚つけます、そして牡丹は、花輪が大きう御座ります故、莖には竹と、太い針金とを入れて青紙で下巻を致して置きます。

葉は、キヤリコ、又は寒冷紗何れでも宜しう御座りますが、矢張普通の葉と同じ染方に致しまして、第三圖のやうに、六稀程に切り、裏を「マセンタ」の淡い液でぼかし、青紙でまきました針金の少し太いものを夫れにつけ、「ピンセット」で眞中の筋をとりまして、尚「筋鏝」、

「中の瓣鬘」で葉筋をだし、後臘をしき置きます、夫れから之をまとめますに、先づ、(一)の(イ)の葉を上に致しまして葉の下の針金三四分の所を青紙でまきおき、又(一)の(ハ)は右手に、(一)の(ロ)を左手に、丁度薔薇の葉をまとめました時のやうに、左右より一所にまとめます、又(二)の組の葉も、(一)のものと同じやうにまとめまして、次に此二組を一所に致します、即ち(一)の組の三枚まとまりましたもの丶下を二寸位太く青紙でまきまして、其所へ左、右より(二)の組の三枚まとまりましたものを、葉柄一寸五六分出してまとめます、夫故かく致しましたものは、都合九枚の小き葉を一つに致したので御座ります、又鉢植などに致します節には、此九枚まとめましたものを、上に致しまして、左右から矢張九枚纒めましたものを程よき形にだしまして、都合二十七枚の葉に作りますのも宜しう御座ります。

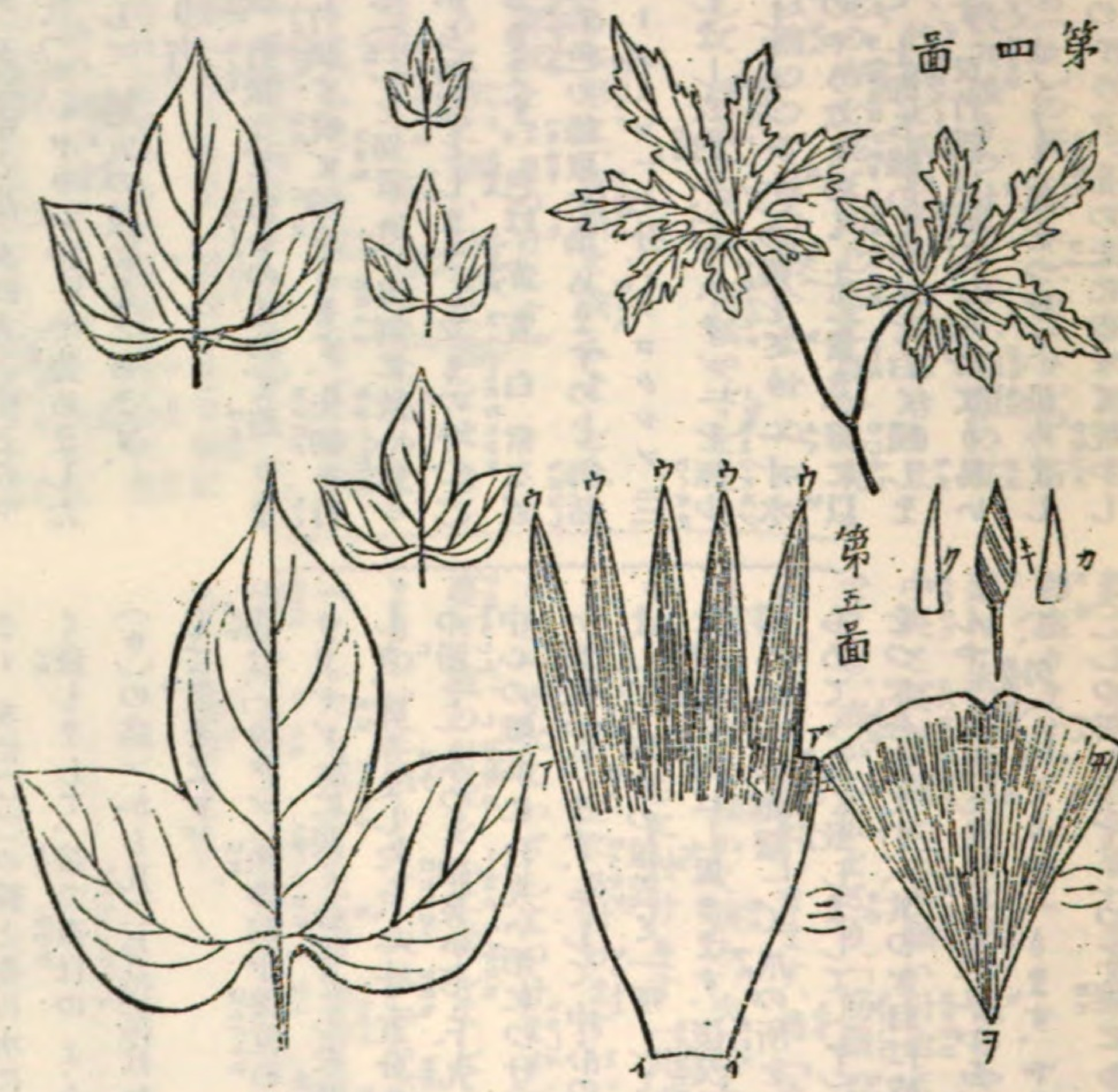
かやうに致しまして、蕾、花共に上の方には、三枚葉のまとまりましたもの、次には五枚、次に根元の方には九枚纒め(或は之れよりも大きなものを付け)といふ風に、程よく纒め、餘り丈を長くせず、軸の細過きませぬやう注意してまとめるので御座ります。

總體出來上りますれば、筆の爲め、花の汚れませぬやう、「マゼンタ」の淡い液で莖をぼかします(節のあります所丈は濃く)尚乾きました上、姫糊を淡目に致して莖全體にぬり、光澤を出すので御座ります

紅葉の造り方

先づ寒冷紗に竹シンシを張り。姫糊を當り鉢にてよくすり、よい加減にゆるめましたものを、裏表からしき乾かします、之れで實物の葉之通り大小三通りほど切り置きます、又一方繪の具皿に「チウラミン」を濃く、「ヨーシン」を淡く、「スカレツト」を濃く、何れも湯でよく解かし置きまして、偖其切り置きました葉をとり、始め「オウラミン」の液に一寸つけ丶、新聞紙のやうなもの丶上にのせ、次は「ヨーシン」の液を筆につけまして、「チウラミン」の黄色の所を、少し殘して染め、次に「スカレツト」の筆てぼかします、大の葉は、かく致しました上に又「マセンダ」の濃い液を眞中に一寸た

らしてぼかします時は少し黒みづきまして、實物の樣に見へます、又極小の葉は、最初「チウラミン」の中へ「グリーン」を少し合せました液で染め、夫れから後、「ヨーシン」と「スカレツト」をかけまして、青い所を殘しましたのも又宜しう御座ります、皆かやうの工合に出來上りましたら、別に淡色の青紙に「マゼンタ」をしいた紙をまきました細い針金で其葉



第四圖

第五圖

柄をこしらへ、表から「ピンセツト」の先て細く筋をとり、そして筋鏝て實物にならひまして、葉筋をつけ、裏から「小の瓣鏝」をあて、臘をしきます、後其葉の柄に前の赤い紙を凡一寸位の所まで捲き、其終りに小さな玉の形をこしらへます(尤も小の葉は七八分の處で宜しう御座ります)即ち第四圖のやうに致します、夫れから又同じ紙て、葉を二枚づゝ纏

めます、(例へは大と大、又は中と小、又は大と中とのやうに)纒まりましたら、「カシドラベル」で染めました紙で、實物に見合せまして、適宜の枝にまとめます、

朝顔の造り方

朝顔の花は、寒冷紗、絖、竹紙など色々のもので造りますが、一番宜しいのは竹紙と絖で御座ります、先初め竹紙で第五圖の(一)の形(五枚)を切置き、又別に絖へ竹シンシを張りまして裏から晒膠をしきましたもので(二)のやうな形をもきりおきます。色は、赤、黃、白、紫など色々御座りますが、先赤色の縁取に染めますのを御話致します、一器に「ローダミン」七分、「フロクシン」三分の割合で湯にとかしました內へ、「リスリン」を極少々入れて置きます、そして先づ(一)の瓣をとり、一寸水に浸しまして新聞紙のやうなものゝ上に置き、筆に以前の染液をつけまして、上即ち縁の所丈を白く殘しまして其下をぼかします、又竹紙は誠にむらになり易いもので御座りますから、よくよく氣をつけて、染めましたものは、一々唐縮緬のやうな、布の上にのせて乾かします、次に(二)の瓣と初め水に一寸入れ、前の液をうすく致しまして、筆で布目のよりませぬやう、爪(即ち(ウ)の處)から凡二分位迄ぼかし下の方は白の儘に致して置きます。

蕊は、「カタン」糸の四十番位のものに、「グリーン」「ヲウラシン」に淡く合せました液で解かしました姫糊をしき、乾きましたら、一寸五分位の長さにきり、先へ米の粉を一本づゝ細長い形と、丸ひ形とに付けます、即ち中心の雌蕊には丸い形につけ、周圍の雄蕊五本には長い形につけます、そして中心の雌蕊は少し短かく致しまして、五本の雄蕊と一所して細い針金で結び、夫れを眞直に延ばし置きます、偖又前に染めました(二)の瓣へ「中の瓣鏝」で爪の所をのぞき、下の方を兩側からあてゝ丸く致しまして、(ア)と(ア)と、(イ)と(イ)とをつぎ合せます、(其つぎ目は成べく細く目にたちませんやうに致しまして)夫れから、同じ鏝で、上の爪の所へ、外へ反りかへります、やうあておきます、又別に(一)の瓣を手て二つに縦におりまして、其先へ濕氣を

一寸合ませて、少し延ばします、そして其兩側に姫糊を付けまして爪の先、即ち(ウ)の所へ(エ)、の(チ)の所へ(チ)をあて、一杯に五枚共張りつけまして、朝顔の花の形になります、又別に、竹紙を爪の所丈の形にきりまして、下を白く殘して、先の方を花と同じ色にぼかし乾かします、之れを五枚、以前のつぎ目の見へませぬやう、其上にはりつけまして、後蕊を入れ、青紙で下をまきます。

蕚は、第五圖の(カ)のやうな形に、青紙を鋏みまして、花のもとへ五枚つけ、又青紙をまきつけます。

蕾は、第五圖の(キ)のやうな形に細い針金に綿をまきまして、姫糊でかためます、そして花と同じ色に染めました竹紙で、全躰をまきくるみまして乾かします、又別に竹紙を「チウラミン」の染液で染めましたものを(ク)の形にきりきして蕾の先へ付けます、(其付けます時には蕾の先が左の方へよぢれ居るやうに見ゆる工合に致すのですから、蕾の赤い所の細く殘りますやう、先を左の方へ向けて付けます) 後蕚を五枚つけ、尚其下を青紙でまきます、此蕾は勿論大小取交ぜ造る方が宜しう御座ります。

葉は、大小五通りほど第六圖のやうな形に鋏みまして、中央と其兩側と三本細い針金を付けまして、下を青紙でまき、表から筋をとり、「筋鏝」をあて、裏から「中の瓣鏝」をあて、蠟をしきます、後「すが糸」を極淡青に染めましたのを細かく鋏み、夫れを表裏に一所になりませぬやう、平らに付けます(此すが糸は只葉ばかりでなく、蔓、蕚などにも付けますが、其節には葉なり、蔓なりと一寸火にかざしてつけます)

蔓は、鐵の針金を心に致しまして、之れに青紙を二回程まきつけて造ります、夫れから之れを二三寸もこしらへましたら極小さな葉を最初に付け、次に中の葉、或は蕾など工合よく實物を手本と致しまして全躰とまとめるので御座ります。

裁縫科

女子職業學校教員　金子銅子述

丸帯

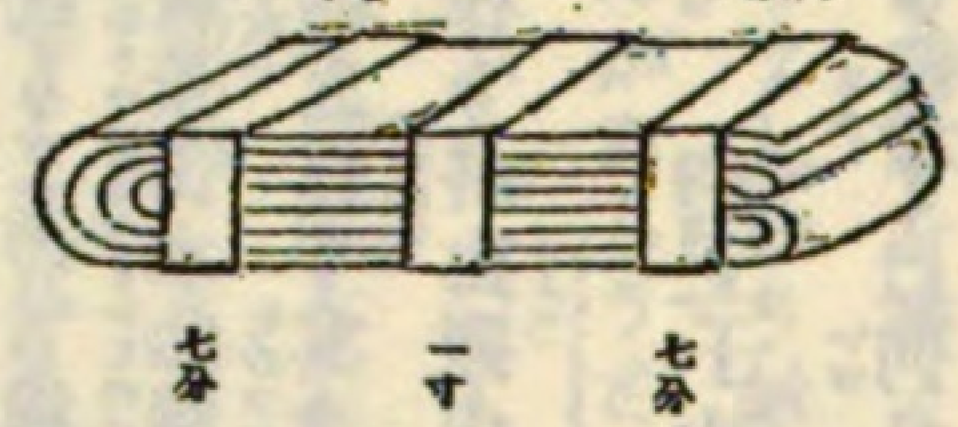
これは、前に鯨帯の縫ひ方を、お話し致しましたから、布の伸び縮みを伸し、ヒノシをかけ、布をよく揃へて、置きますことなどは、能く御承知のこと故委しくは、申上げませぬ、心もやはり、前の通りに霧を吹き、布目を正しくして、棒に巻き置きます、さて仕度が出來ましたらば、帯を取り中を表にして、曲りのなき様に、二つに折り、布のねじれぬ様に、能く注意して、躾をかけ、布の動かぬ様にとめ、巾を當り、一針抜きに縫ひます、しかし中程に、帯巾と同様の寸法に、縫ひ殘しをなし置きます、竪の側が總躰縫ひ終りましたらば、鏝をかけて、能く伸し、兩端を返し縫ひに致しまして、鯨帯の通りに、縫ひ込を折り、綴じ付け、心を取りまして、二枚とも片端を、曲りの無き様に、切りとり一枚は帯巾より、五厘せまき巾に、標を付けて、切ります、他の一枚は縫ひ込たけ、狹き巾に切りまして、二枚重ねて綴じ付け、一方に綿を引き、帯の布を伸し、其上に綿のある方を、表の切に付く様に置き、伸び縮みのなき様にして、待針を打ち、綴じ付けて、其上に又綿を布くことは、鯨帯にて、申しました通りてございます、其れより、引き返へし、平にして工合を能くし、躾をかけ、縫ひ殘しを、絎けまして、疊み付け、前に鯨帯を綴じました様に致して、壓を置き、仕上げを致します、一寸御斷り致しますが、帯の縫ひ方を、一針抜きでなく、返し縫ひに、することもあります、其時は縫ひ込を、片方に返へさず、兩開きに、致すのてございます、

男帯

女の鯨帯、丸帯などにて、お話し致しました通り、心はやはり、霧を吹き、能く布目を正して、棒に巻き置きます、次に帯を取りまして、布の曲りを直し、ヒノシをかけ、中に表を入れて、山を正しく折り、(片側づゝ織方色合などが、ちがうときは、殊更に注意して、山を正しく折らなければ、見にくゝございます)、巾の標を付け、縫

ひ込を折り、(元二つ折りに、致しましたとき、表が中になつてをりますから、外が裏でございます)、此裏の方に向けて、折ります)、布團の樣な物の上に、載せて、又其上に紙を敷き、縫ひ込の、折目だけに、鏝をかけますこれて、仕度が、出來ましたから兩端を、布目の曲らぬ樣に、返し針にて、帶の巾だけ、(縫ひ込だけ、殘して)、

第三十一圖



縫ひます、次に霧を吹き伸して置きました、心を取り端を眞直に切り取り、帶巾より五厘引きました寸法に標を付けます、此標を付け終りましたらばその所より、二つ折に致します、次に一枚の方は縫ひ込だけ、巾を狹く切り取り折を能く付けて、綿を引き、帶の上に載せ、心のつれぬ樣に待針を打ち、端にまいりましたら、兩方とも一枚の心は、表丈けと同樣に致し、一枚は縫込だけ短く切り取りまして、能く綴じ付け、引き返へし、向ひになる側に、心をクルミ絎る計りに致し、躾にて止め置きまして、筋けます、此の絎け方は極々細き針目に致しまして、絎け上げます、上等の仕立になりますと、布目を二筋位スクウのでございます、又心は、表の地の厚きものになりますれば、二枚共に縫ひ込だけ、丈も巾も狹く致し割り糸か、さなくば、極く細き糸にて、表に見へぬ樣に細く綴じ付けますのて、ございます、出來上りました後は、第三十一圖の樣に疊み、西のうちの樣な紙を、一寸巾のもの一枚、(之れが中央になり)七分巾のもの二枚切りまして、(此二枚は兩端の分)帶の疊目の間に、挾みまして、圖の通りに巻き、裏の方にて粘にて止めますのでございます、

書法指南

野口小蘋

◎こゝにゑがき出す虫は轡むしなり總て虫をゑがくにはかしらよりはじめまへの足よりうしろの足背翅腹と順にゑがくべし虫のとまりたる落葉は梧桐なり虫梧桐ともに鈎勒法を以て作る虫は活物なればむづかし

◎山茶花は先づ正面の花より書きはじめ花のかたち成りて後花のほとりの四葉を作り而てのち上の枝葉及び

半あらわれたる莟をゑがき下の小枝を添て葉と蕾を作るべし花心は最終に書くがよろし
◎楓樹小禽圖此鳥は四十雀なり鳥のゑがきかたは前號にあらかじめ説置たり此鳥の畫きかたも一に嘴二に眼三に背四に翼五に腹六に尾七に足と順次にゑがくべし鳥成りてのち楓樹の幹枝葉を作るべし
◎秋景山水此圖は前の高き山よりゑがきはじめ頂上の樹を作り其次に中景の屋宇ある邊を畫き平遠の主山を作り終に遠山ゑがくかた順なり

習字法心得

小野鵞堂

行と草とは何れも隷書や楷書よりも、早く間に合ふといふ事が主になつて居りますから、古來行の手本として傳はつて居るものにも多少草書が交つて見える、又草の手本にも多少行書が交つて見えます、これは今人でも同じ事で、實際中には草行何れへも通用してゐる文字がある、そこで私の考へますのに、普通習字は速成を主とするもの故、行草を混同して誰にも讀み易い限りは草書を取り、草にして讀み難い文字は行書に從ふといふやうにして、彼是混和する事にしたならば、習ふにも習ひやすく、讀むにも讀みやすく、覺えるにも覺えやすい事と存じます、今此行と草とを一躰としたものを假りに混和躰と名づけましやう、(古來諸躰を混同して書くことを破躰と稱へ、上手の人が興に乘じて時に試むる事があります、諸躰を混和するといふ事は勿論上手でなければ出來ませぬ私のいふのは行草のみです)扱かやうに致せば、行と草と區別して習ふには及ばぬ事となり、至極ちか道だらうと存じます、私は近來手紙の文など手本に認むる時は、此意味で筆を執て居ります、が未だ未熟でよく混和しないので、苦しんで居ます、右はほんの一家言で何の御參考にも成らないのですが序ですから一言して置きます、

茲に亦かなの變躰の事につき、御咄し志たい一條がある、近來女子の作文や手紙にかなの變躰が多くて讀みかぬる字が有つて困るといふ事で、諸先生がたからおまへなどが其製造元であるから、少し注意してもらひ

たいと、往々お小言を頂戴致します、これは自分ながら幾分の責任があらうとも存じますから近頃大に注意してゐます、但し手本を書く時の心算では、古人の歌文を讀むにも式紙や短冊を書くにも、變躰を知らねば大に差支があるものですから、必要の事だと信じて居るからして、隨分變躰を書く事がある、これらが幾分の媒介物でもありましやう歟、他の先生にも恐らくかやうの御考への方があらうと思ひます、これは畢竟われ〱の側からいふと、文字の書き方を敎ふるのが趣旨であるから、どうも變躰をこと〲く廢するわけには參りませぬ、其應用のしかたを注意するは、却て我々以外の先生にあらうと思ひます、併しながら書といひ文といひ歌といひ、皆關聯して居るものですから、職分外の事ですが御注意迄に少し申述べましやう、全躰文とか歌とかいへば、先生の斧正を請ふか、他に送るか、又た清書して自ら樂しむかの三點です、其斧正を請ふものは最も正しく最も讀みやすく、するのが肝要ですから、成るべく變躰を用ひぬやうにせねばなりませぬ、又他に送るものは、先方の人により取捨するのが肝要ですから、隨て其書きぶりをも考へねばなりませぬ、自ら樂しむものに至ては、思ふまゝに書きなして、少しも他に斟酌するには及ばないのです、元來文字といふものは言語の使者であるから、どこ迄も讀みやすいといふ事を旨としなくてはなりませぬ、其讀みやすい範圍內で、走り書もし、變化もして人をも慰め、みづからも樂しむやうに致したいのです、然るを讀み難き迄に走り書きするを健筆といひ、字躰の崩れて讀みにくいのを飛動の勢ありなどいふは、習字上の一弊といふべきです、又筆の運びが自在になると、兎角自分流といふものが出て、我しらず段々くづれて來るものですから、かなの變躰などはどこまで變躰になるか分りませぬ、自分流で崩れて讀めぬやうになつたのを直に敎へし人の罪のやうに言はれては誠に心外の至りです、されば人の書きぶりを見て、我が書きふりを直すやうに自ら正して人にも及ぼすやうに各自銘々平常の御注意が尤も肝腎であらうと考へます。

圖案（刺繡用）



菊

武村耕靄女史新案

紅葉



武村耕靄女史新案

講義

百人一首講義（十一）

文學士　大町桂月

八十五、俊惠法師

夜もすがら物思ふ頃は明けやらで、閨の隙さへつれなかりけり。

○夜もすがらは夜通し也。○隙はすき間也。○つれなしは、まゝならずして、我につらきと也。○この歌は、戀の歌にて、終夜人を待ち明かしたる時の煩悶をよめる也。戀人を待てども來らず、今に來るか、來らぬか、物思ひに堪へずして胸はもゆるばかり、じれつたいらや、苦しいやら、いつそ早く夜があければよいのに、あいにく苦しむ時は、時の經つともおそく、幾度戸の透間を見たれど、白うさうにもなし。氣の利かぬ透間かなとの意也。○戀人を怨むより移りて夜の明けぬを怨み、更に轉じて戸の透間を怨む。じれつたさのあまりに當りちらす。透間までがつれないといふに。切なる情もあらはれて、面白きうた也。

八十六、西行法師

嘆けとて、月やは物をおもはする、かこち顏なる我淚かな。

○「月やは物を思はする」は、「月が物を思すや、否月は決して物を思はせやうとして照つて居るにあらぬに」の意也。○「かこつ」は嘆ちなげくの意もあれど、こゝの「かこつ」は、託言つくるの意也。即ち「かこち顏」は、「かこつけ顏」にて、「月のせいて悲しませるのだと罪を月にきせるやうな樣子で」也。○これは月前戀といふ題にてよみたる歌也。よく考へて見れば、月が歎けとて、照つて居るてはないが、月に向つては何となく淚がこぼれる、恰も月が物を思はせるやうに、月にか

こつけて、我涙は落つ、げに、理を以て如何ともしがたきは情也、涙也との意也。○戀にかなしみ、て月を見て、自から涙を墮す、情景おもひやられてあはれ也。この歌、つかまへ所、極めてよし。一代の秀歌也。唯少し談理的(殊に上の句)なるは惜しむべし。

八十七、寂蓮法師

村雨のつゆもまだ晞ぬまきの葉に、霧たち
のぼる秋の夕暮

○村雨は、一時にどつとひどく降る雨の事也。○「まき」は、古くは、杉、檜などの總稱なりしが、のちに槇といふ一種の木の名となれり。○景色をそのまゝよみたる歌にて、さつと降り來りし村雨忽ち晴れて、その名殘の露まだ木の葉に殘りて乾かざるに、霧一面に立ちて、げに面白き秋の夕暮の景色哉との意也。○奇を求めずして光景自から躍動す。捉へ處が自然にして可也。このやうな歌は、幾回よんでも、あきが來ぬもの也。

八十八、皇嘉門院別當

難波江の蘆のかりねのひとよゆゑ、みをつ
くしてや戀ひわたるべき

○かりねは苅根を假寐に言ひかけたり。○「ひとよ」、「よ」とは、竹や蘆などの節と節との間をいふ也。人のよといふも之に同じ「生れてから死ぬるまでの間を云ふ也。君の代と云へは、天皇陛下の御降誕より御崩後までの間を申す也。この一節は、一夜に言ひかけたる也。○みをつくしは、澪標(水路をしらせる木標)を「身を盡し」に言ひかけたり。○此歌は斯くかりね(苅根、假寐)、ひとよ(一節、一夜)、みをつくし(澪標、身を盡し)の懸言葉を用ゐ、又難波江と云ふより蘆と云ひ、苅根と云ひ、ひと節と云ひ、澪標と云ひ、渡ると云ひ、難波江に關する縁語を用ゐたり。○「難波江の蘆の」は、かりねと云はむ爲めの序也。○正味の意のある處は、「假寐のひと夜故、身を盡くしてや戀ひわたるべき」也。即ち、たつとひに晩假寐して契

を結びしばかりなるに、なんでまアこのやうに憂き身やつして思ひこがるゝであらうか、げに戀は曲物なる哉との意也。○白樂天の歌ひけむ、君が一日の情の爲めに、妾が百年の身を誤るとは、戀に覺めたる女の述懷、一樹の蔭、一河の流、共にやすらひ、共に掬ぶも、亦これ他生の緣、一夜の情わすれ難く、しんぞ此君の爲めには命もいらずとほれ込みたる痴情掬すべし。院本で云へば、ちやうど朝顏などの身の上なるべし。

八十九、式子内親王

玉の緖よたえなば絕えね、ながらへば、忍ぶることの弱りもぞする。

○玉の緖は命也。○「ながらへば」は、「生存すれば」也。○「忍ぶる」は、こゝにては、あらはさぬやうに怺へて居ること也。○これは忍戀の心をよめり。戀しくて堪へられねど、妄りに戀すべき際にあらねば、强ひてこらへ居れど、如何にしてもこらへ切れず、生きて居たならば、終に暴露するに至るべし。死んだら、暴露することなく、又この忍ぶ苦しみもなかるべし。いつそ死にたいとなりと也。○愼みぶかき女性の、忍ぶ心の切なさを歌ひ得て、いと憐れなる歌也。ついでに云ふ、戀歌のあはれなるは、失戀かもしくは忍戀か也。成功して逢ふ戀の、肉感的の情をうたへば、何等のあはれも面白味もなし。近時の明星派の戀のうたは、多く此類也厭ふべし。

九十、殷富門院大輔

見せばやな、小島のあまの袖だにも、濡れにぞ濡れし。色は變はらず。

○見せばやな、見せたいもんぢや也。○あまは漁人也。○小島、松島の中に陸地に近く雄島といふ小島あり。魚人の住むべき處にあらねど、たゞ名を聞いたばかりにて、こゝに用ゐしなるべし。歌人は居ながらにして名所を知るとは、こゝらの事なるべし。難波と云ひても、何と云ひても差支なき所也。○「ぬ

れにぞ濡れし」と「色は變らず」との間は、句が切れる也。その間に、「されど」などの語を添へて解すべし。○君を戀ひ泣きて、涙に袖も朽ちむばかりなるを、ひと目なりとも、君に見せたや。漁人は海に入りて、其袖は常に水に濡るゝ也。それでも袖の色かはらず、朽ちもせざるに、我は常に涙をながして袖爲めに朽ちむとす。強顔き君よ、斯くてもなほ我を憐れとおぼさずや。○情切にしてあはれなる歌也。

九十一、後京極攝政前太政大臣

きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに、衣かたしきひとりかもねむ。

○きりぎりすは、こゝにては、蟋蟀のこと也。○鳴くやのやは、口合ひのやと云ひて、別に意味なし。「鳴く霜夜」といふに同じ。○さむしろの、さも意味なし。單に席といふに同じ。○衣かた敷くは、一人にて寝ると也。昔、男女相寝るに二人の衣を敷く風習なりき。朝起れば、その衣を別々に着る故、衣々の別の語起りたる也。二つならべて敷くべきを、一人の時は、一枚故、片敷とは云ふ也。片とは對のなきと也。○こほろぎ鳴いて、寒く、悲しき秋の夜、唯一人寝ることか。さてもつらきと哉と也。○柿本人丸の「長々し夜」の歌と、意は相同じ。蟋蟀鳴く、霜夜の席、衣片しくなど、道具立て多くして、反て人丸の歌の奇拔なるに如かず。而して多少實感的にして上乘のうたと云ひがたきは、二者共に一也。

九十二、二條院讃岐

我袖は潮干に見えぬ沖の石の、人こそ知らね、乾く間もなし。

○われは常に戀に泣きて、我袖に恰も海底深くひそみて、潮干の時にも露はれざる石の如く、人は知るまいであらうが、(絶えず涙にぬれて)乾く間がなしとの意也。○寄石戀の題にて、よみたる歌也。この題よりして、かういふやうな歌をよみたるは感心也。題をはなれては、さまで感服すべき歌にあらず。然

るに、當時この歌もてはやされて、沖の石の讃岐とあざ名つけられしとぞ。

九十三、鎌倉右大臣

世の中はつねにもがもな。なぎさ漕ぐ漁人の小舟の綱手かなしも。

○「常にもがもな」は常でありたいもの哉」也。即ち、「常住不變でありたいもの哉」也。○渚は浪のうちよする岸也。○綱手は、舟を曳く繩の事也。○「悲しも」は「悲しい哉」の意也。「かなし」は非常に氣に入りて感動するをいふ。今日は、之を悲哀の意にのみ用ゐれば、昔は非常に嬉しい場合にも用ゐたり。こゝの「かなし」は、嬉しい方の意也。○松青く砂白き處、烟波縹緲、漁舟點綴す。嗚呼好景なる哉。この景長く變らであれ、われも長へに無事にながらへて、常に此の好景に對したきもの哉との意也。○鎌倉の將軍源實朝、北條氏の專横に心やるかたなきに、たま〳〵海邊にあそび、自然の大觀に接して、胸中萬斛の感慨にうたれて、この歌をよみしものなるべし。情景あはれなる歌也。

土佐日記講義（十一）

文學士　鹽井雨江

四日。楫師、今日風雲のけしき、甚だ惡しといひて、舟出ださずなりぬ。然れども、終日に浪風立たず。此のかぢとりは、日もえはからぬ乞兒なりけり。

○今日、云々。船頭が、今日は風の烈しく吹き起らむやうなる雲の樣子にて、空の模樣が惡き故にとて、舟を出ださずとなり。○然れども、云々。船頭は天氣の模樣惡しと言ひたれど、其の考へと異りて、今日は終日風も吹かず、浪も立たず、天氣はいと穩なりとなり。○此のかぢとり、云々。此の船頭は、天氣のよしあしも測る事の出來ぬ奴だといへるなり。乞兒と

は、船頭の天氣を見まちがへて舟出ださざり事の腹立たしさにかく、卑め罵るなり。

此の泊りの濱には種々の美はしき貝石など多かり。かゝれば、唯だ昔の人をのみ戀ひつゝ舟なる人のよめる、

寄する浪、うちも寄せなむ、我が戀ふる
人忘れ貝、下りて拾はむ。

と言へれば、ある人の堪へずして、舟の心やりによめる。

忘れ貝拾ひしもせじ。白玉を
戀ふるをだにも、形見と思はむ。

となん言へる女兒のぬめには、親幼くなりぬべし。玉ならずもありけむをと、人言はむや。されども、死にし兒、顔よかりきといふやうもあり。

○かゝれば、云々。此の泊まり居る海岸には、いろいろの美しき貝や石などの澤山ある故に、彼の死にたる女兒の事ばかりを戀ひしたふ貫之の女房が、其の貝につけて、左の歌をよみたりとなり。昔の人とは貫之の亡き女兒を言ひ、舟なる人とは、貫之の妻なり。

○歌の意は、我が常に戀ひしたふ女兒を忘れん爲めに其の忘るゝといふ事を名に有つて居る忘れ貝を、下り立ちて拾はん。されば、打ち寄する浪よ、其の忘れ貝を、此方ようち寄せてくれろよといふ事なり。忘れ貝といふは、貝の名なり。忘れといふ名ある故に、其の貝を拾ふ時は、我が戀しき人を忘るゝといふ事を、舊くより言ひならひて、歌などにも、いと多きことなり。これも、亡兒の忘れがたく、いと戀しく悲しきにつけて、かく忘れ貝を拾ひて、忘れたしといふ意にて、よめるなり。切情の極はかなき忘れ貝をたのみて忘れたしといへる、あはれなる心なり。

○ある人の堪えずして、云々。妻が斯くなげくに、貫之も、いよ〳〵戀ひしさ悲しさにたまらずなりて、舟中の悲しき心を愛むる爲めに、左の歌をよみたりとなり。

○歌の意は、我れは、忘れ貝は拾はないよ。かく何時までも忘れずして、常に戀ひかなしむ心を、せめて我が亡き愛兒の形見と思はむ。子を戀ふる心を、愛兒の形見と思ひて、何時までも忘れずに戀はむ。戀ひて、何時までも戀ひ泣かむとなり。いかに思ふとも、その兒は歸らず。いかに忘れんとするも、その兒は忘られず、戀ひしく悲し。よし、我れは、絶えず戀ひ泣かむ。戀ひ泣くを、せめての慰にてくらさむといふ心情、誠に切情の限りにて、あはれに悲し。忘られぬ戀ひしさは、暫時どうぞして忘れたいと言ふは、なほ普通の情なり。とてもその人は忘られぬ故に、いつそ、其の戀ひしさを形見と思ひて、何時までも戀ひ泣きてくらさむといひこそ、切情の極なれ。西行法師が戀歌に、はるかなる岩のはざまに獨り居て、人目思はで物思はずや」とよみたる情の趣きと同じなり。これも、我が戀ひはとてもかなはじ。されど、我が戀ひしき心はやめられぬ。我れは常に戀ひなげかざるを得ず。されど、此の里に居りては、人目ありて、戀ひなくことも、思ふやうには出來ぬ。故に、いつそ、人なき深山に入りて、誰れに憚る所なく、獨り戀ひ泣きて、せめて、それを慰さにてくらさむといへるにて切なる戀ひの極なり。面白し。

○女兒の爲めには、云々。亡き女兒の戀ひしさには、親の心も、思慮分別もなく、たわいなきものになりて幼き子どものやうに成りソゥナといふ事なり。○玉ならずも、云々。親の心には、亡き女兒を、玉にたとへて、歌に言ひたれど、玉の如き美しき子にはあらざりしとと、他人は言ふならむか。されど、死にたる子は、殊に顏が美しかりきなど言ひて、其の惜しき心より、一層良き子なりしやうに思はるならひなりといふ諺もあれば、今我が子を玉にたとへてほめて、言ひたるを、あながちに笑ひ給ふなかれといへるな

り。貫之が、我が亡兒の事を、歌に玉にたとへてよみたる故に、そのいひわけをなしたるなり。
○此の段の文、親の愛情をつくし、人情をつくし、筆もめでたくして、いとあはれにゆかしきを得たりといふべし。

猶ほ同じ所に日を經ることを、なげきて、ある女のよめる歌、

手をひでて、寒さも知らぬいづみにぞ
くむとはなしに日ごろ經にける

○歌の意は、和泉の灘に、爲す事もなく、空しく數日を暮らし居るといふ事なり。和泉(いづみ)を泉(いづみ)にかけて、眞實の井泉にはあらざる故に、「手をひでて寒さも知らぬいづみ」と形容し、また、泉の縁によりて、爲す事もなしといふ事を、「汲むとはなしに」とわやなし言へり。「手をひでて」とは、「手を漬けても」といふ事なり。日ごろは數日なり。

五日。今日、辛くして、和泉の灘より、小津の泊りをおふ。松原、目もはるばるなり。これかれ苦しければ、よめる歌、

徃けど徃けど、行きやられぬは、妹がうむ
を津の浦なる岸の松原。

○辛くして。やつとの事でといふ意なり。○目もはるばる。松原の遠く續きて見わたさるゝ景色なり。○これかれ。都の戀ひしき舟路のおそさなど、いろいろと思ひわづらふを言へるなり。○歌の意は、徃けども、徃けども、往ききれずして、甚だあきあきするは、小津の浦の松原であるよといふ事にて、都へ疾く行き着きたしと思ふ心より、舟の進みもいともどかしく、はるばるとつゞく松原の景色も面白しとは見えず、たゞあきあきする意をいへるなり。「妹かうむ」といふ詞は、「妹が績む苧」といふ語意によりて小津のを(小)にかけて、序としたるなり。而して、

うむ（續む）を倦むにかけて、あき／＼する意を、自から其の序の中にひゞかせたる細工なり。

斯く言ひつゝ來る程に、舟疾く漕げ、日のよきにと催せば、楫師、舟子どもに曰く、み船より仰せたぶなり。朝北の出で來ぬ前に、綱手早く引けといふ。此の詞の、歌のやうなるは、かぢとりの自からの詞なり。かぢとりは、うつたへに、我れ歌のやうなることといふとにもあらず。聞く人のあやしく歌めきてもいへるかなとて、書き出だせれば、實にも三十文字あまりなりけり。

○催せば。天氣が好き故に、舟を急ぎて進ませろと、船頭をせきたてたるなり。○み船より云々。舟を急ぎて漕げと、船中より命じ給ふぞ。朝の北風の吹き出でぬ前に、舟の綱を強く引きて、舟を早く進ませろといふ事にて、船頭が水夫どもに命じたるなり。仰せたふは「仰せ給ふ」なり。「朝北」は「朝に烈しく吹く北風」なり。○此の詞の云々。此の水夫どもに命じたる船頭の言語が、いかにも歌めきたれど、それは船頭が特別に作りて言へるにはあらず、自然に出でたる詞なり。船頭はイツカウ歌らしく優美なる詞を言はんとて、かく言へるにはあらずとなり。「うつたへ」は一向とかひたすらとかいふ事にて、全くさる意あらざるよしを言へるなり。○聞く人の云々。其の船頭の言へる詞を聞きたる人が、不思議に歌らしくも言ひたる事よとて、御覽ぜられよとて、貫之の前に書きつけて出だしたるを見れば、ナルホド、船頭の言ひたる詞は、三十一文字にて、歌の形をしたりとなり。

今日、波な立ちそと、人々、終日に祈る効驗ありて、風浪立たず。今し鴎群れ居て遊ぶ所あり。京の近づく喜びの餘りに、ある童

のよめる、
　祈り來る風間と思ふを、あやなくも
　　鴎さへだに、浪と見ゆらむ。
といひて行く間に、石津といふ所の松原面白くて、濱邊遠し。

○波な立ちて、云々。浪の立つ勿れと、人々が終日神佛に祈り奉るきゝめありて、今日は浪立たず、海上おだやかなりとなり。○今し。しは語勢を强むるまでの助詞にて、別に意なし。○歌の意は、神佛に祈りつゝ來たりて、今や嬉しくも風の絶えたる間なりと思ふに、生憎にマアー、鴎までが浪と見ゆるとなり。風幸に吹かず浪立たぬ海上に、白き鴎の打ち群れて遊ぶさまを見て浪と見ゆると詠みたるなり。

また住吉のわたりを漕ぎ行く。ある人のよめる、
　今見てぞ、身をば知りぬる住の江の
　　松より前に、我れは經にけり。

○歌の意は、今、住の江の松を見てぞ、我が身の老いたるを知りたり。住の江の松は青けれど、我が頭は白くなれり。年久しといふ住の江の松よりも、我が身の方が、さきに年を經て老いたりといふ意なり。色も變はらぬ住の江の古松に對して、我が身の老いたるを思ひやりたる詠なり。○見てと言へるは、「住の江の松を見て」にて、「身をば知りぬる」は「身の老いたるを知りぬる」にて、「へにけり」は多くの年を經にけりなり。

こゝに、昔つ人の母、ひと日、片時も忘れねば、よめる、
　住の江に舟さし寄せよ。忘れ草、
　　しるしありやと摘みて行くべく。
となん。うつたへに忘れなんとにはあらで戀ひしき心地、しばしやすめて、またも戀

ふる力にせんとなるべし。

○昔つ人の母。貫之の妻にて、やがて、亡き女兒の母なり、昔つ人とは、昔の人にて、亡き女兒をさしたるなり。此の母が、一日も片時も、其の女兒の事を忘れざる故に、今、此の住吉の浦を漕ぎ行くにつけても、左の歌をよみたりとなり。

○歌の意は、忘れ草を摘む時は、我が戀ひしきものを忘るるといふ諺あり。果して其の言ひならはしのやうに、忘れ草を摘まば、其のきゝめありて、我が戀ひしき亡兒を忘るゝ事を得るかと思ふに、今や摘みて行かむと思ふ故に、此の舟を、彼の住吉の岸に漕ぎ寄せよといふ意なり。前の忘れ貝を拾はんと言ひたると仝樣の思想なり。しるしは効驗即ちきゝめなり。

○となん。「となん言へる」といふ事なり。なんはぞに仝じ。○うつたへに、云々。かく言ふ妻の心は、全く女兒の事を忘れたしとてにはあらず。かく戀ひのみつゝけ居りては、弱りはつる故に、暫時戀ひしき心を休めさせて、弱る心の力を養ひたすけて、更にまた永く戀ひなげかむとて、かくは忘れ草でも摘みて暫時忘れんと言へるなるべしと、妻の忘れたしと言へる歌につきて、妻の心を思ひやりて評せる貫之の筆なり。いと面白し。

かく言ひて、ながめつゝ來る間に、ゆくりなく風吹きて、漕げども、漕げども、後へ退きて、ほど／＼しく打ちはめつべし、楫師の曰く、此の住吉の明神は、例の神ぞかし。ほしき物ぞをはすらん。とは今めくものかな。さて、幣を奉りたまへといふ。言ふに從ひて、幣奉る。

○ゆくりなく。「思ひかけなく」なり。思ひがけなくも、俄に風の烈しく吹き出でて、舟は漕げども進まず烈風は殆んど舟を海中に沈めんとするとなり。○例の神ぞかし。いつもの物を欲しがる神ぞとなり。○

「とは今めくものかな」物を欲しがるとは、神様も當世めきたる事かなと評せるにて、船頭の言ひかけたる詞を途中にてうけて、直ちに評して言へるなり。○幣。前にも言へり。供物なり。

かく奉れども、もはら風やまで、いや吹きに、いや立ちに、風浪の危ければ、檝師また曰く、幣には御心のゆかねば、み船もゆかぬなり。なほ嬉しと思ひたまふべき物奉りたまへといふ。また、言ふに從ひて、いかがはせんとて、眼もこそ二つあれ。唯だ一つある鏡を奉るとて、海にうちはめつれば、くちをし。

○もはら。トントといふ如き意なり。○いや吹きに風はいよ〱烈しく吹き、波はいよ〱荒く立ちて、いと危險なりとなり。○幣には云々。今奉りたる供物にては、神のお心に、なほ不足におぼしめす故にかく風浪靜まらず、舟の進まぬなれば、なほ神のみ心に悦ばしく思ひたまふ程の供物を奉りたまへと、船頭の言へるとなり。○いかがはせんとて、云々。どうしやうかと思案したるが、他に奉るべき好き物もなし眼は我が身に二つあれど、鏡は唯だ一つ有てるのみなれど、その一つの鏡をこそ奉れとて、鏡を海中に投げ入れたるが、唯一つの鏡をかく捨てたるは、誠に殘念なりといふ事なり。

されば、うちつけに海は鏡の如なりぬれば、ある人のよめる歌、

ちはやふる神の心を、荒るゝ海に、
鏡を入れて、かつ見るかな。

いたく住の江の忘れ草、峯の姫松などいふ神にはあらずかし。目もうつら〱、鏡に神の心をこそも見つれ。檝師の詞は、神のみ心なりけり。

○されば。鏡を海中に投げ入れたればなり。○うちつけに。直ちにといふ意なり。直ちに、海は浪風しづまりて平穏になりたりとなり。○歌の意は、荒れたる海中に、鏡を投げ入れて、神威荒き神のみ心をすぐと知るを得たワイといふ意にて、其の意は明なり。ちはやぶるは神威の強く烈しきを言ひて、神の枕詞とせるなり。かつは、いとむづかしき詞なれど、かゝる時には すぐといふ如き意に見てもよからむ。かの「駒の痕はかつ降る雪に埋れて、後るゝ人や道迷ふらむ」とある歌のかつと、同じ樣なる意に見て、可ならむ。此のかつは、駒の足痕のつくと共に直ちに其のあとは雪に埋るゝ意にて、この鏡の歌にも、鏡を投げ入るゝと共に、直ちに海の平穏になり神の心の知られたる故に、かつと言へるなり。故に、やゝ穏にはあらねど、すぐと解しおきたり。わかり易き爲めに。

○いたく云々。歌などに、住の江の忘れ草とか、岸の姫松とか、優美にやさしく詠む所なれども、さる優美にやさしく詠むやうなる樣には、甚しく似つかはしからぬ荒き神樣なりとなり。○目もうつら〳〵鏡を投げ込みたるにより、海は靜まり、鏡の如く平に成りたるにより、現在眼の前に、つら〳〵と神の心を見たりとなり。○楫師の詞云々。神さまが物を欲じたまふなれば、よき物を奉りたまへさすれば、海は平穏にならむと言ひたる船頭の詞は、其の通りであつて、鏡の幣にて、海は靜まりたり。船頭の言ひつる事は、やがて、神樣のみ心であつたさても〳〵となり。

○總べて、此のあたりの詞づかひ、いと趣味あり。「幣にはみ心のゆかねば、み船もゆかぬなり」「眼もこそは二つあれ」「目もうつら〳〵鏡に神の心をこそは見つれ」など、殊に、その妙なるものなり。其の他すべて、輕妙洒落なる筆づかひ、面白し。神のみ心を驚きいぶかるやうに言ひたるは、皆もとより戯れ興じてなり。且つ、その中に、自から、當世の人情の、利慾につき輕薄なるを諷刺する意をこめて書けるなり。

貫之が此の日記、當世の人情の卑しく輕薄なるを諷

刺したる所は、所々にあり。京につきたる所にもあり。されど、餘りに筆のまはりすぎて、やゝ文章に輕薄げなるけしきあるは、惜むべし。されど、これを以て、貫之に輕薄なるところありとは、決して言ふべからず。末段の「檝師の詞は神のみ心なりけり」の一句は、殊に貫之の意を見るべきものにて、其の裏面に、神樣のお心は、さる檝師の老ふる如き利慾あるものにはおはせずといふ心を有ちて、今偶然にも船頭の詞のあたりたるやうなるを笑ひ戯れて言へるなり。

六日。澪標のもとより出でて、難波津に着きて、河尻に入る。皆人々、女、幼き者、額に手をあてて、悦ぶこと、二つなし。かの舟酔ひの淡路の島のおほい子、都近くなりぬといふを喜びて、船底より頭をもたげさせて、かくぞいへる、

　いつしかといぶせかりつる難波潟
　葦漕ぎそけて、み船來にけり。

といと思ひの外なる人の言へれば、人々あやしがる。これが中に、心地惱む舟君、いたくめでて、船酔ひしたまひし顔には似ずもあるかなとはいひける。

○澪標。水の深淺を示す爲めに立てたる標木なり。○河尻。攝津西成郡なり。○二つなし。喜ぶこと、此の上なしとなり。○おほい子。もと第一の姉といふ意にて、此處にては、船中の人の中の一番年老いたる人なれば、かく言へるなり。此の老女の船に酔ひたる事は九日の條に見えたり。○船底より云々。船に酔ひなやみて、常に船の中にうちふして居たるが、都の近くなりたるを喜びて、頭をあげて、歌をよみたりとなり。

○歌の意は、何時しかと心もとなく思ひたるが、今や河尻の岸の葦を漕ぎわけつゝ、嬉しくも船は思ふ難波につきたりとなり。「葦漕ぎそけて」とは葦をよ

けゝつ漕げゆくさまにて、河尻に入らんとする實景なり。
○いと思ひの外。今まで船中に惱み病へる老女の歌をよみたる故に、甚だ案外の人といひたるなり。○心地惱む船君。船君は貫之にて、折りから病氣にかゝりてなやみ居りたるなり。貫之が、此の老女の歌を大に賞めて、舟に醉ひなやみて、いと惡しき顏色には似ずして、歌はいとうるはしと言ひたるなり。

七日。今日は、川尻に舟入り立ちて、漕ぎ上る。川の水乾て、なやみわづらふ。船ののぼること、いと難し。かゝる間に、舟君の病者もとよりこち〳〵しき人にて、かうやうの事更に知らざりけり。かゝれども、淡路のたうめの歌にめでて、都ぼこりにもあらん辛くして怪しき歌ひねり出だせり。その歌、

來と來ては、川の堀江の水を淺み、
　舟も我が身もなづむ今日かな。

これは、病ひをすれば、よめるなるべし。一歌に、ことのあかねば、今一つ、

疾くと思ふ舟なやますは、我が爲めに
　水の心の淺きなるべし。

此の歌は、都の近くなりぬる喜びに堪へずして、言へるなるべし。淡路の御の歌に劣れり。ねたくいはざらましものをと、くやしがるうちに、夜になりてねにけり。

○なやみわがらふ。川の水の淺き故に、舟を漕ぎやるに甚だ苦しむなり。○舟君の病者。貫之自身のことなり。病氣なる故に、かく言へり。病者は、ひやうざと讀むべし。○こち〳〵しき人。無骨なる不器用なる人といふ事なり。○かうやうの事。かゝる優美

風流なる歌などの事なり。○更に。全く知らずといへるなり。○歌にめでて。老女の歌に感化してといふ事なり。○都ぼこり。都の近くなり行くを喜び誇てやにあらん、平生は歌など知らぬ身なれど、歌をよまんとて、やつとの事で、奇怪なる歌をよみたりとなり。これは、貫之が謙遜して、かゝることをいへるなり。「ひねり出だす」とは苦み／＼てやつと考へ出だしたりといふ意にて言へるなり。

○歌の意は、やつと此處まで來れば、今日は、折りあしく、堀江の川の水の乾て淺き爲めに、舟も漕ぎ苦み我が身も病氣の爲めに苦むといふ意なり。

○これは、云々。この歌は、作者折りふし病氣なればかく舟もわが身もなづむとよめるなるべし。○一歌に、云々。一首にては滿足せざる故に、また一首よみたりとなり。

○歌の意は、早く都へ歸り着かむと願ふ此の舟を、かく苦しむるは水か我が爲めに同情の少き故ならむといふ事なり。

○この歌は、云々。此の歌は、都の近くなりたるを喜ぶあまりに、更に水の淺くして舟を苦しむる事の、いとつらく思ひてかく詠めるならんとなり。少しく、筆足らずとゝのはぬ心地すれど、かく解したり。○淡路の御。御とは、御前に同じくして、婦人を尊びて稱するなり。○ねたく、云々。老女の歌には劣りたれば、恨めしく殘念にして、且つ、いつて詠まずにおかばよかりしものをと思ひて、恥をも知らず得意げに詠みたるを後悔する間に、夜になりければ、眠りにつきたりとなり。謙遜して、我が歌を拙しと言へるなり。

八日。なほ川上りになづみて、鳥養の御牧といふほとりにとゞまる。今宵舟君、例の病起りて、甚くなやむ。ある人、あざらかなる物もて來たり。米してかへりごとす。男ども私にいふなり。いひぼしても釣ると

や。かうやうの事、所々にあり。今日節忌すれば魚用ひず。

○鳥養の御牧。御牧の名なり。延喜式の左馬寮式に攝津鳥養牧とあり。八日の日も、やはり川の水淺くて、漕ぎ上るに苦みて、つひに、鳥養の御牧といふ邊りに舟をとゝめてとまれるなり。○あざらかなる物鮮魚なり。新しき魚なり。○米して云々。米を以て返禮したりとなり。○いひぼしても釣るとや。いひぼとは飯粒の事にて、鮮魚の返禮に米をやりたる故に、飯粒を以て、ヤアー、魚を釣りたりとや言ふべき事ならんと、男どもが、私に許していふとなり。今の世に、「飯粒で鯛釣る」「鰕で鯛釣る」などいふと同じ、鮮魚の贈物に比べて、米の返禮の劣れる故に、かく密に惡く言ひたるなり。○今日節忌。今日は節忌にてなまぐさきものを忌む故に魚は食はずとなり。男どもの返禮の劣れるを惡しくいふを、やゝ面白からず思うて、殊更にかく今日の鮮魚の用なきを言ひたるならんか、何となう、いやしげにあらずもがなの詞なりや。

山家月　範永

すむ人もなき山里のあきの夜は
月の光もさひしかりけり

われひとりなかんと思ひし山里に
おもふ事なき月もすみけり　爲時

住わひて身をかくすへきやま里に
あまりくまなき月の影かな　俊成

擣衣　輔尹

秋風は身にしむはかりふきにけり
いまやうつらんいもかさ衣

うつりゆく月みるほとに衣うつ
ころにも秋のなりにけるかな　家經

菊　常陸

折る菊のつゆにぬれぬる今日よりや
千年の秋に逢んとすらん

紅葉　仲實

なか月の時雨の雨やそめつらん
正木のうは葉もみちしにけり

小説

赤十字

長田秋濤

（上）

遼東の寒氣猶骨を刺すがごとくなる三月の五日附て、近衛第〇隊志願兵吉野雪雄が、その未來の妻たる加納眞子の許に野戰郵便で送ッた書面に依ると大連灣の攻撃を終ッて愈ゝ總督府處在地なる金州城に向つて近々進軍するとの旨を簡單に記して寄越したのである、早茲に四ヶ月と云ふものは何んの音信もない、眞子は旦夕雪雄の身を案じ煩ふのみで更に其安否の消息を得る術もなく、こなたては力なく降る今日此頃の霖雨を友としつゝ空しく心をいたますばかりであつた。

吉野家と加納家とは元來姻戚の間柄で、幾歳の昔から兩家の親等は雪雄と、眞子とを結婚せしめ一日も早く初孫の顔が見たしと、それのみを樂みとしつゝ日を送つて居たのである、雪雄の父は不圖したことからはかなくも此世を去つて程なく眞子の兩親も病に侵されて憫れにも眞子は遂に孤兒となつた、

眞子は其の後吉野家に引取られて、雪雄の母に育てられ、高等小學を卒へて十七才の時に赤十字社に這入ッて看護學を三年の間怠らず勉强した甲斐があつて漸く今年の春業を終へて吉野家に戻ッて來のである。扨又雪雄の方も父が亡なッてからは、一心不亂に螢雪の功を積んでやつとの事で大學を卒業して一年志願兵となッて、退營の後は目出度合卺の式を擧げやうとして居る中に、圖らずも日清の戰爭が起つて雪雄は遂に戰地に向はなければならぬことになつた、しかし雪雄の母といふのは極く男勝りの女である、それゆゑ雪雄が初陣の門出を健氣にも祝ッて、凱旋の日を樂み待つぞ、と門邊に送出しての後は、適れ我子が軍の上の功績を

樹てゝ、君の爲め國の爲め日本男兒の譽れを異つ國の涯まで爲知らせて呉れよと日夜神佛に祈つて居つた、然るに此三四月此方何の音信もないのであるから、我子の身の上を案じ、眞子と共に郵便配夫の來る時刻を待つては空しく其日を送つて居るのである

（下）

この度の戰爭次第に範圍をひろめて遂に端なくも一艘の敵艦は此二人が詫住ひせる浦邊に現はれて隊を組んで敵兵は上陸を初めたのである、されば此處を守備せる軍隊は必死となつて漸く擊退けたが雪雄の母と眞子は砲彈が暫時絕へて戰が終りしと思ふ頃戰後の模樣



如何ならんかと戸外に出でしがこゝに端なく一人の敵兵、身に重傷を負ふて倒れて居るのを見た。敵とは云へ負傷兵、況て年頃も雪雄位の丈夫である、之を見た母と眞子はもしや雪雄が敵地に入つて斯のやうな傷を蒙けて淺猿しき最後をなさば如何ならんかと心そゞろに惻まれて敵兵たりと雖も救ふて介抱するのを妾等の任務であらうと、兩人して其負傷兵を一室に伴ひ入れ、氣つけを與へ繃帶を施しやりさまぐ\手厚く介抱をしたのである。



傷は思ひしよりも深くして人事不省の有様ながら眞子は日頃の習得たる看護の術をこゝぞと應用して出來得る丈けの力を盡した、すると曉方からして段々熱度も下り、負傷者も稍々人心が付いたものと見えて豁つと眼を開き拙い口本語で

「孃さん、……此處何處あります、貴孃大變親切わります私未だ死にません。」
と。頻りに禮を述べんとするのを眞子は遮つて
「ハイ成程あなたは敵のお方でござんせう、けれども負傷をされた上からは敵も味方も差別はないんでござんす、御介抱申すのは妾の務めてす、しかしマア御心持ちがよくなつて妾もどんなにか安神致しました。」
この時負傷兵は臘のやうな蒼白な顔して呼吸も急しげに眞子の顔を熟々と見て居ました。
「私、……傷重い、……助かること出來ません。」
眞子は遮ッて
「イエそんな御心の弱いことを被仰るもんぢやありません、貴方の傷は決して其樣な重傷ぢやありません。」
「イエ　私の傷大變重い、とても助かりません。」
敵の負傷兵は斯く言ひつゝ如何にも痛苦に耐へられぬ樣てある。
なるほど、見て眞子は重傷とは知ッたが成べく對手の精神を鎮めさせやうと思つて、務めて彼を慰めたが、彼は命數を知ッて居ッたか、毫も眞子の言葉を信ずる樣子がなかッた。暫らくして負傷兵は
「私し未だ死ぬこと出來ません、……私傷大變惡い、私……大變苦しい……モウ一時間の中に　私　死にます……其前頼むことあります、聞いて呉れますか。……………」
彼れは長大息しつゝ何事をか語り出さんとしたのてある。眞子は何事と詰め寄りつゝ
「左樣なら貴方の被仰ることを承りませう、何か私に御頼みがあるのですか、御頼とあれば及ばずながら——私に叶ふことならば御役に立てゝ上げませう、何御用でございますかと。」
と膝立直して一層負傷兵の枕邊に近いた、負傷兵は喜ばしげに眞子の面を見詰め、ハラ〱と兩眼に涙を浮べながら眞子の手を握りつめ、言はず語ずの中に鳴謝の意を示しつゝ苦しき息の下から「四月二十九日かと思ひます、……大連灣の方から金州の方へ日本の兵士が三四人參りました、丁度　私　其影を見たゆゑ、垣根

の蔭から鐵砲を撃つて其一人を殺しました、外の人達が皆大變に兵隊が居ると思つて逃げて仕舞ひました、私其死んで居る日本の兵士の側へ參りました、……其兵士未だ死なずに、大變苦んでゐます、兎に角私の手に掛けて殺した人であるから今更私氣の毒に思ひまして、何か話したいことがあるかと言ひましたら其人の言ふには何も頼むことはないが、私日本に母親さんと妻さんがある、若しお前が日本往つた時、何處かで其人達に逢つたならば、此指輪を持つて居た人が死際に是れを頼んだと言つて渡して呉れ。私○○師團の○○中隊吉野であると、斯う言つてカクシの中の指輪を渡して直ぐ息を引取りました、私今鐵砲で撃たれて死んで仕舞ふと此指輪を頼むことが出來ない、それだからお孃さんにこれを預けます私が死んだならば、お孃さんは其人に逢つた時どうぞ渡して下さい、それか私の頼みであります、其外別に話はありません。」と彼は息次ぎ／＼己れの托されたことを更めて孃に托してのち、早心に掛かる雲もないと見へ、無言の儘胸に兩手を當てゝ暫くの間何事をか考へて居たが、眞子はかくと聞いてもしして雪雄の身の上にはあらぬかとまづ胸とゞろきつ扨て其の指環はと言へば、彼れはやがて其兜子の裡から取出した、眞子はそれを手にとりあげて見たまゝて愕然として其儘そこに打僵ほれた扨ても此指輪こそ豫て自分より雪雄に贈つた所の契縁の證しである、さては悲しや我夫はと打倒ふれたまゝ一時は前後正躰もなかつた。

我夫を撃殺した當の敵は即ち我が介抱の下にあつて既に絶命の淵に沈んで居る。夫の敵を討つのは容易であるが然しこれも戰爭の事である、況んや瀕死の弱卒を手に掛けた所ろがそれで亡夫の――仇を報じたとも言へない。

唯、眞子は悔しくもあり情なくもあり熟々と負傷兵の顏を恨めし氣にながめて居た。

負傷者今や死を覺悟したもの丶如く眼を閉じつゝ唯天上の樂土へ往くのを待つやうな鹽梅であつた。

兎に角つく／＼とありし昔しを追懷して無限の感に打

沈んだ、眞子は氣を取り直しまづ其の指輪を手にしつそのうち夜はほの〴〵と明け亘つて、せめても亂れた髪なりと結び上げやうと傍にある鏡に向つて己が姿を映して見ればわなうるはしと見へた昨日までの黑髪は一夜の中に雪を欺く白髪と變じて居つたのである。」

秋の夜がたり

二十三階堂

(六)

早朝御殿へ出仕したる伊織は、此日何故にや胸打さわぐ事のありて心地常ならず氣の進まぬまゝに匆々暇を取りて午過ぐる頃我家に歸り物の本など取り出して氣を紛らしゐるうち、若黨の歸り來たりて慌忙しく物申すに、底事ぞと不審して問へば、奥樣より大切の御一封爾々の次第と、申しおぐれば、伊織いよ〳〵訝かしく斯る和歌の探題を何時殿樣より下し置かれしにや、更に合點の參らぬ事共かなとおもひながらも、念の爲、其旨御上へ達しければ、左樣なる事曾ちてなしとの仰せなり、扨ては彼れ亂心などせしにや、いよ〳〵以て不審千萬なり、今日の墓參こそ仔細ぞあらんと。用人を呼びて、今朝ほどの摸樣を尋ねければ、別段お變らせの御容子は見受候はざりしが、前夜夢見の常ならず惡しかりしほどに、旦那樣の御身に氣をつけよと、重ね〳〵申殘してお立なされ候、またしてもお女中方の癖とおもへば、別段氣にも止め申さずといふ、伊織一考して仔細ぞあるべし。急ぎ寺まで迎へに參るべし途中心にかゝる事ともあれば大義ながら、其方も同道せよと用人官兵衛を促がす處ら、菩提所よりの急使、奥方の紛失なしたまひて、行方知れず候ほどに、急ぎ御用人參らるべしとあり、素破こそと早速に官兵衛駈つけ、其邊りの人夫を雇ひ各々手を別ちて、其夜九刻時までかゝり四宿の木戸まで尋ね廻りたれども、何處へ落のびけん、更に其手懸りだにあらざりけり。

(七)

若黨の藤造は其日のお伴を仰付られし事とて萬一の事あらば己れの落度とおもふものから、是非共さがし出さでは措くまじと其日品川の方へ見込をつけしが、一と筋道の事故、途の懸茶屋へ立寄、往來を行く馬方、駕籠かき、上り下りの人足など、逢ふ人毎に尋ねつゝ一夜を明かして翌日川崎の渡場まで來り其所にて段々尋ねし處ろ、昨日八つ刻ともおぼしき頃ろ、下樣のものとも見へぬ十八九のうつくしき女中が渡し塲へかゝり急ぎの用事にて神奈川の宿まで行きたし、渡し錢のなき故、何卒これにて渡したまへとて銀のかんざしを遞與されしゆえ、人々不審して御持合せなくば宜しく候。僅かの貫錢に斯る結構なる品は請取がたしと斷りたれば、最早妾は身に不用なもの、金銀とても露惜しからざるとの事故、皆々顔見合せて、扨も合點の行かぬ事とて其由申して、品物は問屋に預け置ぎましたといふ、扨ては其の女中にまぎれなし、姿は斯く／＼にて頰の下ふくれた、眼元に何とも愛嬌のある女そう／＼いまだに其の美しさが眼に殘つたと、冗言らして言ひけるを藤藏が半分聞いて扨は奥方に紛れなしと、早速問屋へ案内を頼み、其の簪を檢じ見るに、擬ふ方なき影蔦の定紋あり、然らば其人は何處へ向けて立ちしやと尋ねければ、昨日店での話しに鎌倉まで行くとの事なりしが大方草臥れの容子にて駕籠に乘りたしとの事なりしも人足賃四百文なくては繼立がたく、渡錢の持合せもなき御身ゆえ所詮相談にもなるまいとの事なりしが、人足賃にはこの櫛を遣いすとの事にて又もや大枚の所持品を出されたり、後にて其櫛を吟味しければ、這は全く瑇瑁とやらにて安直に踏みても二三兩がものは確なり僅か四百文の處ろへ、斯く大造なる品を受取ては後日の障りにもならんかと大切に仕舞ひ置き候、彼の地へ參りたる人足も往復十八里の處なれば軈て歸り申さんほどに。暫時御待ちあるべしと言はれてさらばと問屋塲へ腰うち掛けて煙草など喫み居る處へ。人足歸り來りしかば仔切に尋ね、正覺院と申す尼寺なりし事判然したれば、其所へ馳つけ、律義もの、委細構はず、玄關より大聲にて呼び立て、進藤伊織の家來にて安田藤藏と申

すもの、昨夜當院へ御こしなされ候、駈込の女中に一目御遭ひいたし度候と申しけるを、内より達磨に似たる尼駈出で、何者の粗忽ぞ、這所は男禁制の場所なるを心得ざるかと目を瞪らして一喝したる見幕に藤藏莽と荒膽をひしがれぬ。

（八）

進藤家に於ては奥方逃亡して行衛知れずとの事に、一時は上を下への大混雑、家來廝丁打寄りて内々詮義をなしけるを誓願寺の裏の垣根を斫拔けたる跡を見れば何様驅落にまぎれなし、されど我等が御新嫂に限り、色戀の上にさる心得違ひのあるべき筈なし、これには何か深き仔細のなくては叶ふまじ、とおもへど、日頃つゝしみ深き性質とて下人の知るべき譯もなし、唯亂心とおもはゞ、それのみなり、伊織も今更に合點は行かじ、岳父主計諸ともに思案にくれしが、兎も角もと送り越したる彼の一封を披きて歌の心を吟味するに。

千代までも咏めし花も吹けばなほ
なごりは盡じ夏の夜の月

とありこれ、盛りの花を咏むるうちにも、風吹けば散るべきものと無常の心を顯はして更に夜の月にて結びたるはいよ〳〵人生のはかなき處ろを言ひあらはしたるものなり。扨は世上によくあるためし、無常を觀じて俗世をのがるゝ心にやと、斯る處ろへ藤藏喘ぎ〳〵て歸り來り、搜索の顛末を詳しく語りけるに、いよ〳〵それに紛れなしと、一同一まつ安堵はせしものゝ夫婦の中に千さいあるものを、唯譯もなき遁世も近頃不審の至り一言の挨拶もなさで、山院に駈込みし事、更に其の意を得ざるなりと、それより官兵工鎌倉へ馳せ向ひ、腕づくにても迎へまいらすべしと必死となりて爭ひたれど、法門の事は理屈にて押し難く三日三夜玄關につめかけ、樣々情實にからみて申しけれども其意を達する事叶はず空しく歸りぬ、

さるほどにおかねは鎌倉の尼寺へかけ込み、住持正覺院妙蓮比丘の弟子となりしが、始めは尼寺の法として七日の間は追手の樣子を見て、容易に剃髪を許ざりしが、仔細を話せば若な女に珍らしき貞烈の志と住持も

感じ、八日目にいよ〳〵黒髪を卸して浄蓮尼と改め、縞絹の小袖を墨染の法衣に改め、水晶の數珠爪ぐりて行ひすましぬ、常に不動王を信心せしより、佛道に入りても並々のものとは違ひ、經を覺ゆるにも苦しまず、法を修するも難からず、浄蓮尼今は心易く朝夕をくらし、屋敷の事も我身さいあらざれば、伊織の身の上に氣遣ひはなし、よしや半太夫の知るとても、此所へ來て尼となりしを知りなば、いよ〳〵戀も醒めぬべし、金次郎が行末心元なけれど、父親のおはしければ、成人に疑ひなし、此上伊織どの再縁を求めて安堵なされかし、我が願ひはこれにて足れりとて徐ろ佛門の高きに感謝をぞなしける。

（九）

劍法の師範家とて評判一家中に鳴り渡り俊才の聞へ高かりし矢部半太夫も、一旦の迷ひに心の鏡曇り、あはれ色情の奴となりて、朝夕遑々然として物足らぬ心地しつ、胸も塞がり、氣分もすぐれず、間もなく女の家出したるを聞きて、更らに心を苦しめ、それよりは一しほ氣の結ぼれて病の床に臥し居たるが、近習役にて日頃昵懇せる山田甚五郎といへるが其身も落馬して撲身を痛み、暫時湯治にと、すゝむる儘に半太夫も同意なし、兩人相携へて伊豆の熱海へ赴きける、近邊の人々共これも遊び半分湯治に來り、互に出合ひ、珍らしき浮世ばなしの央に、甚五郎、偶と伊織か妻の事、言ひ出して近頃合點の行かぬ事共なりといへば、傍に居合せたる隱居躰の男、受取りて御話しの容子にては私し、少し心當りのはそれは、先月の末つ方、年の頃十八九の美しき女中が伴をもつれず唯一人私共の休み居たる問屋塲へかゝりて、鎌倉まで駕籠を繼立てとの事なりしが、四百文の駕籠の代に瑇瑁の櫛を渡し去りたれば、あまり不審と、香具屋共に見せければ七匁より五兩まで直段つけて候、世には珍らしき事する女もあるものよと、何心なく語るを、半太夫聞耳立てゝ、扨て其の女中は如何に相成候やと、聞きければ、鎌倉の尼寺に、駈け込みたりとの噂にて候といふ、傍なる人の語るに、總別尼寺へは、夫の方より離縁されし時入る習ひなれども、途を忍んで駈

込むは、夫婦の緣を我より切りて思ふ男に添はすか爲めなり、されば其の女中も一時は尼となりしもの、程經て時分を見合せ、還俗する心にやあらんと、推量していふを、元より心曇りし牛太夫のこれを聞くや否、おかねが尼となりしは一圖におのれへの心中を立てんが爲めなるべしとおもふものから、湯治もそこ〳〵になし、甚五郎へはよきほどに言ひ直き、明日直ちに仕度をなし、江戸へ歸つて後の障りの種を絕やしてこそと凄くも心を決して闇に伊織を狙ひ、一刀に打果して、其夜のうちに早駕籠を織立て鎌倉さして落のきたり、

(十)

始めより毒心を包藏したる牛太夫にはあらねど、事の行かゝりは人の心を鬼ならしめぬ、情誼淺からぬ交友の一命を打果し、おのれは二百石の家祿を土芥と擲ちて、其夜鎌倉へ立退きたる牛太夫は、豫て聞きたる雪の下の尼寺正覺院の朱門の前を二三度行きつ、戻りつ、扨て玄關へ訪ひ、姓名を名乘て淨蓮尼へ面會を求めければ、やがて六十あまりの老尼水晶の珠數爪ぐり出て來りぬ、未だ一應の挨拶もなきに屹度牛太夫の顏をにらみつけ、泰然として言ひけるは、扨て〳〵其元は武士にあるまじき男なり、ぬしある女に不義を申懸け、あたら貞女を世捨人の數に入れたり、彼の人の佛道に入りしも一つは家の障りを除かん爲め、又一つには萬更他人にもなき其許の迷を晴さしめん爲めの、遠き慮りぞかし、それをも悟らで尼となッたるものを慕ひ來るとは何たる腰ぬけぞや、淺猿しとも汚らしとも譬へやうなき人非人、物言ひ替はすも心の穢れ、匆々立退いて少しは身の恥をも覺悟せられよと威丈高に言ひこむれば、牛太夫今更言葉につまり、何と言張らんすべもなかりしが、一方ならず戀におこがれ、其上二百石の地行も捨家屋敷をも擲ちて來る上からは、破れかぶれ、腕づくにても奪ひ取るべし、高の知れたる尼寺の有象無象なぞと、力みかへりて進まんとすれど、豪氣の尼に手をつけ難く、無念を呑みて其儘空しく引取りしが、疵持つ足の追手を危み、東海道より西國さして打のびたり。

曩きには奥方の遁走あり、今又主人の横死、一家の不運

名狀すべからず、慘むに詞なく、悔むに辭なし、悲慘至極の境界も家に殘れる人のなければ、面のあたり憐みて親の涙を灑さんものは御岳父山名主計のあるばかり一子金次郎はまだ東西を辨へぬ頑是なきもの、實に申すも愚かしき事ながら斯る時にこそ、神ぞ哀しんで傷らんほどの人こそ欲しけれ、又斯る人の有りてこそ死したる人も冥すべきなれ、現在奧方はありながら、今は世を捨てゝ俗世の涙を灑すの人にあらず、無念とも心外とも、扨ては如何なる因果ぞと、奧齒嚙みしめ、熱鐵の悲涙を濺ぐものは家の忠臣官兵衛なり、讐仇は矢部牛太夫なり、極惡非道の犬畜生、おのれ其儘置くべきやよしや汝に隱形の業ありて日本三界落ちのびるとも、草を分けても搜さで置くべき、譬へ汝に飛鳥の術もあれ、我等雷神となつて汝が頭を打碎かで置くべきや、不俱戴天の主の仇、覺悟をせよと、宛然其人の眼前にあるが如く、悲憤を呑んでおもひ立、家の岳父山名主計に一念の誠を語り、幼子金次郎を小脇に抱え、心は同じ義膽の藤藏と三人相携へてまづ鎌倉へ行き淨蓮の尼に面じ、事の顚末を仔細に語り、よしや佛門に身を寄せ給ふとも現在良人の橫死を見て心を塵外になし玉ふは佛の道に候はじいざ立ちたまへ、我等に同道して諸共に敵を打ちたまへ、躊躇ひたまふは我等の志を蔑したまふなりと、斯くて其場に淨蓮を還俗させ、同勢四人仇を狙ふて東海道を下りけり。　（完）

雜録

支那の婦女子

在清國漢口府　西澤公雄

近來女子敎育の忽諸に附すべからざること國民一般の頭腦に浸潤し漸く舊來の習慣を改良し智德躰三育に關して完全なる良方法を求め男子敎育と駢馳して女子の品格を高尚ならしめんと期するもの多きに至れり然れば其方法の一として各國の風俗人情等を調査し過去現在の狀況變遷の模樣等に就て考究し粹を拔き華を採り之に本邦古代の美風を折中し金甌無缺の民たらんこ

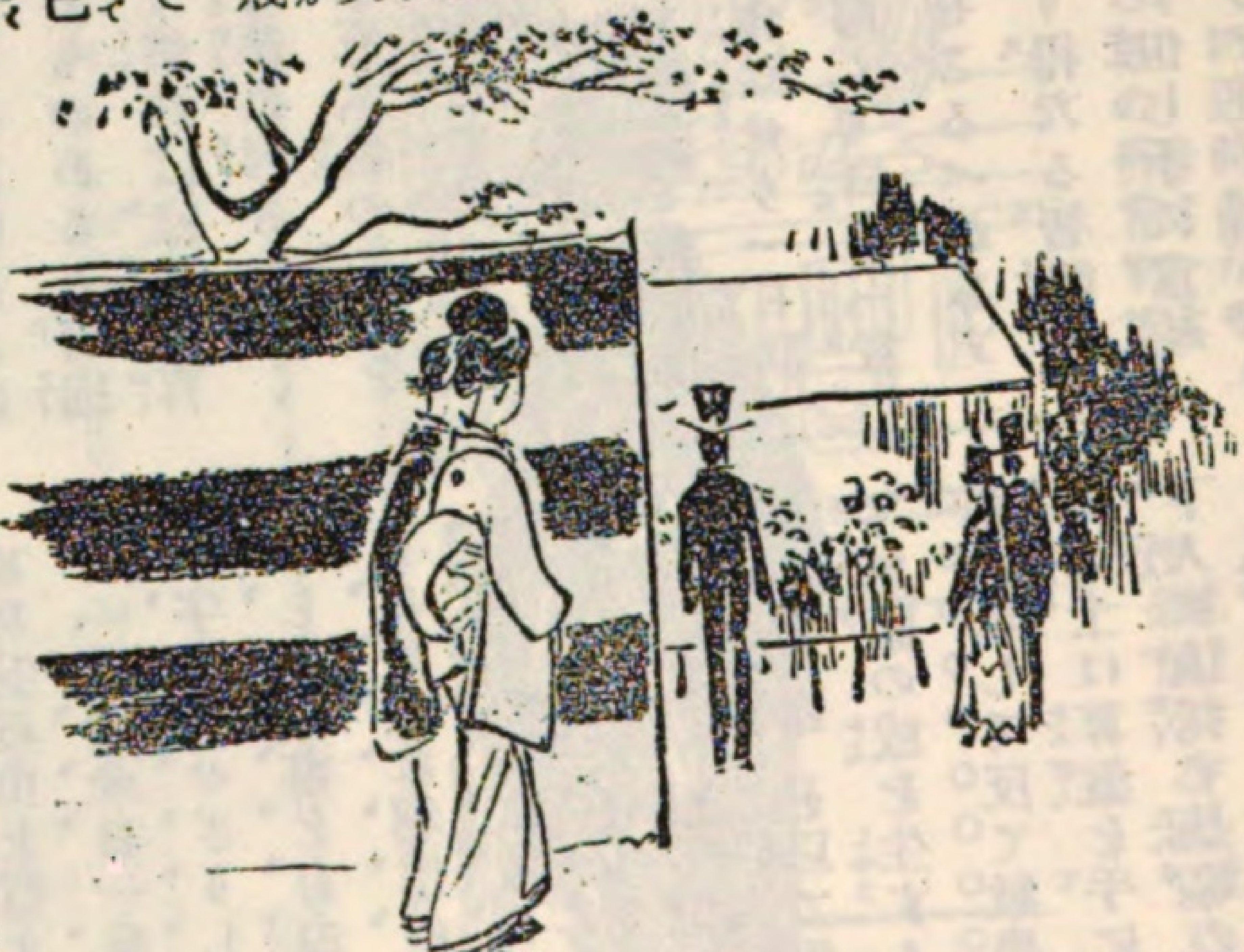
とを欲せり然れども今日の趨勢は多く世人の眼欧洲人の上にのみ注がれ稍之に模倣せんとするの偏僻を生ずるか如し此時に乘じ東洋の一大老國而かも世界人民の大多數に依て愚弄せられつゝある清國女子の風俗を紹介せんと欲するは時勢の變移を知らざる愚物なるが如きの感あらん然りと雖ども飜て我國の地勢を顧みれば隣國支那とは一海洋を隔つるのみにして將來の世界大勢に對する苦樂は必ず相關聯して利害得失の影響又尠少にあらざるべし殊に同文兄弟國の稱あるの外輔車唇齒たるの實情を存せさるべからさるの一國なれば其風俗人情は我邦女子の最も注意せさるべからさることと信ず既に我邦人の篤志者は政事に外交に商に工に其他百般の事業に就て支那の實況を調査するに至り又清國內地に入り込み諸般の業務に從事するもの日に月に益々多きを加へし此等の人士の意思を概括すれば國家の爲に東洋の基礎を固定せんとするの外に出でざるべく其結果は清國を開發して日本化せしめ其風俗にして改むべきは之を改め正すべきは之を正し陋風蠻習を破却して日本的の眞正文明を輸入し欧洲人に對して更に毫末の耻つるなきは國民となし一方に於ては我邦の藩屏となすにあらん乎、

我邦の婦女子にして隣邦支那婦人の風俗人情を知悉するの曉は如何なる結果を生すべき乎請ふ先づ之を說明せんに一國の興廢は人才の多少に關し人才の多少は敎育の盛否に其源を有し而して敎育の根本は家庭を理する婦女子にあり人の母たらさるべからさる婦人は其責任斯の如く大にして斯の如く光榮あるの位置を占むるものなり故に他國女子の風習を見聞すると同時に其心中必ずや研究すべき疑問を生ずべきなり彼國女子の風俗は斯くの如くして國勢の現況は斯々の有樣を呈す國勢の消長は女子敎育の如何に基く內にあつては之を般鑑として自國の將來に及ぼし大に奮發興起する所なかるべからず之を外にしては彼の風俗は將來斯の如く變更せざるべからず斯々して其改良を獎勵せざるべからず等の想像自ら胸中に湧出せし而して時機の熟するに際會せば婦人と雖ども率先して間接直接に隣國支

那を扶翼せざるべからずと云ふにあり予の意見も全く
玆に存す強ち一老野蠻國女子の人情は讀むに足らずと
して之を却くる勿らば幸甚

女子の學力

清國現代の女子は大概文字を解せず間々上流及中流人士の夫人令嬢にして多少の漢字を讀み又詩を賦するものなきにあらずと雖ども清國數億の人口に比すれば九牛の一毛に過ず然れども清國古代の婦女には書畫を善くし賦詩を以て名高きものあり其遺書等は今尚各地に散在し人口に膾炙するも尠きにあらず殊に花柳界に賤業を營む婦人すら往古は書畫を以て客を慰せるもの數多なりしと云ふ已に中流以上の女子にして學識なき斯の如し下流貧民窟に於ては論するに足らざるなり然らは中流以上の人士は其子弟を教育するに如何なる方法



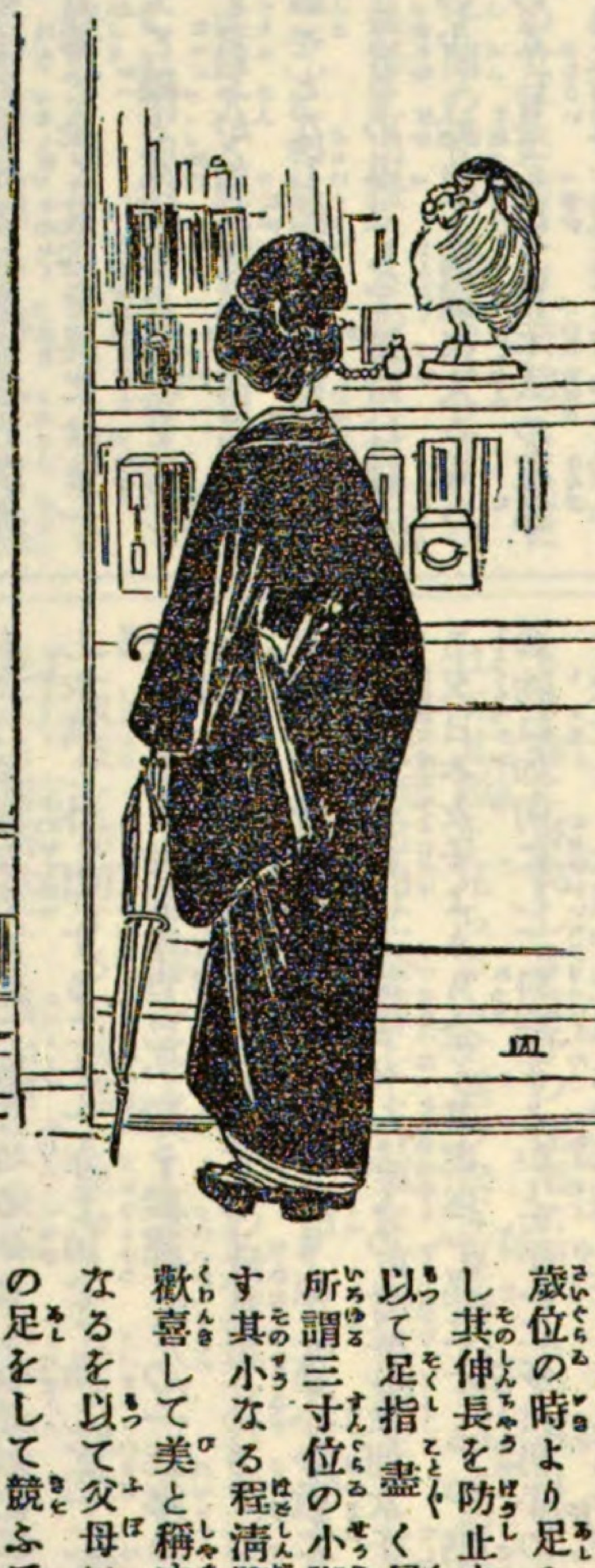
を用ふるかと云ふに大抵各自其家に相當教育ある先生を雇聘し午前九時より午後八時に至るの時間を以て四書五經を讀講し又習字賦詩を教授す雇聘せらるゝ先生と云ふ人は多くは清國考試を經て及第したる秀才にして毎月の報酬多きも十圓を超えず此報酬を以て衣食し猶更に研磨砥礪して次回の考試を經て擧人とならんと欲するは先生の希望にして大概斯の如くして一生涯を終るもの多しと聞けり子弟の修學して得るの智識は只僅に讀書詩字の三科に過ぎず父兄及母たるの婦人も更に少しも此等の教授の有樣に干涉せず所謂先生の意思に一任するものなり女兒に到ては此校堂に入るを許さず又進んで修學せんと欲するの希望を有せさるが如し然れども又時に賢婦人なきにあらず此等は自己の父兄子弟の教習したる

ものを更に自己の室内に於て學修するものにして其苦辛一方ならず上海香港天津の如き外國居留民の數多ありて耶蘇教徒の居住するの地に於ては在外清國婦人にして文明化し英語など達者に會話するものあるも自國の漢字に至ては習修するもの僅少なり然れば家庭教育の行はるゝ筈なく男子のみゼ前述の方法に因るか若くは寺子屋の如き多きも四五十人少きは五六名の生徒を教習する一小家屋に住居する秀才に依賴して父母は更に顧みさるもの比々皆然りとす上流の女子も自己の姓名を記すもの殆んど皆無と云ふを得べし予嘗て數年前清國寧波府にありて土地の紳士と屢會談せり一日談偶々清國教育に及ぶ時に予彼の紳士に問ふて曰く「貴國は日本國と兄弟なり互に相補翼扶助せさるべからず予幸に貴國にあり嘗て日本が貴國より得たる智識の報酬として貴國の子弟を教育せんと欲す但し予に意見あり先づ婦人をして讀書の感念を生せしむべし之を爲すは最初に女子をして文字を修習せしむるにありと」言未だ畢らざるに彼紳士は憮然として答ふらく「男子の教育は須らく請ふ貴下を煩さん然れども女子に至ては斷じて文字を教ゆるの必要なしと」予怪訝に堪えず直に其理由を質すに彼は得々として氣焔を吐露して曰く「清國今日一家團欒家庭圓滿の根源は婦女子をして文字を解せざりしに因るなり何となれば萬一彼等女子をして讀書を自由ならしむるの曉は信書の往復を便にするか故に秘信の取りやり頻繁となり遂に閨門を攪亂し傀聞の外に流るゝあるを致すべし是を以て清國上流紳士は殊に子女をして文字の意を傾注するを忌む所以なりと」予之を聞て覺えず失笑飜て清國人の無智殆んど常識を以て規すべからざるあるを痛歎せり特に不思議の感を生するは利を争ふことに最も鋭敏なる清國人にして反て數學を賤視するの風あること是なり上流人士は算盤を手にするを潔きよしとせず多くは之を下人に依托す是等の風俗は恰も封建時代の日本の士風に酷似するが如し又理化學の如きも男子すら今尚餘り喜はさるの有様なれば婦人に至ては到底其何の謂たるを知らず嘗て予清國上海に在て化學の試驗をなして清

國上流人士に示せば其多は其變化極りなきを視て妖術となし化學と呼び反て之を嫌忌し其理由を質問するが如き人は至て稀少なりしことあり幸に近時北清より南清にかけて日本紳士の視察を試むるもの非常に多く又廿七八年戰役後より日本の文明を羨慕するの念慮清國人中に勃興するの傾向あり各方面に於て女子の教育を施行すべしとの聲吾人の耳に入るもの稍增加するに至れり歐人亦清國舊弊習を破壞して彼國の文物を輸入するに勤め居れり遠からずして其結果の見るべきものあらんを信ず

婦女の常住

清國女子の其家にあるや富家にありては各自一個の室を有し寢臺其他一切器具皆此內にあり貧家にあつては一室數人雜居すると雖とも大抵男子と女子とは別居せり但一室を以て一家となすの下民に至ては誰れも彼れも雜居なるを以て男女の區劃を立つる能はず一般に女子は例の纒足即小兒六歲位の時より足を緊纒し其伸長を防止するを以て足指盡く屈曲し所謂三寸位の小脚をなす其小なる程清國人の歡喜して美と稱する所なるを以て父母は女兒の足をして競ふて細小ならしめんとせり女兒の苦痛迷惑少々にあらざるべし然れば富人は下婢の肩に倚りて歩行すれども貧民の婦女に至ては自ら勞働を爲さゞるべからざるを以て小脚ながら自然重物を擔ひながら歩行を自由にするに至れり北方南方の女子には



多く普通の足を有するものあり清國人士は一般に此等天然生育せる足を有する婦女を反て輕蔑するの風あり南清廣東女子は普通足を有するが故に下婢として需要非常に多く清國繁華の都市中流以上の紳士の婦人は大抵此等の女子を下婢として使用せり纏足には小靴を穿ち股衣及上衣を着し常に椅子に座せり其風俗寧ろ歐洲人に類似せり清國人には日本と全く其俗を異にせる一奇風あり即ち如何なる炎天と雖とも襪子及股衣を着して身體の下半を被覆するを貴ぶが如し故に如何なる貧者と雖ども下部を露出することなし然るに之に反して上半身を露すは左まで怪まさるのみならず夏時は紳士と雖ども上衣を着するもの少し始めて清國に入るもの一度は此風に驚かさるものなし是を以て日本人の支那に在るもの夏時暑氣に堪えず浴衣一枚にて市中を散歩するものあれば先づ股衣なきと足部を露出するとを不思議そうに目擊せり或る支那紳士は忠告がましく之を改良せよと申込たることあり而かも自己の上半身腰部以上は全く露出して寸毫の衣類を用ひず習慣の異なるは實に奇妙の現象を生ずるものなり已に女子の室內は靴の儘住居するを以て土砂塵埃積層し殊に公衆の前をも憚からず清國人は勝手に室內に吐唾をなすを以て其不清潔言語に絕せり然れども婦女子は之を清淨せんとするの風もなく更に顧慮掛念せさるが如し一般に清國人には清潔なる感念は皆無なるが如し女子は之に座臥し衣食し外出することと一年を通じて殆んど一二度に止まるべく此間唯自己の靴を縫繡するの一能事あるのみ然れども是は上流の婦人にして下流にありては男子を補けて勞働をなすものあれども至て僅小の數に止る多くは男子に依て座養せらるゝのみ是れ歐洲女子よりも又日本女子よりも全く其趣俗を異にするの點なり

食物は如何にして料理するかと云ふに多は男子の厨夫を使役せり大槪中流以上の家族に在ては二三の僕男及厨夫を使役し女子は一切食物の料理に關與せず隨て主人の口味に適するものを料理するの念慮もなく其夫婦間の無愛想なる到底日本人の風に比しがたし前に述べしが如く讀書する能はず又音樂等の快樂を以て消閑

するの志想もなく況んや一家擧て山林田野の間を逍遙して光風清月を弄するの概致なし何を以て異人傑士を生するの理あらんや

婦人の交際

下流社界の情躰は婦人間の交際日本の風俗と差異なきが如しと雖ども中流以上の女子に至ては其趣を異にするもの多し概するに女子間の交通は頻繁ならざるのみならず一年一回新年の挨拶に出掛くるか若くは清國の三大期節(新年、仲秋、端午)に相往來するの外交通殆んど無きが如し是迄は西洋婦人と絶對に異なる所にして日本封建時代の女子俗には稍相似たるの感あり而して他人に顔を見らるゝを嫌忌すること甚しく男子を見れば大抵隱匿して自己の室内を出でず殊に主人と極て懇意の間柄なる友人の來訪するあるも室を出て一辭を述ぶることなく酒宴の席に侍りて主客の間を斡旋することなく客亦主人に向て令夫人の動靜を訪ふことなきを以て反て禮節を重んずることゝなし興味單純にして到底日本人の爽快を感じ精神を慰しがたし甞て予清國に滯在するの間殆んど二年間隣家の主人と交際して漸次彼我の胸中を吐露し親族親友間の如き情誼を以て相交はるに至れり主人常に來宅し予又常に彼宅に來往し食を共にし快樂を分てり而かも家族中女子の數十二三名あるに拘はらず此間遂に一語を交換せしことなかりき殊に可笑しきは予の住宅に面するの窓は常に閉されて其顔を見らるゝを避けたり夏時百度以上の溫度なるも大抵室内に蟄居して外氣に直接に觸することなく其陰氣なること驚くの外なし然しながら支那人をして此等を評せしめなば清國眞正の賢婦淑女は全く此種の女子を稱すると答ふなるべし其令夫人が三大節に當りて親戚を訪問するの狀態を記せんに是又想像し難き大壯なる滑稽的なり最初轎子(我國の輿の如きもの)を婦人の室迄運び玆に於て婦人之に乘り之を門外に運搬し來り爆竹と稱する南京花火を打上くること少時間にて前後に護衛の下男下婢あり四人の轎夫之を擔ひ先方の門に着すれば更に花火の轟々たる人聞き其儘之を擔ふて訪問せんとする婦人の室内に入りて轎より出るを常

とせり故に數年間絶えず其宅に出入するの人と雖ども婦人の顏を見知りしもの少く殊に甚しきは下男にして婦人の容貌を知らざるものあり斯く一般に婦人と男子との間は交際せざるのみならず極て冷淡を以て隔て居れども女子と女子との間は親密なる現象あり清國紳士は一人にして多數の妻を有するを名譽とするの風あり日本の如き妻と妾との區別なし均しく同一勢力の下妻として夫の愛を受くるものなれども其相互間は實に姉妹の如く相親み相和し嫉怨等を生するの例極て稀なりと云へり一方に於て男女七歳にして同席せずとの舊嚴風俗の存すると思へば一方に於ては一人にて數妻を同居せしむるが如き蠻風あり支那の人情日本と同一の談にあらざるもの益々出て益々奇と云ふべし。



瓜生岩女（六）

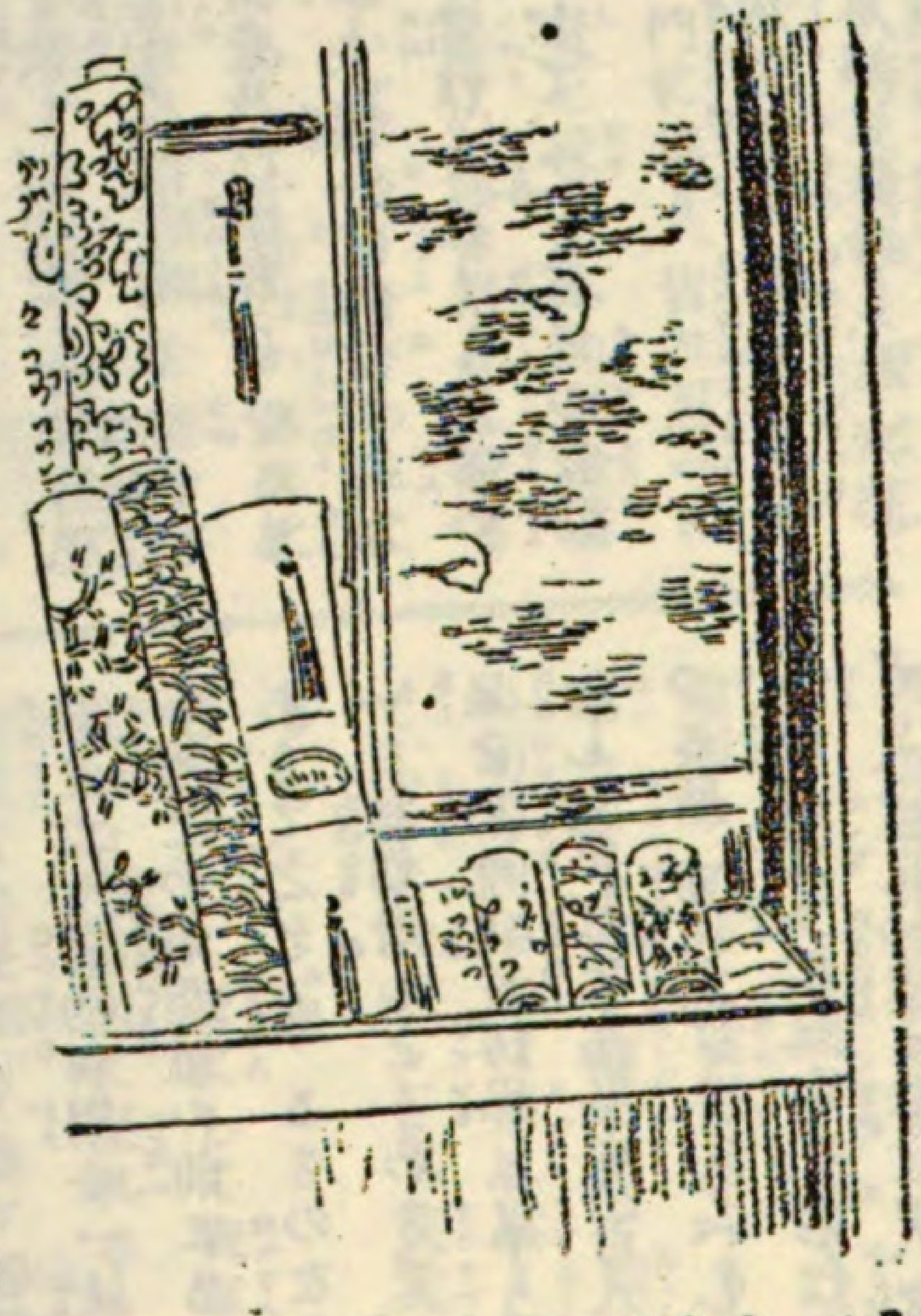
文學士　常盤大定

◉內裏に召さる

明治二十四年六月、さきに改良せし飴糖製の菓子をば、篤に心を籠めて製造し、當時の內閣記錄局長牧野伸顯氏を歷て、皇后陛下に奉りしに、陛下も岩女が奇特なる行狀をかねて、聞召されるれば、世のつねの飴菓子とは思し給はず畏くも　御滿足との御旨を下し猶日比の善行を嘉賞するほどに、今後も增々勵み勉めよとの　御令旨を、香川皇后太夫より傳へさせ給へり、次て宮中に召され、　御內意を以て　御物を賜はりたりき、室町、高倉、柳原、千種、小倉、園、税所、山川等の各女官よりも、種々の贈品どもありて、岩女は身に餘れる面目を施しぬ、此際にやありけん、女官たち數多の中にまじり、飴糖より菓子を製造し、九重の大奧に時ならぬ春を現出せる事もありきとかや、

◉故鄉の德化

會津の地方にては岩女の德に移りけん、貧民子女の敎育に心を傾くるもの漸次多きを加へ、岩女の歸鄕を促す事頻りなれば、流石に其切なる情をも捨てがたく、事の顚末を院長又は山川女官に親しく陳述せしに、さ程までの事たれば、速に歸國して鄕人の意に從ふこそ、なかく〳〵によかるべしとの勸めにより、遂に此年八月、養育院の勸めを辭して、鄕里若松に歸りつるが、有志者は數里の外に出迎ひ、若松町に入らんとするや、八百余名の士女、此處にも待ち得て、奏樂唱歌などもて、盛に岩女を歡迎せり、是より普く同地方に會員を募り、貧民の兒童を養育し、古より行はれしいとも〳〵忌はしき墮胎の惡習を根絕し、猶其他あらゆる弊風を矯正せんとの目的にて、北會津、耶麻、河沼の三郡に、各々育兒會一箇所つゝ、又若松に濟生病院なる慈惠病院を設立し、岩女は其會長に推されしかば、岩女は奮て之に任せりき、



◎震災　明治二十四年十月、愛知岐阜地方に震災の慘狀あり、岩女は之を聞くや、喜多方町に婦人慈善會を組織し、會員の手に成れる種々の製作物品を鬻ぎ、それより得たる收益と、會員の義捐金とを合せて、これを彼地方に送れり、

◎瓜生會　その後岩女は益ゝ育兒の業の擴張を圖り、翌年五月に至りて、福島町に瓜生會といふを設け、貧民を救恤し、且つ普く世人に飴糟利用法を傳習するの目的を以て、其發達を計り、更に福島鳳鳴會といふに育兒部を置きて細民子弟敎育の法を立て、猶遍く福島縣下を巡回して、飴糟利用法を傳習したりき、

◉廢物利用の終

岩女思ふやう、水飴の改良法、及び飴糟の利用法は一縣に用ゐてだに、かく大なる利益あれば、もしこれを日本全國に推し擴めなば、國益を爲す、頗る大ならむ、郷里に敎ふるの小を去りて、廣く之を傳習するの大に就くに若かずとて、再び出京の志を決し、明治二十七年八月、遂に出京して、根岸の里に居を占め、專ら水飴改良の方法を傳習し、之に要する諸費及び傳習を受るもの、賄費さへも、自ら之を負擔し、偏へに此法の普及せんことを計り、而して製出せる水飴はそれ〳〵慈善の道に寄附し、飴糟は其食用法を示して、之を貧民の救助に用ゐたりき、

此時恰かも征淸の軍起りて、經濟界逼迫し、貧民の窮を訴ふるの聲益々熾なれども、人皆軍事に狂奔し、平素慈善家と呼ばるゝものも、多くは貧者を顧るの遑なかりしが、此際に中りても猶たえず岩女の眼に映じ、捨てんとして捨つる能はざるは、是等貧民の救濟法なりけり、若し徒らに之を看過しなば、飢寒の悲境に陷るの餘果は如何なる珍事を惹き起すも計られず、今の時に之を救濟するの策を廻らすこと、何よりの急務ならめとて、名ある人々に謀りけれど、戰役最も酣なる秋とて、遂に顧るものなかりき、されば岩女は獨力にて及ぶ丈の力を盡し、力盡て後已まんものと、こゝに苦心の結果またも廢物利用の一法を案出しけり、岩女はかねていづこの燒藷屋の前にも、堆くつめる甘藷の切屑の、誰ありて之を顧るものなきと、惜しき事に思ひけるが、一日其切屑のとりわきて夥しきにあひ、暫く其前に足を止めつゝ扨思ふやうは、一の燒藷店にして猶斯の如し、若し之を府下八百八町の廣きに求めなば、日々捨つる所邱の如くなるべし、かねてよき工夫もかなと考ふれども、直に妙案も浮ばず、試みに一籠の切屑を二三文にて求め之を携へ歸りて、例の飴製造法に傚ひて、之を製せしに、其結果甚だ良好にて、實に美麗なる飴を得たりき、是に於て人を傭ひ、處々の燒藷屋に特約し、日々に之を集むもと、藷屋は捨つるも猶煩はしき程の切屑な

れば、その一厘にても價を生ずるを喜び、皆競て之を與へしを以て、一回に車幾輌の多きを得しこともありき、而して之より得たる利益を以て其傳習の費に充てたり、岩女は廣くこの法を人に傳習せんとて、日に〳〵幾釜といへる甘藷飴を煑て、問ふ人毎に其法を習はしめ、又其糟を以て團子、餅などを作り、貧者に施しゝかば、多くの貧民は、日毎に岩女の門に集り、皆其惠みによりて飢を凌ぐを得たり、又自ら資を投じて、飴製造器具を求め、貧しき人々に與へて、自活の途を得せしむるなど、頗る此方法の普及を謀りしかば、後日府下のみにても、此法によりて業を營めるもの三十餘戸の多きに及べりとかや、當時岩女が製し出せる甘藷飴を赤十字社病院に於て、技師の分拆せし成績によれば、氣味佳良にして、最も滋養に適するとの證明ありしかば、岩女の喜び一方ならず、同年十一月、其飴を以て、陸軍衛戍病院及び赤十字社病院に寄贈して、征清軍の負傷病兵の滋養品に供したりき、

岩女の此利用法は飴のみならず、之より菓子麪包を製するの料とし、或は燒酎、及び酒を製し、又其糟には少許の米粉を和して燒餅を作り、又は之を以て一時味噌を造るの料ともなしたりき、岩女は元來身を持する頗る嚴にして、酒類は涓滴も口にせしことあらず。而して酒、燒酎等の製法を發明せしは、頗る奇異なれども、岩女はかねて外國米の輸入多きを患ひ、米によらずして造酒の一法を案出せんものとの工夫を凝せしを以て、圖らずも此一新名法を案出したるなり、岩女の此甘藷の切屑利用法は前に屢々記載せる飴糟利用法と相并びて、尤も心をこめ、又尤も其効果の大なる二大發明なり、

◎恤兵　既にして我軍遼東の野に於て、飢寒と共に戰ふの情報切に至れるを以て、岩女は到底根岸の宅に安住するを得ず、この秋歸郷の上、郷人の間を東奔西走し、說て曰く、從軍の士をして一層報國の誠を盡さしむるは、同胞の手に成れる衣食の媒によりて、郷を思ひ國を懷ふの情を加へしむるに過るはなしと、頻りに食料品の寄贈を勸誘しければ、到る處贊同せられ、頓に夥

多の食品を得てければ、岩女は之を携へて、恤兵部に献ぜるに、恤兵部に於て之を檢せしに、長日を保つ能はず腐敗の虞あるを以て、其意は賞せしも勞して益少なからんを諭して、之を却下しけり、是に於て岩女は更に一種の雪鞋を考案し、有志者を勸誘して、献納の擧に出てしめ、以て遼東荒野の雪中に苦戰せる軍隊に力を添へたりき、

◎紀念織

明治二十八年に至り、大山、西郷兩侯、土方、樺山二伯、三島子等の各夫人と共に、東京瓜生會といへるを設立し、征淸及び征臺の役に於て、或は敵の彈丸鋒刃に斃れ又は病魔瘴癘に犯されて、一朝異域の鬼と化せし軍人の寡婦にして、良人の死後能く婦道を守りて貞操を完ふせるものは勿論、幷に世の操正しく婦德あるもの、全國を通じて三千に餘る人々に、各府縣知事の手を經て、銀盃及び紀念織といへるものを贈致し、一は以て哀悼の情を慰め、一は以て後世婦女の鑑と爲せり、紀念織なるものは頗る岩女の工夫を凝せるものなれば、少しく之を叙述するの要あり、

當時戰の尤も激しき折に際し、畏くも　皇后陛下を始め奉り、數多の女官、貴婦人たち、負傷軍人の爲にとて、宮中に於て繃帶を捲せたまひ、之を戰時病院に下附せられたるが、其裁ち屑は實に山を爲すまでに夥しかりき、其裁ち屑は尋常のものなりせば、實に價値なきものなれども、斯る千載一遇の出來事に臨み、畏くも玉手をだに觸れさせ給ひたるものなれば、空しく之を捨んも惜しき限りなりとて、土方伯爵夫人より、岩女へ下附の儀を願ひ出でられ、特に　允可を蒙りて、宮内省の馬車にて、之を岩女の假宅に送致せられたり、蓋し岩女が思慮に密にして、特に廢物利用の奇才ありしが爲なり、岩女は意外なる賜ものに接し、感涙に咽びつゝ、百方苦心の末、遂に之を織りて小旗を作り、以て永世の紀念とせんとの事を案出せり、是此名ある所以なり、岩女は、小旗の殘れるものを、各地の有名なる神社佛閣に納めて曰く、後世子孫をして、長く此歷史ある寶物を拜して、　皇恩の深厚なるを感ぜしめ、以て報國の念を增

進せしめんと、◉褒章の極

岩女が積年の行蹟は、古今無類なる事とて、其筋より懇篤なる申請もあり、明治二十九年六月、賞勲局より勅定の藍綬褒章を下し賜はれり、其褒賞の記は當初既に之を記載せるが如し、いふも愚なる事なれども、藍綬褒章とは善行表章の至極のものにて、或は非常に公共に盡し、或は極めて慈善に盡せるものに對して、下賜せらるゝものなり、此褒章を受けたるもの、數ふるに遑あらずと雖、就中慈善に盡せるが爲に、之に預れるものは唯二人のみ、加州の小野太三郎氏と、岩女是なり、女子の身にして、慈善の爲に、此至極の褒章に預れるものは、皇國廣しと雖、唯岩女あるのみ、如何に名譽の極みならずや、

◎大海嘯　二十九年の歳、東北三陸の海岸に古來未曾有の大海嘯あり、一時に數千の生命を海底に奪ひ去りて、實に目も當てられぬ慘狀を呈せしかば、岩女はまたと頻りに知人の間を奔走周旋して、多くの金錢物品を募り、之を罹災地に送りけり、

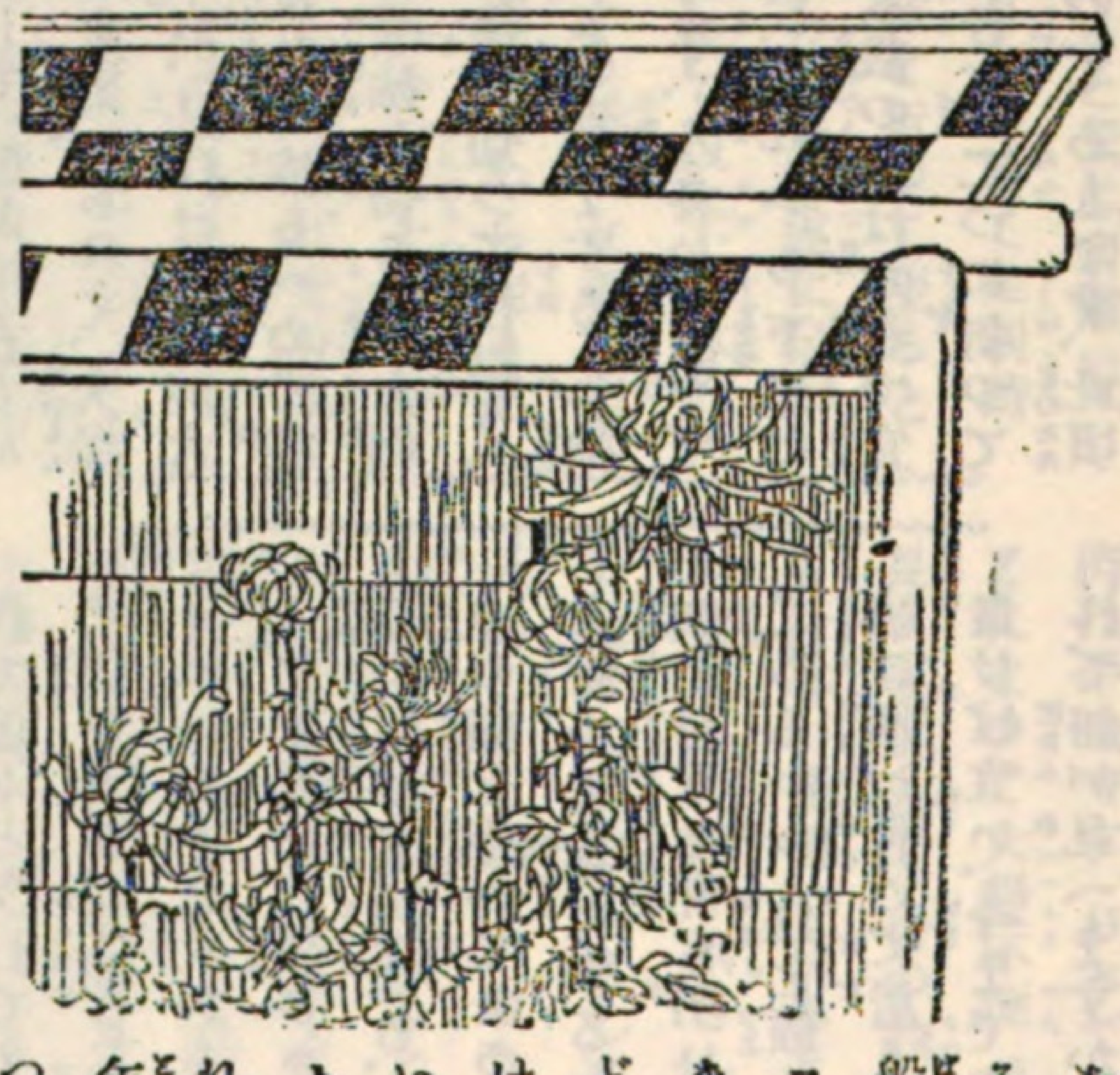
女子運動と衣服

警察醫長　醫學士　山根正次

日本人は兎角運動を怠る癖がある、それには、定めて原因のあることであらう、さて日本の衣服が運動に適せないのも、確かに其一原因であらうしかと思ひます、從來の日本服の運動に不便なるは、何人も認むる所である、それで私は此の頃衣服改良をやつて居る、衣服の改良は全躰家の改良が出來なければ、ナカ〱容易に出來ぬのであります、且又た殊に御婦人が運動が惡い、家の中ばかりに居つて運動をなさらぬ者が多い、しかし、今までの習慣に馴染んだ御婦人方に、袴を穿きなさい、袖を御剪ぎなさい、と云つてもナカ〱それは出來ない、併しながらそれをやらないと云つて、今日安んじて居るものではなからうと思ひます、させぬでも皆さんがなさるやうにしたいと思ひます、何故ならば、殊に婦

入に對して申さにやあならぬのでありますが、婦人の大きなのが出來ますれば、則ち立派な大きなお母さんが出來るから、良い子を御生みなさることになる、それかどうも婦人の衛生の惡い爲めに、此婦人の身體が次第に惡くなり、其結果が小さい者が生れると云ふ、現に私の如きもお母さんが小さいから斯う小さいので、若しもお母さんが大きかつたなら、非常に大きな男が生れたに違いない、だから私はお母さんの小さいのを恨んで居ります けれども運動は能し能く食つて育つたから横には能く張つて居る、それで殊に身躰は丈夫でありますが、どうも私は身丈が短いので非常に閉口し居る、それで私は後來未來のお母さんを拵へるには、先づ第一に婦人の衛生を善くすると云ふことが必要であらうと思ひます それて今までの着物は惡い、何が惡いかといふと、實に女の着物ほど紐の多いものはありませぬ、男のは一つの紐てありまして、袴でも穿けば袴に紐が着く位てありますが、婦人の紐は非常に多い甚だ卑陋なやうな御話でありますが、私は常に之れを言ふて居ります、湯卷に紐が二つ位ある、夏はヘチマの紐があります、それから、繻袢に此襟が後ろの方へ下るやうにぬぎ下げが出來るやうに繻袢に紐が着いて居る、或は二枚重に紐が着いて居ることがあります、そうして長い着物を着ますると腰へ紐を結びます、甚だしきになりますとどうです、人間の最も發育せにやアならぬ胸を傳つて居ります、胸の部分を縮緬で卷いて居る上に、大きナ板のやうな帶をしめて居る錢の掛つた帶ほど不養生の帶、一人位ではメめられない、二人位上と下と掛つてメめる、それて漸く締まる其上に、三味線の胴の半切みた樣な物を背負うて、そうして前へ結付けるのであります、それからどうであるかと云ふと、其上に帶止を以てピチンと引掛ける、凡そ十二三紐がある、髮の結び方はどうであります、たとへば高島田にしたらどうか、今のやうな着物を着て高島田を結ふ、島田の中には、小枕が這入つて居る、それで大變引張られて居る、此島田と云ふものは彼の島田の宿の賤女が、初めて結つた髮の形てござい

ますげなが、小枕が這入つて居る、他へ行つて坐つて御辭儀をしますと髮が引張られる、それであるから大きな帶を結んで居るなり、是れから小枕で引張ると云ふやうなことからして、御辭儀も中々えらい、御辭儀をするほど、自分が蹈んで歩く汚ない所の芥を、スウ〳〵ハア〳〵吸うて居る有樣で大變叮嚀なる御辭儀をしますると翌日はどうであるかと云ふと肩が張つて往かないといふ、歐洲諸國にあつては肩の張る病氣はない、日本の婦人ばかり色々種類がありまして、獨り小枕を入れるのは島田ばかりではありませぬが、ア、云ふことが害になる、それで私はどうしても此着物を改良いたさなければならぬと云ふのであります、随分幅が廣くつて豐かのようであるけれども、重たい幅のある帶をきつと占める、それが爲めに胸の周圍を強く、壓迫されて、發育をすることが出來ないことになります、それでありますから、丁度害は西洋のコーセットと同じことであります、それで外國においても、此のコーセットを廢することが非常な問題になつて、先般の萬國躰育會に於ても、婦人のコーセットを廢せしめると云ふ大きな問題が出て居る、大分米國などでは廢して居る婦人もありますけれども、未だ治く行はれて居ないのです、然るに柔いコーセットを歐洲では取つて居ります、それで私が考へたにはどうしても年を老つて婦人は改良が出來なくつても、今から極く惡い習慣に馴染んで居らぬ所の幼年なる、即ち學校へ行く所の御孃さん方をして、早くからして着物を改良せしめてやり、ましたならば、宜からうと思ひますので、私が一つ拵



へた着物がある、此着物は私の考ですが衛生一點張り便利で能く歩ける、運動を充分にさせることが出來ると云ふ法、此へ以て行つて美術と云ふことが混らにやァならぬと云ふことでありまして、梶田半古とか其々の方々が、朝鮮の服の如きものを拵へられて、大變優美のもの丶やうに認められますが、是れは仕立が六ケ敷からうと思ひます、今までの反物で拵らへぬと往かぬといふ私の考で、私のは唯袖を切る、袖を剝いて筒袖にする、さうして脛の半ば邊で切つて仕舞う、今までの長い着物を切つて仕舞う、さうしまするど、袖と縫上げとで袴が出來るのであります、小さいものでありまして十歳位なのは五布で宜い、それから下には袴は四布で宜しい、それから十五六歳の人は六布で宜しい、唯行燈を拵へてそれへ裏を付けて、二つに折つて兩緣を切つて上を疊んで袴にするのであります、此頃立派な袴が出來ましたが矢張いけない、紐を胸の方で結ばなければならぬから袴の裾が長いから立派には見えるが往けない、それで私は今の着物の下には、下ズボンを穿いて今の短い袴を穿かせる、短い袴でありますから膝坊主から三寸下つて居る、それまであれば宜しい、さうして歩く上に於ては靴を穿かせると云ふ、それで追々どうしても男でも何でも靴でなければならぬと思ひます、軍隊に出るときは靴を穿かにやァならぬ、それでありますから、常に習慣を付けて置かければなりますまいと思ひます、私の此着物の圖案は誠に見易い、誰でも出來る、私でも縫ふことが出來ます、一つの袋を拵へてそうして、兩方を切つて前へタ丶クレを拵へて、袴にするから譯けない、袴の紐の半はの處に鈕を付ける孔を明けて、衣の前に付いて居る釦で留めてあるから、鈕を強く結ばぬでも宜い、下の着物は唯兩緣に紐が付いて居りますから、それをチヨツト結んで置けば宜い、今までの樣に帶を結ぶやうな用はない、それて鈕が見へますからそれを隱す爲めに、縮緬なり何でも宜いそれを結んで後へ蝶々に結むで下げる、大變立派に見へます、髮は臭い油をつけずに、すこし洗髮にして束髮でも何でもよろしい、後ろへ垂しても宜し

いから容易なものにしたいのであります、御婦人が此運動をなさつてそうして發育すると、立派なお母さんになられて、さうして後來良い丈夫なる所の軍人を生むやうになると思ひます、又男も此坐ると云ふ習慣は、どうしても廢止せねばなりませぬ、日本に於て足利時代の末からだらうと思ます、眞二つに膝を折つて坐ると云ふ習慣は、是は大變に營養を害された結果、遂に足が短くなつた坐る習慣と云ふものが出來て以來、身躰が小さくなつたと云ふ、それでどうしても垂袍を着て居るときは坐らなかつたので、社袮が出來てから坐り出したのである、私共の子供には言ふので、此上短い子供が出來ては困る成る丈け足でも出して置ば充分足を出して足の營養が取れるやうにと云ふことを常に言ふ、私よりは十五になる奴の方が大きくなつたてず、成るたけ營養を與へねばなりませぬ、日本には此運動を共は營養を能く勸めると云ふことが第一である、殊に稽古をずる者は前言つた通りで、肉食をやらせ乳を飮ませ、充分習慣を付けて徃かなければなりませぬ、日本は實に惡い習慣が付いて居る神佛を拜むには御精進でなければ徃かぬ、四つ足を食べては徃かぬと云ふことがありますが、御精進のときは西洋では魚を食ふ、肉は平生です、日本てはさうでない、さう云ふやうなことになつて大變不便であります、御精進の時は非常に長い、菜ッ葉の香の物に茶漬てやつて居る、それでは迚も身躰の營養が立ちませぬ、それでありますからどうか皆さんの御子供さんには、充分なる甘い物を食はして充分に運動をさして一さうして、餘り勉強をさせると云ふことを御止めなさらんければならぬと思ふ、長く勉強をさせると云ふことの考を有たせなければならぬ、徃々落第でもすると云ふと或は子供を叩いたり大變叱つたりする、それが爲めに遂に其子供が精神病を起して、自殺を計たりするとが今年になつて段々ありました、ア、云ふことになつては徃かない又た充分に養ひを付けて丈夫にして稽古をさせぬと、偶々大學校を出るやうな時になつても、遂に血を吐いて死んで仕舞ふなど云ふとになる、どうしても、丈夫なる國民を拵

へねばなりませぬから、どうか皆さんが躰育に、心を充分に置かれるやうにしたいのでありまナ、御存知の如く歐米人は非常に大きくなります、滿州に居る所の露西亞の軍隊は非常に立派な者であります、日本人が荷うて居る所の倍のランドセルを擔いで居る、さうして充分に運動をして居るのであります、御互ひがハザと云ふと彼等と拮抗しなければならぬ、彼等と拮抗する上に於ては實に吾々の身躰と云ふものを丈夫にして置かなければ堪へられないのであります、それで今日に於て遲くはありませぬに依つて、躰育と云ふことを充分に骨を折るやうにしたいと思ひます、詰らぬ話でございましたが御淸聽になつたことを謝するのであります、

女子問題

二性の岐るゝ理

につとう生

人間に男女二性の別あるは、自然作用の結果に出づるものである、されど、自然の作用は、決して偶然のものでない、必ず一定の必要によりて起るものである、此の理は、凡ての事物を通じて皆同じことなるが、人の男女二性に於けるも、亦此原則に支配せらるゝを見る、此の如く男女の二性は、人生の必要に基きて、自然的に分生せられたるものとすれば、果して如何なる必要あるか、之れ二性を解釋すべき重要件である　抑も人世に男女二性を生じたるは、此二種の異性の調和に由りて、配偶者をつくり、子女を設うけ、家庭をつくり、以て圓滿なる社會を形成せんが爲めである、人生畢局の目的たる幸福も、此二性あるが爲めに充足せらるゝのである、若しも男女の二性なからんか、吾人は想像す、人生はいかに淋しきものなるかを、何んとなれば、一心同躰ともいふべき配偶者を見ることも出來ない、また圓滿なる家庭とか、社會とか云ふものも見ることは出來ないのである、さるを、造化の神は、其技に機徽巧妙なる、人生に此二種の異性を生じ、相倚つて以て圓滿なる社會を形成せしめたるは、實に人世の幸裕な

りといふべきものである、されば、男女の二性は、社會の元子的基本となるものにして、人世否人類の社會は、之れに由りて組織せらるゝものである、言はゞ社會は男女二性に由りて造らるゝものである、されど世人或は、男女の二性を以て、單に夫婦の間に子女を產み、未來永劫に子孫の絕ゆることなく、以て人類を蕃殖せしむるが爲めのみとするは、決して穩當の說でない、もしも然りとせば、男女は、生殖作用の外に其必要を認められないではないか、男女は子を產むべき單純の機關に過ぎないてはないか、されど、之れ男女二性をあまりに蔑視したる觀察なり、思ふに男女の二性は、肉躰上に於ける生殖作用の外に、精神上においては、剛柔相融和し、長短相補助して、圓滿なる人世を造る爲めの必要あるものである、人に男女の二性あればこそ、人世は單調ならず、趣味枯燥ならざるを得るものである、此等の點において、男女二性の岐るゝ所以の理は存するのである、

男女交際の利害

男女の交際に付ては、いろ〳〵の議論があるが、之れを大別すれば大凡そ三說となる、一は男女の交際は、之れを許すべきのみならず、之れを奬勵すべしとするもの、即ち可認說是である、二は男女の交際は、之れを許すべからず、寧ろ之れを抑制すべしとするもの、即ち非認說之れである、三は男女の交際を可認すれども、之れを實行するについては、時機尙ほ早しとするもの、即ち時機尙早論之れである、以上の三說は、男女交際論に於ける重なる論見である、而して此三說の主張する要點は、第一の可認說に在りては、男女交際の利を見て害を見ぬもの第二の非認說に在りては、男女の交際は、弊害あるも利益なしとするもの、第三の時機尙早說に在りては、男女の交際に、二性固有の性質上よりするも、一般理想上よりするも、決して些の支障あるものでないが、タヾ之れを實行するとなれば、我國當今の事情較々早きが如きの憾ありとするものである、此等の三論調は、いづれを勝れりとすべきか、之れ輕々しく斷言すべからざるも、之れに對する吾人の素見の一班を述ぶれば、大略

左の如くである、

男女の交際は、之れを實質上より見るも、之れを理論上より論ずるも、決して否定すべきものではない、否寧ろ二性元來の性質に適ふものである、前述の如く、男女の二性は、社會の必要に基きて生ぜるものにして、人類の棲住すべき社會は、之れに依りて組織せらるゝものであるから、其固有の本質上よりするも、男女の二性は、之れを接近せしむるこそ當然なれ、敢て之れを隔離するの必要はない、殊に、男女の交遊を遠からしむるが如きは、如何なる意見のものなるやを解する能はず、昔時の女權振はざる時代に在りては、イザ知らず、今日の如く女權の發達せる世に在りては、殆んど自由原則の下に、男女の同權は承認せらるゝを以て、從つて今日の青年女子は、昔日の青年女子の如く、偏狹なる思想と態度とを去つて、適宜の方法に由りて、接近するの機會を造り、正當なる男女間の交際を行ふも、何んの不可かあらん、男女の交際は、道理上決して不可はないのである、唯其方法の如何に由りて、或は利となり、或は害となるのみ、男女の交際を行うて、野卑に流がれず、高尚なる社交心を以てせば、二性相互の缺點を補助し、又た相互の慰安を得るの道となり、而して又た將來の結婚の選擧方法となるものである、されば、其利の大なるものこそあれ、毫も其弊害の存すべき筈なし、只夫れ交際の方法が、變んじて一種の私交となり、遂に淫交の弊に陷り、其極、卑穢なる行動を爲すが如きは、其の害ありて利なきなり、されど、之れ男女交際なるもの惡しきにあらずして、其方法の不可なるより起れる弊害なるのみ、之れを以て男女交際論を罪するが如きは、洵に思はざるの甚だしきものである、是を以て吾人は、絕對的の非認說には、最初より贊成することが出來ない、而して又た尚早論に至りては、漠として其要を得ざるものと見做す、何んとなれば、時機の早否は、何に由りて其見解を下すやと云ふに大躰の社會的標準より見て推定せるのみ、されば、固より一定不動の根據あるに非らず、論者の私見より割出したるに過ぎざるのみ、然るに、方今婦女社會の趨

勢を見れば、婦女子の智識は、兎に角一般に高り來たり、教育の力に由りて、多少是非善惡の辨識心もあれば、之れを以て幾分か男女交際に伴ふ弊害を矯正するを得べん、男女の交際を抑壓するのは、或は男女の不正當なる交際否密交を誘起するの動力となるやも知るべからず、語を換へて言へば、公然に男女交際の道を開くは、隱密的に行るゝ私交を絶つの方便たるやも知れぬのである、果して然りとせば、男女の交際は、之れを今日より實行するも、何んの不可なきのみならず、諺に善は急げの言葉もあれば一日も之れを早むるこそ至當なるべしと思はる、されば、吾人は時機尙早論を以て、正確なる論斷と認むることは出來ない、故に吾人の意見にては、大躰上において、男女交際の可認說に贊成するものである、唯に贊意を表するのみならず、之れが實行說を採るものである、されど、倩々方今女界の實情に省みれば直ちに我國において、歐米諸國に倣ひて、無制限的に否自由的に、男女交際の道を洞開するは、或は少しく危險なき能はざるを憂ふ、何んとなれば

我國に於ては、古來の國風慣習に由るも、婦女子は男子と異り、可成奧床しき躰を裝ひ、結婚前の女子の如きは、孫にも男子に接近することを厭ひたりし、近年は著しく婦女社界も開け行きて、餘程其の弊風を脫するに至れるも、未だ婦女子の社交心は十分に發達せず、男子と交際するのみか、女子間の交際さへも、尙ほ十分に發達せざる位なれば、若し今に於て、俄かに男女交際の道を開くとせば、頗る急激の變化なりと云はざるを得ざるを以て、或は正當の觀念を失却し、其弊害を釀すに至るやも知るべからず、されば、吾人は男女交際論を是認し、之れが實行を希望すと雖ども、又た實際問題としては、其實行についての成敗をも考慮せざるべからざれば、男女の交際は、我國の婦女社界に於ける急激的變化として多少の危險之れに伴ふを免かれざるを豫想し、或る制限の下に、男女交際を認許することである、或る制限とは何ぞ、他なし、青年男女をして自由氣儘に交際せしめず、教師、父兄等の嚴しき監督の下に、交遊するを得せしめ、潔白にして清純男

女間の社交心を發達し、以つて眞正なる男女交際を遂行するを計るに在るのである、吾人の男女交際に對する論見の大略は、此の如くである、若し之れを詳細に論ぜば、一長論文を草するも、或は盡きざるべきを以て、此には只短少なる論評に止めたのである、

女學の要訣

婦女子の知德を高めんと欲せば、須臾らく女子敎育を盛んにせざるべからざるは勿論である、何んとなれば人間を完成する方法は、敎育の力と、學問の道を措て外に無いからである、近年我國に於ては、女子敎育が年を追うて旺んになつたのは、實に國家の爲めに慶すべきの事ではあるが、其の女子の學問を修むる情態を見るに、高尙なる學理の講究にのみ心を專らにし、日常卑近に應用せらるべき、所謂實用的學問を重んずるが如き弊風あるやうに見ゆ、吾人は信ず、女子が學問を修むる要訣は、高尙なる理論の學問よりは、通俗なる實用の學問を主とする方、却て適當の修學方法にあらずやと、女子は將來において、人の妻となり、人の母となるは常態なれば、其時の用意を先にすることぞ適當なるべしと雖も、而して餘力あらば、進んで高尙深遠の學藝を究むるも不可なきは勿論である、

社交

家事と體操

靜女塾長　平尾光子刀自の談

◉家　事

いつかも申した通り今日の女子敎育はどうかすると兎角實際に離れてゐるかとおもひます、まづ家事に就て申しませうが家事として最も必要なのは先づ雜菜料理、今日用ひます衣服の裁縫、それから手紙―然るに學校の料理の敎へ方はドウして中人には適しませぬ、少し贅澤に流れて居る。其れから裁縫となりますとドウも上等の品でなければ下手と云ふ氣味があると思ひます。先づ今日洗濯綴物と云ふものは娘子は極く面倒

だと言つて居ります。それから手紙はドゥかと云ひますと、是は徳川時代の御隠居様に負けること萬々、其の時代の御隠居は餘程立派な書である、今日の學校の生徒は殆んど金釘を曲げた様なもので、今日學校で骨を折つて居り乍らそれほど役に立たぬのですそれ故に娘の子を滿足に人に仕上げやうと云ふならば、地方抔からは學校に入れないで、固き處にお小間使に出した方が餘程一家を廻はせる女が出來ます。今から考へますと實に馬鹿々々しい樣でござりますけれども昔の御殿奉公と云ふものは人間を高尚にさせたものであります。今日では餘程御身分のお有りなさるゝお家が少し崩れて居りますから御奉公に差出して充分の結果を見ると云ふ事は六ヶしくなつて居ります。今の世の中に誰か早く其處に目を着けないと、此の先き十年二十年經ちましてからでは、娘を上等の人間にする積りで學校に入れた、學資金も掛けて藝は立派に出來たと云ふ者が、ソラ離縁になつたとか、姑さんと面倒が起ッたと云ふことばかりです。或日田舍から人が來て娘を田舍から東京へ出したいと思ふがドウしたら宜からう、月に十圓宛は掛ける積りであるかと言ふことでありますから、私は十圓宛何年掛ける積りであるかと云ひますと、五年掛けたらドゥか人間に爲れやうかと思ふと云ふ親の考へで、私は五ヶ年學資金と思つて五圓宛積みて固き所に奉公させなさへ、其の方が五年の後は親に安心をさせる事が出來ませうと言つたが、其れを用ひませぬで或る學校に入れたのですさうすると無闇に氣位が高くなつて、田舍に歸ッて田舍へ片づく事は嫌やだ、アノ夫も氣に入らぬ、アノ男もいかぬと言つて、朋友と交際と云つて始終出歩くと言つて親が閉口して、親が今になつて始めて眼が覺めましてござります。仰せの通り銀行に積んで置いて相當の所へ遣れば今頃は安心して居られたのであると云ふ話なのです。それは其の學校と云ふものは人にもして呉れる、藝も敎へて呉れるものと思ふから違ふ、學校は藝を敎へて呉れる所と思ッて、人間に爲るだけの所は考へて呉れねば困るのです、と云ふは百聞一見

に如かずと云ひますが、教師が朝々修身の講釋を念を入れて致しました所が、其の事柄が理屈を覺へるだけで、教師と共になつて其れを行ッて居るのでないから、唯々さういふ筈のものだと云ふ事を覺へるだけである。それて人間が善良になるものならば賢人君子の手本は要らぬ。それ故に先づ學校の修身科と云ふものを措くよりは

學校の先生に德望のある人の薫陶をして行くが第一である、

講釋するに及ばぬ、先生が如何にも親切に思ひ遣りて、アノ先生の爲めならばと云ふ樣にさせれば勞せずして出來る。先生が唯々講釋を爲し、演說をするだけでは幾らやッてもいけませぬ。それて今各地の或は師範學校に生徒の騷動が起ッたとか、小學校に面倒が起ッたとか云ふのは、實際を申すとお氣の毒の話で或る場合には算術に致しましても加減乘除から漸く數へ方が解ッたと云ふに至りますと、それから生徒が先生を困らせると云ふ問題が起る。先生が閉口すれば併呑する、先生が骨を折てさういふ生徒を拵へるのであります。

◎躰操の事

これは私は教師でも生徒でも日天に出て躰操させると云ふよりも庭の掃除をさせるが宜いと思ひます。(室內の掃除は空氣が宜しうござりませぬが)是は昔の大名の御隱居樣に段々其例がある。御運動として庭の掃除を爲されたと云ふ事がござります。然るに今は躰操と云ふことで、或時は日天に出て或時は棒を持ち、或時は胸をはたき、さう致して飛歩き、學校に參つては腰掛けて居りますから其處て足が冷つて、さうして色々と精神を使ひますから腦が鈍る、其處でドウいふ結果を起すと云ひますと男女を問はず生徒の脊中の丸くなると云ふが目下の有樣である。それから腰が冷えて來ると云ふ爲めに子宮病が多くなる、それから腦病である。嫁して充分に丈夫な子供が出來るかと云ふと弱い子供が出來るそれは學校に就いて衞生會が起ッて居るけれども、男子の方が女子の敎育の方針を執り爲さるゝからではないかと思ふ。是れは餘程考へものである。そ

れでありますから風の吹く日抔には外に出さずして坐らせて置いた方が女の爲めになる。丈夫にする爲めに躰操するのでありますから害を及ぼすと云ふ位ならば寧ろ廢めた方が宜いのです。師範學校には長飛を始めて居る、長飛にはドレ程効能があるかと思ひます。それて大躰學校の埃だらけの處を草履を穿きて歩くよりは昔の御殿風をさせた方が生徒の爲めになると思ふ。廊下を長袴で歩くと云ふほどでなくとも、見ればピカ〳〵廊下が光つて居る其處を歩けば家に歸つてもシトヤカにならうと思ふ。又一方から言へば戸の開閉の如きも坐つて開閉すべきであるが、娘が學校に行つて學校の戸は坐つて開閉するどころでなく餘程力を入れねはならぬ、學校では其の樣な有樣で歸つて來れば坐つて開閉をせよと言つても行はるゝものでない。坐つて開閉をすると云ふ方針を執つて行けば世帶を持つてからも其れ程の差がないと思ひます、それが萬事に行き渡るのですから……、それで立つて開閉するは一躰之を西洋風としまして、學校に居る間はそれて結構としても父母の家は日本風である。歸つて來れば坐つて開閉をすべきであるが、朝學校へ昇つて遠くからお早うと云ひ、歸る時は先生にも遠くから左樣ならと云ふ樣な風で、歸れば只今と云ふ樣な工合で、父母はドゥしてさうであらう、お辨當は其處に投出してあるがと言ふが、學校の境遇と父母の處の境遇と違ふから御尤もである。併し此處は學校であるから斯う、歸れば斯うと云ふ考へがあれば、エライものであるが、日本の習慣は立つて開閉すると坐つて開閉するとは今日は坐つてするに適して居る。疊の上では坐つてお早うと云ふべきであるから學校の今日の境遇と違つて居るのでございます。

交際のしをり

贈物のこと

贈物は又遣ひ物と言ひて、知人や親類の親しみの情より、又は人に世話になりたる時、その禮をなすために遣はす物なり、すべて人へ物を贈るには、なるべく眞心を

こむべきものなり、一筋の手拭一足の足袋といへども眞心より出たるものなれば、五圓十圓の菓子折にも勝るべく、たとひ價高う形のうつくしき品にても眞心の伴はぬものならば、人の情を動かすこと少かなかるべし、物を贈るに唯躰裁を飾り外見をなすことのみ考ふに人世に少なからず、これ等に賢こき交際の仕方にあらず、

人より物を贈られたるときは、此方よりも相應のものを贈り、その厚意に報ゆべし、これ交際の當然にして殊に交際の新らしき內などにては、互に物を贈るは交を親しくする爲なれば一方より物を贈りても一方にて返禮せざる時は、つまり附合せずといふに等しくして甚無禮のことゝ知るべし、されど、たゞこれを貰ふたからこれ丈の物を遣らねばならぬといふことのみを考へ、先方より物を贈らるゝや價を物積りて同じ價の品を買ひ求め、直ぐに返禮するやうにては面白からず、殊に親しき間柄にては、一圓位の品を贈れば直ぐに一圓位の品で返禮さるゝやうにては如何にも眞心を無にされたるやうにて贈りたる人もあまり快くあらざるべし、故に他より贈物ありたる時はこれを記憶し置き後ちよき機會を見て返禮すべし

親しき間柄にては固よりの事、一と通りの附合の間にても、人に物を贈るには贈るべき時と品とを考ふべし。先方にて祝ひ事のある時にはその喜びとなるべき品を贈り誕生日ならば秋ならば菊の花、などを贈り、また自分が遠地に旅行せし時には其の地方の名物や寫眞などを贈るといふやうな風にせば、その心を慰め交りを親しくすること深かるべし。

朋友との交際

古るき諺にも水は器の方圓に從ふと曰ひ、又朱に交れば赤くなるとも曰へり。人も亦此の如く、良き友と交れば、善人となり、惡き友と交れば、惡人となるものなれば、朋友は能く其人を擇びて、而る後に交らざるべからず。さて朋友は、古の聖人も、五倫の一に置かれしほどなれば、親族に次ぎて、親しく、何事も實意親切を

以て交るべきなり。又吉凶、慶弔、年始、暑寒の訪問、天災、厄難、病氣、留守の見舞などは、それ相當に禮を以てし、贈物等も、其身の分に應じて、見苦しからざる樣なすべき事とす。又朋友たる者一家の主人にして、不慮の事より貧困に陷るか、若くは其主人死去し、或は病氣等の爲に家族困難する事あらば、夫に乞ふて應分の助力をなすべし。元來他人にても、近所合壁に貧困者あらば、之を憐むは人の情なり、況て日頃親しく交れる朋友ならんには、他人に先ちて之を救ふこと當然の義務と謂ふべし。朋友若し寃罪を蒙りし者あらば、之を辯護し、爲に其寃罪を雪ぐは、最も潔き事なり。されど、己の器量を量らずして、妄りに人を救はんとすれば、世に謂ふ贔負の引倒しとなりて、却て人に迷惑を及ぼすことあれば、能く其場合と程を斟酌すべし。又朋友の中にて、身の行不爲體なるか、又は業務を怠る者あれば、能く事の理を分けて忠告すべし。されど數すれば疎まるゝと、古人も言はれしことあれば、友を諫むるには、能く其程を計るべし。道德を缺き、貞操を傷くる行ありて、人の忠告を用ひざる者は、之と交りを絶ちて、我品位を保つべきなり。又己過失ありて、朋友より諫を受くることあらば、徒に聞き流さずして、親切を謝し、速に其過を改むべし。朋友の中にても、殊に親しく、學問上の事は更なり一家の秘密より、或は經濟上の事までも、之を打あけて語らふことを得るは、多年一つ學校にて螢雪の苦を共にせし、所謂同窓の學友なるべし。されば、斯る朋友には、勉めて行末長く交を結ぶやふ心掛くべし。されど、餘りに狎々しきに過ぐべからず、終始能く其程を愼み、行に禮し、言に敬せよ、さすれば其交誼の永く全からんこと疑なし。

流行のコート類

朝夕の肌涼しきも通り越て一雨每に冷氣の增て來るに早や弗々とコートの注文を見るに至れり和洋兩裝とも凡そ一年中の半を實用さるゝ極めて長時間の着衣にして殊に此の四五年以來は生活の程度如何に拘はらず孰れも二重廻しを着用するの氣運に向ひたり最とも上流

界にありては巨金を擲ちて調製したる美服を掩はれ隱すとの嫌ひはあれども時の流行として之を愛し又中以下にありて衣服の調度意の如くならざる向も一の襤褸隱しとして調法するには至れり

◎流行の新柄　本年の流行と認むる柄行及び裁縫方に就き先づ男向より記さんに二重廻しは鼠藍革色、霜降、黑、紺の綾羅紗或は無地スコッチ其他縞羅紗の細柄等にて裁縫方は矢張り達摩形又羽根は和服の袖一ぱい位に仕立て領の反も深くして兩前の重り深きもの﹅好なり、裏地類は佛蘭西繻子、毛繻子、唐繻子類を普通とし稍﹅上等の向には繻珍及び山水人物種々の畵甲斐絹倘ほ最上の部は綸子、西陣織琥珀等にして表地質は一般に薄地ものを用ふる傾きあり價格は先づ二十圓以上七十圓位の所大いに行はる、襟皮類は矢張り北海道産のラッコを隨一とし時としては九州邊よりも入荷あれど毛並惡く艶もなければ一着の襟皮五圓以上七圓位なるが之に反し北海道産のものは十圓以上二十圓位なり

◎エンパチス　高襟連には無てならぬエンパチスは昨今會社員又は官吏等の間にも盛んに行はれ居り柄及び仕立方は前記の分と大差なきが本年は稍や丈の長き方となり羽根は短め流行せり隱しは表三ヶ處にて價格は十八九圓より四十五六圓位、角袖コートは少しくにやゝける傾きあるためか藝人社會に行はる﹅のみ代價は十七八圓より三十圓前後を止りとせり但し內隱し行はる

◎オペコート　一般に兩前なれどもちら〳〵シンプルと稱して片前のもの流行の模樣あり柄は焦茶を重とし次は黑の綾織もの、スコッチ類にて價格は二十圓より四五十圓位ゐ裏地は無地もの﹅みにて縞ものは稀なり

◎ロングコート　一寸外出するにも馬車或は人力車を用ゆる紳士連高等官達の間に專ら行はる﹅ものなれば從つて價格も廉ならず普通三十圓以上二百五十圓位何れも帳附にて三所に毛皮を附せり

◎護謨製合羽　護謨製の防寒合羽は實用に適せず雨雪の際などは步き惡くして殊に風の爲に煽られ却つて下の着衣を濕すなど甚だ不愉快のものと云ひ且つ割合に價も不廉のものなれば追々使用者減少の傾きあり

◎吾妻コート　本年の流行は相も變らず表は綾羅紗また色は鼠、小豆、紺、黒等の好みにて娘向は斜綾の大柄なるも紺の褪やすきを厭ひてか黒色流行の傾きあり又被布地と稱する和製の絹地の者を用ふるものボツ〳〵あり裏地は大躰甲斐絹、繻珍の類なるが柄は白地に人物の墨畫或は山水等の好みありて續いて濃紫、赤、黄などを用ふるものもあり

◎裁縫の好み　裁縫かたは胸と領とのあきを角形に取ると絲瓜形に取るとの兩樣あり角形は下に着



東京婦人の髮形（處女の部）（前號記事參照）

たる衣類の領が少しく見える丈なれば普通着に適し居れるが晴着の時には下に着けたる美裝を見せんとするより自然胸の邊まで絲瓜形にくりたるものゝ必要を感ずるに至れり

◎結び紐　紐は蕨結び梅結び菊結び等を普通とし何れも絹の打紐を用ひ種〳〵の形を現はせるものなり以上記し來りし吾妻コートの價格は先づ二十圓より五十五六圓までにて其他裏地に好みを盡せば際限のなき事なり

◎雨合羽　雨合羽は十七

八歳までは何れも木綿更紗、霜降更紗等にて色は澁、淺黄、鐵などの類最も流行せり又年增向は黑、鐵色等の澁いものを好む傾きあり

◎合羽の領附け　合羽の領附けは立領と抉領の兩種あれども若き方には抉領のもの似合はしくまた立領は年增向に適せるやうに覺ゆ此の立領には何れも黑唐天などの巾廣の上領を附するもの多く其の價格は普通三四圓より七圓位ゐ迄にて重に和木綿なるが中には絹紬或はセル等を用ふる者もあり然れど冬季は吾妻コートに勢力を占られ合羽を用ふるもの極めて稀なり

◎婦人用被布　被布は槪して上流向なるが小供に安物を用ふるもの追々流行の傾あり普通の婦人用被布地は七子形又は斜綾の薄羅紗にして其他に織出の模樣もの即ち梅花、櫻花等を現はせしもの數種あり色は紺或は黑などを用ふるもの最も多き模樣なり

◎肩掛類の新形　コートに因みて婦人用肩掛類の新柄ものを紹介せん本年新着の分は極めて華やかなるもの多きは全く需用者の嗜好の一變せし故なるべし昨年の澁味あるものを好みしに反して本年は當秋季より先づ牡丹色、紫紺色、青竹色、藤色の類最も賣行好く此等は何れも新着の分なるが續いては黑、紺、焦茶の類なり此の價格は四圓以上十三四圓位までなるも周圍に捻房或は羽毛の附きたるは稍や高價にして品質も好しといふ

◎頸卷兼用の肩掛　形も普通ものは四角にて之を半より折りて和服又は吾妻コートの上へ着する事の流行せしが本年度よりは又半肩掛と稱す三角形のもの現はれたり之は領卷と肩掛を兼用するものにて實用的のものなれば大に流行の模樣あり價格は三圓以上五圓位までありて何れも獨逸よりの新輸入品なり

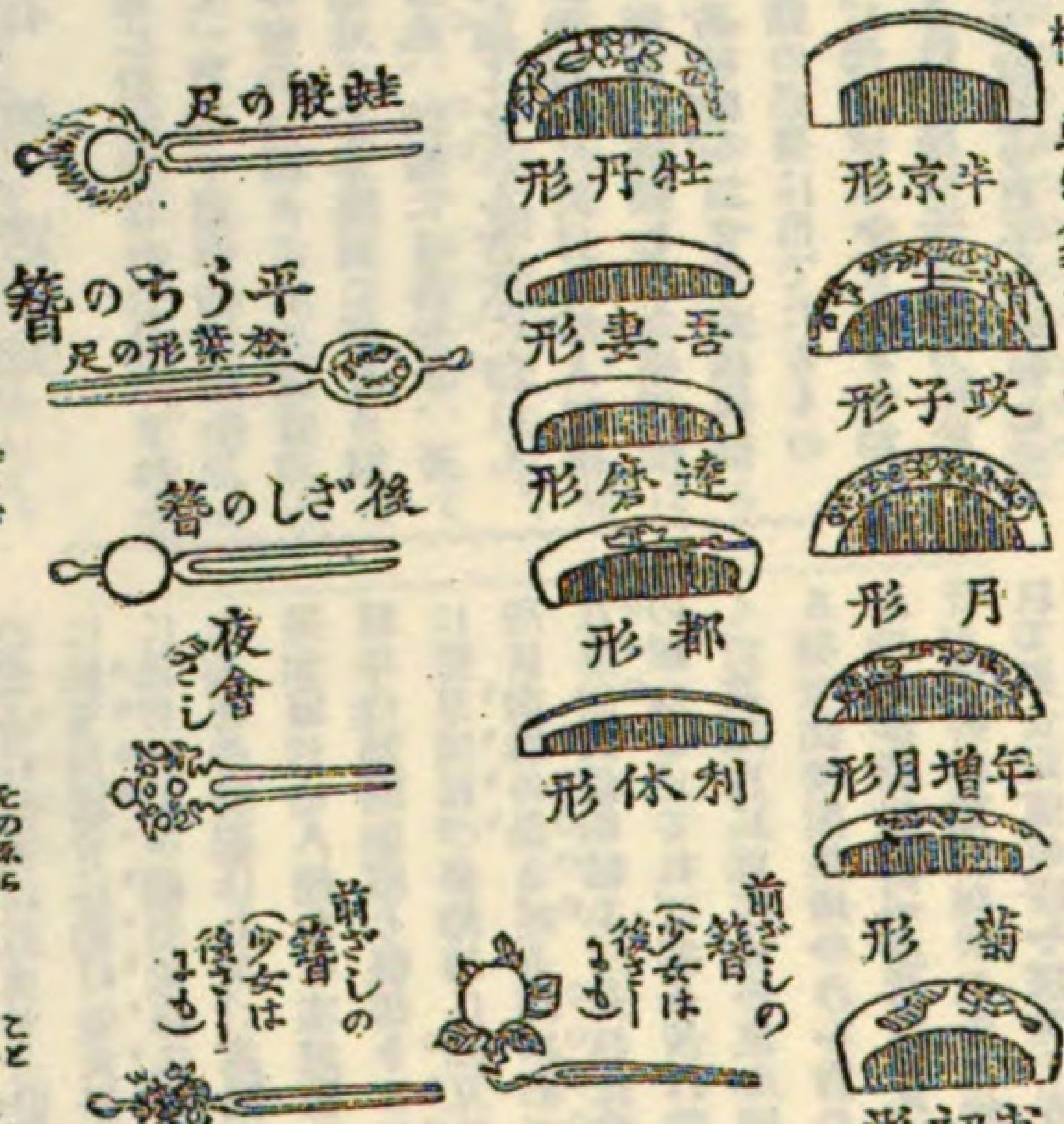
◎防寒用領卷　其他にまた駝鳥の羽毛にて製したる長方形の領卷あり以前は洋服の上にのみ用ひたるも近來和服の上にも用ふるやうになり防寒用には最も妙なるべし價格は十圓以上三十圓までありて重に英國製のものなりといふ

（東京朝日新聞）

東京婦人風俗一斑

◎髪飾の種類

櫛笄簪の類も好尚時々に異り、儀式用には紋服に對して櫛笄は鼈甲を始め金蒔繪の木櫛、或は象牙、卵甲、護謨製、下りては黄楊の木地などを用ふ、而して其形には、政子形、月形、吾妻形、お初形、半京形、菊形、都形、牡丹形、達磨形、利休形、等の類あり、又笄は櫛と對なるを晴てすれども、常にはそれまでに至らず、其形にも種々あり、されば儀式用の角笄を特に笄と稱へ、餘を中挿といふもあり、櫛と笄とは島田丸髷によりて大いさを異にして島田には大なるを用ゐ、櫛は概ね三寸二分、笄は七寸二分に至り、齢を加ふるに從ふて共に小にす、簪には種類多く少女のかざす花簪より島田、丸髷に至るまであり、また前挿、中挿、後挿に從ふても異なり、簪の珠は珊瑚を最上とし、雀孔石、瑪瑙、彫珠等多し、兎角高尚作りの喜ばるゝ世とて、文金高髷の流行と共に平打の銀簪さへ盛んに用ゐらる、脚は金脚を最とし、鼈甲、銀、赤銅、亞ルミ等の次第あり、其形にも蛙股、松葉形の別あり、手柄は縮緬絞を多しとす、都下の婦女は比較的に年增に至るまでも赤色をかけたり、また根掛は珊瑚珠、瑪瑙珠、純金の彫物、貝珠、七寳珠を始め葛引奴髷結、金銀モールなど用ゐらる、就中葛引は清高なるが上に其價も廉なれば最も賞用せらるべし、以上はいづれも身分の高下と年齡の老若によりて其選みを異にするなり。



婦人問題

婦人勞働の罪過

法科大學　石黒定美

◎婦人の解放、歐洲に於ては既に前世紀の中葉に於て行はれたり、されど當時の我日本は、尙ほ未だ迷夢の裡に彷徨し、舊慣の消極的道德を以て、嚴かに女子の上に鞭撻を加へ、男尊女卑の汚流は滔々として社會の上に漲溢せり、疑者一度び就て我邦の史乘に徵せよ、其裏面に橫はる婦女子の死骸は、累々として吾人の眼目を遮ぎる也、慘憺たる其光景、吾人をして慄然卷を蔽はしむるに至る。若しそれ遠く之れを古代に訪れんか、バホーヘン一派の社會學者說を作して、原始時代に於ける婦人は權力甚だ强盛にして、或は男子の儕輩を凌ぎ、一種族を統轄し、女系相續をさへ行ひたる事實ありしと雖も、吾人は此女系相續を以て、女權强盛の致したるものとなすにあらずして、社會的狀態の必要に出でたるものとすなり、埃及のクレオパトラ、我邦の巴御前、佛のジヤンダルクの如き、夫れ或は男子の上に出でたるものあらん、されど婦女子は腕力に於て、智力に於て到底男子の敵手にあらず、從て其支配權の男子に遷徙し、女子の制御に服するに至る、是れ亦た當然のみ。

◎過去に於て社會が婦人に對する待遇は、極めて劣等にして、之を視るを恰も奴隸の如く、日常賣買品の如く、唯だ男子の好む處に隨つて弄用されたるのみ、乞ふ去つて希臘の聖賢に問へ、ソクラテス、アリストートルの賢哲にして、猶ほ女子を視るを恰も「劣等なる人間の如くなりき」續いて歐洲の封建時代にありては、社會的階級なるもの嚴然として存立し、兩性間の限界動かす可らざるものあり、男子は常に女子の上に位し、女子は常に男子の下に位し、斯くて男尊女卑の弊風漸く社會に浸潤し、因襲の久しき遂に社會の習慣となり、惰性となり、遺傳となり人種の制度とはなれり。

◎然るに輓近に至りて、社會の視線は漸く女子問題に集注し來り、一方に於ては社會に於ける女子の地位如何を論ずると共に、他方に於ては盛に敎育機關を起して以て男子との權衡を得せしめんとす、顧り、吾人亦た人格の神聖にして、其間に些の徑庭あるヿを認むる能はざるもの也、男女同じく人格を有す、若し此人てふ起點より考察し來る時は、其間に尊卑の懸隔を附し得べきものならず、況んや人類として此世に生活するに當りては、必然的に相互の依賴を有するに於てをや、男性の短とする所は女性の長とする處にして、女性の短とする所は、又男性の長する所なり、長短相補ふ、是れ社會をして益々圓滿なる發達を遂げしむる所以の理なり、されば其長所に就てのみ之を視ば、男女の兩性は俱に尊むべく、其短所に就てのみ之を視ば、男女の兩性は俱に卑むべきもの也、さるを一性は其長所のみを指して以て之を尊み、他性は其短所のみを視て以て之を貶す、何で妥當の見解とや云ふを得ん、男尊女卑――女尊男卑、吾人は共に首肯を與ふるヿ能はざる也、然りと雖も、吾人は未だ直ちに以て男女同權の語を讚美するものにあらず、そは近世の唱道さるゝ男女同權の語義を考察するに、謂ふ所多くは、女子の身を以て男子の事をなす、是れ男女同權の眞髓なりとし、男女各々其所を得、其分を守りて相犯すヿなきを意味せざれば也、されど吾人固より女子たるの故を以て、全く男子の採る所をなし得ずとはするものにあらず、否な、寧ろ或事項に就ては、女子の功業却て男子に勝るものあるヿを知る、然りと雖もこは婦

女子の常にあらず、其の分として未來永劫確定不變の原則にはあらざる也。

◎夫れ遂に斯の如しとせば、何を以てか婦女子の天分とぞ稱す、曰く、社會開明の度と、業務分岐の度とは、毎に其併行を期するものにして、分業なき社會の未だ嘗て進化したるものあらず、されば男女兩性の間、相倶に其分限を守りて、夫は外に働き、婦は內に助けて以て家庭の和樂、社會の進化祝福を期待すべく、徒らに其天分を棄てゝ他を犯すが如きは、是れ之を小にしては一家の慘、之を大にしては社會の不幸とならざるを得ず、豈に寒心せざるべけんや。

◎米國の一操觚者、書を裁して博く回答を促かすに、二十世紀に於ける危險の最大問題を以てす、其答ふる者、或は社會主義なりと云ひ、或は新聞社の愚民煽動なりと云ひ、或は女子の高等教育なりと云ひ、或は知らざるを以てしたるもあれど、其尤も極端なる者は更に語を作して曰く、大統領、議員、市長、巡査、兵士、教師、記者、醫師、辯護士等、凡て是れ婦人の手に委ねらるべしと、夫れ遂に眞歟、若し然るともありとせば、吾人は是を以て、彼等が進歩てふ美名の下に、歩々危險の斷涯に近づくものなりと云はん、ソムアソン夫人亦た之を悲しんで曰く、婦人の家庭に遠ざからむとするの傾向あるは、實に是れ國家の將來に向て暗憺たる徵候なりと。

◎然りと雖も、米國の地や新開なり、彼等の其初め英國より移住して、夫兄と倶に相勞働するの必要は、自ら其精神に創業的氣力を富ましめ、"Go ahead." の語は、遂に彼等の格言と成化したるのみならず、新開國に於ける殖民地の事情は、女子の數極めて尠く、爲めに幾分か我意を擅にせしめたるの餘弊、以て此激語あるを致さしめたる也、されば之を今我國の古來貞節の心に富み、一度び嫁すれば夫の家を以て其家となし、夫死するも亦た二夫に見えず、舅姑に對しては忠順、兒女を教養するに當りては溫嚴其宜敷を失はず、家を守りては其處置度に適ひ、禮を執りて迫らず、和氣堂に滿ちて而も淫せず、其負ふ所當に夫をして內顧の患なからしむるのみならず、一旦緩急あれば夫に代りて外に對し、節に殉じ、義に據りて一歩を假さゞるものは比すべくもあらざる也、殊に歐洲に於ては、女子の數常に男子に超過すると夥しく、即ち佛國に於て二十萬人、墺國に於て八十萬人、英、獨の兩國に於て百萬人の大超過を見る、此外未だ良人を得ざる者、獨身なる者、寡婦となりし者を合算せば、其數實に多大なるべし、現今獨逸に於ける獨身者、寡婦のみを以てするも、尙ほ八百萬人の多きに上れるを見ば其大躰を推知するに足る、されば歐米の婦女子が出でゝ外に勞働す、亦た止むなきの至りと云ふべしと雖も、我國の如く却て男子の女子に超過する四十有餘萬人なる國に於ては、吾人絕躰に之が禁止を唱導せざる可らず、而して婦女子の勞働を廢する、是れ國家の常道にして、其否らざるは異例なり。

今歐米の諸國を通觀するに、婦女子の職業は極めて小範圍に限られたり、即ち教師、醫師、辯護士、書記等にして、其數も未だ尠く、直ちに以て社會の害毒をなすに至らすと雖も、婦女子にして工業界に投するの一團は、學者、經世家の一日も之を看過するを能はざる處也、合衆國最近の調査に就て見ば、婦人にして製造業、鑛山業に從事する者のみを以て既に七十萬人に上れりと、其數や實に合衆國勞働者の半數を占むる也、就中紡績業に至りては女子の數却て男子に超過す、亦た之を我國東京府下三百六十四個の工場製造所に就て見るも、

	男	女
十歳未滿	一七	—
十歳以上	一五八	一三一

十二歲以上	一、一〇九	二、六一〇
十六歲以上	二、八八四	五、一六八
廿歲以上	一一、九二一	三、二八〇

總數二萬七千二百七拾八人中、女子一萬一千百八十九人、而も身躰の發育上尤も緊要なる時に當りて女子の勞働者極めて多く、而して彼等は遂に何をか得たる、彼等が其希望したる所……自己の地位、品性を増進するの目的を達し得たるや、吾人は敢て其否らざるを斷言する者也、否な、寧ろ彼等は之に依りて以て社會を危險の深淵に置くものなりと云ふに躊躇せず、暫く不忍の私情を棄てゝ其罪條を數へんか。

▲(一)女性を驅りて男性と倶に自由壇上に競爭せしむ、是れ其特性を害するもの也、若し知性の上より考察せば、女子は男子に一籌を輸せざる可らず、女子の觀察は論理的にあらずして直覺的あり、理性的にあらずして感情的なり、抽象的にあらずして具體的なり、其精緻の度に於て或は男子に勝ることありと雖も、到底男子の高遠なるに及ぶべきもあらず、然りと雖も亦た其柔性は遙に男性を凌駕するものにして、女性の生命とする所亦た玆にあり、女には柔性の結晶、柔性の人格化せられたるもの也、然るに今其特性を棄てゝ男子と競爭壇上に相鬪ふ、是れ心理上、生理上共に認容す可らざることにして、其結果は徒らに女子の天分を損し、其長所を失するに終らむのみ。

▲(二)一般勞銀の低落を來たし、男子の職業を奪ふ、女子の出でゝ男子と共に家外的勞役に服す、是れ遂には勞力の供給をして社會の需要を超へしめ、其結果は生産の過剩となり、貨物の停滯となり、勞銀の低落となりて遂には一家の困厄となる、看よ工場の業務相仝じとするも、女子勞働者の多き地方は常に其勞銀の低廉なるを、而して其害未だ玆に止まらずして、資本家は却て價廉なる女子を應用し、爲めに益々男子の職業を奪ふに至るべし。

▲(三)兒女の教養を完からしむることを得ず、夫れ女子は家庭の王なり、一家を整理し、兒女を哺育して以て夫に内顧の患あらしむ可らず、然るに今其天分の尊きを棄てゝ外に男子と相爭ふをなさば、兒女教養の任を盡くし得ざるべきは當然なり、而して其害毒を受く者、啻に其者の一人一家に限らずして、國家は永遠に其梟毒を繼承せざる可らず。

▲(四)道德上に及ぼす影響、女子をして工場に入らしめ、男子と共に勞務に從はしむるは、遂に彼等特有の柔性を消磨して疎暴の慣性を作り、自らは其淑德を敗り、延いては天下の俗を惡化し去る、是れ以上三個の事情より已むなく生じ來る現象にして、歐と云はず、米と云はず、我國と云はず、輓近漸く結婚の數減じ離婚の數雨加するに依りて徴せられ、流産、墮胎、私生兒の増加するにても知らるべし。

▲(五)不生産的兒女の増殖、若し夫れ文明の利便は、絶えず全種物の相吸合することと、科學的技術の通有性に係ることに依りて全種物の齊一を來たし、以て國際間の均衡を致さしむることを疑はずんば、衆寡の數は世界を支配し、將來に於ける人間社會の分合を定むる力ありと云はざる可らず、果して然らば人口の繁殖こそは國家の前に尤も慶すべきこと也、されど其身躰と、其精神との發育充分ならざる者は、寧ろ國家に無用なるものとなさゞる可らず、而して斯る不具的人間の増殖は、實に彼等の亂婚、設備の不宜、素行の忌可に源因するとせば、爲政の局に當れる者の深く意を矢むべき也。

▲(六)非貯蓄心の慣養、女子は一家督正の大任を負ふものにして、其持するや必ず萬事に節倹ならざる可らず、然るに幼年の時に於て給料收得の惡慣を養生せば、自然の理數として駄費徒消の習遂に其性をなし、一家財政の根基忽ち破れて百獘此より生ず。

人ありて若し吾人を責むるに、女子勞働の利益あるを揭示し來らば、或は亦た數個をなすことを得ん、然りと雖も其功や眞に尠、未だ以て此等の非過を贖ふに足らざる也、豈に怖れざる可らずや

◉下婢の拂底

近年都鄙一般に下女奉公を望むもの甚だ拂底にして雇入に困難を感ずるは實際の事實なり從來我國に於ける婦女子の職業は僅に裁縫機織の類に止まり其區域極めて狹かりしかば下流社會の輩は水仕奉公を以て唯一の業と爲し之を望むもの少からざりしに近來世間に新事業勃興し其新事業は大抵蒸汽電氣等の動力を利用して機械を運轉せしめ直接に人の體力を要すること少なく人力の要は單に時間を正確に守り手先きを働かすのみなれば女子に取りては恰も誂向きの仕事を得たるものと云ふ可し、即ち紡績製絲摺附木電信電話活版等の如き孰れも近年の新事業にして其發達と共に女業の區域を擴めたるが故に從來の如く下女奉公に出で丶他人の家に寄寓し氣分不揃なる主人の無理小言を聞くの苦痛を忍ぶの必要なきのみか或は田舍地方にては相應の家にても行儀見習いの爲めにとて給料の多少に拘はらず娘を都下に奉公さするの習慣ありしと雖も都下の家風も今は昔に異なり行儀を見習はせんとして反て行儀を紊すの掛念ある尙ほ其上に世態一變、古風の行儀作法は今日の實際に適せず之を習ふも何の益する所もなければ見習として都下に奉公口を求むるものも自から減じたることならん假令ひ下等社會の女子とは云へ一個月僅々二三圓の給料を以て一人前の人間を牛馬同樣に使役せんとするは本來無理なる注文にして今日までは世間に女子の執る可き職業少なきが爲め止むを得ず之に滿足したることなれども目下の實際に十二三歲の少女にても工塲に雇はる丶ときは一箇月三五圓の給金を得ること難からず今後新事業の興るに隨ひ女子の職業いよ／＼增加して下女の給料の如きも之と共に騰貴するは自然の勢にして一家の經濟には容易ならざる影響を與ふ可しと雖も女業の發達は一國の生產力を增すものにして社會全般の上より見れば甚だ喜ぶ可きの現象と云はざるを得ず僅々百圓にも足らざる收入の家にて贅澤にも下女下男を使ひ殿樣奥樣風を吹かすが如き今後は到底望み難きのことゝなれば一家の主婦たるものは座敷の奥樣、臺所の下女、兩役兼帶の心掛を以て活潑に立働くの覺悟なかる可らず(時事新報)

◉女服改良と家屋改良

近來風俗改良の說漸く盛なるその中にも女服改良の如きは幾分か既に實行の途に上りたるが如し、醜美の論は兎に角此忙かしき世の中に起居不便なる服裝をなし、好んで自から窮窟にし亦不活潑に陷いるは一身の衞生上及び經濟上素より不利なりこれを國家の上より見れば更に大に憂ふべき事なりとす、故に吾輩は大體において今の女服改良論即ち筒袖に袴を着くるの新案を歡迎するものなり然れども吾輩の甚だ不審に堪へざるは、今日世間に熱心なる衣服改良論者あるに拘はらず、家屋改良論を耳にすることの寥々たること是なり、抑も女服を筒袖袴にしてその動作を活潑ならしむるとすれば住居の體裁も亦自から一變の必要あるは言ふを俟たず、否衣服の改良を成就せんには先づ住居の方法を改むることこそ順序なれ、何となれば如何に女子をして便利なる衣服を着せしむるも、今日の如く膝を正して疊の上に着坐し、小笠原流にて人に應接する樣のことにては、折角の改良衣服も毫も便利ならざればなり試みに見よ山本男子の洋服を用ゆるや既に三十年なり、而して兵營學校事務所等に在りては便利至極と稱せらるゝにも拘はらず、屋內に在りては却て不便利の衣服として排斥せらるゝの狀あるにあらずや、筒袖袴の改良女服は洋服に比して日本在來の流義に適すること勿論なれども、男子の袴にすら窮窟袋の異名あるを思へば、その着流しに比して輕快ならざるは毫も疑なし、

況や女子の坐作するところは獨り座敷の内に止まらず、食物を調理し膳部を用意する臺所の働あり、現在の如き家屋の造り方にては袴着の女房が臺所に出るは振袖の嫁が宴席の給仕に出でたる如く、衣服のために一方ならざる窮窟を感ずべし、女服改良論と家屋改良論とは必ず相俟つて離るべからざるなり

然れ共吾聟の希望は猥りに現在の日本家屋を改めて西洋風ならしめず、唯幸に女服改良の論が或は實地に行はれんとする兆候を認むるが故に、同時に家屋の一部を改良して活潑の動作に適するものとし、衣服と家屋と相伴ふて國民の經濟に益せんとするなり、例へば從來訪問者に引見するに一々奥座敷に通し、主客座蒲團の上に人形の如く端座し、恭しく畳に手を突き、一言一拜稍久しくして漸く用談に取懸る如き、時間と勞力の不經濟を省くがためには、別に應接所を設け西洋風に椅子卓子を置き、主客無造作に相對して無造作に談話を片付け、成るべく無用の手間を省くことゝせざるべからず、亦臺所の如き輕快活潑の動作を要する塲所も、西洋風の構造とし、筒袖袴の婦人等が自由に立働くことに改むれば、勞力の上に何程の利益あるや知るべからず、又小兒有る家などにて居間座敷等を腰掛の流義にすれば、小兒のために食事を妨げられ或は大切の器物を壞さるゝこと少なかるべし、偖かく客間等を腰掛けに改むるも、敢て西洋造を建築するに及ばず、日本座敷その儘にても可なり又或は新築するに當り稍舊來の趣を變じ適當の釣合を保たしむれば更に妙なり

元來日本流の坐り方は、萬國無比の異風にして、身體の天然を損ずること甚だ大なり、この習慣を改めて便利自由なる腰掛となすは最も有益なる改良なりとす、然れども老人婦女の内には惡習性をなして到底改め難きもの亦多し、故に吾輩はこれらの人々に對して暫く改良論の鋒先を寛にし、家屋一部の變革をもつて當分の間滿足せんとす、云々

（大阪毎日新聞）

才媛詞藻

第十回懸賞文披露

和歌

文學士 大町桂月先生選評

《天》 鹿

下谷區南稲荷町二八白井方 松原あや子

かり人も妻うしなひし此夕
いかにきくらんさをじかの聲

《地》 初時雨

但馬國朝來郡竹田町 尾知山靜枝

菊折つて行く人遠くなりにけり
初時雨降る野べのほそみち

《人》 初時雨

横濱 長谷川さく子

新しぼり今日賣り初むる居酒屋の
しるしの旗にはつしぐれする

總評　かり人の姿うしなへる、温き同情をよせてあはれなり。時雨に菊折つてゆく人、居酒屋の旗、明星の下の鹿、花なのする鹿、いづれも雅趣ありて、軒輊し難し。以上五首は氣に入りたるうた也。鹿の中には、つまこふる鹿、鹿の聲聞くぞあはれなるなど、陳腐なるもの多かりしぞくちをしき。初時雨の中には、單に時雨をよみて、初の意なきもの多かり。すべて調とゝなへても、陳腐なるは省きぬ。

《秀逸》鹿

明星のひかりかゞやく明けかたの山川づゝみ鹿のゆく見ゆ　筑後　三毛野須美

舞姫の聲によりくる御社の小鹿のせなに花ちりかゝる　香川　有信露子

思ふどち歌に明かして鹿の旅をたのしときゝし秋もあらしを　横濱　長谷川さく子

如何すべき紅葉はつとに折りもせん月澄む峯のさを鹿の聲　赤間關　熊谷房子

いりあひのかねの聲して風あれて紅葉みだれてさをしかのなく　石川　永山豊子

きゝなれてねざめの友となりにけりさがのゝ奥のさをしかのこゑ　麻布　馬場邦子

きゝなれし軒の松風吹きすぎて枕にのこるさをしかのこゑ　信州　小林義子

《仝》初時雨

田のくろをそゞろわりきの笠もなくおどろかれたる初時雨可那　新潟　吉田梅子

うき秋の露もかはらぬ庭の面の枯葉にそゝぐ初時雨かな　奈良　壚見策子

秋風のそよき殘しゝ萩の葉にまた音たつる初しぐれかな　三重　鹿見島ふじ子

神無月返りさきせし花の上をつれなくすぐるはつしぐれ哉　岐阜　藤浪紫子

いつよりも早く暮れぬとおもふ間にやがて降りくる初時雨哉　本郷　青木龍子

あさまたきさ霧晴れゆく名香山の麓にのこる初時雨かな　越後　鈴木梅子

佳調

◉初時雨

そめつくす山のもみち葉こゝろなくさそひてもふるはつしぐれ哉　愛知　吉田静枝女

◉仝　駿河　眞しやう

神無月くもりみはれてうき雲の空さためなく初時雨かな

◉仝　磐城　加藤みつ子

いく度か槇のいたやにおとづれて夢おどろかす初時雨かな

◉仝　常陸　岡本とし子

陸奥の忍の山の初時雨今日幾しほの紅葉そむらむ

◉仝　やす女

初時雨はやもふりきぬきのふまで菊よ紅葉とあくがれにしを

◉仝　愛知　岡本匡子

きのふけふ散りしばかりの紅葉ばをはやくもたゝく初時雨哉

◉仝　横濱　柴谷たき子

おくて田の稲かる賤がそての下にはら〳〵とふる初時雨かな

◉仝　神奈川　吉田かつ子

門田もる案山子のかけのあはれにもあはれをそふる初時雨哉

◉仝　東京　大島雪子

くもろかと見れば晴れ行く浮雲にこゝろまよひて今日もくらしつ

◉仝　大坂　杉山仲子

初時雨ふるかと見れば晴れゆきて小松のくれに夕日さすなり

◉仝　播磨　中村益子

露なさへいとひし庭の女郎花えもたへせじなけふの時雨に

◉仝　周防　水田雪子

落穂はむ雀の聲も絕えはてゝ野守の小家に初時雨する

◉仝　備前　重松竹子

晴るゝかと見れば降りくる村時雨さためなき世をそらに見せつゝ

◉仝　出雲　清浦女史

露霜のそめし梢のひとしほをちしほになしてふる時雨哉

◉鹿　松坂　澤音江

今はゝや鹿のなくねもきゝなれてきかぬ夜半こそ淋しかりけん

◉仝　靜岡　永山ます子

たちこめし霧より上にきこゆなり高嶺を越ゆるさ男鹿の聲

◉仝　横濱　柴谷瀧子

霧ふかきふもとの里に月落ちて鹿のねたかし妻やこふらむ

◉仝　姫路　高井かず子

夕まくれ鹿のね遠くなりゆくはをちの山べの妻やこふらむ

◉仝　赤坂　兒島みね

すさまじく雨戸ゆるがす風のおとのたえま〳〵に小牡鹿の聲

◉仝　長崎　寺井ちく子

山里は秋の夜半こそわびしけれ都にきかぬさ男鹿の聲

◉仝　下谷　宮内ちよ子

雲はらふ荻らしのこへに月さえて鹿の音さびし秋のさよ中

◉仝　茨城　都築鐵子

山ふかくもみちかゝりでかへるつのゆうべの月に鹿そなくなる

◉仝　薩摩　二の宮波留子

小男鹿の妻戀ふ聲におどろけば杉のじつ枝の月落ちんとす

◉仝　岩代　畑野りん子

つまびとのよびますこゑとおもはれてけふもねざめにさをしかのなく

◉仝　大坂　島君代子

秋の野の月と花とをふみしだきあはれ幾夜が鹿のなくらん

◉仝　宇治　木母女史

すゝき原渡る夜風のあと見えて三日月細く鹿の鳴くなる

⦿仝　山梨　神奈なみ

あめにやせ風にやつれてさなしかの身もたなしらにつまやこふらん

⦿仝　福島　もみぢ子

いざさらばやゝ戸ひらきてめでまゝし月の光りも庭のなくれも

文章

(天)

鎭守祭

牛込區天神町二十三番地　早川たけ子

今日にて二日、故鄕へ歸る道すがらの、心のみせかれて乘れる車のもどかしく早く〳〵と急がすれど、田舍の道の是非もなや、やう〳〵我村近く來りし時、胸の逸奇しく轟きぬ、嬉しさか懷しさか、危く立たんばかりに延び上りて、我家見ゆるかと眺むる向ひの森に、大旗小旗幾筋となく、吹く風に飜り、所々紅葉せる樹々にかゝるも美し、今迄は耳にせざりし太鼓の音、鼕々としてなり響きぬ。それよあの森は、鎭守の神の在す處、霜月の三日はそが祭にてありき。思へば遙けくも來つるものかな、山河幾十里、夢にも故鄕の俤を浮べて、羽根なき身を嘆ちしを、今漸く都離れて、嬉しくも鎭守の祭にあひし事よ。心は家にせかるれど、日頃妾が祈りまゐらする神にしあれば、車留めて暫しと内に入りぬ。

赤き鳥居くゞれば、兩側には鳥羽繪の燈籠、あたり狹きまでたて並べられ、白き幕四方を圍み、紅葉を其儘なる飾床しく、村中安全など記せる神燈の、晝ながらいと淸らに光りぬ。進みゆきて恭しく社前にぬかづけば、ありし昔のさまに變らで、わけて今日は新しき榊に注連さへつけられたる、いと神々しうぞ覺ゆる。神樂は面白き狐の舞に、笑の聲たえず起り、角力に勇む若者の腕ふりかざしたるもありき。行く者歸る者織るが如く、何れも今日を晴れと着飾りて、小娘のお白粉濃くつけたる、殊にをかしく、青葉茂れるなど歟に兒等の、枝の儘なる柿の實提げたるは、家土產にせんとにや。或は菓子、或は繪本など、戸板に並べ、安し〳〵、お土產いかゞなど、のゝしるに、背曲れる媼の本一つ買ひて、傍の子に取せたる、そが孫にやと心ゆかし。

ふと孃樣々々と、覺えある呼聲するに、後ふり返れば、我家に使ふる下僕なりけり、髮白く腰歪み、數年見ざりし程に、いたくも年よれるよと思ふ間に、下僕は寄り來りて、今日孃樣のお歸りときけば、祭見がてら御迎に參りぬ、よく早く歸りきませし、いたくよき娘御となれるよと、はや眼沾ませつ、流石に老は涙脆きものなりけり。

車歸して下僕と共に、我家に到りつけば、父上母君の喜いはん方なく、妾は夢心地に家に入りぬ。種々の話中々に盡せず、母君は微笑たゝへられつ、御身はよくも鎭守の祭に歸りあひしよ、妾が常に祈り置し驗にやあらん、御身も詣できぬと、若きに似ぬよき心掛なりなど、たゝへらるゝに心恥しう、且は深き御情の程いと有難し、夕には隣村の從弟も來られんに、御身共々詣りし昔語りつゝ、また詣でんなど。御言葉偏に嬉しきに門邊俄に騷しき聲す、打出てみれば、壯者數十人、かけ聲勇しく、神輿擔ひゆくなりけり、小川に映る飾の、青赤等眼もあやなり、げにや靜けき田舍の秋に響きて、趣中々に盡せず、かくたまさかに歸り來て、變らぬ式見ん事、花の香のみならず、人の心も昔の儘なるやう覺えて、いとゞ嬉し。猶も祭は賑かならん、絕ては續く太鼓の音、鬨の聲。

(評)　婉轉玲瓏

《地》

鎭守祭

長崎ふよう

わが家より程遠からぬ、田舍の親戚よりおとづれありき、今年は殊の外の豐年にて、村人の喜びも世の常ならず、こん日の鎭守の祭には、力の限り賑はひなんとて、老ひも若きも指折り數へて待てるなれば、皆々打揃ひて來よとのヿなりければ、其の喜びの少々なりとも分ち得んとて、母上と妹と三人、車をはしらす。

車の上にては、祭のヿ、伯母君のヿ、花子の君のヿなど思ひつゞくる程もなく着きぬ、出迎へ玉ひしは、例の伯母上と、花樣とにて、笑顏はいつも、變ることなく、導かれて內に入るに、玄關の次の間にて伯父上に會ひぬ、煙草くゆらして、出で給ふに挨拶すれば、よくこそとて笑みたまふ。座敷に入るに、集ひ居たまひし人々、座をゆづりてとりなし玉ふ、田舍人の質朴さ、其心根のうれしさ。

庭におりて、そゞろ歩きするに、今を盛りの黃菊白菊、頭おもげに咲き出でたる、めづらしきに、百日紅長くのびて、色とり〳〵に、葉鷄頭の咲けるあたり、鷄の餌をあさるも見ゆ。池の方に行かんとせし折から、けたゝましう、妹の馳せ來て、姉上、早く歸りて仕度し玉へ、鎭守樣へ參るとて、皆樣の待たせ玉ふに、といふに、急ぎかへりて仕度す。

人々と打ち連れ立ちて、野路ゆくに、彼岸花赤く咲き出でゝ、黃に紫に色さま〴〵に、にほへる草花と、まぢりて美しきに、驚かされてか、折々いたごの飛び立つもおかし。若き人の老人を助けて行ける、母の子を連れたる、あるは赤き褶あらはに着たる娘など、引きもきらず、會ふ人毎に笑ましげに會釋する田舍人の心やすき、よそ目にも羨やましき程なり。

鼕々たる太皷の響、いと近く聞ゆるに、鎭守の社の近さは知られつ、木の間木の間にほの見ゆる幟の、いさましげに風にひらめけるに、心も一きわひき立つやうなり。

高き石階も數へつくして、頂上に到れば大なる鳥居聳えつ、社殿もいつにまして嚴めしげなり。手水鉢に手洗ひ、口漱ぎて、神殿にぬかづく。拜し終りて眺むるに、里の總角打集ひ、太皷打ち鳴らすあり、角力とるあり、聲高にのゝしるもあり、老ひ、若き、男、おみな、入り亂れて其賑はしさ、耳も聾せむばかりなり。人々の中を縫ひて廻廊に上れば、下男ははや毛布おしひろげて、辨當さへ開き居れり、座につきて見渡せば、社殿をめぐらすに、古りたる松杉など、いや高く茂りて、雲をもしのがむばかり、下は晝さへなほ暗かり、沖の方を見渡せば、硯の海眼下にありて、波の靜けさ、海面恰も熨したらむ樣に、行きかう眞帆片帆さながら眠れる鷗の如く遠きは動かず、雲のちぎれにも似たり。

皆人は酒飮みなどして、高らかに打興じ玉へど、妾たちは花樣と妹と欄干によりて、何くれとなく打語らふ。世の中のいつも〳〵今日のやうならばといへば、母上と伯母上とは後の方にて笑ひ給へり。

庭の方は前にもまして、賑はしく、にはか、する人さへあり。漸しにして、さま〴〵のもの來れり、甲冑にて身をかため、繪にて見たる武士の裝したるもあり、蓑笠着けて竹槍持ちたるもあり、幼き乙女の舞へるもあり、顏おかしく、つくりなして上下着たる若者あり。かたみに辨當とりやりして祝するもあり、我子のよきもの貰へりとて讃遙ぶる親もあり、酒の過ぎたるにやあらん、足もと危うげによろめきつゝ鼻歌高やかに歌ふもあり、羽織袴いかめしく着て奔命に急かわしき人もあり、神官さへ繁勵すにいそがしげなり。

あまりのおもしろさに、尙ほあちこちと見めぐるに、不圖後ろより、肩を打つものあり、誰ぞと見れば伯母上なり、いざ歸らむ、との給ふに興はつきれど、後へに從ひてまかる。

母上はと見れば、伯父上などゝ共に、石階の下にて待ち居給ふ、今日の樂みは盡くべくもあらず、太鼓の響きは絶えず轟ろけり。

程なく伯母上の家近ふなれば、暮色早やくもおちこちをこめて、夕陽名殘りなく、波路の末に入り、空にはきらめける宵の明星一つ二つ夕日のあとに生れ出でぬ。

（評）叙景畵のごとし

《八》

鎭守祭

大阪府泉北郡北上神村井上徹方　井上清子

わが里の鎭守聖神社は近鄕三村の產土にして、陰曆の十月半をもて御祭を行ふ例となれり、其祭はいみじう賑はし、こは稻などのよく實りて農民ら心樂しう覺ゆるなりとてならむ、されば日頃幼兒のむつかるふしにも、秋祭きなばよき衣作り參らせ連れだち詣てむなどいひこしらふ時、幼兒はやがて笑を催ふして必ず引つれ給ひてよと、年立つ頃より指をり待ち渡るも實に理りなりかし、妾も幼き頃より樂しきものゝ一つと數へて、稚兒抱く今にも秋祭來る每に、里の母より待ちもうくとの文を楯にして、背の君に里歸りの暇乞ふに、未だいわけなければなどあはめ給ふ、いで今此樂しき祭のさまを書き出でてむ。

古りたる松杉の幹雲を凌ぎて聳へ、木立深くして物靜なる鎭守の森の、いつにかはりて賑はしく大鳥居の前には長き幾本の幟相雙んで朝風に飜り、大鼓の音鼕々と森の外に鳴り響くは、是ぞ吾村の鎭守の秋祭なりける、戸々には幟神燈を揭げ客數多集へり、老も若きも打ち連れて詣づ、大門より進めば兩側には幾十の神燈立て並べ、拜殿には紫縮緬の大幕を張廻し、神官烏帽子に直垂して恭しく內殿の前に跪拜し、御幣さゝげて祝詞をよむ樣のいと神さびたる、祈禱を終れば巫女二人出でゝ神樂を奏づるなどなかなかをかし、社の周圍には物の店相並びたり、玩弄店の前に立ちてこゝの笛かしこの面を指さしするは幼き子供なり、小間物うち並べたる店先に彼の簪やよけん此根掛やよけんと眺むるは年若き女子なり、又こなたには見せ物五つ六つも假小屋うちしつらひて、是は何某の山にて得たる怪しき毛物なり頭は人に似て尾は蛇なりいざ見給へ、こを見ぬ人は何とやらんなど罵りて客を集むるもをかし、森の裏道よりして多くの人來るけはひす、これはダンヂリといふものを村々より引出すなりけり、ダンヂリの上には鉦太鼓の音當の聲面白く調子をとり、扇子をうちひろげ聲ふり立てゝ、勵めや若者、今夜は美君の膝枕など戯れ交りに勵すに、綱引く數多の若者の、色も揃模樣もそろひの襦袢に赤き襷かけたる、又一かたは黃なる手拭各うなじにかけ、これも同じはでやかなるきぬ着たり、其衣裝のをかしさ彼のオリンピヤ祭に州の若者のいでたちもかくやあらんと思はれてをかし、間もなく社前に出揃ひて、かたへは人もて山を築きたり、打見やる人の中には麥藁帽子戴くもあれば手拭にて頬冠りするもあり、蝶々銀杏返し島田髷等に花簪又は銀簪をかざして、口紅濃く染め白粉厚く施せるあり、絹の單衣に繻子又は繻珍の丸帶を結び、表つきの駒下駄に白足袋はきたる女のさま、日頃稼ぐ時の姿と全くかはりて見ゆるもをかし、社殿の裏手に當りて折々ときの聲の森になり響くは、村の若者等が催せる寄合相撲なりけり、日も暮るゝ頃相撲

もはてゝ人々皆散じ、大門幾十の燈火おひ／＼消えて、さしも賑はしかりし境内、寂として夜色深し。

（評）文章すら／＼としてよくその境をうつすに適へり

《秀逸》

◎鎮守祭

信州上水内郡榮村
住良木四八一寄留　小林つね子

四方山の紅葉うるはしき神無月の末つ方、淋しき我里にふさはしからぬ物騒がしき鎮守の祭りあり。

今日しも空いと清う晴れ渡りて、そよふく涼風に訪へるは日頃隔てぬ友垣なり。いと嬉しふて何くれとなく饗應なし、よも山の物語などする内、話頭はいつしか今日の祭りに移りて、いざたまへなどそのゝかさるゝ儘に、いつも出嫌ひなる我の何浮れけむ、とみに誘ひて立ち出でつ。

秋とは云へ名殘なう霽れ渡りたる空、さすがに霞の眉は見えれども、さながら春のごと覺ゆるぞ心地よし。

程なう御社に着きぬれば、げに老も若きも男も女もけじめなく今日を晴れと着飾りて心を空に浮かれありく。

彼方此方に見世物の囃いと／＼騒がしふて耳もづぶらんやうに覺ゆる、そが中に畸形兒とやらんの小屋すぐれて賑はしかりしかば、思はず進みよりて見るに、七ッ斗りの少女のやけどにても志たらんかと覺ゆるが、さらでもみる目だになき哀れの姿なるに、番人の命によりて、何やらん手踊りの眞似して、悲しき聲に歌謠ひなどすれば、心なき見物の人々皆手を拍ちて囃ひ合ふ淺猿しさに、えたえず此處を去りぬ。あはれ此可憐の一少女、宿世いかなる罪作りけむ?。我は妙なき彼が運命を思ひて不覺ゑに同情の涙を絞りつ。

かくて足のまに／＼そこはかとなく彷徨ひば、土地の農民等の老ひたるが揃ひて鹿爪らしく羽織袴つけたるいと可笑し。拜殿のなばしまに、いづれ見劣りのせぬ舍娘の數多腰打ちかけたる中にて、紫縮子の袴に夜會結ひして白きりぼん付けたる、一きは目立ちて美はし。我は何心なく友なる人に對ひて彼君はいづ方のと問へば、藤井某とてこゝらにて名高き素封家の姫君なりと云ふにまばし見惚れてありける程、車上美しき八字髯蓄へたる若紳士の、鄙珍らしき洋服姿に、白粉臭き婦人と相乘したるが、是見よがしに悠然と鳥居の前を風切りて過ぎ行くさま、これも當世の紳士かは知られどいと心憎し。

さて今日の餘興なる山車は三ッ四ッ計りもありなむ、各々華美を競ひ、意匠を衒ひ我劣らじと囃したてたる群なうて可笑し。そが中にあるは、アルタイ嶺上の福島將軍を擬したる、あるは大黑の槌かつぎたる、あるは五條橋の牛若と辨慶とを眞似たる、あるは處に似げなき婀娜姿の手弱女五六人、手に／＼笛太鼓さては三味つゞみなど打合せて謠ひ來るに怪みて人に問へば、底拔けとて囃方は長野市より傭ゐたる歌ひ妓とやらん答えぬ。

何れを見ても面白のげにきわみなき鎮守の祭りよと打語らひつゝ南の方に到れば、奇しき音の忽然とするに驚き、何ならんと仰ぎ見れば花火の揚りたるなりけり。朝日に匂ふ日の御旗よと見るまもなく又音して、み國を守る軍人の姿空高く現はれ、これも又落ちぬ間に提灯よ風船よと限りなく描かれていと面白し。

竿もちて處嫌はず我先にと走り行くは里の童の落ちくる花火の種を拾はむとするにやあらむ、いと無邪氣に可愛らし。

かくて早や日も入相の鐘告げ渡るに森の銀杏の一葉二葉風なきに散りか

ゝる。げに秋を淋しとはかゝるをや云ふらむと打語らひつゝ惜しき秋を頭ちて家路に歸りぬ。

《秀》

◎鎮守祭

大分　稻光敏子

けふはしも一年に一度の鎮守八幡宮の御祭とて朝とくより大鼓笛なとふきならして天さかゐ鄙もいと賑はし朝の程より空はれ渡り日影さやかなりければ詣つる人〻ひきもきらさす老もわかきもとり〲に新しき衣をまとひ後れさきたちて畑の細道たとりゆく樣いとおかし我も友にさそはれ幼き妹をつれ村人等にしたかひゆく程にやかて白赤の旗ぁ紅また風になひける鎮守の杜近ふ至りぬ社頭の楓の紅葉して錦なりなせる木のえに物賣る店なと處せきまてあまたならひ常には物さひしき鎮守の杜もいとにきはし紅葉なせる木のまを烏朝直垂なとまとひたる人とも行かふ樣のいと古めきて其昔のさまもかくやとおもはれぬ社殿には村人の志とて初穗をはしめ山海のめつらかなる物あまた奉れり御鏡の光幣のなひきもいと神さひて尊としやかて拜し終りて志はし人なき處にいたはんと友の言葉まかせうらの方にゆかんとせし時はや奏樂のはしまれるなりとて人々我れも〲とゆくさまいと賑はし妹は我れもとかなたをゆびさしぬればせ貧ひて奏樂ゐ拜しけるに赤青なとの鬼人出つるを見てにはかにかへらんとていまや泣き入らんはかりなりければいと名殘をしけれと友に別をつけ家路へつきぬれといと細き道にさなから御神のみ幸とおほしくこなたをさして來る人々の志けきにいと道はかとらすやうやく我屋へはかへりつきぬ

此夜は戸毎にけん燈なとあかし來客いと多くてよろこひうたひの聲は家々にみち〲ぬ

《秀》

◎鎮守祭

東京市本所區番場町十一、田中方　小池靜枝

二百十日も事のうすぎ、見渡すかぎりの千町田は、早稻も晩稻もみず〲として、穗をうなたれて實のりたり、實に黄田穰々とはかゝる事をや云ふならめ。されば、村人の喜び此上なく、今日こそは此の豐年の祭りとて、村人が心をこめし鎮守まつりなり。

よべより打ならす太皷の音は、彼方の丘、向ふの谷間に響き渡り、馬鹿囃の面白き笛の音などいと心地よし、母上はまだ朝早きより起き出てゝ、下女相手に赤飯たき、馳走など煮たまふ。まづ赤飯をば重箱につめ、姿の御子供樣かた御同伴云々の手紙そへて、近きわたりの親戚知己の許に下男走らす。さるほどに、久しく都にありて會はざりし、若林の伯母君、去年嫁きませし姉上、など小供引きつれ來給へば、弟の友得て喜しげに、晴衣きて飛ひまわるもいと樂し、はなれ座敷には兄上の友なる人と手風琴と淸笛との合奏などしたまひけり、やがて、みな心ばかりの御酒馳走などもすみ給へば、いざこれより宮へ行きみんとて、一同打つれ畔道たとり行く。小春日よりの暖かさ、碧空雲のあとさへあらず、雲雀の聲もかすかなり。日頃は駄馬追ふ馬子と田畑行く農夫のみなる此の道に、今日は又、孫負ふ翁、いとし子の手ひく新嫁、夏羽織いかめしき若君など今日を晴れと着かざりて、織るが如くに行き會ふこそ實に樂しけれ。やがて宮にとつき、まづ石階をのぼる、此地は里人山王の岡と呼び、淡

々たる千町田の中にそばだち景色最も絶妙なり、幾かゝへもあらん松杉なとの大樹、日の光りさへ見えさるまで生ひ茂り、日頃は落葉枯枝散々なる庭も、今日ははゝきの目いと清らかに、しめさへ新たにかゝけられつ。やがて里神樂の、つゞみの音、笛のれ、大太鼓など調子よく打ちあはさるれば若きも老いたるもみな集ひきつ、須佐男命の八尾のをろち退治などは八一きは弟どものいと興かりて、手うち小躍するこそ可愛けれ。社の後ろは一面に駄菓子屋、玩具商、小間物屋などさま〳〵の商人軒を比べ、サアベル買うてとせまる小兒あれば、こちには又、かさし買うてたまへといふ少女あり、若林の勇の君にいさき神樂にてみしをろちの面とて買ひ求められつ、いと喜しげに見えけり、宮の內外あたりあちこちとありきける程に、あたりはまたく暮れはてたれば、いさとて家路さして急ぎけるに、鎌の如き三日月の、中空高くさえ渡り、社の森にはほゝつき提燈、カンテラなとのまばゆきまでにかゝやきて、太鼓の音、笛のれは猶ほふし面白くひゝき渡り、畔道てらす燈ろうのこゝかしこ、何處の家もいと樂しげに、一里こぞりて實に豊年の里祭り、和氣藹々とぞ見受けける。

〔天〕

菊見の記

在信　服部じゆん

朝日影花やかにさし昇りて、門にたてたる國旗の光さへ、いと麗かなるは天つ神も今日のよき日を祝ふにやあらむ。東なる皇居を遙かに拜みをへて、文机に向はんとする時しも、日頃隔てぬ友の二人三人訪ひ來て、此小春日和いかであだに過すべきかはいで隱逸園の菊を見てむと、云ふに、同じ心の友垣なれば皆手を打ちて誘ひつ家を出でぬ。

道すがらつれ〳〵なるまゝに友に對ひていふやう、人々おの〳〵嗜好の異なるはなほその面の如し、されば花など愛づるにも自づからけぢめあるものと見ゆ。かの菊と梅とは色と云ひ香と云ひ、その間兄弟を分ち難く共に勝れたれども、昔菅丞相は梅を愛で給ひ、陶淵明は菊を好みしも此の故にやあらむ、思ふに菅公は我中古の壽識にして、淵明は晉朝の節士なれば、其名士たりしは相似たりと雖も、これは當時朝廷の大臣にして威權輝やけること春の日の如かりしかば、その春花の魁けたる梅を愛でしは理なきに非ず。かれは當時澆季の人情を厭ひ彭澤の幽靜なる田園に耕して節を養ふ處士なればその靜けきさまは秋の日に似たり、これやがて秋花の獨秀たる菊を好みし故にやあらむ。をのれもと閑靜を好む癖あり、春よりも秋を好み、菅公よりも淵明を慕ひぬ。さればわきて菊をめづる身とはなりぬ。されどなほ學生の身なり。いかで座右に好める菊を植えて朝な夕なにめづるをなうべき。故に秋としなれば觀菊の遊びをもてこよなき樂とはするなり、今亦ゆくりなく卿等と倶にその樂園に入らんとす洵に悅ばしさ限りなし、と云へば 友の一人、そも君は清節を慕ひ、菊を好むと云へるにかゝるさわがしき隱逸園わたりの菊を見給はゞ地下の淵明に笑はれなんと嘲りぬ。己れいらへて、かく宣ふ人こそ未だ淵明が眞意を得給はざるならめ、野山の菊なればめで、都近きわたりの物はいかでか、と云はゞたゞ所によりて菊を觀るとこそ云ふべけれ、もはや眞に菊をめづるにはあらぬなり、古人が數多き花の中にわきて此花をめでしは、いと氣高くて俗塵に汚されぬ色香をめでしなりなど云ふ程に思ふあたりにつきぬ。

名にし負ふ隱逸園と云ふに入れば、花壇の備ひあるのみならず、凡そ五六百歩もあらんと覺ゆる前栽の有様、いと〳〵優にして雅致あり、先づ

花壇を見ばやとま近く進みよれば花の色と形とによりて その品々をわけ、ゆかしき名札さへ付け、白菊を列られたるは雪に匂ひあるかと怪まれ、黄色なるは黄金の花かと計り疑はる。其他、赤、桃、紫、いろとり〳〵に咲き誇り、あでを競ひ、芳を闘はして、さながら彩美はしき巻物を舒べたらん如くなり。

折にふれてはいひしらぬ香ひ、かほりわたりて袖に宿りつ、げに彭澤の仙境もかくやあらむと覺えぬ。やがて日も入相の鐘の音微かにきこゆるに蹤き友をうながして家に歸りぬ。

あはれ十六瓣の菊は畏くも朝廷の御紋に撰ばれて日の本の泡に輝き、半輪の菊――一條の流水は忠臣楠氏の印しとて世々に其香をとゞめたり。雨を侵して開くといふ重陽の儀式は癈れたれど、今は天長の佳節を盛りと咲き出でたる折にあひし此花の榮、霜に撓まぬ此花の操、代は萬々歳、さゞれ石の巖となりて苔のむす代のめでたさは、彭祖が齢ひも物かはとこそ覺ゆれ。

（評）文爽暢にして、些の苦澁を見ず、前段に自己の菊花を愛づる理想を描きて、頗る妙。

《地》

菊見の記

富山泉町
五二飯田　泉　秀子

我住む町より一里の在。長右衛門とか云ふ物古き家に見事なる菊の畑ありて、大方の人には見するとか、かねて聞きければ。今日の休みを幸ひ。友なる芳子の君を誘ひて、七時と云ふに道迴る。朝風やゝ冷く身に泌み、稲は大方刈り採られて案山子のみこゝそこに淋しげに立てり。とある小屋の後ろなる大きゝ柿の木に昇れる里童の、紫の傘珍らしきにや、柿喰ひ〳〵怪顔の目して我等を見送りぬ。橋渡りて、やがて道二つに別るれは、いづ方行きてよきや、心まどひして、姿の佇むに、芳子の君は、傍への茶屋に入りて、言葉優しき媼に、右なりと聞き來ぬ。道やゝ細うなりて、草はいとゞしく露にぬれたり。日は温う背にさして、美しく色つきし紅葉山眞向ふに見ゆ。其山讓遠く門構ひ嚴めしく、白壁の土藏三つ迄樹の間に見ゆるは、これなん我等が目さす長右衛門にぞあなる。頗少しく汗ばみてければ、しばし立止りて手布にて拭ひつゝ如何にして案内請はむと、今更のやう互みに、心こらしつ。行く中によき考ひも出でむ、いざと進めは、芳子の君、若き女の心太き仕業よと打笑まひ給ふ。先きの川の曲れるに過ひて、道土手傳ひとなり、やゝ小高ければ、目もはるに見渡されつ。畑上る彼處の森は何といふならむ、其中に赤きは柿の木にや、鳥居にやなど。他愛もなき事。語らひ〳〵行く。今土手には始めて松の木ありて、其處よりは道斜めになりて、降らむとする時。芳子の君さとくも、紫の傘來るよと、南の方指し給ふ。打見ればげにさなりき。やう〳〵近づくに見覺えのあるものから、急には思ひ出でず。芳子の君もしか云ひ給ふ。かゝる中向ふなる君、にこやか笑まひつゝ、小走りに走り來て『泉の君よ』と聲し給ふ。思へば今より三年前。小學に通ひし時。一つ机に睦まじう並びあひし友なりき。『いづ方へ行き給ふ』と問へ給ひければ。『長右衛門へ菊見に行くなる』と答ふ。『妾も家より使にて其處へ行くなり』と語り給ひぬ。あはれ、よき案内者の出でけるよ、さらばお頼み申さむと三人打連れて、いと賑しう語らひつゝ歩む。小さき流れ二つばかり越ゆれば、早其處は長右衛門の後ろにぞありけれ。『しばし待たれよ』と友は先づ裏門より入り給ひぬ。待つ程にそよ吹く風の折ふし、菊の香のえならずも薫り來る。間もなく來り給ひて『許しえてけれ

ばいざ入り給ひ』と案内す。門くゞり少し歩みて、又門打開けば。あはれ美しき菊のみ園よ。泌み入る如き香のしるくも薫り來て、畑の廣さいかばかりあるらむ。さながら彩色したる百の莚も敷かれたる如くなむ。今を盛りと兩側に咲き揃ひたるにふれまじと袂とりつゝ、友の君先きに、静かに歩む。友の君立ち止まりては、ねむごろに、一々花の名、由來など、こまぐと語り給ひぬ。余りに多かるに煩しきと思ふばかりなり。妾芳子の君と、幾種あらむ、異なる花を數へて見むと、歩みく指折り來しが。いつかは數誤りて、かへり見れば、芳子の君もわからずなりきと打笑ひ給ふ。幾うれりかしける程に、さゝやかなる四阿屋の前に出でけり。人も居ずして、疊敷かれしが、茶盆などありて、火鉢にかけたる鐵瓶のしきりと煮え立てり。『しばし休み給ひ』と友の君入り給ひぬれば、我等もさらばとてつゞいて腰かくる。高うなりし大陽に、花あでやけく。輝やくかと思はれ目もくらむばかりなむ。茶などすゝる間に友はそとすべり下りて、美しきを二枝折り來て、友と妾とにくれつ。やがて傍へより硯ひきとりて、是非にと歌こふ。いなむもなめげなれば、掴きながらも、

美しき花にやさしきみ心に
かへす我歌さてはづかしき

芳子の君も

たまひたる菊にかへたる我歌の
薫なきこそ恨なりけれ

かゝる事して遊べば、いつ飽くともえ知らず、心殘のいとく多かれど、午飯にも近づけり。母も待ちませり。今日はこれにて、又更めて參らむ。切にとむるも聞かで、いざと立ち上る。立ち上る時二人して。

よし花のちるともいかてわすれめや
今日の菊見を今日の情を

（評）最情ふたつながら兼ねそなへてうるはし

〔人〕

菊見の記

筑後國久留米市学扱町
一丁目裏中村米吉方　飯田しけ子

奥山の妻呼ぶ鹿は憫れに聽かれ、梢を渡る猿の聲は哀しく採られ只さへ寂しき秋の眞中なるに、まいてや月はえたり顔に古へを語り、草間にすだく蟲の音は村里を想ひ起さしめ、天の原深く鳴き渡る雁金は、故郷の空を言信るゝなど、いといたう思ひに惑ひてあくがれしまゝ、明日などは芽させる菊を見やらむと、ふと思ひ立ちて、空うち眺めつゝ疾く寢ねつ。

明くる其日は霜月の十日あまり一日と云ふ日、まだきに起き出で空見しに、天も我を憐れみ玉ひしか、ゑたり顔に星のみ閃めき渡りぬ。飛び立つ計りうちよろこびて、輕ろき身仕度に垣根まばらの柴門を振り出ぬ。定めしは月島町の花園にて、こゝのあるじはいとも、義俠心に富みたる人なれば、菊なども人には劣らじ、いかでかは劣る可きと、今年はこそより、更に心を用ゐきと聞けば、定めし、美しき事ならむなど思ひつゝ、そが前に來りぬ。まだ朝も早かりければ、往き來ふ人も繁げからずして、僅かに、十あまり二三の人の集はれありけるにぞ、よしやと直ちに主の許し得て、蹈む足知らず内へ入りぬ。色種々ありて、紅、白、黄、紫、赤など、幾そばくあるやわいだめなし。されど、何れの莖も、花一つ咲かせたるぞ多かりける。翁の手入れよく叶ひてか、花輪の大いなるは、盆の如くいと目出度し。特にすゞしきは白になむ。葥はなべてひくゝ、

後漸く高ふせり。こは只、其莖を挽めたるものにて、觀る人々に便ぜさしとなむ。さて、上には蔭覆あるは蠟塗りたる障子もて、情けなき霜の防ぎせり。下には無下に、白銀の清き砂を布き散らして、前には欄を結び。美たりしき事限りなく、麗はしきこと極みなし。あなや／＼と興ずる折柄、日ごろ親しき友の二人來にければ、いざこそと起ちて歩み掛りぬ。共に手を携へてうち見つゝ、こは只、人の工を用ゐたるなれば、雅雄はさほど、愛で度きものに思へる趣てふものはあらじなどさゞやきて、ふと園の後なる籬の下見れば、生ひたるまゝ華々しく咲き亂れたるむら菊に移りぬ。こは又なか／＼にて、なむとなふ愛嬌あり。是には、覆もなく砂もなく、見る人さへ少なけれども、自づと勝る所あり。これこそ雅雄の趣てふものゝ潜むめれ。世の人は只作れるをのみ、いみじと稱へ賞むるぞ、いとも淺ましく口惜しかる。見盡さむとて限りなく、彼方此方に跳ひそむれば、移るにつけて又變り、變るにつけて新らしく、昨日の徒然草は何れへか行きて、香のみゆかしく衣をおそひ、ゑみ／＼と醉ひ初めければ、やむなく歸さに就きぬ。又其夜は四邊冷しく冴え／＼しかりければ、黄昏深く出掛けぬ。月に花はまたなか／＼にて、何れも色の分別なけれども、其香りは遙かに晝に勝りて、歸らむすべなかりしかど、子の刻の鐘さゞかに聞へければ、籬の菊一枝家づとに乞ひて歸りぬ。其花今に机の塵を拂ひつゝ、衣の香り消すともせす、いやが上に心なぐさむ。まいてや、月冴え渡る夜なに／＼、冷しき光香り行く言はむかたなし。

あはれ、一園さては一枝の香菊にて、かくも人の心を慰むる物かな。此寂しき枯野と萩さへ霜にうなだるゝと、菊のみは、雪とまがふ白露も何かせむ。高峯の嵐吹き棄つとも何かせむ。撓まぬ心のやさしき貞は、げに美はしく喜ばしき極みになむ。此菊、我れに取りてはこよなき寶なり。はれど、よろ年波に枯れむとす。まてしばし。

（評）文は綺麗なれど少しく理屈に落ちたり

《秀逸》

◎菊見の記

神田區新銀町 廿八、西浦蝶方　賤の家靜子

頃日團子坂の菊の花、いとくしくひもときそめぬ、と聞くに、日頃より心隔てぬ、茂房ぬしと手をひきて、家居をいでしは、未だ夜のほの／＼と、あけそむる曉方のことなりき。

柳原のそよ吹く風に、面なぶられて、切通の坂下へまはり、路も上野の廣小路より、池の端に出でぬ。名は不忍とはやせども、おちこちの木々は、色ばへて、彌生の春に榮えにし、櫻の花の面影は、絶えてなく蟋蟀の、音さへ、露しげき落葉が下に、かこつごと聽きなされて、うらさびしく哀れなれば、忍ぶケ池と謂ふこそよからめなど、ちゞのをこなる戯言に、草ふかき谷中の奥をよぎりしが、俄に行手失ひければ、とある、はにふの小屋を音づれしに、あいなきいちへに、せんすべなく車をはせて到り着きぬ。

さらでもわびしき昨日今日、花はさらなり木の葉まで、散りゑきて、えならず心むすぼるゝものなるに、菊てふ花の、冷き霜にもうつろはで、もゝ草の枯れ果つる頃、獨時をえ顔に一と本の白菊、まがきのかたへに咲き匂へるなど、あはれにも誠に目出たくて、人の心をなぐさむるは、あらわれわたりし事なれば、殊更にいひとかずとも、もろ人の遍く知り給ふ所になむ。

園生は大方、白黄色々のはなこきまぜて、くさ／＼の人形を作せるもの

のみなれど、同じなまめきたてるにも、むごの潔き所そこともしらぬ、あるは、この花の特性にて、畏れ多くも賢處のみ紋に用ひさせらる、百千々の花と、その見所を異にするも、誠にゆゑなきことと言ひつべし。

花園の邊はわきて、ちりもすえぬばかりにきよめられ、花のたぐひはあるが上に植えられたれば、見る人の所せきまで集ふと言ふも、推しはかられぬ、まいてやこゝは地の理もよろしく、屋敷もひろければ、さこそと二人さゝやきつゝ、そこはかとなく逍遥ふうち、茂房ぬしはさかしだちて、『菊咲いて今日までの世話を忘れけり』と口に繰り返して獨り惑に入り給ひしが、やをらあなたをふりさけ見て、

菊の花いたゞく霜に枯れぬこそ
　　千歳ふるてふしるしなるらめ。

とたはむれ給ふにやがて妾も、

露のみに齡ひのぶてふ菊なれば
　　おひさきながく榮えますらむ。

とおふな〳〵の事口走るも既になまひとわろしなど謂ふ心は消え失せたるなれば、一入にけうさかして其たのしさはきこえんやうなし。

むなでにて歸るも異なればとて、丈けいみじう低く小枝に澤なる蕾もてるを、根はあるかなきか知れ共、かたみにいへづとにとて一と鉢づゝあがなひて立ち出でしが、うすき日影はときぞともなく、端山に沈みてあますさへ時雨さへそぼふり來りしかば、もなか逍遥によらむよりはと又の日の休みをやくして、こゝに花ぞめの袖をわかちて、おのがじゝ家居に車をはせぬ。

（評）此の文、別に勝れる節もなけれど、文詞綺麗、その修辭に勉めたるは特色とも見るべきか

《秀》

◉菊見の記

米子町大字紺屋町　越しげ子

忘れもせじ去年のこの頃なりき、親しくむすびし友垣の許より、園の菊花今を盛りと咲きつる程に、しぼみ初めぬ間に疾く來り給へ。と文して招きしに、妾は止むなき要事のあればとて、かたく辭りぬ。さるに一とせ過ぎし今日、又もや招きの玉章に接して、再びいなまんは餘りに情なしと思ひしまゝ、支度もそこ〳〵に我家を立ち出でゝ、絶えて久しき友を訪れつ。

一方ならぬ饗應にあづかりし後、互に手をかい連れて背戸をくゞれば、眼の及ばんかぎりは、綾の莚を敷きつめしごとく、赤、黄、紫、さては、白、紅、など或は濃く或は淡く、芳しき香は馥郁として、鼻をうち衣に薫りぬ。さても美しき菊園かな。とひとり心に賞めそやしつゝ、友に從ひてそが一筋道を辿りぬ。滿園の菊は秩々序をなし斑々列をなして、咲きも亂れず凋みも初めざる風情は、これを措きて他に覓むべくもあらずかし、げに秋の花は春の花の如く艶麗ならざれども、瀟洒にしてこれに勝れること數段なり、わけて菊の花は奥床しく氣高くして、畏きあたりの御紋所と、定められしもこの故なるらん、と感じつゝ歩む程に、菊亭となん名づけられたる離座敷には入りつ。正面の床間には菊飾り美々しく、右に小舟ありて、張れる帆、欹てる舵、操れる舵、これよな菊なり。左に鶴ありて、顧る頸、翔る翅、昂る尾、これみな菊なり。葉緑には花もて補ひ。花斷には葉もて補ふ。紬纏色をなし腹背彩を遶ぬ、といはんも、いかでこの有樣を形容し得べけんや。

妾は一夜を菊亭に宿りぬ。面白からずや、菊花の文に招かれて、菊花のために引止められしとは。

（評）文は軽婉にして、結尾は奇警の言なり

《秀》

◉菊見の記

高知市中島町三、藤本邸内吉川方　高橋ゆき子

秋深くなれば人々のもみぢかりに菊見にと車いそかすをよそになし一日家居にこもらんも口惜しき業なれば近きあたりの野邊に心ばかりの菊見し給すやと日頃心合たる友にそゝのかされてひろ過ぐる頃家を出ぬちりたちのぼる市路を行きすぎて鏡川をわたり筆山の麓をめぐりて廣き野に出でたり人里はなれし地の心やすさに歌などうたいあいつゝ小路をおちこちとさまよいぬ

紫白の菊、と多くさき亂れて流かすかなる小川をしづめる自然のすがたたおやめのかたちつくろはぬにていとあはれにおもしろしこゝにとゝまりて友と共にその雪霜を堪ゆる心ばえをたゝえ或は日頃師の君の教をうけし白菊の唱歌くりかへし／＼うたいつゝ志ばし時のすぐるも知らざりき

くるゝに早き秋の日のならひとて入合つぐる山寺の鐘の音はや野末にひゞき物あさりつゝありしからすのねぐらにいそぐ頃となりしかば友をうながしてふりよき枝を一ッ二ッ手折て家づととなし心をあとに殘し置てもときし道をたどりつゝ家路をさしてかへりぬ鏡川のほとりにて友と袖別かち我が家にかへりつきしはいざよふ月影筆山のいたゞきにすみほしかげ二ッ三ッかゝやきそめし頃なりき

（評）筆枯れ、想高きは、この文の見るべき所。

雑文

「糸薄」の小説をよみ侍りて

すみれ

近江の人、白露女史が作「友千鳥」並に都の君かあらぬか、田中春風女史の「八重子」、既に評者の言の如く、まことに符節を合したる如し、たとへば春の神が咲かし給ふ櫻花の、大内に匂ふも賤が軒にさけるも、一つくれなゐの色とこそ見め、これ二人の女性が心に戀の希願光明ありて、しかも妙なる友情にかられ、燃ゆる如き血を進んで冷かなる地下に葬らんとつとむる、實に神妙なる心がけにして、となりを愛するものと稱すべく、これや至高大の愛ならん、友の爲に命を捨つる、豈唯劍きらめく戰爭場裡にのみ限らんや、女が王國は一扁の心緒なり、愛は即ち心の女皇、彼女の滿心は、愛の支配するところにして、彼女はこれが忠實正直なる臣たらざるべからず、おのれひとり浮世に戀を成就して、最愛の友を終生涙の人たらしむるは誠ある女性の忍び難きところ、おのが苦悶を以て彼の苦悶をおもひやり、おのが愛情を以て彼が愛情をおもひやりたる妙子八重子がやさしさ、しほらしさ、共にこれ天上の姫御前が、下界にはあまりに優しく、あまりにしほらしきなり、怖ろしきは涙の後の女心ならずや、「闇夜」のお蘭、彼女はむかしの情人をさゝんとしたり、いまはしきは人間執着の念ならずや「にごりえ」のお力は昔の情人にさゝれたり、お春は戀人が妻のせつなる希願を遂に容るゝ能はずして、一死治兵衛と悲運をともになし終へぬ、嗚呼愛の赴くところ過ぐれば高山大河をも越へなんとし、及ばされば刄に水にはた病に命をまかす人多し。

この時にあたり八重子は一身を學術研究に捧げて英國に留まり、美はしき琵琶湖邊、まゝ罪なき罪人ひとりを生じぬ、作者が想いとも皓潔にして雪中にほゝゑむ梅花の如きか、淸楚また可憐、さはあれど嗚呼これ將して眞に今の世のさまか、見給はずや去年東隣に嫁したるの人今年西家にゆき、甚しさは黃金の光によりて中原の鹿をえんとするあり、友は友と戰ひ、おのれひとり榮華の巷に遊ばんとす、世に怖ろしきは妬心なり、よしや八重子妙子友情の爲滿腔の戀を捨てんとするも、一たびゼノーが蛇の化身、其衣の裾だにもふれなば、彼等は正に友を救ふものたらずして友を殺すものなり、怖ろしき哉ジユーピターが妻、妾レトナの懐妊をそれみてこれをなやます事甚しとかや。妙子等はこの敎をのがれたり、幸なる哉小さき胸に耐え難き悶をしのび、忍び難きおもひを捨つ、まことに目出度き友情といふべし、唯うらむこれ單に大空の月、高根の花にして理想の搆造に過ぎざるやを、若し作者よ、御身かゝる場合に臨み給はゞ能く情人の前に罪なき罪を告白し、友が祝言の席に列し得られ給ふや否や、これ我の深く此の種の小説をいとふ故にして、御身等が筆のあまりに冷かなるに驚かざるを得ず、和歌山の人、いさな女史が「秋の空」却てわが心に小說として大に味を得たり、しかもこれ第三次、の唯「浮世」と云々の評言によりて其所以を知りぬ、さはれ評者は往年閨秀小說の「くれゆく秋」をよみ給はざるか、こは大塚女史の御筆なりき、特賞の二篇何ぞ彼に類する事甚しきや、藤田の君よ御身が御筆いとなだらかにして、秋宵悲劇の物語に、われまた同情の涙をそゝぎぬ、小說としての御技量先きの方々に勝るや萬々たり、いつしか月はさぎりにより以下の文章、目のあたり見る心地して、故一葉女史が筆づかいに似たりとやいはん、再三再四よみ侍りぬ、一の卷二の卷などものされしことの某小說家さへおもひいだされて、怪しき想像に耽りぬ、七の卷の完結いと力あり、今いづくに、此の雲を……の末句「町もう會はぬぞ」のそれにもまして力あり興味あり「秋の空」をよみて心づようなりぬ、藤田の君よ、獨益々進みて寂びゆく女文界をにぎはし給へ、和歌の浦わの詩神よこの女流をとこしへに守りまして、いよゝ才筆の加はりゆき、月桂冠の必ずこの君が上に加はらんを、北信の山家にて祈る。

あなかしこ

◎まゝならぬ浮世

茨城　渡邊光子

いつの程にいづこのたれにか口ずさしみけむ浮世とはよくも名實の相かなへることよさりとはいへ余り悲しや今年神無月十あまり三日の夕つ方なつかしき師の君は無常の風にさそはれてかへらぬ冥途にまかりぬ月はかくるともまたみち花は散るとも再び開らかむなれど一度ゆきましゝ師の君は末の松山千とせの末かけてまつともいかでかへらむうたてきかもかなしきかもまゝならぬはうき世哉一度はあの世に行くものとはいひつれど老の後ならばこそあれいまだ三そじなるにはかなく散りはてしはいとゞ涙のとゞめもあへずなむ徒らに三界の火宅にのこされし身は思ひの雲に鎖されて悷の淵に沈むも理よ浮世が儘ならんにはせめて今一度はこの世に師の君を生れさせなましものをあゝ實にまゝならぬは浮世哉



女學世界定期增刊冬の卷
第一卷第拾五號
磯ちどり

（十一月十五日發行）

▲▲▲磯ちどりは女學世界定期增刊冬の卷として來十一月十五日を以つて發行せんとす、時方さに初冬、菊花爛熳、紅葉的皪として梢に錦繡を織るの好季節に會す、本誌の增刊が高尙清新にして趣味の豊富なる如何に諸孃が學窓の好伴侶たるに適するかは今之を贅せず、其の躰裁は例によつて紙數二百八頁、內三分の二を以て江湖才媛の美文に充て、殘餘の紙數を附錄として左記知名作家の佳什數篇を收む口繪には內外人物風景の斬新にして警拔なるもの十二葉を添ふ

附錄

▲上川の風雪　下田歌子女史

女學界の泰斗下田歌子女史、頃日北海道の漫遊を終へて歸らる、本篇は即ち這般觀風談の一にして石狩國上川新開地に於ける特殊なる婦人の忍耐談を女史が同情饒き筆もて描き出されたるもの、又是れ一種の婦人立志篇なり

▲乙女心　グラッドストオン夫人作　古賀根生譯

容貌の玲瓏たるは天使の如く、性情の純潔なるは神のごとし、楚々たる乙女が、手飼の鵝を賣りて慈母の病を看る、美感、佳想、眞にこれ家庭の好話料たり。

▲上洛日記　梅颸夫人（故人）

山陽外史、賴翁に母あり、飯岡氏、名は靜子梅颸夫人と號す、即ち春水先生の配なり本篇は夫人が入嫁の翌年藝州竹原より其の舅翁に伴ひて上坂せられし折のすさびにして芳紀まさに二十一歲、日本有數の文豪か其の懷妊中なりしなり。

▲こぼれ水　菊の屋女史

朱買臣の故事を布衍せる支那教訓談にして東洋的道德の面影をうつして奥床し

▲題未定　三宅花圃女史

▲題未定　大塚楠緒女史

▲東海道の記　中村秋香君

三枝茅淵刀自の「旅の命毛」の綴稿にして文字流麗耙行文範の珍とするに足るべし。

●懸賞和歌兼題（投稿は端書に限る）

枯野（十二月分）〆切十一月十五日
女學生（同）
立春（一月分）〆切十二月一日
新婚（同）

（天、地、人、秀逸十種を撰び金壹圓以下の圖書切符を呈す）

●懸賞文（文題隨意）

▲國文、▲普通文、▲小説
▲消息文、▲新體詩

（甲、乙、丙の外秀逸十種を選び金貳圓以下の圖書切符を呈す）

●懸賞才媛畫箋募集

▲山水、▲花鳥、▲人物、▲氣形、▲器財、其他

揮毫は繊、畫箋紙共隨意、毎號逸品十種を撰び卷頭寫眞版として掲載し、賞金（圖書切符）を呈す

●各地風俗の寄稿を募る

本誌の編輯は、號毎に改良を施し來たれるも、其の風俗人情に關する材料は、主として中央都會に採りたれば、聊か遺憾なしとせず、由て今後は廣く全國各地に於けるものを掲げ、以て相互に異なれる地方の風俗人情を知るの便に供する爲め、這回左記諸項に關する寄稿を歡迎す、江湖篤志の諸孃よ、乞ふ其地方に於ける特種的の風俗人情に關する事柄を其儘に記述し、續々投稿せられんことを

●冠婚●葬祭●交際●家庭●奇習●俚諺●生活●物價●其他孝女節婦の美談佳話くさぐさ

投稿規程（今後厳行）

▲本誌は女子の手に成れる投稿を歡迎す▲投書の種類は文章（文は國文體及普通文に限る）詩歌（新體詩及短歌今様の類）小説は優美にして卑猥ならざる者等とす▲投書の期日は規定なきも懸賞文は所定に依る▲投書の用紙は半紙二ツ折（和歌は端書に限る一葉一首の事）半面十行一行二十四字詰にて文字は正楷に限る▲投書は各種類を別紙に認め匿名を欲する者と雖も原稿紙には必其姓名住所を明記するを要す▲投書の送附は博文館編輯局宛にて封筒の表面に『女學世界原稿』と記載すること▲投書は採否に拘らず一切返戻せざる者とす

學校案内

東京女醫學校規則

世界の文化は日一日と其歩を進め泰西の制度文物輸入以來日本女子の教育は長足の進歩を成し今や普通教育に至りては殆んと間然する所なし而して今將さに其必要を感ずるは女子の専門學にあり由來女子の専門學は歐米に於て既に數十年以前より實施され或は政治界に新聞記者に或は醫業に教育界に銀行會社に職を奉じつゝ其資格毫も男子と軒輊する處なし我邦も今や列國と對等に交際するに至りたれば女子の品位も彼我又對等ならざるを得ず此際に當りて社會の人心皆茲に意を注くと雖も其意を滿たすの設備不完全なるを如何せん思ふに女子の學校としては女子師範學校、産婆學校、看護婦學校等の設けありて各自其志望を達せしむると雖も獨り女醫學校に至りては未だ其設立あるを見ず女子大學に於てすらも文學科、家政科等ある而已蓋し女子の本性に最も適し且つ女子の品位を高尚ならしむる業務は醫學を以て唯一とす隨て斯學に志すの女子又少しと云ふ可らず然るに是等の姉妹に其志を遂げしむる學校なきは我邦學校設備の缺點にして幾多の高尚なる思想ある姉妹をして岐路に迷はしむ是千歳の恨事にあらずや云々と是れ同校設立の主意なり。同校は昨年十一月の創立にして當分事務所を東京市麹町區飯田町四丁目九番地に置き校舎は牛込區市ヶ谷仲之町二十二番地にあり、目下生徒四十餘名、寄宿生十餘名に上る、蓋し同校は學説と實地との並行を主眼とし、理化學は器械に依り、實驗を行ひ、生理は動物試驗、解剖も實地解剖を實習せしめ其他科外講義として專門家の有益なる講話あり、秩序大に整ひ、本十一月一日より新學期を始め一層規摸擴張の計畫なりといふ。同校規則左の如し

第一條　本校は東京女醫學校と稱し當分事務所を東京市麹町區飯田町四丁目九番地に置き校舎は牛込區市ヶ谷仲之町二十二番地に置く

第二條　本校の學科を前期學科後期學科の二とす

◎前期學科

組織學　解剖學　生理學　化學　物理學

◎後期學科
病理總論　內科各論　外科通論　外科各論　診斷學　藥物學
眼科學　產科學　婦人科學　衛生學　法醫學
內科臨床講義　外科臨床講義　婦人科臨床講義　眼科臨床講義

第三條　卒業年限を四ヶ年とす前期學科終業年限を一ヶ年半とし後期學科を二ヶ年半とし前期學期に分ち後期を五學期に區分す
但し新學期開始は各期とも毎年五月及十一月とす

第四條　毎日授業時間を五時間とし一週卅時間とす
但し正午より五時に至る

第五條　本校に入學せんとするものは年齢十七歳以上の女子にして高等小學校卒業以上の學力を有し品行方正にして思想確實なるものに限る

第六條　試驗を分つて學期試驗、前期試驗、後期試驗及び卒業試驗の四種とし學期試驗は各學期の終りに施し前期試驗は前期科目修了の後後期試驗は後期科目修了の後、卒業試驗は後期試驗及第の後とす

第七條　入學の期は各學期の始めとす
但し望みに依り臨時入學を許す

第八條　休日は毎日曜日、大祭日、創立紀念日、年始年末各々七日間

第九條　本校に入學せんとするものは左の書式に依り入學願書を認め履歴書及東修月謝を添へ本校事務所に差出す可し然るときは校主面接の上其許否を定め本校登錄簿に原籍、現住所、族籍、姓名、生年月日を認め調印せしむ
但し保證人は本人の父兄及び東京市內に居住の戸主に限る

第十條　毎月一回校友會を開き立身上の協議をなし且つ郊外の運動を試み心神の安養を圖らんとす

第十一條　學費は入學金貳圓月謝金貳圓とす

第十二條　教科書は校內に掲示す

第十三條　賞罰　品行方正にして學期試驗及び卒業試驗に優等を得たるものは賞與を與へ不品行にして成業の見込なきものは退學を命ず可し

第十四條　轉居若くは保證人變更の節は其旨直に届出づ可し

第十五條　本校卒業生は永久校友として優待し開業奉職立身上の事に關し萬般の指導をなす

東京女醫學校寄宿舍規則

第一條　本校寄宿舍は醫學專修生の爲に設け父母兄姉に代り學業の進歩を圖り品行を監督し婦道の養成を勉め家族的生活の模範を示し以て一方には成業の速かならんを期し一方には將來善良なる家庭を作るの準備たらしむ

第二條　寄宿舍には舍監一名を置き監督の責に任し又寄宿生をして毎月順次一名宛室長たらしめ舍內一般の取締をなし且つ寄宿生と舍監及校主の間に立ち意志の疏通を圖らしむ

第三條　寄宿生は主として品行を愼み學業を勵み互に和合一致を重んし誘掖補正を務め反目嫉視するの弊なからしむ

第四條　寄宿生は規律的生活を成すの習慣を養成せんが爲め自修時間の日課を定め之を實行するは勿論適宜戸外の運動をも怠る可らす

第五條　社會的事業の成否は專ら身體の健不健に關するを以て寄宿生たるものは務めて身體の修養を怠る可らす

第六條　寄宿生にして若し疾病に罹るときは校主直に之を診察し適當の治療を施し父母兄姉をして決して不安の念なからしむるの待遇をなす

第七條　天性斯學に適せす誘導啓發の勞を取るも到底成業の見込なきものは他に轉學をなさしむる等父兄と協議をなす可し

第八條　入舍又は退舍せんとするものは其旨父兄より申出て校主の許可を受く可し

第九條　本校の寄宿料は一ヶ月金七圓と定め總て前納せしむ但し食物の良否は身體の氣力に非常の關係を及ぼす者なれば務めて滋養物を攝取せしむ

第十條　父母兄姉より學資金保管の依頼あるときは本校會計に於て之を取扱ひ濫費の憂なからしむ

雜報

◉皇孫殿下御箸初

迪宮裕仁親王殿下の御箸初式は去月五日の吉辰を以て行はせられたり殿下は午前中參賀の人々に拜謁仰付られ正午樓上御座所に於て川村伯より獻上の御赤飯に二汁五菜の御料理を供へたる御膳部に向ひ侍女の御介酌にて目出度御箸初の式を擧けさせられ同時に兩陛下幷に東宮兩殿下其他より御贈進の御祝儀を御覽に供し畢て御召更の上御參内あらせられたり

◎御參内 それより殿下は午後一時三十分御出門御養育主任夫妻御陪乘加藤、小原兩侍醫、御乳人等の供奉にて東御車寄より御參内 兩陛下に御對顏わらせられ次に賢所御參拜あり畢て御退出夫より東宮御所に赴かせられ皇太子同妃兩殿下に御對顏ありき

◎御祝儀御贈答 殿下御箸初當日の御祝儀として畏き邊より御酒肴を御下賜わらせられ東宮御所よりも同樣の御祝儀あり尚有栖川宮殿下其他よりも夫々御祝ひ申上げられたるが當日殿下より御贈進相成りたるは

天皇皇后兩陛下へ　生鯛　一荷宛
賢所へ　生鯛　一臺
皇太子同妃兩殿下へ　生鯛　一臺宛
常宮、周宮富美宮、泰宮各殿下へ　生鯛　一臺宛
有栖川宮殿下へ　五種交魚　一折
九條公爵へ　五種交魚　一折
中山一位局へ　三種交魚　一折
柳原權典侍へ　三種交魚、一折　清酒　一樽

兩陛下より　生鯛　一荷
兩殿下より　生鯛　一臺
九條公爵より　生鯛　一臺
中山一位局より　生鯛　一臺
柳原權典侍　生鯛　一臺

◉英國女學界の泰斗 （ヒユース孃の來遊）

英國ケンブリッヂ女子師範學校長エリサベス、ヒユース孃は、今回本邦の教育制度視察の爲め本國政府の命を受けて渡來せり孃は本年五十歳元とウエールスの人にして三十三歳の節哲學博士の學位試驗に應じ主席を以て及第し翌年又史學博士の學位を得、爾來教育界に各種の委員として盡粹する事尠からざる人なりと

いふ。
嬢は去月十二日午後一時より帝國教育會に於いて同會の招待によりて演説を爲せり演題は「英國人の立場より觀察したる女子教育」と云ひ岸本能武太氏通譯して約一時間ばかり演じたり來聽者の重なるは徳川達孝伯並に夫人、船越衛男、濱尾新氏並夫人、久保田讓、箕作理科大學長、中島大學教授、澤柳普通學務局長、隈本文部視學、加納、南摩、肝付、伊澤、馬屋原の諸氏婦人には山脇夫人、津田梅子、安井哲子、三輪田眞佐子、武田錦子、佐方鎭子、其他六百餘人

（演説別項に在り）

◉ヒユース孃の演説

◎會長及紳士諸君、私は今日諸君に對して演説をなすは非常なる光榮なれども又た其れ丈非常なる責任を負ひあると思ふ私は日本に來りて觀察したる教育の概要に付いて演ぜんと欲すれども此の如きは私より申上ぐるよりは諸君より拜聽せんことを希望す

◎日本は外形に於てのみならず其内容に於ても英國と酷似し居る也海に働らく水夫を見ても時代の古きことに於ても酷似し居る也殊に日本の武士道と英國の紳士道とは能く似て居る也

◎今日は英國人としての立場より女子教育を觀察すと云ふ主意にて其大體は左の如し

◎一、女子教育は單に女子のみに限れる問題に非ず男子も亦た大に力を盡さゞる可からざるものなりと思ふダーヴヰンの遺傳論其眞理たるを認められ知育、德育、體育か其の子女に遺傳さるゝに於ては家庭の中心たる母、妻、女子の大なる關係を有し居るは明かなり是によりても女子教育の必要を知る可し

◎二、社會の發達するに就ては是非とも女子の力に依らざる可からざるものあり故に英國にては社會の必要上女子をして其の職分を盡さしめんとし其の發達進歩を助成せり女子は兎角引込み思案になるは其の特性なれば之を引上ぐるは男子の力によらざる可からず而して自然其職を盡すべき位地其品位を保つべき位地に置くは必要なり故に英國にては此手段を取り中學校の校長其他相當の位地に置きつゝあり是れ婦人をして社會に出でしむるの手段なれば也

◎三、女子教育問題は現在確定したるものにあらず英米に於ける女子教育は今日進歩したりと雖も是れ經驗により玆に至りしもの最初は實に詰らぬ有樣なりし英國は最初は女子教育を以て男子教育と同一に見倣したりしが今日に至りては其弊を認め實驗しつゝある也米國は婦女協同教育を爲し今猶ほ此方針を採り居れども是には近來に至り反對論出て來れり即ち女子には女子適當の教育を施すべしと云ふに在り此等の論は大に研究に資すべきものなりと思ふ

◎四、女子教育の必要なる點は家庭を作らしむると云ふにあり私の實驗したる處によれば家庭の勢力あるは英、佛、日本の三國也善良なる家庭を作らんには女子に善良なる教育を施さゞる可からず左れば女子教育の目的は此方面に力を盡し家庭を作るの資料を得せしむるが緊切なりとす男子教育に一般と特殊とある如く女子教育にも此二樣あるなり今日社會の事物進歩して女子の爲すべき事は減じたるが如しと雖ども一方に於て

は子弟の教育家庭の修整、下女の取扱等益々女子の事業を増加し來れり家庭が社會に對して影響あるものとせば其の家庭を作るの女子に社會的の智識を與ふること必要なり

◎五、女子教育には新しき職業を與ふるの方針を採らざる可からず今日こそ社會に勢力なけれ今後は工場の監督、會社の事務等に當るべき時の來るべきは必然なるを以て其の力を與ふるの方針を採りて女子を教育するを要す

◎六、日本の婦人は運動に多くの時間を有するは喜ふべきこと也然れども女子の體育を脩めんには男子と異なりたる運動を採らざる可からず而して心を窮屈ならしめず自由に運動せしめずんば却て害やり其教師としては婦人を以てせざる可からず今日瑞典に行はるゝ女子體育の如きは最も適當なりと思ふ

◎七、女子教育は學校に於てするよりも學校外に於て有益なるもの也私はケンブリッヂ大學に在るの際外に在りて先生に 逢ひ其の說を聞いて益を受けたること少なからず心不活潑にては教育も効なし自由に活潑に社會に臨著するの方法を採らざる可からず

◎八、今後女子教育をなさんには男子に於いて誤りたる如き事なからんを望む英國の如きは近年男子に施したる教育の不都合なりしを悟り其の弊を除去するに力められたれども其の點に於ては女子教育の方は遙かに進歩しある也日本にても右は習慣 の存するあれば 此點に 注意を要す可し

◎最後に婦人諸君に一言せんに婦人諸君が女子教育を盛にし其の品位を高め位地を得んと欲せば宜しく其機會に乘ずへし妄りに動いて男子の反對を受くるが如き事ある可からず英國に於ても女子教育の進歩は四十年來以來也是れとて急劇に爲したるものにあらずして漸を追ひたる也

◎次に紳士諸君に望むは女子を引立てゝ成るべく社會の上に超たゝしむるに力を盡されんこと也日本婦人は柔和温順なり此婦人を教育するならば必ずや國家の洪益となるべし有ゆる機會を女子教育に與へられんことは切に望む處也

◎嚴尙宮の逸事

去十五日いよ〳〵立后の式を行はせられたる朝鮮國新王妃嚴尙宮の逸事を聞くに嚴氏の家門元とと微賤にして半島にて所謂中人なり一說には尙其以下にて常民ともいへり中人は兩班と常民の中間に位すと雖も兩班よりは下賤視せられて隸隸の如く刀筆主簿の小吏たる外就官の資格をも有せず嚴嬪の祖父は嚴裁裕、父は嚴鎭參とて共に下賤なりき嚴氏は鎭參の長女にして容姿揚らずと雖も天性怜悧宮人として王宮に入りしは今を距る約三十年前芳紀十八九歲の時なりしと（今年四十八歲）半島女官の階級は實に數十に別たれ嬪、貴人、昭儀、淑儀、昭容、昭媛、尙宮、尙儀、尙服、尙食等とし、宮人といふは最下級とし常民より入るを習とすと尙宮以下の宮女は凡て殿中に雜居し尙宮に進みて始めて別に洞房を賜ふ嚴氏の宮人として宮中にあるや其尙宮に昇進して初めて別房を賜はり君寵を受けしは今より十星霜の前にあり當時此事忽ち故閔后の察知する所となり怨妬に會して苛責酷待具さに到り名花折落の危に瀕するに及び嚴氏遂に堪ふる能はず一夜宮中を脫出し東西彷徨城隙に陋居せる一老婆朴氏の居に投ず老婆は其尋常の宮人にあらざるを察知し意を傾けて歡待し以て庇護に力めたり此後嚴氏の運命再開と共に忽ち巫女朴氏の名世に轟き嚴嬪の權勢に攀ぢて深く宮園の中に出入し神驗祈禱の寬術に託して寬殿の密謀に參し一大勢力を有せる一老婆こそ當年嚴氏が庇護せし化身とは

知られたれ而して嚴氏が宮牆外に淵零落魄の數年間災厄と危險とは嚴氏の身邊に纒綿して離れず閔氏の嫉妬は城隍の一陋居にまで及て彼ゝ免かれざらしめんとせり嚴氏は遂に城外に走り或は麻浦の米店に傭婦を粧ひ或は東門外の旗亭の賣酒女と化し其辛苦慘憺の狀は名花風雪の厄も啻ならず然れ共嚴氏亦野心滿々の女豪たり宮牆の外より遙に多恨の情を君王に寄せ其の情緒を動かしその歸參を許されんとするの謀略に疎かならず時に城內兩班の禁闕某々等に結んで慇懃を通じ時に雲峴宮派の志士と好を通ぜし事あり

大院君の薨後雲峴宮門前は今正に雀羅を張らんとし今上の實兄たる李載冕氏の如き給與足らず甚しきは薪水の費に困乏せるを嚴嬪常に竊に米金を寄送して庇助に怠らず雲峴宮一門の今日僅に飢寒を免かれ居るもの重に嚴嬪の力によるもの多し

已にして乙未十月の變あり一陣の腥風雨血は爆然慶福宮を襲ひ國色の閔后を吹き落せり而して此無情の慘風悲雨は却て嚴氏の爲に運命の再開を媒酌せる靄々の春風にてありしなり事變後の新閣員等は此の玉折蘭摧によりて起れる君王斷腸の怨を慰さめんと欲し東西に物色して嚴氏を野徑陋居の中に求めて再び君王の玉闥に侍らしめたり間もなくして王子を擧ぐ（英親王にて本年五歲）嚴氏は尙宮より一躍して貴人に進められ昨年更に一級を進められて嬪號を賜はり淳嬪と稱せらる父嚴鎭參は夙に逝きて世に在らず家に男子なく他家の子を養ふて嗣子となし其名を嚴俊源と云ふ即ち嚴嬪の義弟にして今や漢城府判員の高官にあり（漢城府判員の職は中人の就くを得ざる高官なり）此一大破格の任命あるに當り宮中府中共に反對の議ありしも遂に嚴嬪の勢力に抗し得ず即ち先づ嚴鎭參に位職を追陞すべしとの勅命ありて議政府參政の顯職を以てせられ尋で嚴俊源を該判員に任ぜらる是れ本年七月の事にして此に嚴嬪の家門大に世に著はる嬪の從弟嚴仁源又警務局長の職に在り

●愛國婦人會の報告會

去月五日午後二時九段偕行社に於て愛國婦人會の報告會を開き奥村五百子氏各地方漫遊の結果を報告したり左に錄するは近頃東本願寺新法主大谷光瑩師が奥村女史に就て某子爵に送りたる書面なり女史の熱心を推するに足るべし

二伸五百子例の通君國のため奔走し餘程疲勞の樣見受け候間一日休息按摩にてもとり候樣申入候へども例の氣象故承知仕らず室外に立ち出でられ候小衲背後より見遣り候所餘程腰痛の躰相見え候もはや六旬にも近き老躰殊に此程吐血致され候事故さもあらんと存じ如何に世の爲とは申ながら唯々感激の外御座なく候國家報恩を以て務と致され居候故人に向つては氣强く談話致され居候へとも人なき時は（小衲と對座のときは）自ら疲勞の躰現はれ候事と轉た暗涙にむせび候何卒貴邸へ參り候節貴君よりも一日休息し候樣御政忠告の程願上候

●北白川宮妃殿下臺灣御渡航
並に御獻詠

故北白川宮能久親王殿下の御靈を祀れる臺灣神社大祭は十月二十七八日を以て執行されしに付同妃富子殿下

は田中家令、高野、樋口の二家從、松岡老女、侍女二名を從へられて御渡臺の途に就かせられたり右に付小松宮、同妃閑院宮妃、成久王、恒久王、照久王の各殿下を始め田中宮内大臣、香川皇后宮太夫、土方伯、林御養育主任、同夫人、鍋島侯、島津公、德川侯、戸田伯、有馬伯、大久保中將、齋藤内事課長、其他宮内省高等官、華族等百數十名は新橋停車場迄御見送り申上げ尚成久、恒久、照久の三王殿下は橫濱迄御行相成りたり妃殿下は同十時二十分橫濱に御到着隨員と共に直に海岸の御用邸に入らせられ暫時御休憩の後淺間艦附屬の小蒸汽船にて本艦に御移乘玆に三王殿下と御袂別の上正午御發艦相成りたり。

◎臺灣神社獻詠●●●●●

大祭御執行に付き賀陽宮邦憲王妃好子殿下以下京都向陽會員、宮内省親勅任官　女官、御歌所員等四十四名は「能久親王」といふ御題にて和歌獻詠

邦憲王妃勳二等好子殿下

◎こもまくら高砂島の民草は神のみいづになびきふすらむ

久邇宮絢子女王殿下

◎高砂の島につくしゝみいさをはよゝのかゝみと輝ぬへし

久邇宮純子女王殿下

◎月に日に高砂しまはなさまれとことむけましゝ君はいまさす

東久世通禧

◎にきみたまあまかけりして高砂の島の新國千代まもりませ

久我通久

◎そびえたつ新高山の峯よりもたかきは親王のみさを成らん

鍋島直大

◎高砂のしまを御國となしてけりかへらぬ身とはなりたまへとも

渡邊千秋

◎新高の山の草木もみそのふのたけの葉風にうちなびきけり

黒川眞頼

◎御靈はも島にとまりて島人のあらき心をしつめますらん

本居豐穎

◎おきつしまあらしの中になれしかなあはれみその丶竹の一もと

津輕承昭

◎白川のなみ／＼ならぬ名をあけてのちの世遠くあふく君かな

松浦詮

◎御勳はいくちよまても新高の山のたかねのくちせさるらん

壬生基修

◎宮柱高砂しまにたちそひえかみの御いつもかゝやきにけり

長岡護美

◎大前にひくみしめなは打はへてのとかなるよの島風そふく

渡邊清

◎そのかみの君か御影も見ゆるかな新高山のあきのよの月

大谷光尊

◎いつきまつる神のいさをは新高の山よりたかくあふかるゝかな

梅溪通治

◎まつろはぬあたをきためて高砂の高きいさをゝ立ましにけり

◉尊かる身をさへ捨て高砂の高きいさをゝたてし君かな　水野忠敬

◉仇波をしつめたまひしみいさをゝたゝへてあふく高砂のしま　藤枝雅之

◉誰もみな袖をぬらしてしのふかな高砂島の神のむかしを　小原適

◉皇孫殿下のおしやぶり

皇孫迪宮殿下御用のおしやぶりを、下谷池の端の玉寶堂が調製して上つた由なるがさて其おしやぶりの形狀を詳しく見聞すれば、お握りの處は長さ一寸五分五厘で、其の中央三分二厘の間に三條の線を淺く彫り、此處の太さは二分五厘で、兩方を少しく細くし、それから段々に兩端を太くし、御口に含ませ給ふ處は楕圓形で、長さ九分厚さは一方が五分他方が六分五厘あるそうである、尙洩れ承る處に依ると、殿下には最初彼の護謨製の乳器を召させられ、近頃は矢張玉寶堂で、調進した象牙製のおしやぶりをお用ゐになつて居たが日增しに御成長遊ばさせ給ふにつけ、今回更に前のよりも、稍大形のを召させられた次第のやう承る。

◉風俗改良會の實行事項

西鄕侯、板垣伯等の主唱にかゝる風俗改良會は過日商議員會を開き先づ本會が實行して他を誘導するの事項を左の如く制定し今回の兩侯伯地方遊說にも亦此事項を到る所に宣言せり

一訪問は午前は九時より十一時午後は二時より四時（日の永き季節は五時）に至る間を通例とす但別に其時刻を約束したるとき又は特に面會時刻を定めたる人を訪問する時は此限にあらざるは勿論なり

一訪問の際に於ける對話は冗長に涉らず其間は短少なるを要す

一訪問するときは必らず名刺を出すべし面會せざる時と雖も之を遺し置くべし

一訪問者には茶菓を出さゞるを通例とす

一業務上の訪問は豫め時間を定むる能はざるも單に用務を談ずるの外餘事を語る可らず

一訪問に用ゆる名刺は白色の紙を用ひ總て裝飾を附すべからず

一社會共存の義に由り他人の妨害を爲さゞるを努むべし之を例せば道路の通行は左側を進行し人道車道の區別ある場所に在ては必らず人道を行くべし

一途上に佇立し立談す可らず立談を要するときは片隅に於てし通行の

妨とならざる樣心掛くべし
途上又は船車中に在りては容姿を端正にすべし
船車中等に在りては無作法なる態度をなし或は坐席を廣く横領し携帶品を取散らし或は酒宴に似寄りたることをなし其外總て他人の迷惑を顧みず我儘の行爲ある可からず
渡船塲又は乘車塲等にて先を爭ひ混雜せざる樣注意すべし
劇塲寄席等に於ては極めて靜粛にすべし
一老幼婦女に對しては可及丈け力を添へ扶助するを忘る可からず
一會葬の際は愼簡なるを要す
一回答を要する文書を接受したるときは努めて速に返信を發送すべし
一虚飾無用の物品贈答を廢すべし
一酒杯の獻酬を廢止すべし
一旅店其他の茶代は一切廢止すべし
一約束時間を嚴守すべし

●女子大學校へ御下賜金

今更申すも畏きわざながら、皇后陛下には、深く女子敎育に御意を傾けさせらるゝ事は、我等臣民の感泣に堪へざる事なるが、陛下には、日本女子大學校の主旨を嘉し給ひ、殊に御思召を以て、去月廿五日、金二千圓を、御手許より御下賜相成りたりと承る。誠に女子敎育界の光榮といふべし

●女界片々

○日本女子美術協會　近來女子にして美術工藝を研究するもの追々と進歩し來り青山女子學院、東京職業學校、跡見學校及は高等女學校等の如き生徒の製作品にして見るべきものなきにあらず而かも日本美術協會には此等の作品を世に紹介する奬勵の機關なく是女子美術上の一大缺點として今回日本女子美術協會なるものゝ發起さるゝを見たり其主意目的を聞くに全國の女子美術家の製作を集めて展覽會を開き以て之が奬勵發達を計るにあり第一回展覽會は來る十一月十六日より十二月十二日迄上野公園第五號館にて開設する筈なりと尙會長には佐藤進氏夫人を戴き事務に熟する迄男子美術家之が斡旋の勞を取るべしと

○女子敎育の趨向(萬朝報)　日本の女子敎育が近年著しき進歩をした事は大に賀すべき事である、遠からぬ前まで少女が或高等の學校に在學して居れば近處の驚きの種であつたが、今日は良家の女で高等敎育の缺けて居る事は耻辱と考へられ、其結果は東京の諸高等女學校は皆滿員となつて、多くの熱心なる入學志望者を謝絶せればならぬ程である、朝頃の首府の學の區を散歩すれば何れ程女子敎育が盛であるか分る、何故なれば十歩毎に海老茶色の袴を着け本の小包を脇にかゝへた女學生の小群に出會ふのである、地方に於ても高等女學校は同樣に繁昌して、其卒業生のうち志ある者か少くない彼等もし當地に親戚友人等があつて、其家に寄宿することが出來れば幸福であるが多くはそのやうに幸福でなく、已むを得ず下宿屋に行くことになる、此事が彼等の爲めによくない事は殆ど言ふ迄もない、何となれば此等下宿舍の空氣と四圍とは決して健全でない、これを思ふて多くの兩親は其娘を上京さすことを躊躇する、此故に純潔なるホームの如き寄宿學校で經驗ある敎師が女學生を監督指導する所が大に入要である、我々は少くも此種の學校を一つ知つて居る、それ

は本郷彌生町にあつて櫻井女塾といひ女子教育に多年の經驗ある櫻井氏が數年前設立せられたるもので、旣に多くの學藝ある淑女を出した、全くホームの如き風を以て管理され、溫く樂しき空氣が充ちて居る、其上櫻井夫人は英學に精通せられ英語を敎授して頗る好結果がある、我々は東京でホームと學校とを要する地方の女學生に此學校を推薦する

○女生徒服裝の改良（京都）　京都市上下京區聯合學務委員會に於ては中村常次郎氏より建議に係る尋常小學女生徒服裝改良の件に就き調査委員を推選し同委員は各地方より數種の標本を蒐め更に考案をなし上衣は筒袖にて元祿時代の形式に袴は普通に調製し聯合會に報告したるが實行如何に關しては熟考の上來春開會する聯合會に於て可否を决すると旣記の如くなるが下京區富小路松原下る有隣尋常小學校にては他に卒先して前記委員の報告せる服裝を採り改良服を調製することとなり本月末若しくは來月上旬擧行する運動會には女生徒一同該改良服を着用せしめん計畫なる由

○栃木婦人協會　慈善事業と女權の擴張と風俗改良とを目的として起りたる同協會は去月廿一日其の發會式を擧行し久松義典氏外數氏の演說あり來會者は縣郡町村會議員小學校議員等無慮五百名同會役員左の如し（會長）善野松子（會計監督）飯塚この子（幹事）中川又七郎氏平岩幸吉氏黒川善作氏近藤龜次郎氏（評議員）片山榮子高山とほ子望月玉子木澤糸子波多野豐子波多野みよ子大塚雪子鈴木房子塚田仙子谷田卷子山崎行子早乙女菊子

○今世女訓　棚橋、鳩山、三輪田、佐方、安井、後閑、津田諸女史の女子教育に關する論說を蒐集せしもの一讀の價なしとせず發行所松屋三松堂定價二十錢

○家庭讀本　堀内新泉君の著にして家庭の語り艸をたも平易に且つ趣味あるやう書き顯はしたるもの也定價十錢普及舍發行

○京都淑女學校　は京都市下京區不明門通中珠數屋南入所にあり校長は田島敎惠氏にして敎師八名あり凡て女子なり本年四月開校し本科四年高等科三年別科三年にして現在は本科一年二年三年及び別科一年の四學級にして生徒は現在の假校舍に充滿し本年中に本校舍に移轉に付目下其準備中なり京都各女學校中校服として女生に袴を穿たしむる所なく獨り本校は敎師生徒一般に校服として紫紺色の袴を穿たしめ衣服は凡て綿服とし校紀甚だ嚴正なり

○慈善女學校　京都上流婦人間には從來慈善の事業とては一もなかりしが今回貴婦人の特志家は慈善女學校なるものを設立し明年一月より開校の都合にして本校設立の目的は貧民の女子に必須の簡易なる學科及裁縫手藝等を無月謝にて敎授し月末には手藝等の製品に應じて相當の賃金を與ふるにあり經費は維持會なるものを設け一時に金拾圓若くは二ヶ年間每月金五十錢づゝ寄附するものを會員とし已に續々入會者あるよし校長には前女子高等師範學校舍監正七位安達安子女史を學監には田島淑女學校長及橋川京華看病婦學校主を推薦し敎師は目下撰定中なりと、

○女子美術學校の擴張　本鄕區弓町二丁目一番地に設立されたる女子美術學校は去る四月開校以來時日尙ほ淺きにも拘はらず旣に百八十名の入學者あり其餘は是非なく入校を謝絕し居りしに本月より更に校舍を擴張して多數の入學者を容るゝこととなり又た寄宿舍をも新設して遠來者の便を計ると云ふ同校の學科は日本畫、西洋畫、彫塑、蒔繪、編物、造花、刺繡、裁縫の八門に分れ各門普通高等の兩科あり副科として普通學を兼修せしめ且つ實技のみを修めんと欲する者の爲めに專修科を設け其の授業料は普通科專修科は各一ヶ月一圓五十錢、高等科二圓にして入學金は各科共二圓、寄宿料は一ヶ月金六圓なり

◎女流十二大家投票（第二回披露）

教育家

下田歌子	二百七十二
棚橋絢子	二百六十六
跡見花溪	二百三十七
三輪田眞佐子	二百七十三
矢島楫子	百五十二
小鹿島筆子	二十一
山川二葉子	十二
安井哲子	二十三

宗教家

村雲尼公	二百二十三
長谷川喜多子	四十三
河野閑子	七十一
島村光津	二十一
潮田千勢子	二十五

著述家

下田歌子	六百四十一

英學家

津田梅子	百二十五
長谷川喜多子	四十三
安井哲子	二十三

女丈夫

野中千代子	百四十三
鄕瀧子	百四十一
奥村五百子	百二十五
原禮子	四十三

小說家

三宅花圃	百二十三
大塚楠緒子	百二十六
小石井喜美子	七十二

事業家

奥村五百子	三百四十二
原禮子	七十三
深井仁子	十八
鳩山春子	百四十六
大隈綾子	七十五

交際家

鍋島榮子	四十七
廣岡淺子	十二
原禮子	三十二

音樂家

橘糸重子	二十七
幸田延子	百十八

歌人

中島歌子	百六十三
大谷章子	六十一
小池道子	百二十七
服部[illegible]子	十五
佐々木雪子	三十二

畫家

跡見花溪	二百六十三
中島歌子	百十二
山岸多年子	十七

書家

野口小蘋	三百四十七
武村千佐子	七十二
跡見花溪	百四十一

女學世界第十六號記事要目

每月一回五日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）…金二十錢
四冊（三ヶ月分）……前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
内（定刊數……………十二冊
　（增刊四回…三、六、九、十一月價格同一

郵稅　一冊　二錢

廣告料

	二十四字詰一行	半頁廿二行	一頁六十四行
特等	……	……	割引 三十三圓
一等	四十三錢	十三圓七十六錢	割引 二十七圓
二等	三十五錢	十一圓二十錢	割引 二十二圓
三等	三十錢	九圓六十錢	割引 十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

注文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず。
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す。
●郵劵代用は一割增にて五厘一錢の分に限る。
●總目錄御入用の方は二錢劵相添へ申込あれ。

明治卅四年十一月五日發行　第一卷第十四號

編輯人　松原岩五郎
發行人　大橋新太郎
印刷人　石川金太郎
印刷所　株式會社秀英舍　東京市京橋區西紺屋町二十六七番地

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番

博文館諸雜誌發行表

定價

- 太陽一冊三拾錢・郵稅三錢・毎月一回
- 少年世界一冊拾錢・郵稅壹錢・毎月一回
- 中學世界一冊貳拾錢・郵稅貳錢・毎月一回
- 女學世界一冊貳拾錢・郵稅貳錢・毎月一回
- 文藝倶樂部一冊廿五錢・郵稅二錢五厘・毎月一回
- 太平洋一冊六錢・郵稅五厘・毎月曜日
- 圖書世界一冊三錢・郵稅五厘・毎月一回

十一月發行表

六大雜誌及增刊

- 太陽第十三號・五日發行
- 少年世界第十五號・一日發行
- 中學世界第十四號・十日發行
- 女學世界第十四號・五日發行
- 文藝倶樂部第十三號・一日發行
- 女學增刊磯千鳥第十五號・十五日發行
- 圖書世界第五號・十五日發行

太平洋

- 第四十四號……四日發行
- 第四十五號……十一日發行
- 第四十六號……十八日發行
- 第四十七號……廿五日發行

廣告料

- 太陽……一行一回金四拾五錢　五號活字十八字詰
- 少年世界……一行一回金四拾錢　五號活字廿四字詰
- 中學世界……一行一回金三拾錢　五號活字廿四字詰
- 女學世界……一行一回金三拾錢　五號活字廿四字詰
- 文藝倶樂部……一行一回金四拾錢　五號活字廿四字詰
- 太平洋……一行一回金四拾錢　五號活字廿二字詰
- 圖書世界……一行一回金拾五錢　五號活字廿二字詰

詳細は御問合せの事

蠶業叢書

全部拾貳冊

洋裝菊判美本

正價　一冊金三十錢〇六冊前金一圓七十錢〇全部十二冊前金三圓貳拾錢〇郵税一冊六錢

發行の趣旨

富國強兵の策は他なし殖産を興し民力を休養するより急なるはなし、本邦は古來扶桑國と稱し蠶桑の業を以て名あり宜なり歴朝能く斯業の奬勵に勉め人民亦孜々之れが發達を企圖するや其現今に至り已に輸出物金額の大半を占むるの盛境に達したる眞に偶然にあらざるなり惟ふに我邦家の消長は蠶業の盛衰に關するや大にして國家は殆んど斯業によりて其運命を卜するに似たり、然りと雖も蠶絲は獨り本邦の特有物産にあらず清國の多産伊佛の精良尚ほ我を凌いで餘裕あり、去れば本邦の蠶業は將來益々進んで之れが勃興を圖り之れが改善を講せざれば彼の列強に對峙すべくもあらず然るに本邦未だ斯業に關する學識經驗共に幼稚の域を脱せず是れ本館が當代斯業界に於て錚々の聞えある農商務省蠶業講習所本科出身者數氏の新著を乞ひ蠶業叢書の名を以て逐次之を刊行し汎く當業の士に領ち斯業改善の良友たらんを期す其全部の要目左如し

第壹編　蠶業通論　三谷識君・池田榮太郎君著

第二編　生絲檢查論　德田實也君著

第三編　栽桑新論　池田榮太郎君著

第四編　桑樹病害論　岩淵平太君著

第五編　養蠶新論　望月關馬君著

第六編　蠶體解剖論　松下憲三郎君著

第七編　蠶體生理論　松尾重信君著

第八編　蠶種論　岩淵平太君著

第九編 製絲新論 井上陸君著

第十一編 多化蠶飼育論 山田島次郎君 大森孫十郎君著

第十編 殺蛹乾繭論 三谷徹君著

第十二編 蠶業經濟論 德田實也君

本書は所謂蠶業叢書の總論にして世界蠶業の起原より蠶業に關する萬般の事項を括論せるものなり本邦從來此に類似せる一二の著書なきにあらずと雖も陳腐にして見るに足るものなし然るに本書は斷然奇拔蠶業界の既往に鑑み現在に照し以て將來執るべき方針に及ぼせり卓觀特絕の論鋒人をして當然蠶界の活劇に遊ばしむるの感を與ふ實に本邦古來空前の良書なり凡そ斯業に從事する諸氏は其學者たると實業家たるとを問はず本書を一讀せば恰も闇夜に一道の光明を得たるの觀あらむ

第壹編

蠶業通論

農商務省東京蠶業講習所技師農學士 本多岩治郎君校閱

三谷徹君 池田榮太郎君共著

全一冊 正價金卅錢郵稅六錢

第貳編

生絲檢查論

橫濱生絲檢查所長 岡毅君序文

橫濱生絲檢查所技手 德田實也君著

全一冊 正價金卅錢郵稅六錢

本書は我邦に於ける生糸檢査の方法を論述し進んで其精粗優劣の由て來る所を詳說したるものにして著者自ら其職に在りて日常檢査に從事し見聞調査せる事項を發表し以て全國各地製糸業の趨勢を窺ふの便に供す殊に昨年內外生絲業者に締結されたる條約中水分檢査の項目の如きは具に之を解釋し製糸家及び生絲業者の參考たらしむること甚だ大なり蠶業家の本書に待つ所鮮少にあらず

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

警察監獄全書 全部六冊 完成廣告

社會問題國家問題として大に研究すべき必要書籍『警察監獄全書』全部六冊玆に完成を告ぐ此際弊館に於ては江湖購讀諸君の御便利を謀り全部六冊取揃へ御注文の方に限り**上製六冊金貳圓八拾錢並製六冊金貳圓**にて送本す請ふ續々御注文あらんことを希望す

●定價●●上製壹冊五拾五錢●郵稅壹冊拾錢
並製壹冊四十錢●郵稅壹冊八錢

第壹編 監獄學

法學士 谷野格君著

監獄費國庫支辨案は上下兩院を通過し監獄事務は內務省を脫離して直に司法行政の配下に歸屬せり然れども半億の國人中克く其事務を知悉せるもの果して幾干人ぞ而て其國庫支辨となし又は司法行政事務となすの當否に關し獨立の見解を有する者に至りては寥々として誠に晨星の如し夫れ監獄學は大學獨立の講座たるに足り監獄制度は優に一國樞要の立法又は政畧の問題たるに足る而して國人の頭腦監獄思想缺乏する斯の如く太甚しとせば豈に啻に當該者の不幸のみと言はんや

第二編 司法警察手續法

法學士 中大路正雄君著

社會の罪惡は濱の眞砂の盡きざるが如く、人間道義心の腐敗とゝもに益ます增加し之を防止する司法警察の任務は日に益々重きを加ふ司法警察の職を全ふするまた難い哉、是れ本書の著者が多年東西名家の所說を參考して此書を編し司法警察法規の原理を論究し讀者をして其手續に熟熟し以て社會の罪惡を矯正せんと欲する所以なり司法警察の意義、警察官の責任、其責任を全ふす方法等は詳說して餘蘊無し

（後付の五）

(後付の六)

新刊廣告！

文武堂發販

文學士藤井紫影君序
文學士佐々醒雪君序
文學士笹川臨風君著

遊俠傳

全壹冊袖珍金文字入美本
正價金廿五錢　郵稅六錢

目次
幡隨院長兵衛
花川戸助六
大口曉雨

附錄……蔦屋重三郎

講談物に非ず小說に非ず事實は正確考證は該博觀察は奇警之を行るに著者一流の文辭を以てす、上正保慶安の頃よりして下、文化文政に及ぶ通じて之を讀めば江戸市井の歷史なり分て之を觀れば江戸各時期の時代觀なり製本既に成る請ふ御愛讀あらんことを。

押川春浪君著

海島探險　塔中の怪

全壹冊袖珍金文字入美本
正價金三十錢　郵稅六錢

濠洲の端、黑面塔あり魔賊之に棲み海洋に隱見して魔道を行ひ宇內を震駭す、會々二俠士あり海星丸に駕して此怪島に入り幽鎖門を侵し魔窟を衝きて可憐の處女を海底の牢獄より救ひたる其奇其怪、開卷一番、讀者既に魔境に在るの感あらん

高山文學士序文
國府犀東君新著
審也素明百穗三君揮毫插畫

新體詩集　花柘榴

全壹冊袖珍洋裝頗美本
正價金廿五錢郵稅四錢

近刊

犀東居士政治を論じ時事を談じ禪を話し俳を弄し文を草し詩を賦す又嘗て新體詩に見る所あり淚珠唾玉推鍊して數十篇を成す。乃ち輯集して此冊子を得たり其句勁拔其調高曠蓋し新躰詩壇に一異彩を放つ者一誦せば秋燈の下榻試に之を讀て可なり。

東京日本橋區本町三丁目
博文館發兌

大賣捌所　東京堂書店

鶯亭金升君著

風雅文庫

全部六册袖珍美本

風雅文庫第壹編 都々逸の栞

天文地理鳥獸虫魚等各部に別ち古今の秀吟を添へ季題と雜題とを親切に說き卷頭には初心の爲めに作法を掲集し卷末には雜題見立物詠込折句其他數百吟を集めたる無比の珍書にして、啻に雜俳家のみの重寶にはあらず

製本既成 正價金貳拾錢 郵稅六錢

風雅文庫第貳編 冠句の栞

附り前句付 正價金貳拾錢 郵稅六錢

雜俳中の流行物なる冠句は冠附、傘附、狂俳等の名は變れども全國に廣く行はる、本書は冠句中別に東京調の名ある一派を初め全國作家の秀吟を網維し、卷頭には卷附の作例を擧げて初心の爲めに東西を指し、冠附選林中には冠句の題數百を蒐集し、附錄には上句附下句附の佳作を掲げたれば俳諧の參考ともなるべし

續刊目次
狂俳句の栞
狂句の栞
狂歌の栞
雜俳の栞

上記の六册を纏めて美帙に裝ひ明窓淨凡の下に備へて花月の好伴侶とせば百年の長齡も此の浩氣を養ふの原素となるを得べし雅客たる人必ず一本を購入せざるべからず

新刊 俗曲大全 全壹册
鶯亭金升君校訂 正價六十錢 郵稅拾六錢

再版 都々逸一千題 全壹册
鶯亭金升君編纂 正價金參拾五錢 郵稅六錢

(後付の七)

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

著名文學大家執筆 ∴ 有名和洋諸伯揮毫

洋裝菊判美本

世界歷史譚

每冊百卌頁餘

全部卅六冊 ∴ 每月壹回發行

第壹編 釋迦……芦山文學士著 製山畫
第貳編 孔子……吉國文學士著 不折畫
第參編 耶蘇……上田文學士著 不折畫
第四編 ビスマーク……笹川法學士著 秋堂畫
第五編 ハンニバル……大岡文學士著 寓也畫
第六編 マホメット……坂本文學士著 蓮叢畫
第七編 漢高祖……三浦文學士著 篁渓畫

第廿九編

法學士名尾良辰君著

クリスピー

遠藤耕溪君畫

正價拾三錢 郵稅四錢

第拾五編 ソクラテス……久保文學士著 不折畫
第拾六編 グラットストン……近松法學士著 不折畫
第拾七編 歷山大王……幸田文學士著 不折畫
第拾八編 王陽明……白河文學士著 春汀畫
第拾九編 ガーフ井ルド……酒井文學士著 不折畫
第貳拾編 デモステネス……十時文學士著 古洞畫
第廿一編 シェクスピーア……中村法學士著 春汀畫

第八編 子ルソン……島田法學士著 蘆岳畫
第九編 岳飛……石川文學士著 金次畫
第拾編 コロムブス……若月文學士著 白龍畫
第拾壹編 ガリバルチー……岸崎法學士著 不折畫
第拾貳編 彼得大帝……佐藤文學士著 春汀畫
第拾參編 華聖頓……福山文學士著 古洞畫
第拾四編 孔明……安藤法學士著 松亭畫

伊太利の統一はエマニエル王の英邁とガリバルジークリスピー諸人の風雲の際會とに成れり然るにガリバルジーカヴール等前后世を去るの後獨り生存して希代の大手腕を奮ひ伊國をして一躍歐州强邦の列に入らしめたるものは實にクリスピー其人なり本傳其人を寫して活躍出んと欲す偉觀たりといふべし

第廿二編 那破翁……土井文學士著 不折畫
第廿三編 孟子……永井法學士著 春汀畫
第廿四編 成吉思汗……大田法學士著 不折畫
第廿五編 クロンウエル……松岡法學士著 耕渓畫
第廿六編 戈登將軍……赤松法學士著 春汀畫
第廿七編 威蘭士將軍……布施法學士著 春汀畫
第廿八編 ウエリントン……高木文學士著 春汀畫

正價◎壹冊拾參錢◎六冊七拾錢◎拾貳冊壹圓三拾錢◎廿四冊貳圓五拾錢◎郵稅壹冊各四錢

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

(後付と八)

(大谷製本)

女學世界
每月一回五日發行
第壹卷第十四號
(明治三十三年十二月廿五日 第三種郵便物認可)
(明治三十四年十一月五日發行)

東京秀英舍印刷

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版⑦
明治34年10月～11月（第1巻第13号、第14号）

2005年12月10日　第1刷発行　　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
印　刷　ジャパン リアルティ スーパービジョン株式会社
製　本　有限会社青木製本

ISBN4-7601-2841-7　C3321